仙台市文化財調査報告書第14集

仙台市中田町

栗遺跡発掘調査報告書

昭和54年3月

東北学院大学考古学研究部
仙台市中田第一土地区画整理組合
仙台市教育委員会

仙台市中田町

栗遺跡発掘調査報告書

例　　言

1．本報告書は、宮城県仙台市中田町所在の栗遺跡における、昭和49年度及び昭和50年度の発掘調査報告書である。

2．栗遺跡は、従来『栗囲遺跡』と呼ばれていたが、昭和49年度の調査以降、現在の地名に基づいて『栗遺跡』という名称に統一した。

3．本報告の記載内容は、調査中に発行した現地説明会資料及び昭和50年3月に発行した『栗遺跡発掘調査略報』に優先するものである。

4．本報告書の作成に当っては、第一章より第六章までは東北学院大学教授加藤孝の指導により、東北学院大学考古学研究部々員が執筆・作図した。

執筆の担当は次のとおりである。

志間　玲子……第一章、第二章
相沢　史子……第三章第一節
佐藤るみ子……第三章第二節、第五章第一節
渡部　弘美……第四章、第六章第三節4
紫桃　尚子……第六章第三節1・2・3
石本　　弘……第五章第二節・第四節、第六章第一節
工藤　哲司……第五章第三節、第六章第二節・第四節、第七章
遺物実測図のトレースは、主に鈴木覚が行なった。
写真の撮影は、主に堀込裕紀が行なった。

5．本報告書の本文は、昭和52年3月に脱稿したものである。このため、昭和52年4月以降に発表された資料は参考にされていない。

6．栗遺跡出土遺物は、実測図を作成した資料については、分類に従って遺物番号を付した。栗遺跡出土遺物集成図版・本文図版・写真図版に記されているNo.付の数字は遺物番号である。本文における遺物の説明は、遺物番号を使って行った。

本　文　目　次

例　言
第一章　調査に至る経過……1
第二章　調査要項……1
第三章　栗遺跡の位置と地理的・歴史的環境……3
　第一節　遺跡の位置と地理的環境……3
　第二節　周辺の遺跡と歴史的環境……4
第四章　調査の方法……7
第五章　調査遺構と出土遺物……11
　第一節　調査概要……11
　１．遺跡の層位と遺構の状況……11
　２．発見遺構の概要……11
　第二節　住居跡……11
　第三節　土壙……59
　第四節　その他の遺構……66
第六章　遺構・遺物の総括と考察……68
　第一節　住居跡の総括と問題点……68
　１．平面形と規模について……68
　２．壁と床について……68
　３．柱穴について……69
　４．カマドについて……69
　５．その他の施設……70
　６．火災住居跡について……70
　７．18号住居跡について……71
　第二節　土壙の性格についての考察……71
　第三節　出土遺物の総括……72
　１．土製品……72
　２．鉄製品……75
　３．石製品……75
　４．須恵器……77
　第四節　土師器の分類と編年試案……79
　１．分類法と分類……79
　２．栗遺跡の住居跡編年と土器変遷……86
　第五節　栗遺跡の年代に関する考察……91
第七章　まとめ……94

挿　図　目　次

挿図－1　栗遺跡の位置と周辺の地理……4
挿図－2　栗遺跡と周辺の遺跡……5
挿図－3　トレンチ配置図……8
挿図－4　遺構配置図……9
挿図－5　1号住居跡実測図……12
挿図－6　1号住居跡出土遺物実測図……13
挿図－7　2号住居跡実測図……15
挿図－8　2号住居跡出土遺物実測図……16
挿図－9　3号住居跡実測図……17
挿図－10　3号住居跡出土遺物実測図……17
挿図－11　4号住居跡実測図……18
挿図－12　4号住居跡出土遺物実測図……19
挿図－13　5号住居跡実測図……21
挿図－14　5号住居跡出土遺物実測図……23
挿図－15　6号住居跡実測図……24
挿図－16　6号住居跡出土遺物実測図……25
挿図－17　7号住居跡実測図……26
挿図－18　7号住居跡出土遺物実測図……27
挿図－19　8号住居跡実測図……28
挿図－20　8号住居跡遺物出土状況実測図……28
挿図－21　8号住居跡出土遺物実測図……29
挿図－22　9号住居跡炭化材検出状況実測図……31
挿図－23　9号住居跡実測図……33
挿図－24　9号住居跡出土遺物実測図……35
挿図－25　10号住居跡実測図……37
挿図－26　10号住居跡遺物出土状況実測図……38
挿図－27　10号住居跡出土遺物実測図……38
挿図－28　11号住居跡実測図……39
挿図－29　11号住居跡出土遺物実測図……41
挿図－30　12号住居跡実測図……43

挿図－31　12号住居跡竹材実測図……42
挿図－32　12号住居跡出土遺物実測図……45
挿図－33　13号住居跡実測図……46
挿図－34　13号住居跡出土遺物実測図……47
挿図－35　14号住居跡実測図……47
挿図－36　14号住居跡出土遺物実測図……48
挿図－37　15号住居跡実測図……49
挿図－38　15号住居跡出土遺物実測図……49
挿図－39　16号住居跡実測図……50
挿図－40　16号住居跡出土遺物実測図……51
挿図－41　17号住居跡実測図……52
挿図－42　17号住居跡出土遺物実測図……53
挿図－43　18号住居遺物分布状況……54
挿図－44　18号住居跡実測図……55
挿図－45　18号住居跡出土遺物実測図……57
挿図－46　第１土壙実測図……59
挿図－47　第２土壙出土遺物実測図……59
挿図－48　第２・３・４・５土壙実測図……60
挿図－49　第３土壙出土遺物実測図……61
挿図－50　第５土壙出土遺物実測図……61
挿図－51　第６土壙実測図……61
挿図－52　第６土壙出土遺物実測図……62
挿図－53　第７土壙実測図……62
挿図－54　第７土壙出土遺物実測図……62
挿図…55　第８土壙実測図……63
挿図－56　第９・10土壙実測図……63
挿図－57　第９土壙出土遺物実測図……63
挿図－58　第11土壙実測図……64
挿図－59　第12・13土壙実測図……64
挿図－60　第14土壙実測図……65
挿図－61　第14土壙出土遺物実測図……65
挿図－62　第15土壙実測図……65

挿図－63　第15土壙出土遺物実測図……66
挿図－64　河原石群……67
挿図－65　溝……67
挿図－66　〔グラフ－１〕住居跡の規模……68
挿図－67　〔グラフ－２〕カマドの方向……69

表　目　次

表－1　遺跡の名称と時代……6
表－2　住居跡一覧表……95
表－3　土壙一覧表……96
表－4　土師器・小形壺分類表……97
表－5　土師器・甕Ⅰ類分類表……97
表－6　土師器・甕Ⅱ類分類表……98
表－7　土師器・甑分類表……99
表－8　土師器・鉢分類表……99
表－9　土師器・坏分類表……100
表－10　土師器・高坏分類表……103
表－11　住居跡出土土師器の分類と組合せ表……101
表－12　住居跡編年関係表……103

出土遺物目録

栗遺跡出土遺物目録(1)　No.1～No.35……104
栗遺跡出土遺物目録(2)　No.36～No.71……105
栗遺跡出土遺物目録(3)　No.72～No.107……106
栗遺跡出土遺物目録(4)　No.108～No.143……107
栗遺跡出土遺物目録(5)　No.144～No.179……108
栗遺跡出土遺物目録(6)　No.180～No.215……109
栗遺跡出土遺物目録(7)　No.216～No.251……110
栗遺跡出土遺物目録(8)　No.252～No.287……111

写真図版目次

写真図版－1　①遺跡遠景（西南より望む）……113
②遺跡主要部（西半分）……113
③遺跡主要部（東半分）……113
写真図版－2　④遺構検出面の状況……114
⑤第1号住居跡……114
⑥第2号住居跡……114
写真図版－3　⑦第2号住居跡遺物出土状況……115
⑧第3号住居跡カマド周辺残存部……115
⑨第4号住居跡……115
写真図版－4　⑩第5号住居跡……116
⑪第6号住居跡遺物出土状況……116
⑫第6号住居跡遺物出土状況……116
写真図版－5　⑬第8号住居跡北東コーナー残存部及び遺物出土状況……117
⑭第9号住居跡炭化材検出状況……117
⑮第9号住居跡遺物出土状況……117
写真図版－6　⑯第9号住居跡ピット検出状況……118
⑰第9号住居跡……118
⑱第9号住居跡カマド……118
写真図版－7　⑲第10号住居跡遺物出土状況……119
⑳第10号住居跡……119
㉑第11号住居跡……119
写真図版－8　㉒第12号住居跡遺物出土状況……120
㉓第12号住居跡……120
㉔第12号住居跡北東側壁出土竹製編物……120
写真図版－9　㉕第13号住居跡……121
㉖第14号住居跡……121
㉗第14号住居跡遺物出土状況……121
写真図版－10　㉘第15号住居跡……122
㉙第16号住居跡……122
㉚第16号住居跡カマド……122

写真図版－11　㉛第18号住居跡……123
㉜第18号住居跡カマド……123
㉝第18号住居跡炉の埋設土器……123
写真図版－12　㉞第１土壙……124
㉟第２、３土壙……124
㊱第２、３、４土壙……124
写真図版－13　㊲第５土壙……125
㊳第６土壙……125
㊴第６土壙……125
写真図版－14　㊵第７土壙……126
㊶第７土壙……126
㊷第８土壙……126
写真図版－15　㊸第９、10土壙……127
㊹第９、10土壙……127
㊺第11土壙……127
写真図版－16　㊻第12、13土壙……128
㊼第15土壙……128
㊽河原石群……128
写真図版－17　㊾溝状遺構……129
㊿鏡模造土製品……129
(51)須恵器出土状況……129
写真図版－18　(52)第３土壙出土骨片……130
(53)第６土壙出土骨片……130
(54)第７土壙出土骨片……130
写真図版－19　(55)第11土壙出土骨片……131
(56)第12土壙出土骨片……131
(57)第18号住居跡方形ピット出土骨片……131
写真図版－20　(58)第４土壙出土クルミ炭化物……132
(59)出土土器－ハケメ調整……132
(60)出土土器－ハケメ調整……132
写真図版－21　(61)出土土器－ヘラケズリ調整……133
(62)出土土器－ヘラナデ調整……133

⑥③出土土器－ヘラミガキ調整……133
写真図版－22　小形壺（No.１、２、３、４、５）……134
写真図版－23　甕Ⅰ類（No.６、７、８、９、10、14、16、19、20）……135
写真図版－24　甕Ⅱ類（No.23、24、25、26、28、29、31、34、35）……136
写真図版－25　甕Ⅱ類（No.38、43、44、45、46、47、50、51、53）……137
写真図版－26　甕Ⅱ類（No.55、57、59、60、61、64、67、68、70、73）……138
写真図版－27　甑（No.81、82、83、84、86、89、93、94、97、98、99、101、102）……139
写真図版－28　鉢（No.106、109、110、112、113、117、118、120、123、124、125）……140
写真図版－29　坏（No.127、129、133、136、137、138、148、149、150、153、159、161）‥141
写真図版－30　坏（No.162、170、172、177、181、182、185、189、193、194、197、199）‥142
写真図版－31　椀、高坏、蓋、その他の土器（No.202、203、204、205、207、208
211、212、213、244、245）……143
写真図版－32　土製品、鉄製品（No.215、216、219、221、222、223、260、261、262、265、
266、267、268、269、270、271）……144
写真図版－33　石製品（No.247、248、249、250、251、252、253、254、255、256、257、258、
259、237）……145
写真図版－34　須恵器（No.272、273、274、275、276、277、278、279）……146
写真図版－35　須恵器（No.280、281、282、284、285、286、287、278）……147

第一章　調査に至る経過

昭和20年代、遺跡上の畑地開懇の際に多数の土師式土器が出土し、小野力・両川端国両教諭の手で蒐集せられた。当時、遺物が単一型式を示すものが多かったので『栗囲式土器』と命名されて、宮城地区出土土師式土器の形式名を示し、年代観は、横穴等より出土することがあるので７世紀末、古墳文化時代というふうに言い習わされて来た。以降、同型式の土師器は『栗囲式』という古典的名称になって遺跡の調査とは別に一般化し、他県の遺跡にもその年代決定に際して、適用されている。

このように、考古学上貴重な栗遺跡では、遺物の実態が遺跡に則して観察されずに経過して来たが、中田地区の土地区画整理に伴って遺跡の上に道路が作られることになり、発掘調査の必要が生じたため同組合理事会の依嘱によって、昭和49年３月に第一回の調査を行なうことになった。その結果、古代住居跡と古代墓地跡を含む当時の村落跡が発見された。なお、49年度の調査では、深耕によって、遺構は荒れてはいるが、それでもなお多数の遺構の存在を確認することができた。そこで、さらに国庫補助を仰ぎ、50年度に改めて道路敷予定地全域の記録保存調査を行なうことになった。

第二章　調　査　要　項

第一次発掘調査

１．遺跡所在地

宮城県仙台市中田町字栗52番・外

２．調査期間

昭和49年３月11日～昭和49年４月10日

３．調 査 者

仙台市中田第一土地区画整理組合

仙台市教育委員会

４．調査担当

加藤　孝（東北学院大学教授・日本考古学協会会員）

５．調 査 団

顧　問　高橋富雄（東北大学教授）

団　長　加藤　孝（東北学院大学教授）

副団長　小野　力（宮城県名取高等学校教諭・日本考古学協会会員）

副団長　坂田　泉（東北大学助教授）

調査員　渡辺泰伸（仙台育英学園高等学校教諭・日本考古学協会会員）

川村　正（東北学院大学考古学教室）

調査協力

東北学院大学考古学研究部学生

宮城県名取高等学校郷土部生徒

仙台育英学園高等学校郷土史研究部生徒

株式会社飛島建設仙台支社

栗地区部落会

第二次発掘調査

1．遺跡所在地

宮城県仙台市中田町字栗52番・外

2．調査期間

昭和50年２月20日～昭和50年４月25日

3．調査主体

仙台市教育委員会

4．調査指導

高橋富雄（東北大学教授）

坂田　泉（東北大学助教授）

5．調査担当

加藤　孝（東北学院大学教授・日本考古学協会会員）

6．調 査 団

団　長　加藤　孝（東北学院大学教授・日本考古学協会会員）

調査員　小野　力（宮城県名取高等学校教諭・日本考古学協会会員）

渡辺泰伸（仙台育英学園高等学校教諭・日本考古学協会会員）

調査補助員

東北学院大学考古学研究部部員

千葉　寿郎	古山　和久	門馬真一郎	新沼　秀二	西原　克久
宍戸　宏和	菅原　孝	高橋　英人	高橋　弘彦	吉木　敏
小山　玲子	掘込　裕紀	石本　弘	工藤　哲司	鈴木　覚
渡部　弘美	相沢　史子	佐藤るみ子	志間　玲子	宍戸美智子

紫桃　尚子　　相沢　伸一　　星　　昌吾　　松浦　邦幸　　佐藤　好正
遠藤　美江　　伊藤　敦子　　樹神　和子　　小松とき子　　斉　祐美子
斉藤　祐子　　佐藤　明美　　高野しをり　　佐藤千賀子　　渋谷　紀子
高橋せつ子

調査援助員

宮城県名取高等学校郷土部生徒

仙台育英学園高等学校郷土史研究部生徒

東北学院大学考古学実習生

調査協力

地主　柿沼勝美、菅井長英、菅井富士男

栗部落会、柳生町内会　代表　阿部雄作

柳生幼児園

株式会社飛島建設仙台支社

東北学院大学ＯＢ　恵美昌之、野崎準、結城慎一、木村浩二、鈴木実夫、志賀豊徳、篠原信彦、山田稔、今野章、阿部正光

東北学院大学学生　三塚敏明

第三章　栗遺跡の位置と地理的・歴史的環境

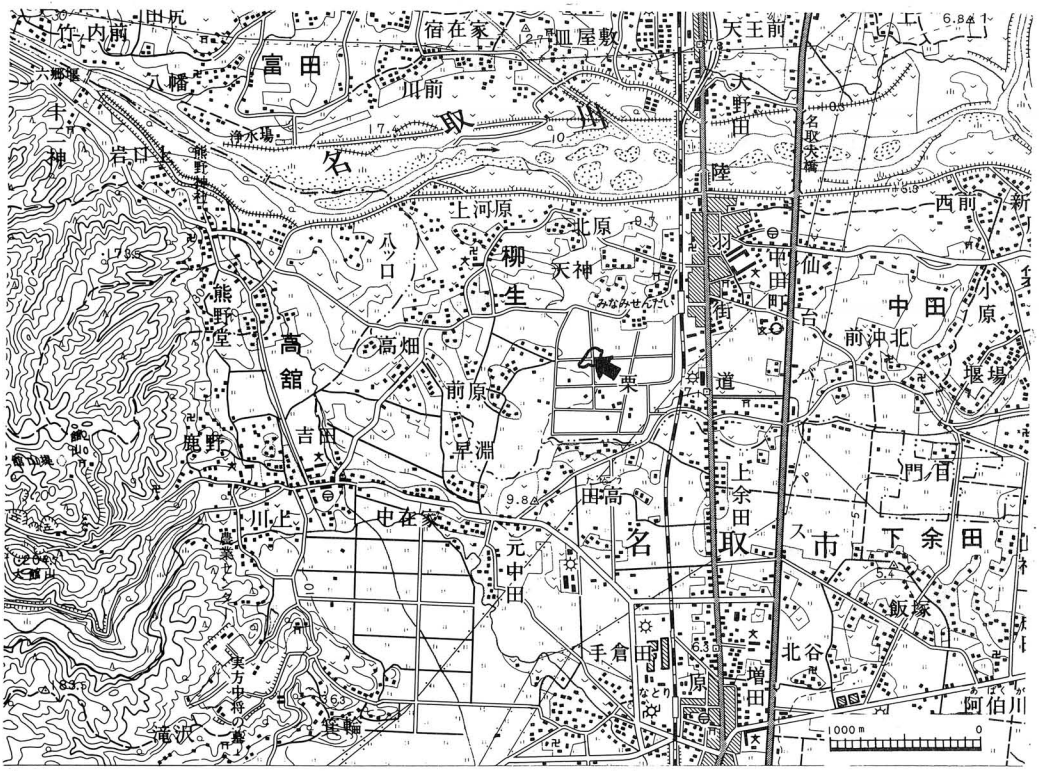
第一節　遺跡の位置と地理的環境

栗遺跡は、仙台市の西南部、名取市との境界近くの沖積平野に位置する。東北本線南仙台駅の西南１kmの地点である。遺跡の西方2.5kmには、奥羽山脈から続く標高200m前後の高館丘陵がひかえている。この丘陵の北側山麓からは名取川が東流し、栗遺跡の北方を通り、仙台市の中心部を流れて来た広瀬川と合流して東南方向に流れを変え６km下って太平洋に注ぐ。

高館丘陵東麓より太平洋岸に至るまでの平野は、宿場町としての面影を残す陸羽街道沿いの住宅密集地帯を除いて、宅地の周囲に防風林や防風垣を巡らした住宅が、広い田畑に囲まれて数戸づつ点在する田園風景を見せている。急速な都市化を続ける仙台市街と比較すると、名取川の水利による水稲栽培や野菜、園芸作物等の畑作が行なわれ、実によく自然環境が守られていると言うことができる。しかし、仙台市の都市化の影響を免れることはできず、田畑は徐々に宅地や工場用地へと変化しつつある。

栗遺跡は、上記した平野にあって、名取川の形成した氾濫原に点々と分布する微高地の一つ

に立地する。栗遺跡をはじめ周辺の微高地は、畑地または宅地として利用され、微高地のまわりの湿地または低地と見られるところは水田となっている。栗遺跡の立地する微高地の標高は9m前後で周囲の水田より1m程高い。微高地の面積は17000㎡で、ほぼ三角形を呈し、全面から土師器片の採集ができる。微高地の西北と南東辺には、名取川の田河道も観察される。

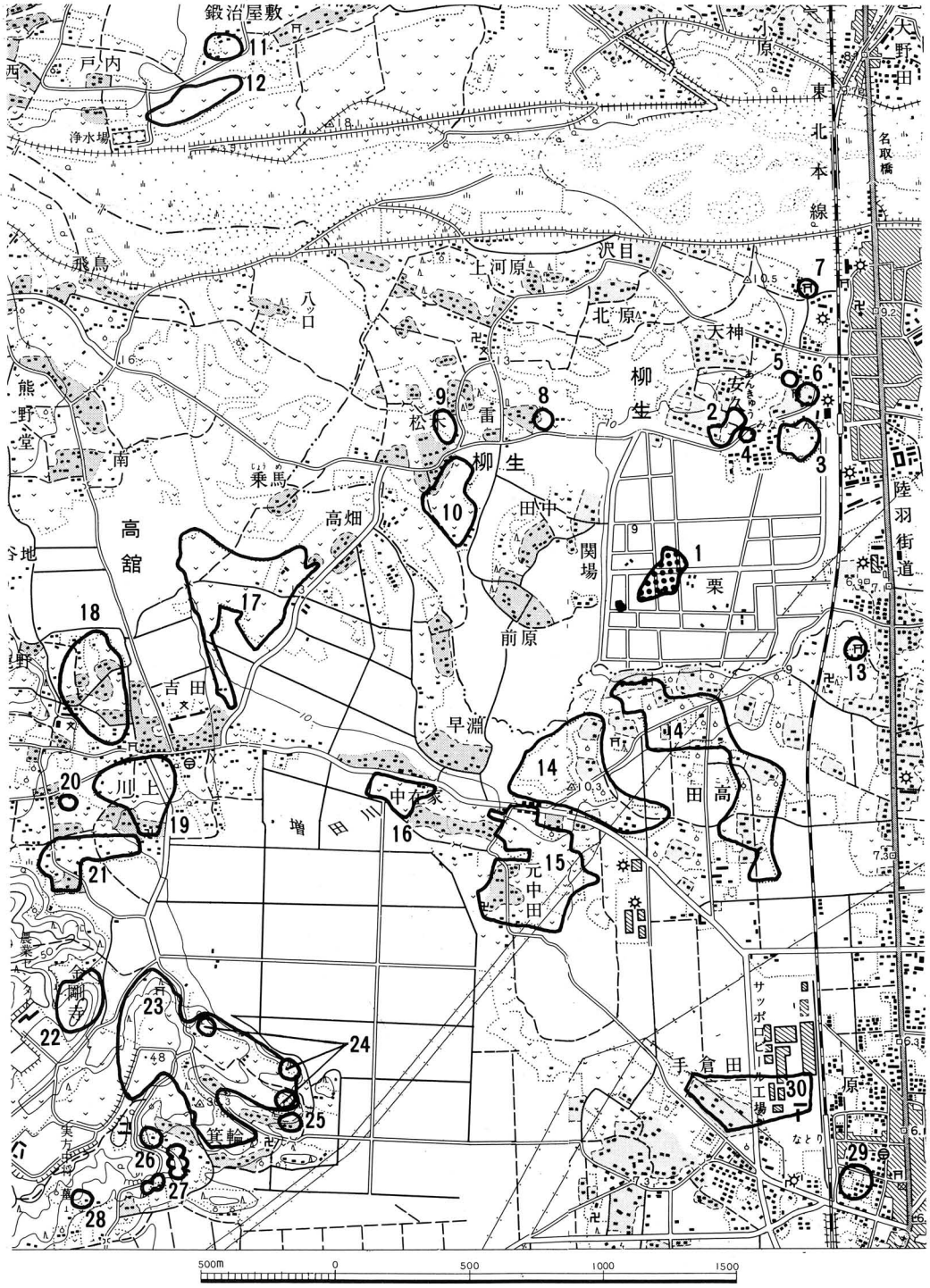


挿図－1　栗遺跡の位置と周辺の地理

第二節　周辺の遺跡と歴史的環境

栗遺跡の周辺は、図2に見るように濃密な遺跡の分布をみる。縄文時代には、高館丘陵の東端部を中心に諸遺跡が形成された。中でも今熊野遺跡は、縄文時代前期の大集落跡であり、また、金剛寺貝塚は、縄文時代後期から晩期を中心とする貝塚であることが近年の調査で明らかになっている。(註1)

弥生時代になると、丘陵部だけでなく沖積平野の微高地上への遺跡の形成が目立ってくる。これは、栗遺跡周辺における水田耕作の開始と密接な関係をもつものであろう。



挿図－２　栗遺跡と周辺の遺跡

表－1　遺跡の名称と時代

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	栗遺跡	古墳	16	東内館遺跡	古墳・奈良・平安
2	安久遺跡	縄文・平安・中世	17	高畑遺跡	弥生・古墳 奈良・平安
3	安久東遺跡	古墳・奈良・平安	18	鹿野東遺跡	縄文・弥生・古墳 奈良・平安
4	安久諏訪古墳	古墳（後）	19	川上遺跡	縄文・弥生 奈良・平安
5	中田神社裏遺跡	古墳・平安	20	西北畑古墳	古墳（後）
6	伊豆野権現古墳	古墳（後）	21	来光囲遺跡	縄文・奈良・平安
7	上古川古墳	古墳（後）	22	金剛寺貝塚	縄文
8	雷東遺跡	平安	23	今熊野遺跡	縄文・弥生・古墳
9	原東遺跡	古墳・奈良・平安	24	箕輪Ａ地区古墳群	古墳（中）
10	関場遺跡	古墳・奈良・平安	25	北野窯跡	平安
11	鍛治屋敷Ａ遺跡	縄文・奈良・平安	26	南台窯跡	奈良・平安
12	六本松遺跡	奈良・平安	27	箕輪Ｂ地区古墳群	古墳（後）
13	天神社古墳	古墳（中）	28	北野横古墳群	奈良・平安
14	清水遺跡	弥生・古墳 奈良・平安	29	町裏遺跡	奈良・平安
15	田高遺跡	弥生・古墳 奈良・平安	30	八幡遺跡	古墳・奈良・平安

※（　　）内は古墳時代時期区分

弥生時代の末から古墳時代の初め頃のものとしては、今熊野遺跡における方形周溝墓がある。古墳時代の前期から中期にかけて、清水遺跡（註3）や安久東遺跡（註4）等に集落が営まれ、栗遺跡（註2）付近でも人々の活動が活発になる。これに伴いその古墳時代中期には、天神社古墳や箕輪Ｂ地区古墳群が造営され、後期に入ると、安久諏訪古墳、上古川古墳、伊豆野権現古墳等が造営された。

古墳時代以降、奈良・平安時代になると、付近一帯に多数の遺跡が形成される。

以上のように歴史的に恵まれた環境を持つ地域に栗遺跡は形成されている。

註１＝宮城県文化財調査報告書第33集金剛寺貝塚、今熊野遺跡調査概報（宮城教育委員会・昭和48年）

註２＝註１に同じ。

註３＝清水遺跡現地説明会資料（宮城県教育委員会・昭和50年）

註４＝仙台市文化財調査報告書第10集仙台市中田町安久東遺跡調査概報（仙台市教育委員会・昭和51年）

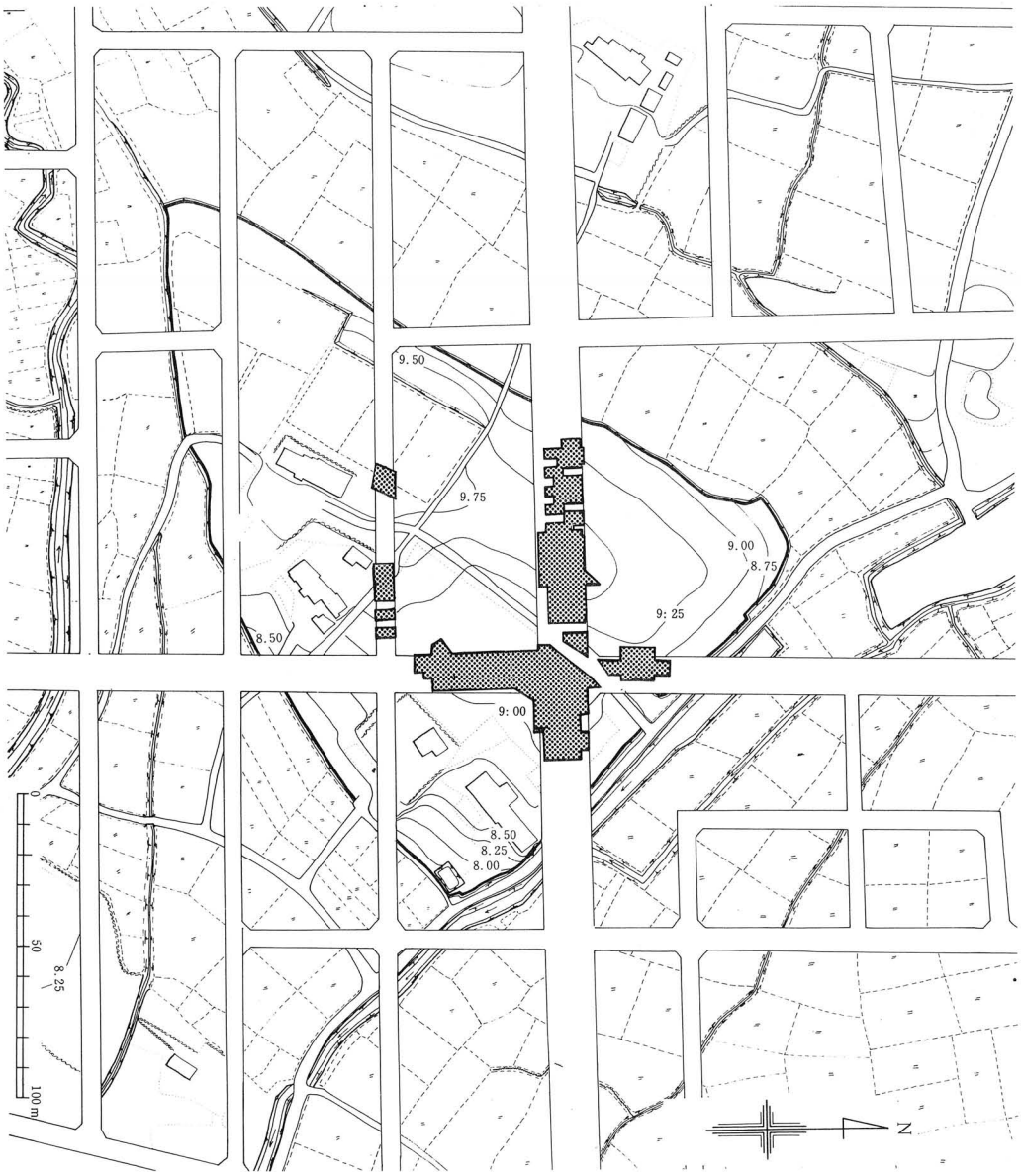
第四章　調査の方法

栗遺跡は昭和49年（第１次）・昭和50年（第２次）の二度にわたる発掘調査を実施したわけである。基本的に調査の方法には異なった点はないが、調査の性格上、第１次・第２次調査に若干の違いがみられる点もあるので説明を加えておく。

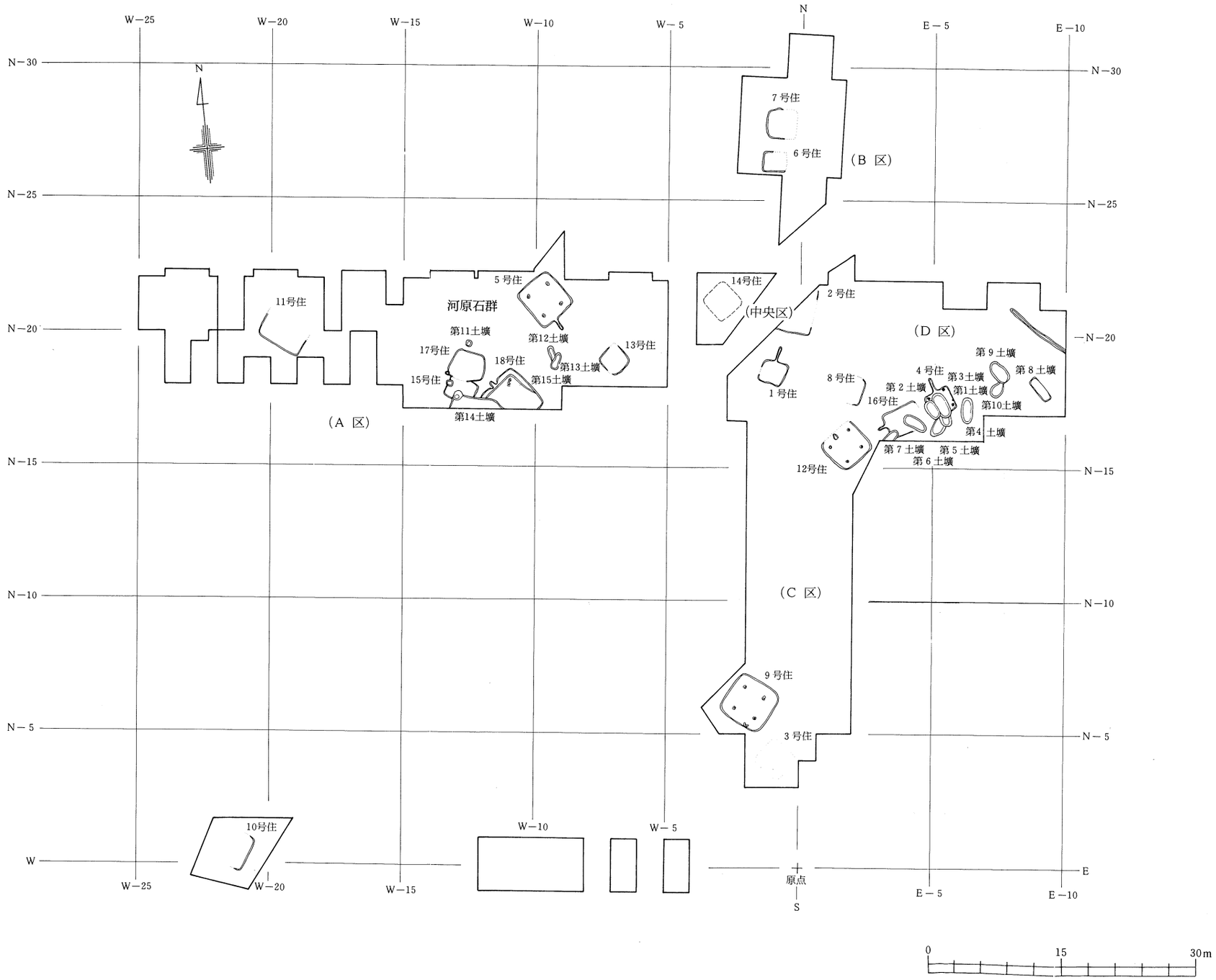
第１次調査は第一章～調査に至る経過～で述べられているように遺跡の残存状況の確認が主であったため、遺跡にかかる道路敷の片側部分をトレンチ方式による発掘を行なった。トレンチは各ブロックごとに、Ａ区（遺跡にかかる16ｍ道路北側）・Ｂ区（12ｍ道路北側）・Ｃ区（12ｍ道路南側）・Ｄ区（16ｍ道路東側）・中央区（16ｍ道路と12ｍ道路の交差点地域）と呼称した。〈この名称は第２次調査時にも使用している。〉

第２次調査は第１次調査の成果広範囲に位置する竪穴住居跡・土壙・土壙墓等の遺構の確認を参考にして遺跡にかかる道路敷の部分の全区域を発掘調査することに決定した。ただし、道路敷の部分でありながらも発掘調査の事前調査（ボーリング調査・試掘等）によって発掘調査の区域から除いた地点もある。

調査は遺跡南東部にかかる12ｍ・６ｍ道路の交又する中心点を原点とし、真北と結ぶ線を軸とした３ｍを単位とするグリットを設定した。グリット番号の名称は、東西、南北を基準とした、Ｎ・ＳとＥ・Ｗを使用し、グリッドの単位３ｍを１と数え加算してゆく、方向と距離の方法を用いた名称を使用した。掘り下げ時には、６ｍ×６ｍのトレンチを一単位とした調査を行なっていった。又、第１次調査部分と重なりあう地点があっても６ｍ×６ｍトレンチを設定し、第一次調査で確認されている遺構であっても他の遺構との関連や再確認の意味において掘り上げているものもある。第２次調査では遺跡南西部のトレンチをＥ区と呼称している。



挿図－3　トレンチ配置図


W−25
W−20
W−15
W−10
W−5
N
E−5
E−10
N−30
N−25
N−20
N−15
N−10
N−5
W
E
S
原点
7号住
6号住
(B 区)
5号住
河原石群
11号住
第11土壌
第12土壌
17号住
18号住
13号住
第13土壌
15号住
第15土壌
第14土壌
(A 区)
14号住
(中央区)
2号住
(D 区)
第9土壌
第8土壌
4号住
第3土壌
8号住
第2土壌
第1土壌
1号住
16号住
第10土壌
第4土壌
第7土壌
第5土壌
第6土壌
12号住
(C 区)
9号住
3号住
10号住
0
15
30m

挿図－4　遺構配置図

第五章　調査遺構とその出土遺物

第一節　調査概要

1．遺跡の層位と遺構の状況

栗遺跡の下層には、名取川礫層が厚く堆積し、その上部に砂礫層があって旧名取川の河道とも観察される。さらに、その上部には砂層が50センチメートルから２メートル以上も堆積し同河川の自然堤防を形成している。この砂層は、遺跡の北側で厚く南側では薄くなっている。遺跡は以上のような三層から成るが、遺物包含層は地表よりほぼ１メートル内外の層位を占めている。

遺構が検出されるのは、現地表より１メートル前後掘り下げた砂層中である。検出面はそのほとんどが、人力や機械力による天地返しが行なわれたために溝状や乱雑な凹凸面となっている。遺構は深耕による破壊が進み、保存状況は非常に悪く、壁がほとんどなくなり、床面だけが遺存する住居跡もみられる。

2．発見遺構の概要

発見された遺構は、住居跡18棟・土壙15基・溝１条・河原石群である。

住居跡は竪穴式のもので、平面形は隅丸方形を基本的プランとしている。保存状態の比較的良好な住居跡には、カマドが検出でき、カマドと伴に地床炉を備えたものもある。出土遺物は、そのほとんどが土師器である。18棟の住居跡のうち15棟は遺跡の北半部で発見され、他の遺構と同様に北半部に密度を高くして分布する。３棟の焼失住居跡も発見されている。

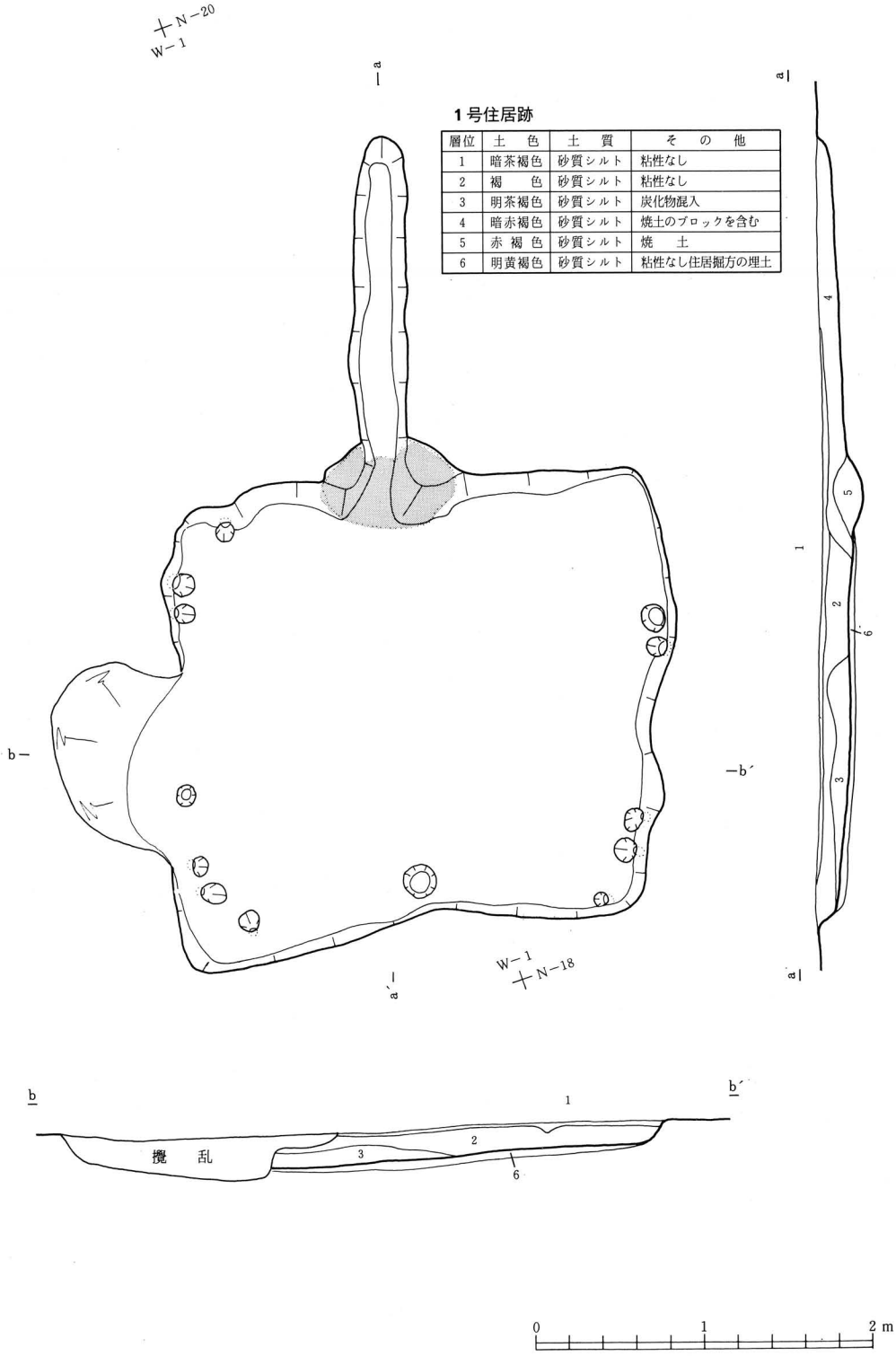
土壙は、平面形として楕円形・円形・方形の三種がみられた。住居跡と重複する土壙があるが、全て土壙が住居跡を切っている。土壙内の出土遺物は、そのほとんどが土師器である。15基発見された土壙の内10基が遺跡の北半部東側にみられ、密に分布しているのがみられる。

第二節　住居跡

１号住居跡

（遺構の位置と確認）微高地の中央から、やや東北に偏った地点に位置する。調査区域では、中央区にあたる。地山である褐色砂質シルト面でプランを確認した。

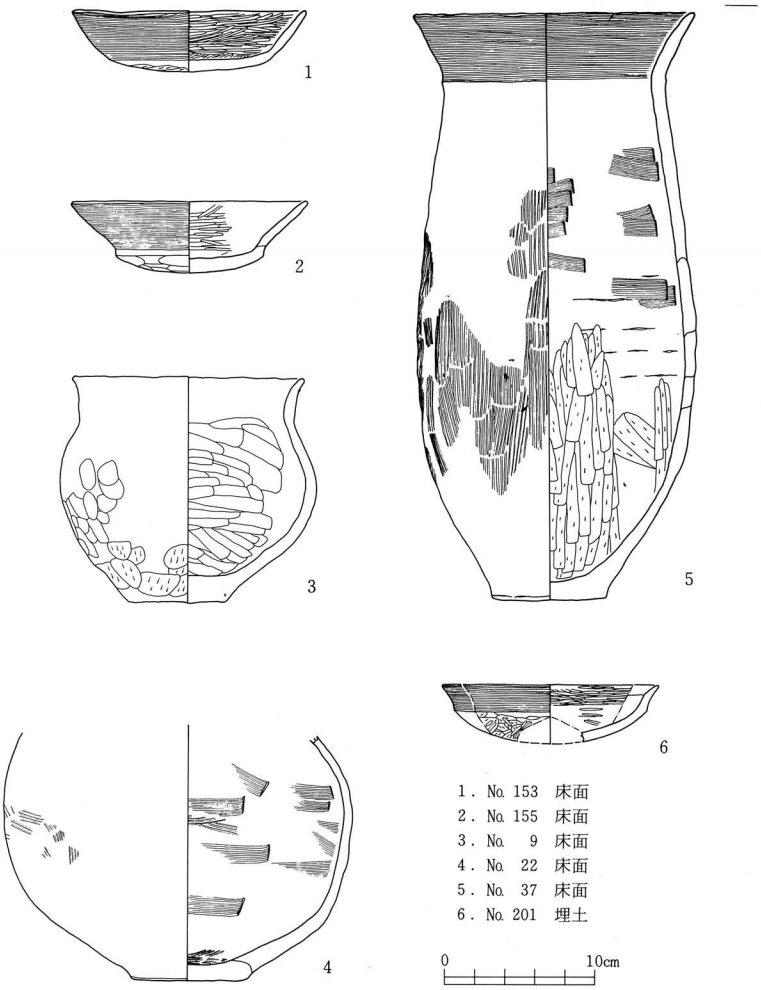
（遺存状況）西壁の約半分程が削平されているだけで、遺存状況は良好である。



1号住居跡

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	暗茶褐色	砂質シルト	粘性なし
2	褐　　色	砂質シルト	粘性なし
3	明茶褐色	砂質シルト	炭化物混入
4	暗赤褐色	砂質シルト	焼土のブロックを含む
5	赤 褐 色	砂質シルト	焼　　土
6	明黄褐色	砂質シルト	粘性なし住居掘方の埋土

挿図－5　1号住居跡実測図



挿図－6　Ⅰ号住居跡出土遺物実測図

（平面形、規模、方向）平面形は、正方形を呈する。規模は、長軸３ｍ・短軸2.7ｍであり、長軸方向は、北西－南東を示している。

（壁・床）壁は、10cmから15cm遺存し、立ちあがりは、やや外傾している。床は、灰白色シルトを含んだ明黄褐色を呈する砂質シルトであり、しまっている。

（柱穴）柱穴は、観察されなかった。

（カマド）カマドは、北壁中央に設けられているが、カマド本体は、右袖と火床面のみ遺存している。残存部分から推定される規模は、80cm×55.5cmである。長さ230cm・幅30cmを計る煙道が地山を掘り込んで付設されている。

（堆積土層位）住居内堆積土は、６層が観察された。土質は砂質シルトである。６層（掘り方埋土）上面を床としている。

（重複、増改築）重複や増改築は、観察されなかった。

（出土遺物）出土遺物は、すべて土師器であるが少数である。床面出土のものには、甕（No.９・No.22・No.37）、坏（No.153・No.155）である。その他に覆土から坏（No.201）が出土した。

２号住居跡

（遺構の位置と確認）１号住居跡の北側に隣接する。褐色砂質シルト面でプランを確認した。

（遺存状況）壁及び床は、ほとんど削平され原形をとどめていない。農道が斜めにかかっているため、西側は調査を行っていない。

（平面形、規模、方向）東壁部５ｍ・南壁部3.2ｍの平面を確認したのみで、全容は道路の関係上把握が出来なかったが、規模としては大型のものである。長軸方向は不明である。

（壁、床）壁は、ほとんど削平され高さ18cm程度が残存しているだけである。床も壁同様削平され、南側に一部遺存している。

（柱穴）柱穴は、観察されなかった。

（カマド）原形をとどめていないが、東壁部の北端において火床と思われる焼土が観察された。付近に焚口の補強に用いられたと思われる焼けた石と石製支脚が出土している。

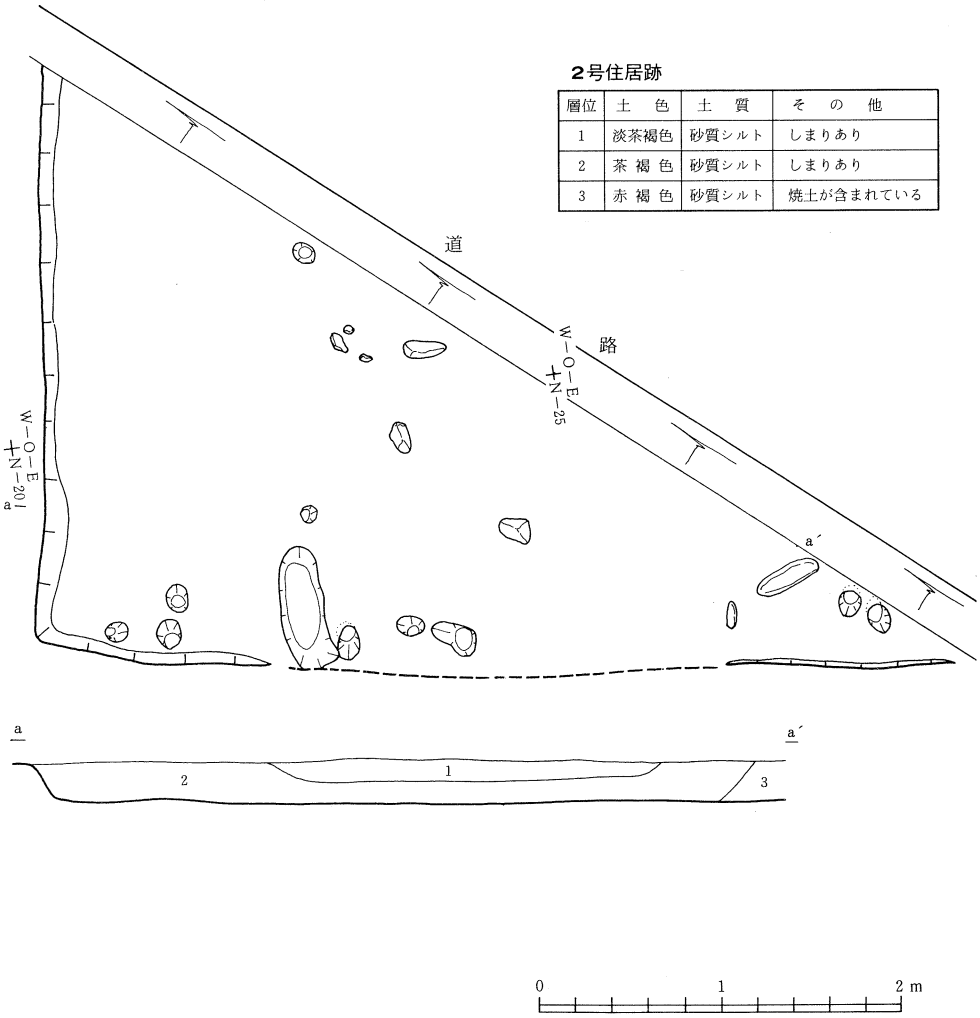
（堆積土層位）住居内堆積土は、褐色を主とする砂質の層が３層観察された。

（重複、増改築）重複や増改築は、観察されなかった。

（出土遺物）床面出土遺物は、すべて土師器である。甕（No.38・No.62・No.64・No.70）や甑（No.85）、高坏（No.204）などである。その他、埋土から小破片が出土している。

３号住居跡

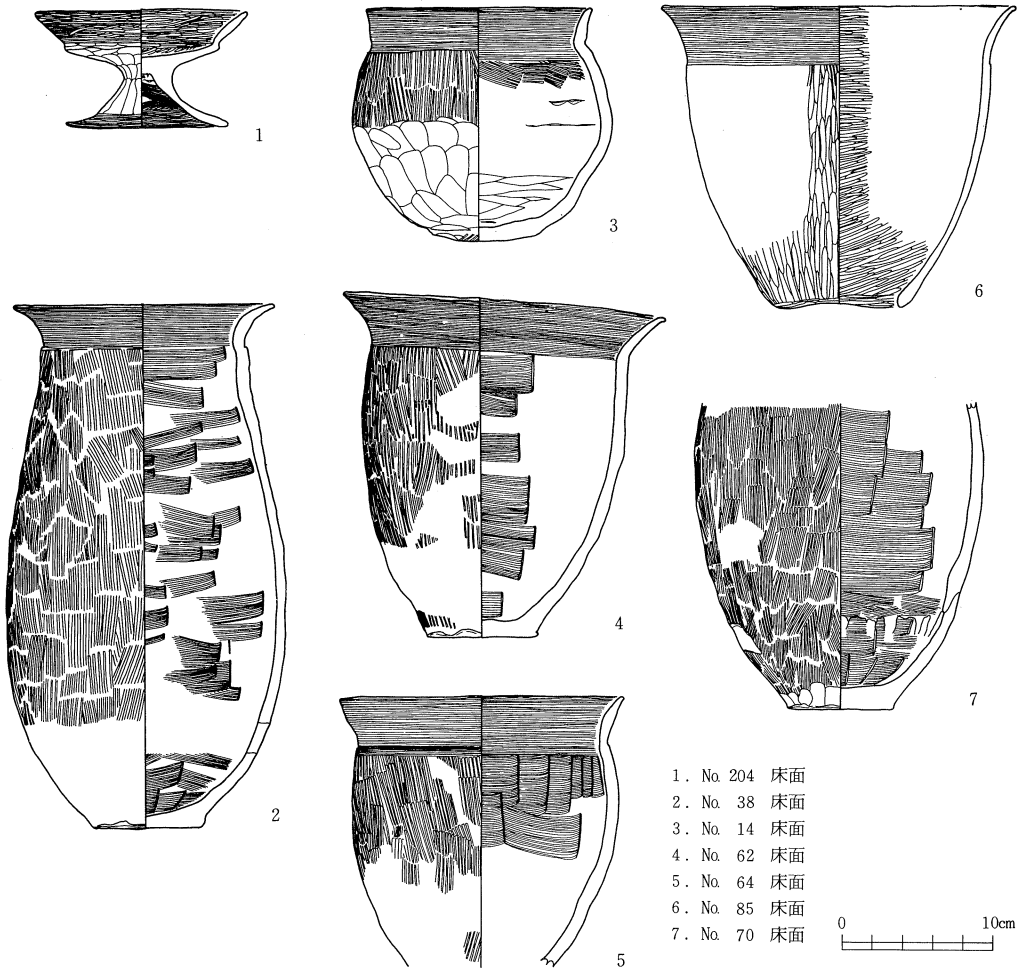
（遺構の位置と確認）微高地南東端に位置する。



2号住居跡

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	淡茶褐色	砂質シルト	しまりあり
2	茶 褐 色	砂質シルト	しまりあり
3	赤 褐 色	砂質シルト	焼土が含まれている

挿図－7　2号住居跡実測図



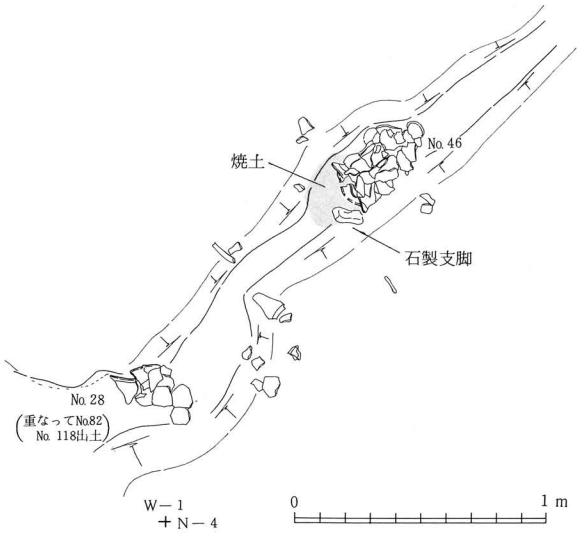
挿図－8　2号住居跡出土遺物実測図

（遺存状況）耕作によって大部分が壊滅しており、わずかにカマドの周辺が畝状に残るだけである。土師器が5個体ほど集積して出土しており、それに伴ってカマドの支脚に使用したと考えられる焼けた石が出土している。

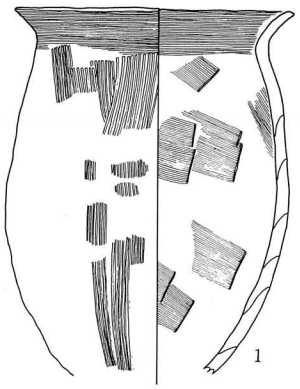
（出土遺物）土師器が5個体ほど出土した。器形は、甑（No.82）、甕（No.28・No.46・No.208・No.238）である。

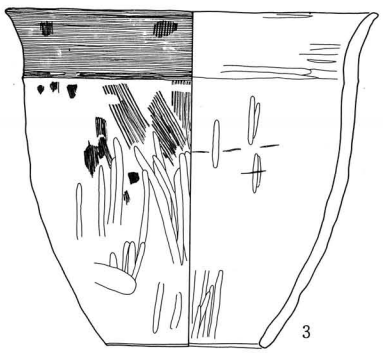
4号住居跡

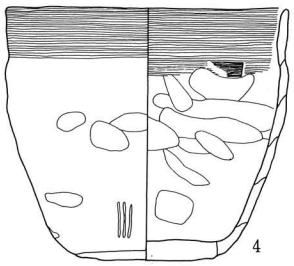
（遺構の位置と確認）微高地の北東端に位置し、調査区域のD区で発見された。確認面は、褐色砂質シルト層である。

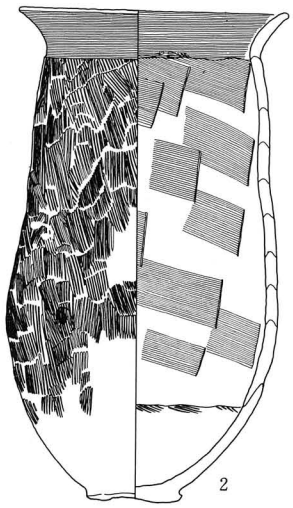


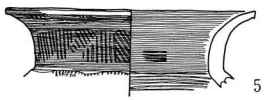
挿図－9
3号住居跡実測図











挿図－10
3号住居跡
出土遺物実測図

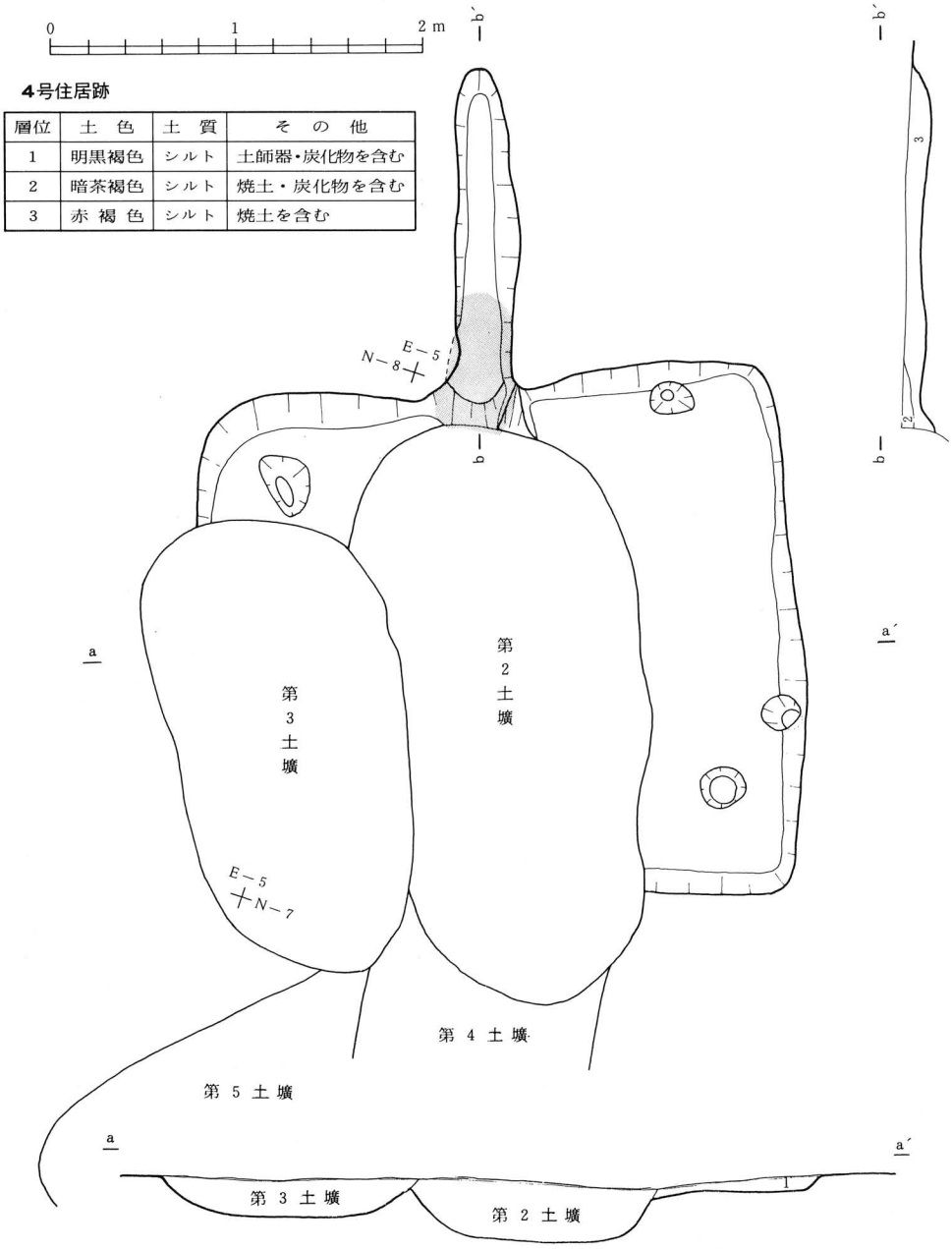
1．No. 28　床面
2．No. 46　床面
3．No. 82　床面
4．No. 118　床面
5．No. 238　層位不明

0　10cm

（遺存状況）第２土壙、第３土壙及び第４土壙に切られているが、良好に遺存している。

（平面形、規模、方向）長軸3.9m、短軸3.3mのほぼ正方形の平面形を呈し、各壁はやや外方に弯曲している。長軸方向は、北東－南西である。

（壁、床）壁は、高さ15cmから10cm程残存している。立ちあがりはやや外傾している。床は、



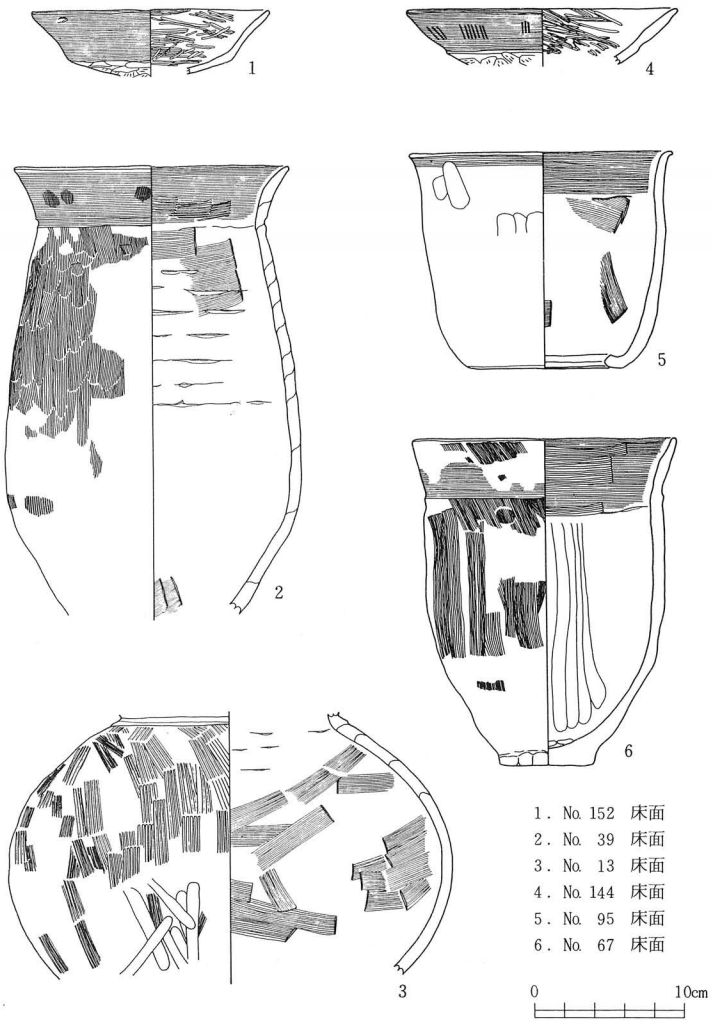
層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	明黒褐色	シルト	土師器・炭化物を含む
2	暗茶褐色	シルト	焼土・炭化物を含む
3	赤 褐 色	シルト	焼土を含む

挿図－11　4号住居跡実測図

褐色砂質シルトでしまっている。

（柱穴）ピットは住居跡隅に計４個確認された。配置などから柱穴とも考えられるが、床面からの深さが16cmから22cm程度であるので、柱穴と断定するものはなかった。

（カマド）カマドは、北壁の中央に付設されている。カマド本体は、右側の袖の一部及びカマド石が残存しているだけで、ほとんどは第２土壙構築時に破壊されており原形をとどめていない。本体の推定規模は、75cm×60cm程度と思われる。煙道は、トンネル状を呈しているが、天井部は、崩落している。長さ175cm、幅35cmを計る。



挿図－12　４号住居跡出土遺物実測図

（堆積土層位）３層が観察された。３層とも砂質シルトであり、土師器片や木炭片を含んでいる。また第１層には、骨片が含まれている。

（重複、増改築）第２土壙、第３土壙及び第４土壙と重複している。４号住居廃絶後に、これらの土壙が営まれている。増改築は、観察されなかった。

（出土遺物）出土遺物は、すべて土師器である。床面出土のものは７個体あり、器形は、甕（No.13・No.39・No.67・No.229）、甑（No.95）、坏（No.144・No.152）などである。

5号住居跡

（遺構の位置と確認）微高地北部の緩斜面に位置する。調査区域のＡ区で発見された。確認面は、褐色砂質シルト層である。

（重複、増改築）柱穴・カマド・堆積土及び遺物の出土状況から２回の改築が行なわれたものと考えることが出来る。便宜的に、新しいものからⅢ期・Ⅱ期・Ⅰ期と分けた。

Ⅲ期

（平面形・規模・方向）柱穴の位置、確認された壁の状況から、平面形は方形を呈すものと考えられる。規模としてはⅠ期のものよりも若干小型である。主軸方向はカマド・柱穴の位置より北－南である。

（壁、床）壁は堆積層６・８層・地山を壁とし、５層上面を床とする。Ⅰ期プラン内で壁、床を形成している。

（柱穴）検出面、配置から柱穴は、P_1・P_2・P_3・P_4と考えられる。

（カマド）住居跡北西に位置している。火床のみ残存している。火床規模は、110cm×70cm程の楕円形を呈している。火床内には、径65cm、深さ12cm程の円形ピットがみられ、ピット内からは支脚として使用されたと考えられる石が直立した状態で観察された。

（堆積土層位）Ⅲ期に関する堆積土は、１・２・３・４層の計４層であった。

（出土遺物）北東隅で土師器が一括で出土している。甕（No.57・No.236）、甑（No.93）、坏（No.156・No.183）、鉢（No.114・No.123）

Ⅱ期

（平面形、規模、方向）プランが不明であり、カマド・柱穴が考察されるのみで、平面形、規模、方向は不明である。

（壁、床）壁はⅢ期改築の際に壊わされたと考えられ残存していなく、床も同様に残存しておらず不明である。

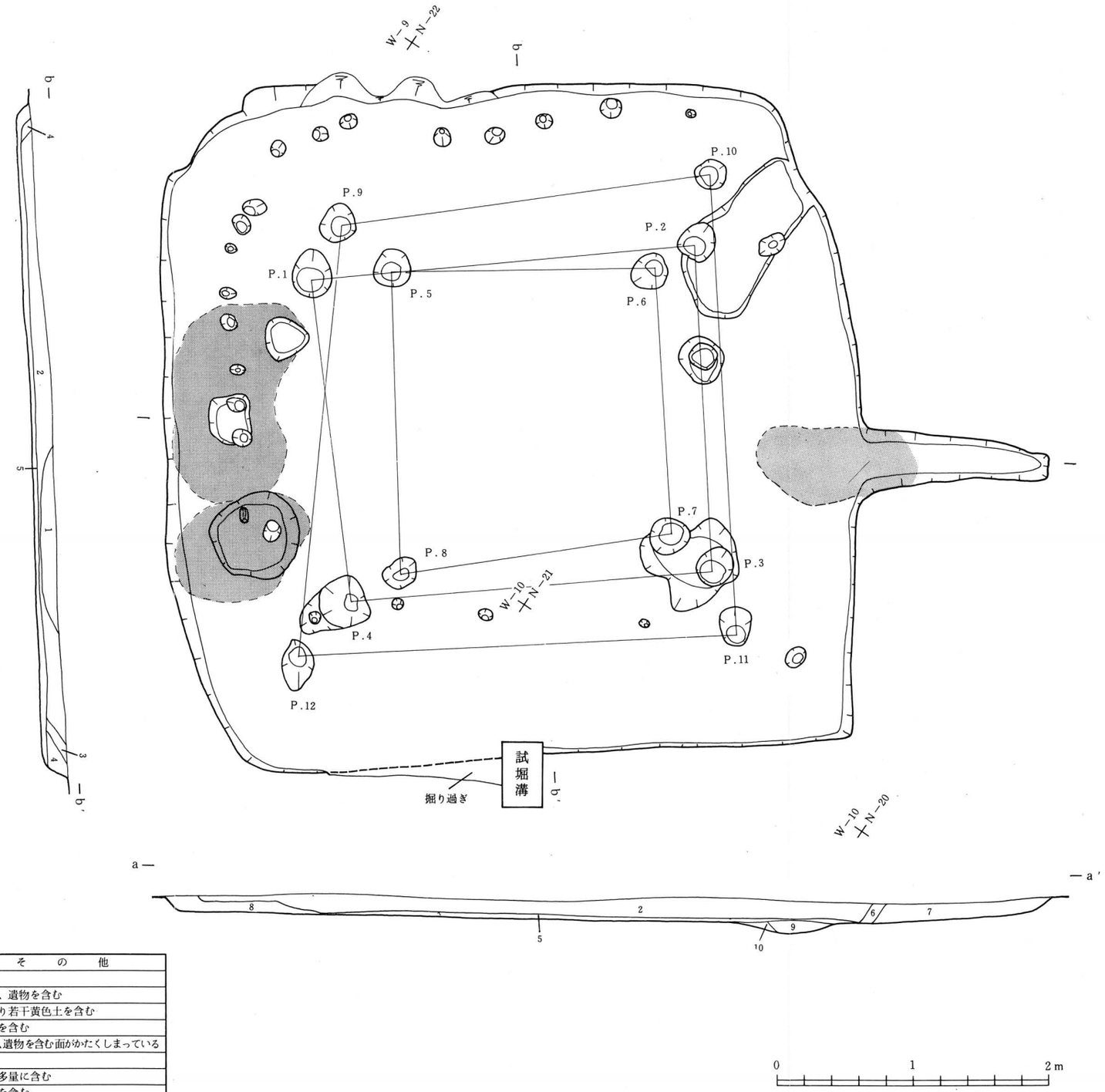
（柱穴）層位的には検出されず、Ⅲ期・Ⅰ期の柱穴を除いて推定したものである。P_5・P_6・P_7・P_8が妥当と考えられる。

（カマド）北壁中央に火床の残痕が観察され、Ⅱ期のカマドと考えられる。火床規模は、150cm×90cmの歪んだ楕円形を呈する。

（堆積土層位）確認されなかった。

Ⅰ期

（平面形、規模、方向）長軸5.15m、短軸4.95mを計り、ほぼ正方形を呈している。長軸方向は北西－南東である。平面規模としては、３期のうち最大のものである。時期としては３期のうち最っとも古いものであるが、住居跡の大きさが最大のものであるので、遺存状況は最っと



5号住居跡

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	黄茶褐色	微砂質シルト	
2	暗茶褐色	微砂質シルト	炭化物、遺物を含む
3	暗茶褐色	微砂質シルト	2層より若干黄色土を含む
4	暗黄茶褐色	微砂質シルト	炭化物を含む
5	黒　褐　色	微砂質シルト	炭化物、遺物を含む面がかたくしまっている
6	明黄褐色	細砂シルト	
7	赤　褐　色	微砂質シルト	焼土を多量に含む
8	黄茶褐色	微砂質シルト	炭化物を含む
9	赤　褐　色	微砂質シルト	焼土を含む
10	暗黄茶褐色	微砂質シルト	焼土を含む

挿図－13　5号住居跡実測図

も良好である。

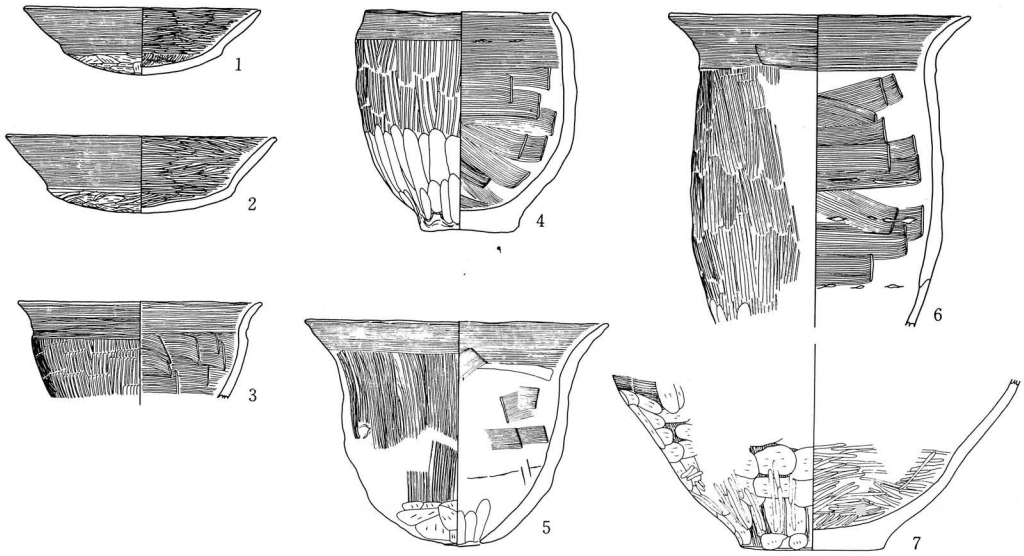
（壁、床）壁は高さ30cmから15cm程遺存しており、やや外傾気味に立ちあがっている。床は平坦でしまっており、大部分は褐色を呈するシルトであるが、西壁付近では砂となりもろくなっている。

（柱穴）柱穴はP_9・P_{10}・P_{11}・P_{12}である。3期のうち、最大の柱間隔を有しており四隅を結ぶ対角線上に位置している。

（カマド）南壁中央で検出された。燃焼部はIII期改築の際破壊され残存してはいないが、火床が残存しており、70cm×60cm程の範囲が確認された。又、南東に向く長さ1.4m程の煙道部を伴なっている。

（堆積土層位）I期に関する堆積土は、住居跡南東側のカマド部分・北側の壁部・II期住居跡床面部の5・6・7・8・9・10層の計6層が確認された。

（出土遺物）土師器の小破片のみ出土している。



1．No. 156　床面
2．No. 183　床面
3．No. 114　床面
4．No. 123　床面
5．No. 93　床面
6．No. 57　床面
7．No. 236　床面

0　10cm

挿図－14　5号住居跡出土遺物実測図

6号住居跡

（遺構の位置と確認）微高地北東部の緩斜面に位置する。調査区域ではＢ区にあたる。遺構確認面は、褐色砂質シルトである。

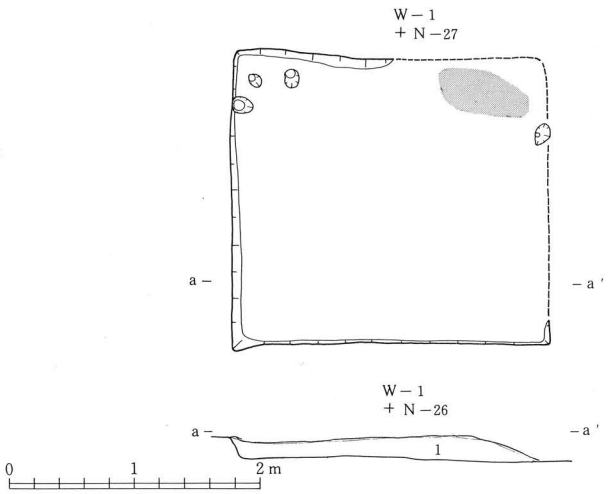
（遺存状況）住居跡東側３分の１程が削平を受け壊滅している。

（平面形・規模・方向）平面形は、ほぼ正方形を呈している。規模は、長軸2.5ｍ・短軸2.4ｍである。長軸方向は、東－西である。

（壁・床）壁は、高さ10cm程残存している。立ちあがりは、やや外傾している。床は、砂質シルトでしまっている。

6号住居跡

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	明茶褐色	砂質シルト	しまりあり、炭化物、遺物を含む



挿図－15　6号住居跡実測図

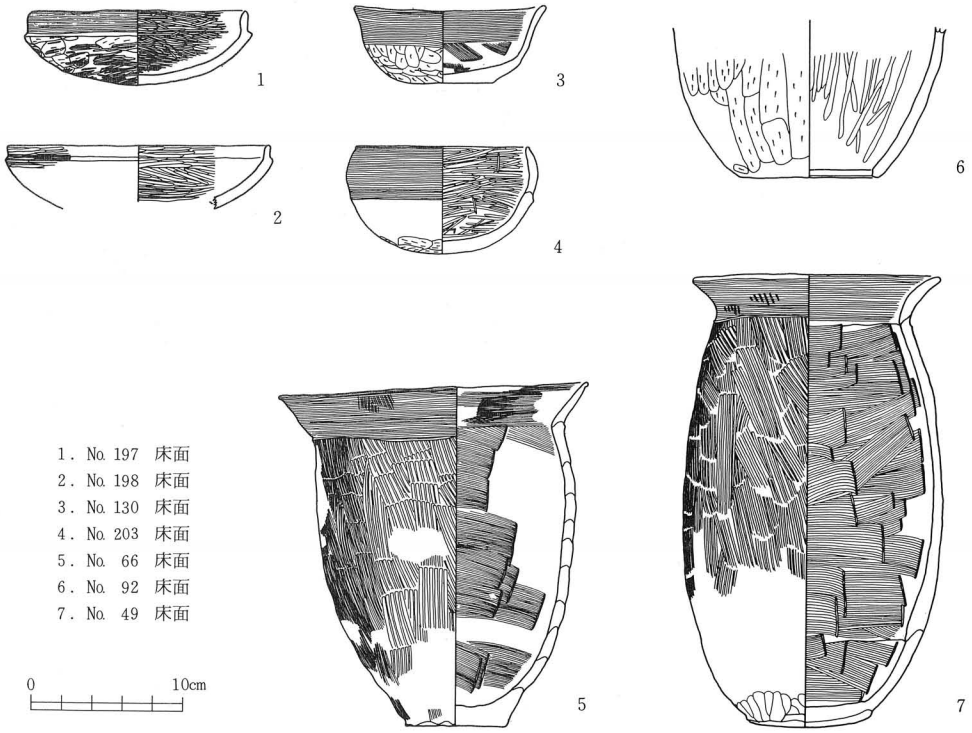
（柱穴）柱穴は観察されなかった。

（カマド）北壁東側に、80cm×35cm程の楕円形を呈する焼土の範囲が確認された。火床の残痕と思われカマド部であると考えられるが、住居跡東側は大きく削平を受けておるので、全容は不明である。

（堆積土層位）住居跡内堆積土は、明茶褐色を呈する砂質シルト、１層が観察された。

（重複・増改築）観察されなかった。

（出土遺物）出土遺物はすべて土師器である。床面出土は、甕（No.49・No.66）、坏（No.130・No.197）・椀（No.203）などである。



挿図－16　6号住居跡出土遺物実測図

7号住居跡

（遺構の位置と確認）調査区域のB区にあたり、6号住居跡の北側に隣接して発見された。確認面は、褐色砂質シルト層である。

（遺存状況）東壁と南壁の一部が削平され消失している。

（平面形・規模・方向）平面形は、ほぼ正方形を呈すると思われる。規模として、南北最大幅3.7m・東西推定幅3.5mを計る。

（壁・床）壁は、高さ10cm程が残存し、やや外傾気味に立ちあがる。床は、砂質シルトでしまっている。

（柱穴）観察されなかった。

（カマド）住居北東部にカマド火床のみ観察された。この付近からは、焚口補強のものと思われる焼けた河原石が数個出土している。

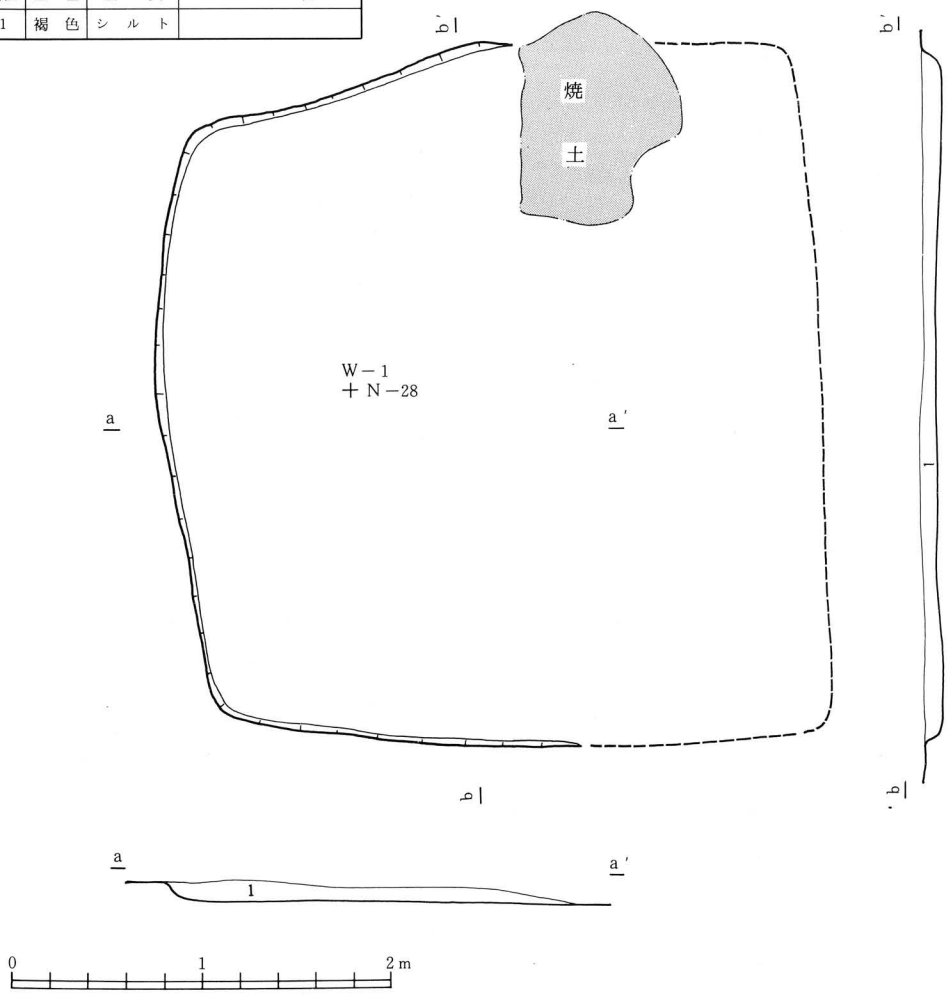
（堆積土層位）褐色シルト1層だけが観察された。

（重複、増改築）観察されなかった。

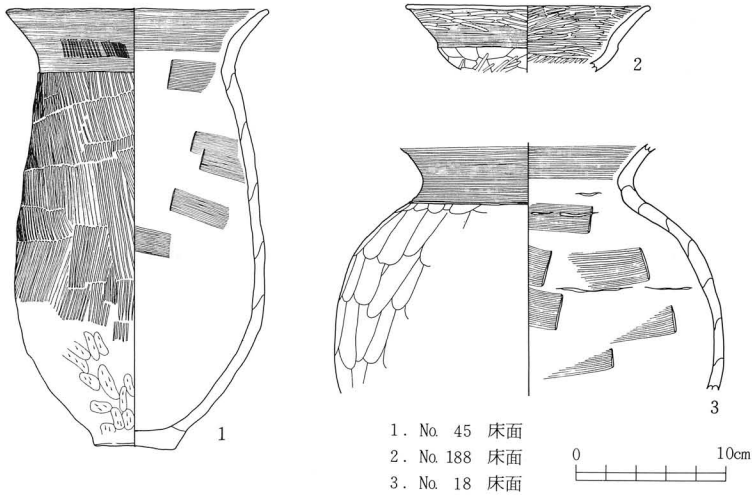
（出土遺物）床面から出土した遺物は、土師器甕（No.18・No.45）、坏（No.188）だけである。

7号住居跡

層位	土色	土質	その他
1	褐色	シルト	



挿図－17　7号住居跡実測図



挿図－18　7号住居跡出土遺物実測図

8号住居跡

（遺構の位置と確認）微高地北東部の緩斜面に位置する。調査区域では、D区にあたる。プラン確認面は、褐色砂質シルト層である。

（遺存状況）東側の壁と北側、南側壁の一部だけが遺存している。

（平面形・規模・方向）平面形は、東壁部のみ残存し、他は削平されているので不明である。規模としては、東壁側で南北幅3.2ｍを計るのみである。

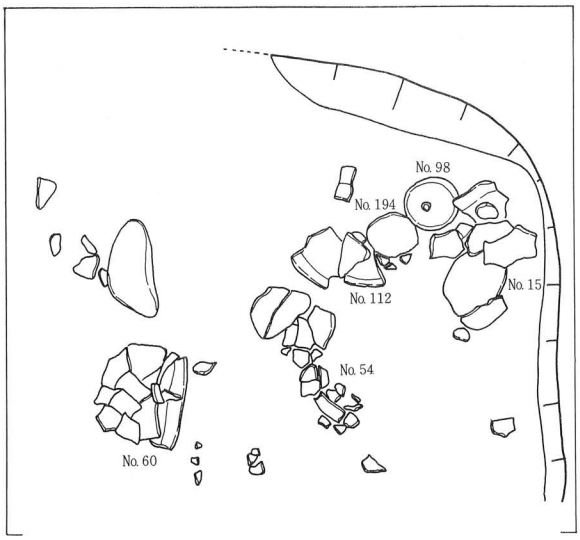
（壁・床）壁は、高さ20cm程残存し、立ちあがりは、やや外傾している。床は、西側が大部分削平されている。残存している床は、平坦でしまっている。

（柱穴・カマド）観察されなかった。

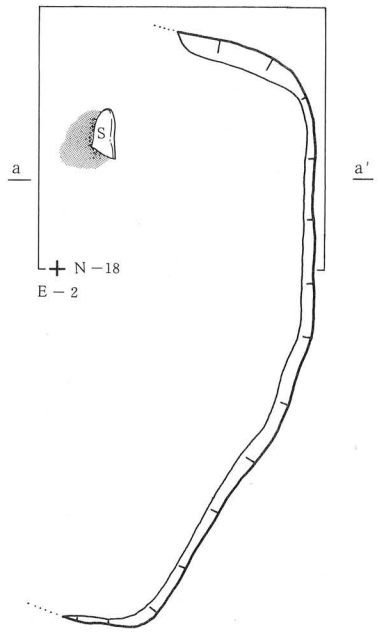
（堆積土層位）２層が観察された。第１層は暗褐色を呈する砂質シルトである。第２層は、第１層と較べて粒子が粗く砂に近い。

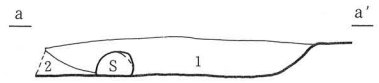
（重複・増改築）観察されなかった。

（出土遺物）北東隅の床面で土師器が７個体一括出土した。器形は、甕（No.15・No.54・No.60）、甑（No.98）、鉢（No.112）、坏（No.128）などである。



挿図－20　8号住居跡遺跡出土状況実測図





8号住居跡

層位	土　色	土　　質	そ　の　他
1	暗褐色	砂質シルト	粘性しまりなし、土器片を含む
2	暗褐色	砂質シルト	焼土を含む

挿図－19　8号住居跡実測図

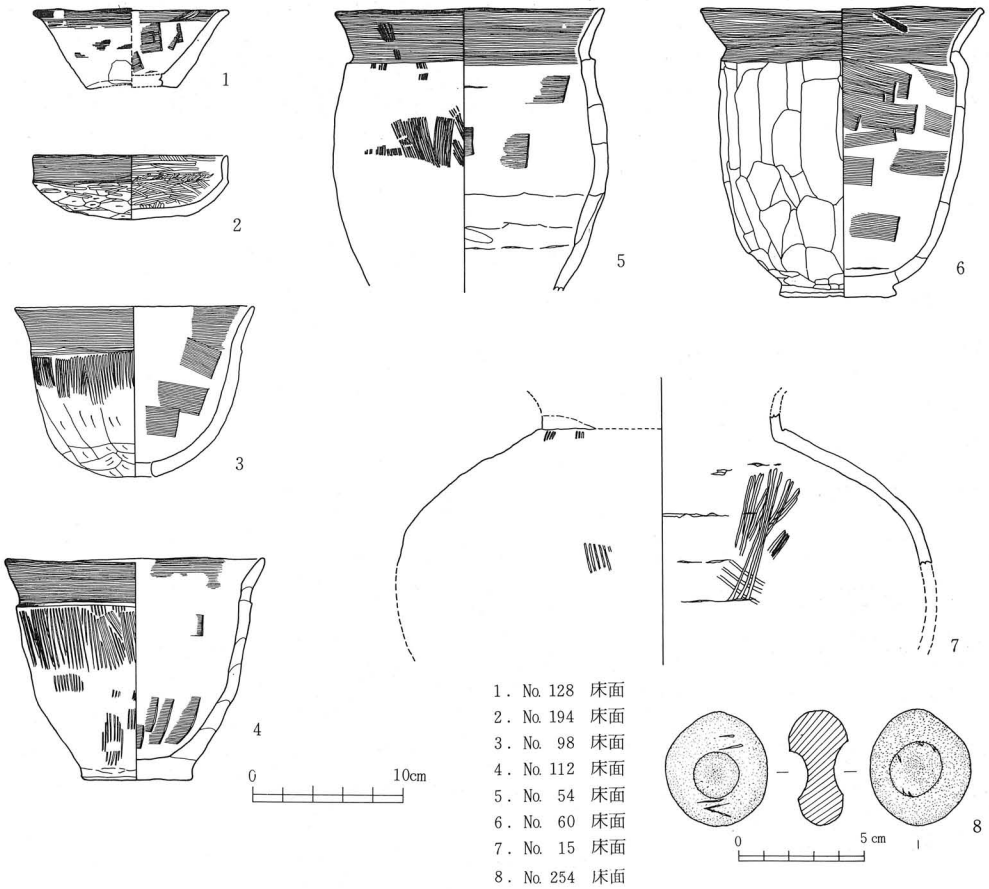
9号住居跡

（遺構の位置と確認）微高地南東端の平坦部に位置し、調査区域のＣ区で発見された。表土下約１ｍの灰白色シルト混入の褐色砂質シルト面でプランを確認した。

（遺存状況）１次及び２次調査を通して発見された住居跡の中で、最も保存の良い住居跡である。

（平面形・規模・方向）長軸5.7ｍ、短軸5.3ｍの正方形を呈する。長軸の方向は、北西－南東を示す。

（壁・床）壁は、ほぼ垂直に立ちあがり、高さ20cmから約10cm遺存している。床は、灰白色シルトを含んだ褐色砂質シルトであり、平坦でしまっている。また床面の所々が火を受けた痕跡



挿図－21　8号住居跡出土遺物実測図

があること、多量の炭化材と灰が出土したこと、出土土器も焼けて橙色に変色していることなどから、火災によって倒壊し、廃棄された住居であると考えられる。炭化材は、床面から5乃至10cmほど上で最も密度が濃く、平面では、東半分に折重なるように出土している。この中には、長さ約3m、太さ約25cmの棟木に該当する炭化材や屋根を葺いたと思われる藁がみとめられる。また各壁に沿って、長さ70cmから40cm、太さ10cm程の垂木と思われる炭化材が、壁に直行して放射状に出土している。

（柱穴）ピットは、合計14個が発見されている。このうちのP_1からP_4が主柱穴と思われる。これらは、住居の四隅を結ぶ対角線上にほぼ正方形を成して位置している。4個の各主柱穴に付随する形でP_5・P_6・P_7・P_8が観察されたが、これらは、支柱の役割を果していたものとも思われる。

（カマド）カマドは、南壁の中央からやや東偏りに設られている。規模は、長さ80cm、焚口の幅70cmで序々に幅が狭くなり、壁に向ってやや登り勾配になっている。焚口の右袖には、補強

用の河原石が残存し、付近から焚口天井に用いられた長円形の河原石が出土している。またカマド中央の火床面からは、石製支脚が立ったまま出土した。カマド内の堆積土は、４層が観察された。

（炉）住居中央やや東偏りの床面で発見されたものである。規模は、直径50cmで円形を呈する。この上面には、２～３cm程の灰層が検出された。

（堆積土層位）８層が観察されたが、この層位は、炭化材の密度と焼土の多少によるものであって、本来は１層の堆積と考えられる。第１層及び第２層に特に多く炭化材が含まれており、下層になるにしたがって炭化材は少くなる。この成因は、住居の上屋が完全に焼落ちないうちに、急激な土砂の流入があり、そのためにこのような堆積となったものと考えられる。

（重複・増改築）観察されなかった。

（出土遺物）床面から出土した遺物は、土師器が主である。カマドの左側からは、甑、長胴甕、坏などが出土し、右側からは、胴部球形の甕が二個体出土した。火災のため放置されたと思われ、比較的完形品が多く、器形の組合せも良く解る。甕は、６個体（No.11・No.19・No.20・No.56・No.63・No.68）出土し、甑は２個体（No.86・No.100）出土している。その他に鉢２個体（No.117・No.124）、坏４個体（No.131・No.141・No.172・No.180）出土している。この他に床面から出土したものとして、滑石製紡錘車（No.250）、石製品（No.255・No.256）などが出土している。また、覆土中の遺物として、完形に近い坏２個体（No.161・No.164）があるが、これらは、炭化材の最も多い第１層上面から出土したもので流れ込んだものと考えられる。

10号住居跡

（遺構の位置と確認）微高地の南端に位置する。褐色砂質シルト面でプランを確認した。調査前に削平を受けており、残存するプランはすでに露呈していた。

（遺存状況）東側部分が遺存している。

（平面形・規模・方向）残存している壁は、東壁４ｍ、南壁及び北壁2.3ｍで、推定規模は、約４ｍ程度と思われ、平面形は方形で、長軸方向は北東－南西あるいは北西－南東と思われる。

（壁・床）壁は、高さ10cmから15cm程遺存しており、わずかに外傾する。床は、褐色砂質シルトで凹凸が少くしまっている。削平された部分では、砂礫層が露出している。

（柱穴）住居床面においてピットが合計７個発見されたが、そのうち深さなどから柱穴と考えうるものはP_7のみであり、西側部が削平を受けていることもあり、他に柱穴として組み合うものは確認出来なかった。

（カマド）観察されなかった。

（堆積土層位）計５層が確認された。１層及び２層はともに褐色を呈するが、混入物によって

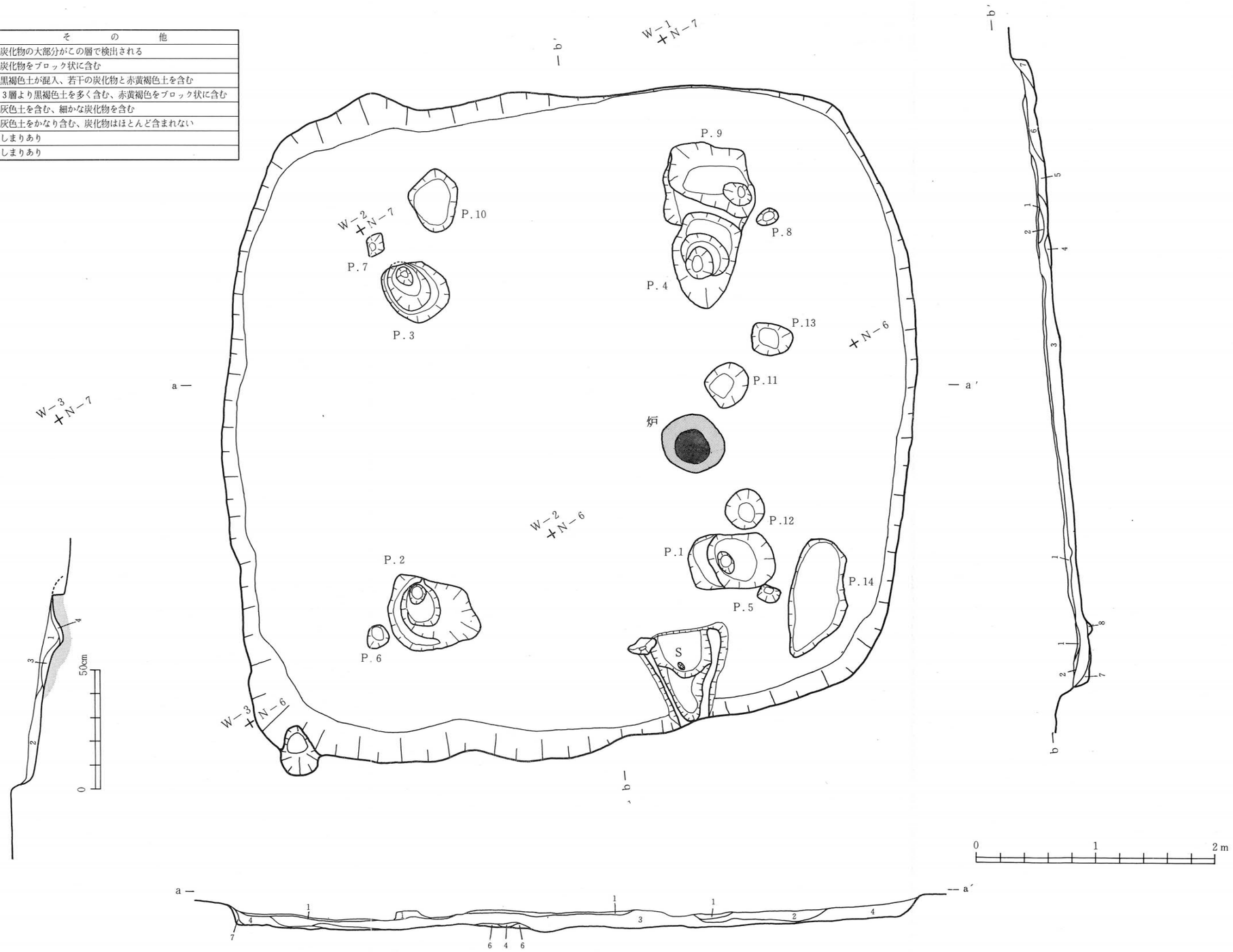
挿図－22　9号住居跡炭化材検出状況実測図及び遺物出土状況

9号住居跡

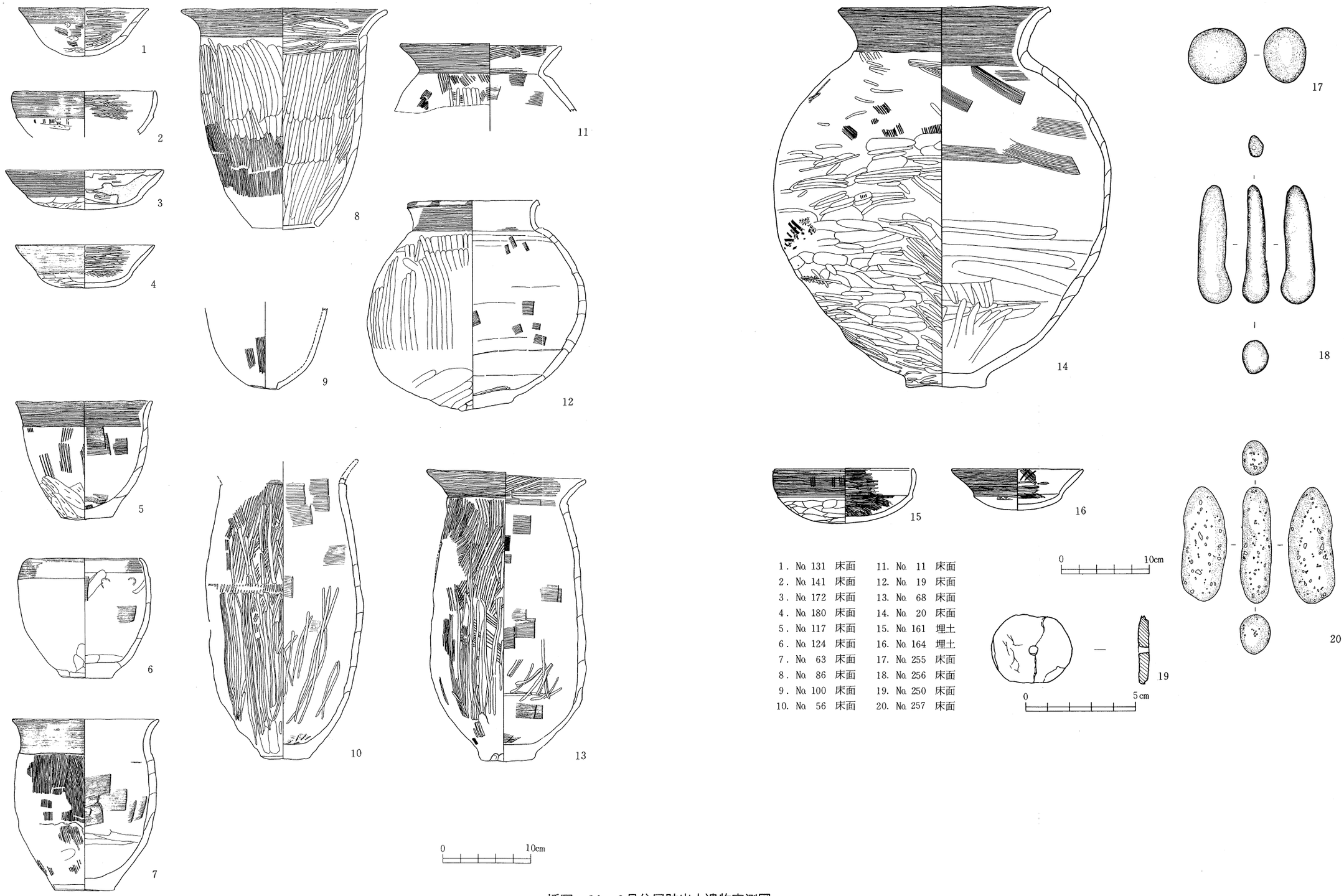
層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	明褐灰色(7.5YR7/1)	砂質シルト	炭化物の大部分がこの層で検出される
2	褐　色(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物をブロック状に含む
3	暗褐　色(10YR3/4)	砂質シルト	黒褐色土が混入、若干の炭化物と赤黄褐色土を含む
4	暗褐　色(10YR3/4)	砂質シルト	3層より黒褐色土を多く含む、赤黄褐色をブロック状に含む
5	褐　色(10YR4/4)	砂質シルト	灰色土を含む、細かな炭化物を含む
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	灰色土をかなり含む、炭化物はほとんど含まれない
7	褐　色(10YR4/4)	砂質シルト	しまりあり
8	暗褐　色(10YR3/4)	砂質シルト	しまりあり

9号住居跡カマド埋土

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	黒褐色(10YR2/2)	砂質シルト	焼土及び灰を細粒状に含む、粘性しまりなし、土器を含み、やや灰色く感じる
2	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	焼土、灰、黄褐色土を細粒状に含む
3	暗褐色(7.5YR3/4)	砂質シルト	焼土を一様に含み、しまりなくやや赤っぽく感じる
4	灰黄褐色(10YR3/2)	砂質シルト	焼土の上にのっている層で、灰が土化したと考えられる。粘性なし

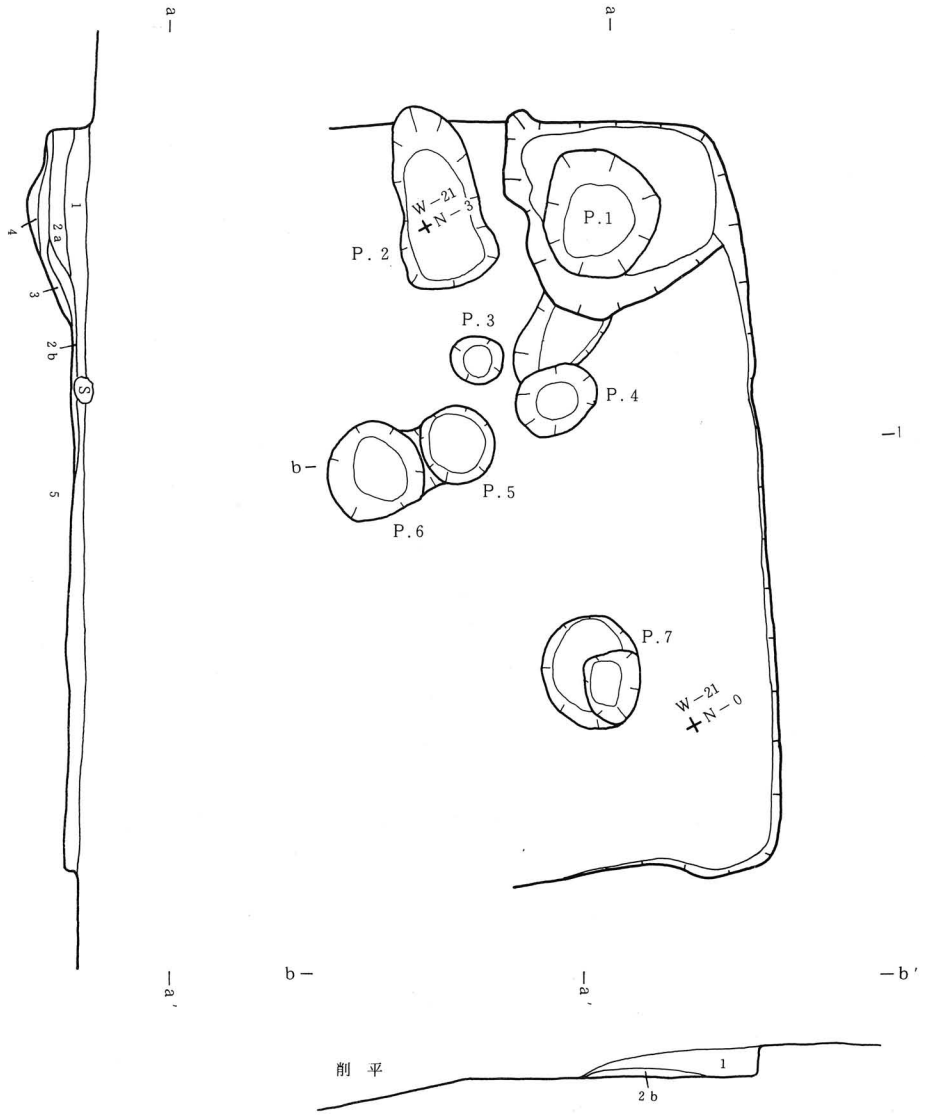


挿図－23　9号住居跡実測図



1．No. 131　床面
2．No. 141　床面
3．No. 172　床面
4．No. 180　床面
5．No. 117　床面
6．No. 124　床面
7．No. 63　床面
8．No. 86　床面
9．No. 100　床面
10．No. 56　床面
11．No. 11　床面
12．No. 19　床面
13．No. 68　床面
14．No. 20　床面
15．No. 161　埋土
16．No. 164　埋土
17．No. 255　床面
18．No. 256　床面
19．No. 250　床面
20．No. 257　床面

挿図－24　9号住居跡出土遺物実測図



10号住居跡

層位	土色	土 質	そ の 他
1	褐 色	砂質シルト	粘性なし、炭化物を含む
2a	褐 色	砂質シルト	灰色シルトが混入、粘性なし、炭化物を含む
2b	褐 色	砂質シルト	灰色シルトを含まない、炭化物を含む
3	灰 色	シルト質砂	
4	暗褐色	砂質シルト	しまりがなく、焼土、炭化物を含む

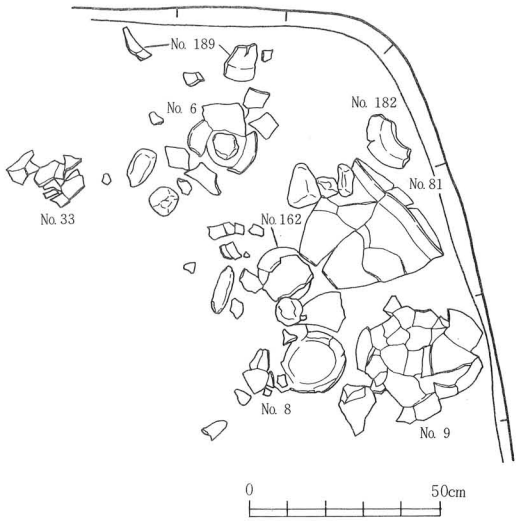
0 1 2 m

挿図－25 10号住居跡実測図

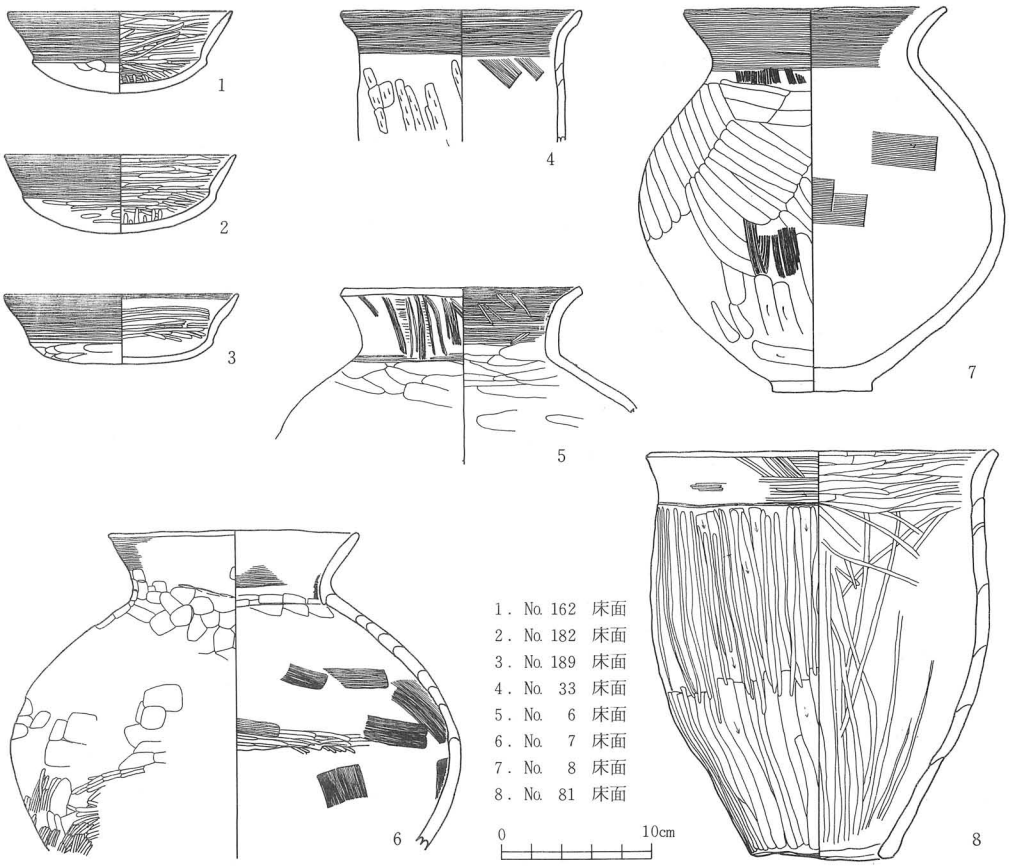
分けられる。3層は灰色のシルトで南にむかうにつれて砂質になる。4層は暗褐色のシルトで焼土・炭化物・土器片を多く含んでいるのが特徴である。

（重複・増改築）観察されない。

（出土遺物）北東隅に集って出土した。すべて土師器である。甕（No.6・No.7・No.8・No.33）や甑（No.81）坏（No.162・No.182・No.189）などの器形がある。



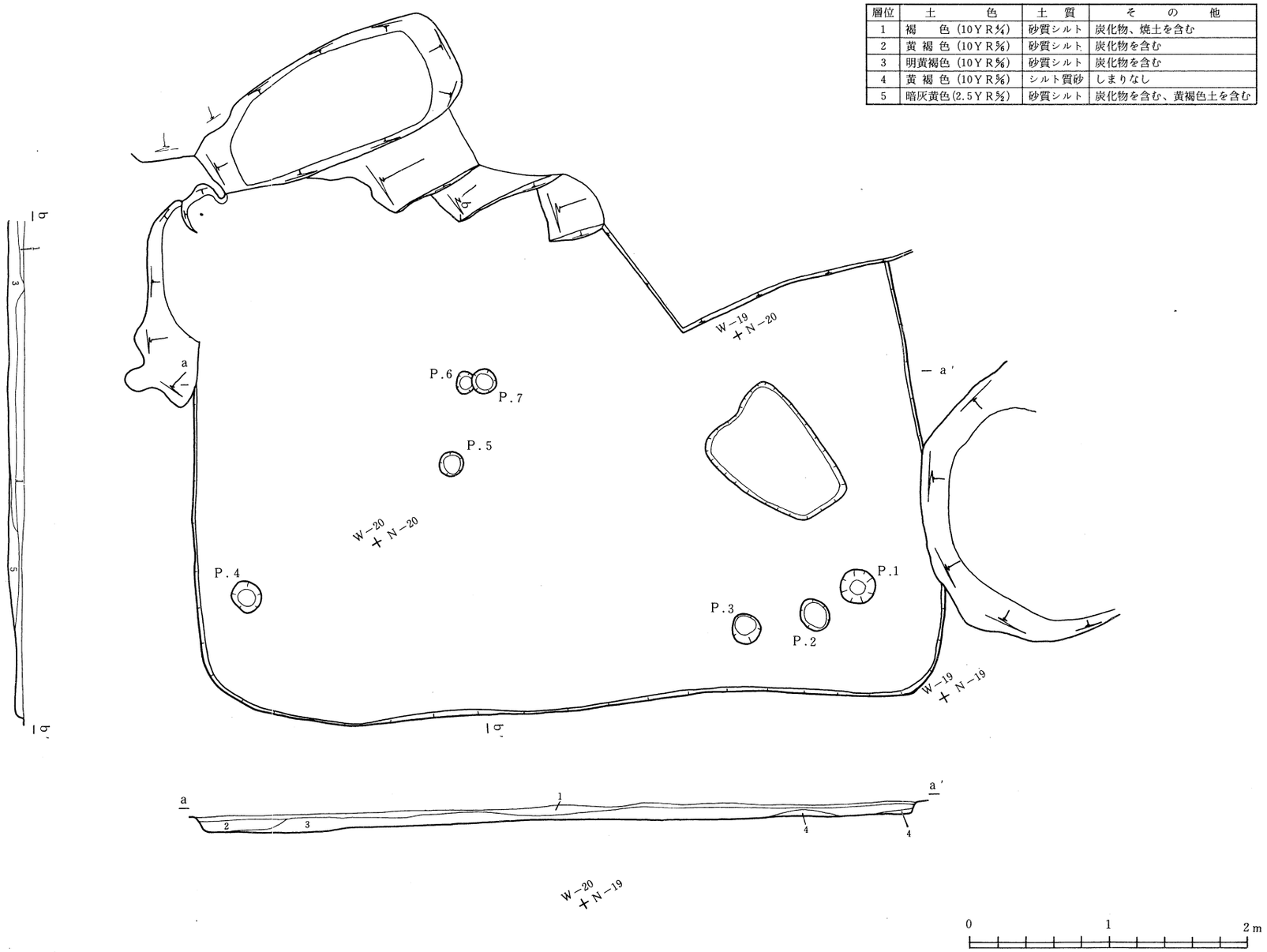
挿図－26　10号住居跡遺物出度状況実測図



挿図－27　10号住居跡出土遺物実測図

１１号住居跡

層位	土　　色	土　質	そ　の　他
1	褐　　色（10ＹＲ4/4）	砂質シルト	炭化物、焼土を含む
2	黄 褐 色（10ＹＲ5/6）	砂質シルト	炭化物を含む
3	明黄褐色（10ＹＲ6/6）	砂質シルト	炭化物を含む
4	黄 褐 色（10ＹＲ5/6）	シルト質砂	しまりなし
5	暗灰黄色（2.5ＹＲ5/2）	砂質シルト	炭化物を含む、黄褐色土を含む



挿図－28　11号住居跡実測図

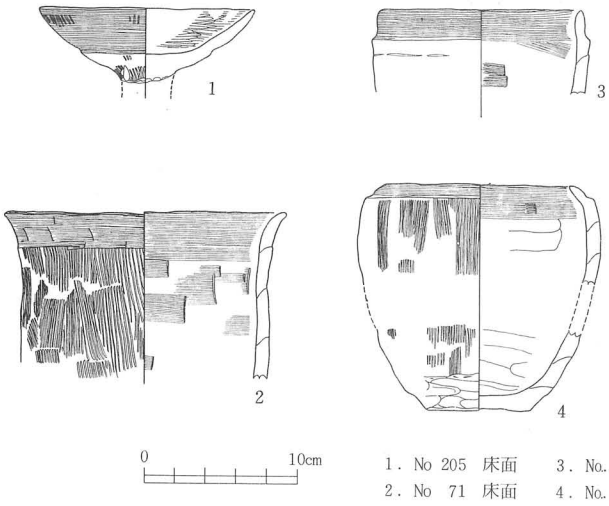
11号住居跡

（遺構の位置と確認）調査区域Ａ区の西端に位置する。この区域は微高地中最も標高が高い。褐色砂質シルト面でプランを確認した。

（遺存状況）北半分は完全に壊滅し、残存している部分も壁がほとんど削平されている。

（平面形・規模・方向）長軸5.4m、短軸（残存部）3.9mで、平面形は、一辺５m程度の正方形を呈すると思われる。長軸方向は北東－南西あるいは北西－南東である。

（壁・床）遺存している壁の高さは、10cmから５cmであり、やや外傾している。床は、褐色砂質シルトで一部砂の所もある。中央が若干高くなっており、しまっている。



挿図－29　11号住居跡出土遺物実測図

（柱穴）ピットは、合計７個発見されたが、そのうち柱穴と考えられるものは、P_1とP_4の２個である。

（カマド）カマドは発見されなかったが、プラン確認の時点で南東壁中央にわずかに焼土が観察された。

（堆積土層位）５層が観察された。第１層、第２層、第３層及び第５層は、砂質シルトであるが、第４層は砂である。

（重複・増改築）観察されなかった。

（出土遺物）床面出土遺物は、すべて土師器である。実測可能なものは４個体と少ない。甕（No.71）、鉢（No.121・No.126）、高坏（No.205）などの器形がある。

12号住居跡

（遺構の位置と確認）４号住居から西南西に約10mの地点に位置する。調査区域ではＣ区に入るが、Ｄ区との境に位置している。プランが確認されたのは、表土から１m程掘り下げた褐色シルト面である。

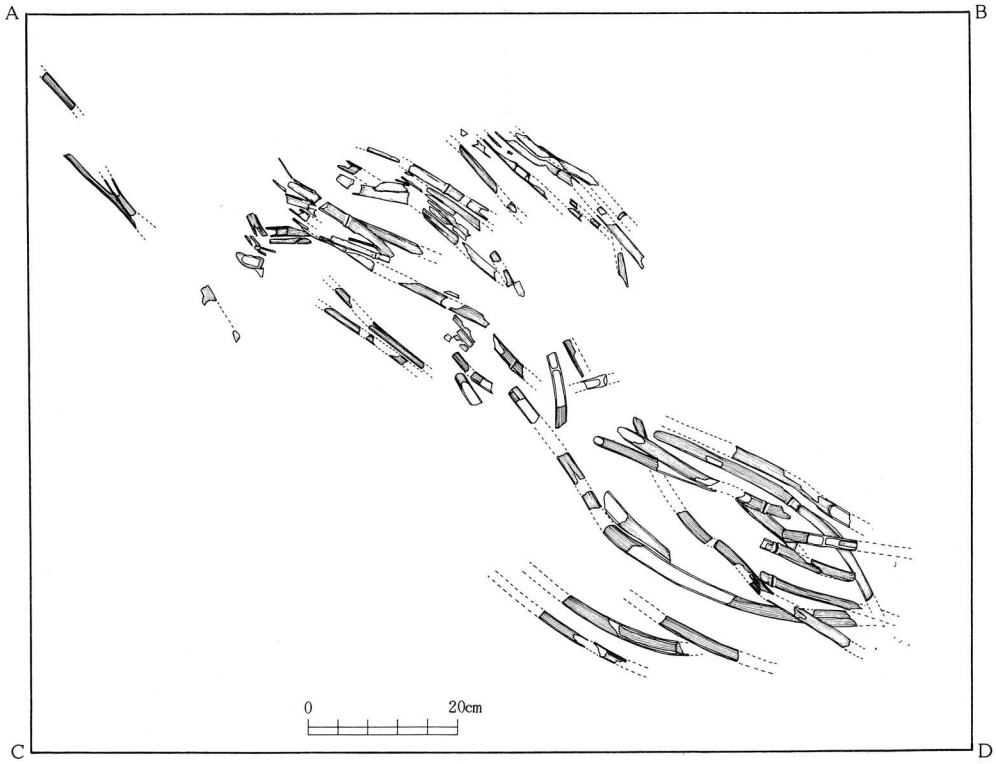
（遺存状況）西壁が削平されている。

（平面形・規模・方向）平面形は、正方形を呈し、長軸は4.5m、短軸は4.4mの規模を有する。長軸方向は、北東－南西である。

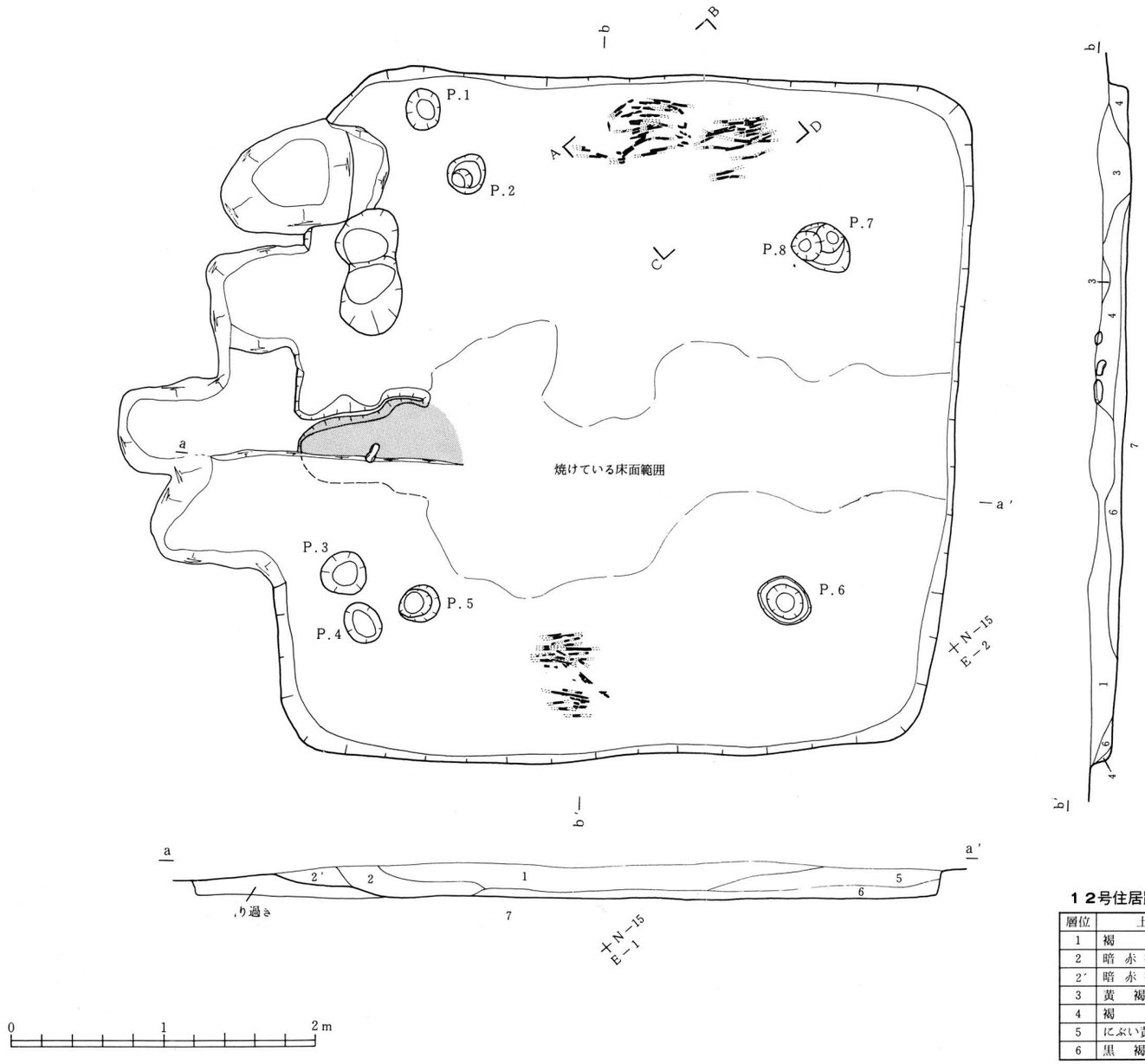
（壁・床）壁は、若干外傾して立ちあがり、残存する壁の高さは、15cm程度である。床は、平坦で堅くしまっている。カマド前方の床面は、焼けて赤褐色を呈し、所々に炭の散布が観察される。炭化材が床面の各所から検出されており、９号住居同様火災に見舞われたものと考えられるが、９号と異なるのは、炭化材は床面で観察されるという点である。また北東壁沿いの床面から炭化した竹材が30本程まとまって検出された。長さは、30cmから10cm程度である。床面に接して出土していることから、本来は紐などで編まれて敷かれたのではないかと推定される。これと同じものは、福島県岩瀬郡鏡石町仏具壇遺跡の同じく火災にあった住居跡から出土している。

（柱穴）発見されたピットの総数は８個である。住居の四隅を結ぶ対角線上にほぼ正方形を形成して位置するP_2・P_5・P_6・P_8が柱穴と考えられる。

（カマド）北西壁中央に設けられている。外に向って緩やかな登り勾配になっている。煙道は発見されていない。床面と右袖の立ちあがりの一部のみ残存している。規模は、82cm×40cm程と推定され、カマド内より石製支脚が、やや傾いて出土している。



挿図－31　12号住居跡竹材実測図



12号住居跡

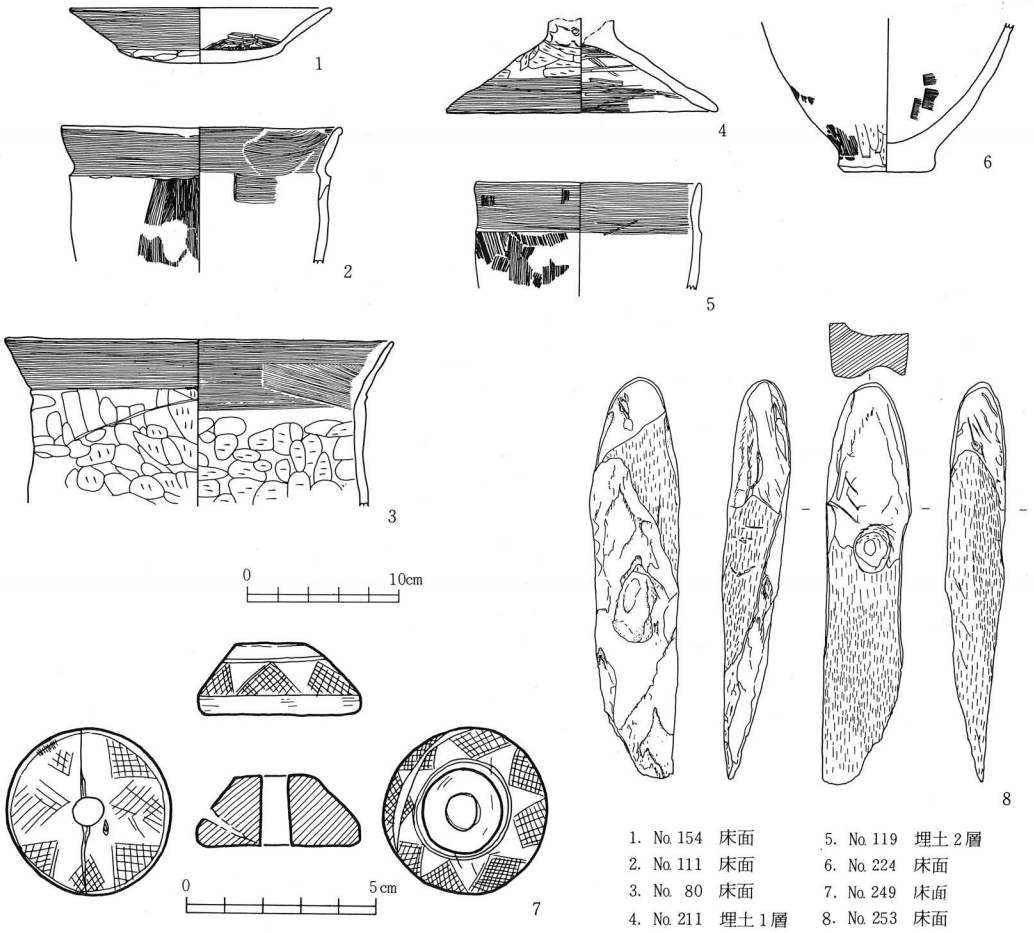
層位	土色	土質	その他
1	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	粘性、しまりなし
2	暗赤褐色(2.5YR3/6)	砂質シルト	粘性、しまりなし2′より焼土が多い
2′	暗赤褐色(2.5YR3/3)	砂質シルト	焼土を含む
3	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	粘性なし
4	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	粘性なし、炭化物、焼土を含む
5	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	粘性なし、炭化物を含む
6	黒褐色 (5YR3/2)	砂質シルト	炭化物、焼土、遺物を含む。粘性あり

挿図−30　12号住居跡実測図

（堆積土層位） 6層が観察された。土質はすべて砂質シルトである。第2層はカマドの崩落土あるいは埋土であり、また第4層、第5層及び第6層には、木炭片が含まれている。特に第6層は、木炭片・焼土を多量に含んでいる。

（重複・増改築） 観察されなかった。

（出土遺物） 床面出土の遺物は、極めて少なく、土師器は甕（No.80）、坏（No.154）、蓋（No.211）などがある。その他の遺物は、鋸歯文が刻まれた滑石製紡錘車（No.249）と砥石（No.253）である。また覆土中に含まれていたもので実測可能だったものは、第1層からは、蓋（No.211）、鉢（No.119）、第2層からは、甕（No.400・No.224）が出土した。



挿図－32 12号住居出土遺物実測図

13号住居跡

（遺構の位置と確認） 微高地北部の緩斜面に位置し、調査区域では、A区にあたる。表土下50cm程度の褐色砂質シルト面においてプランを確認した。

（遺存状況）耕作によってかなり削平され、壁を欠いている箇所もある。

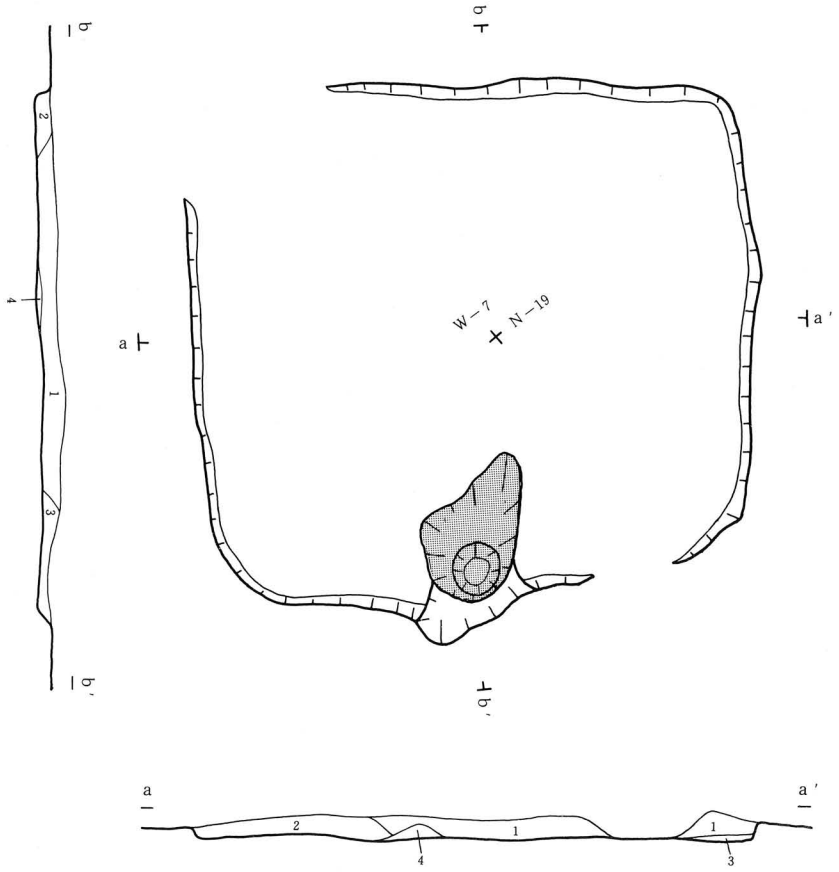
（平面形・規模・方向）長軸3.05m・短軸2.7mの歪んだ正方形を呈する。南壁がやや外方へ弯曲している。長軸方向は北西－南東を示す。

（壁・床）壁は、所々が耕作によって壊されているが、高さ９cm程を残し、外傾気味に立ちあがる。床は、やや凹凸があり、砂質シルトでしまっている。

（柱穴）観察されなかった。

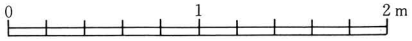
（カマド）南壁中央に、カマドの残存と思われる焼土が観察された。

（堆積土層位）４層が観察され、すべて土質は、砂質シルトである。第１層と第２層には、木炭片、骨片などが多く含まれている。



１３号住居跡

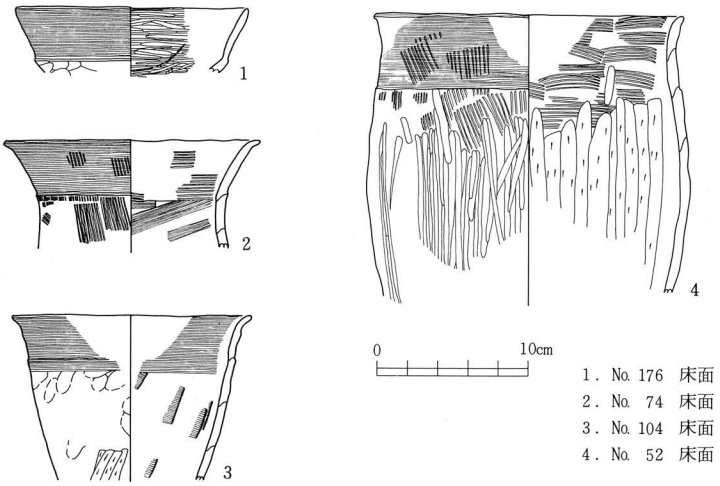
層位	土　色	土　　質	そ　の　他
1	暗 褐 色	砂質シルト	炭化物、遺物、骨片を含む
2	褐　　色	砂質シルト	
3	黄 褐 色	砂質シルト	
4	暗赤褐色	砂質シルト	焼土を含む



挿図－33　13号住居跡実測図

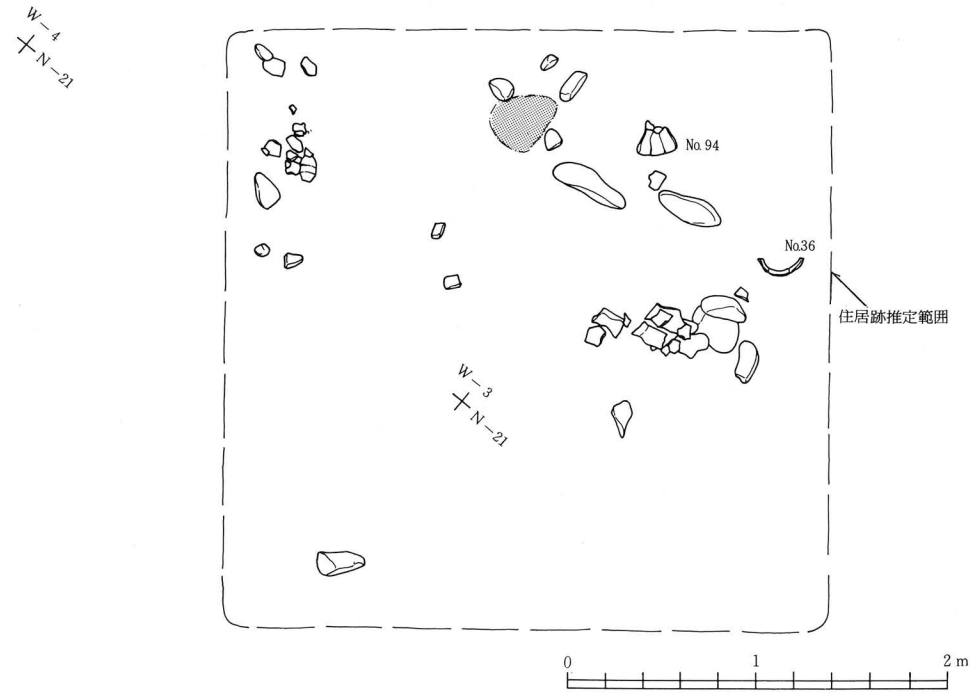
（重複・増改築）観察されなかった。

（出土遺物）出土遺物は、少量である。すべて土師器の破片である。床面出土のものは、甕（No.52・No.74）、鉢（No.104）、坏（No.176）である。



挿図－34　13号住居跡出土遺物実測図

14号住居跡

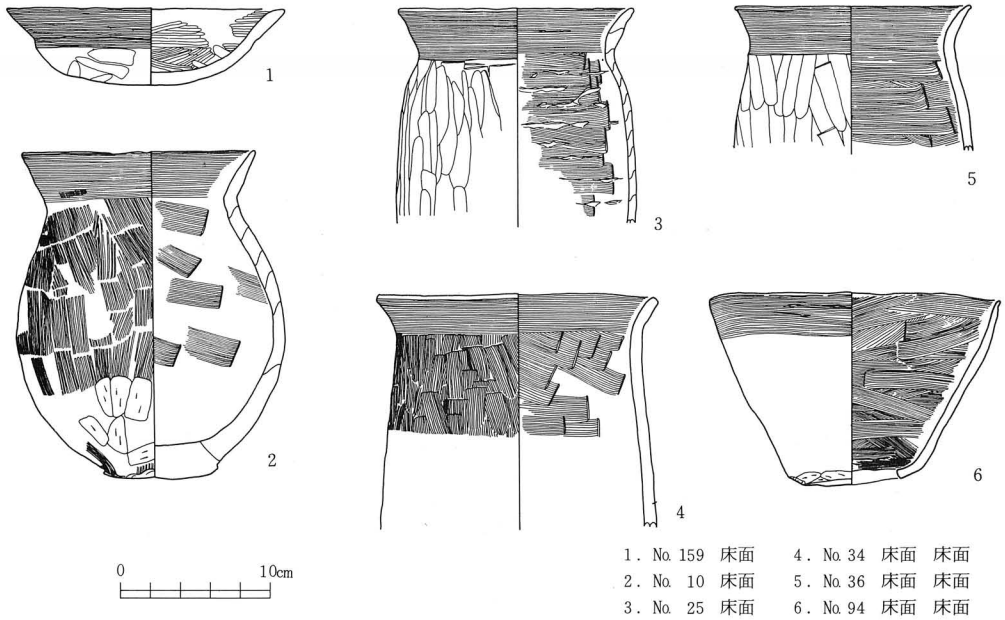


挿図－35　14号住居跡実測図

（遺構の位置と確認）13号住居跡の北東約15mに位置する。確認面は、褐色砂質シルト面である。

（遺存状況）壁はすべて欠いており、床面もほとんど削平されている。そのため平面プランは、確認ができなかった。しかしカマドの火床残痕と思われる焼土と、それに伴う支脚と思われる3個の石が観察された。

（出土遺物）出土遺物は土師器が6個体ほど出土し、その中には完形品に近いものもある。器形は、甕（No.10・No.25・No.34・No.36）、甑（No.94）及び坏（No.159）である。



挿図－36　14号住居跡出土遺物実測図

15号住居跡

（遺構の位置と確認）5号住居から南西15mのところに位置し、調査区域では、A区にあたる。確認面は、褐色砂質シルト面である。

（遺存状況）北壁は、17号住居に切られ、南壁は、第14土壙によって切られている。

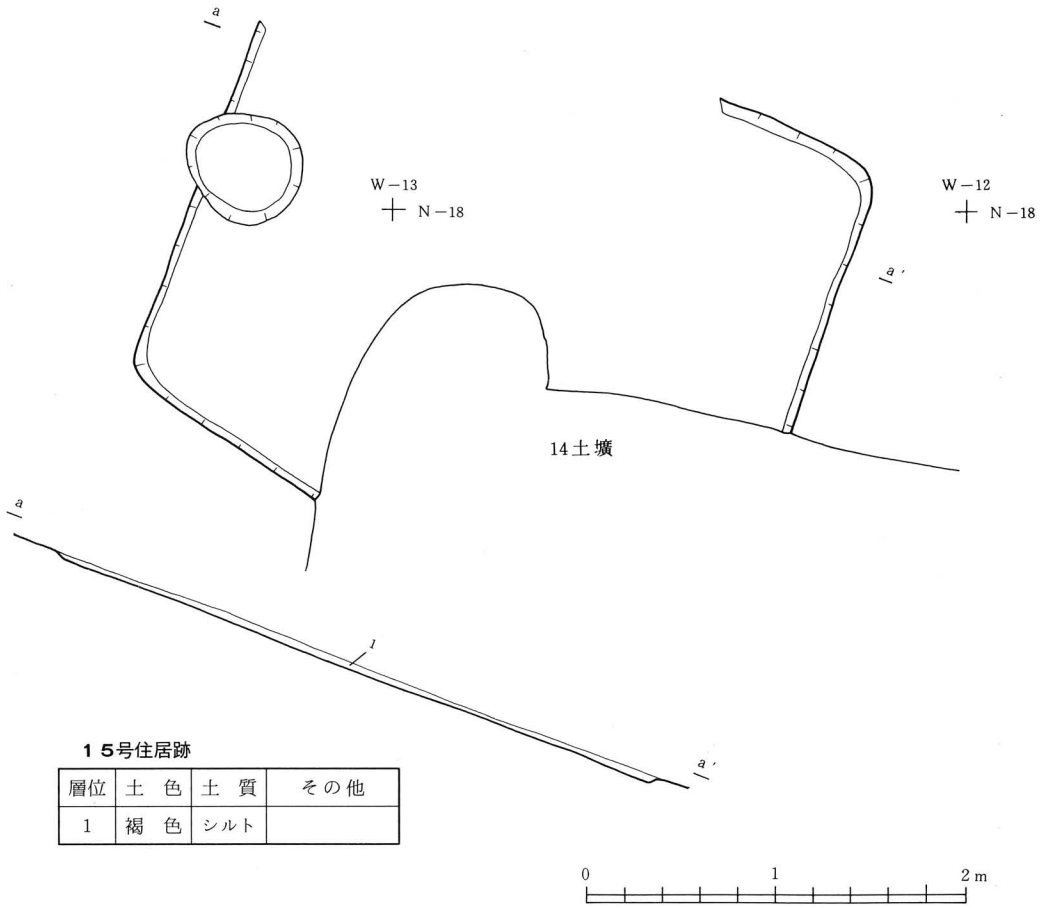
（平面形・規模・方向）平面形は、平方形を呈し、規模は、長軸3.4m、短軸2.8mである。長軸方向は東－西である。

（壁・床）壁は、3cm程残存し、立ちあがりは、やや外傾している。床は平坦でしまっている。

（柱穴・カマド）発見されなかった。

（堆積土層位）褐色シルト1層だけが観察された。

（重複・増改築）17号住居及び第14土壙と重複している。17号住居及び第14土壙が15号住居を



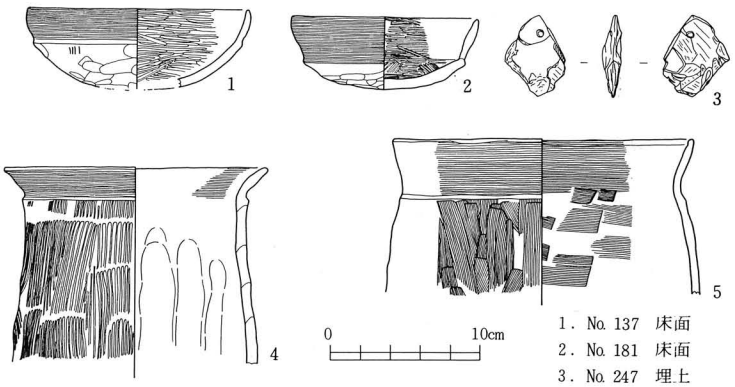
15号住居跡

層位	土　色	土　質	その他
1	褐　色	シルト	

挿図－37　15号住居跡実測図

切っている。増改築は認められない。

（出土遺物）土師器が主である。床面から出土したものは、甕（No.75・No.79）及び坏（No.137・No.181）などである。その他に埋土から石製品（No.247）が出土している。



1．No. 137　床面
2．No. 181　床面
3．No. 247　埋土
4．No. 75　床面
5．No. 79　床面

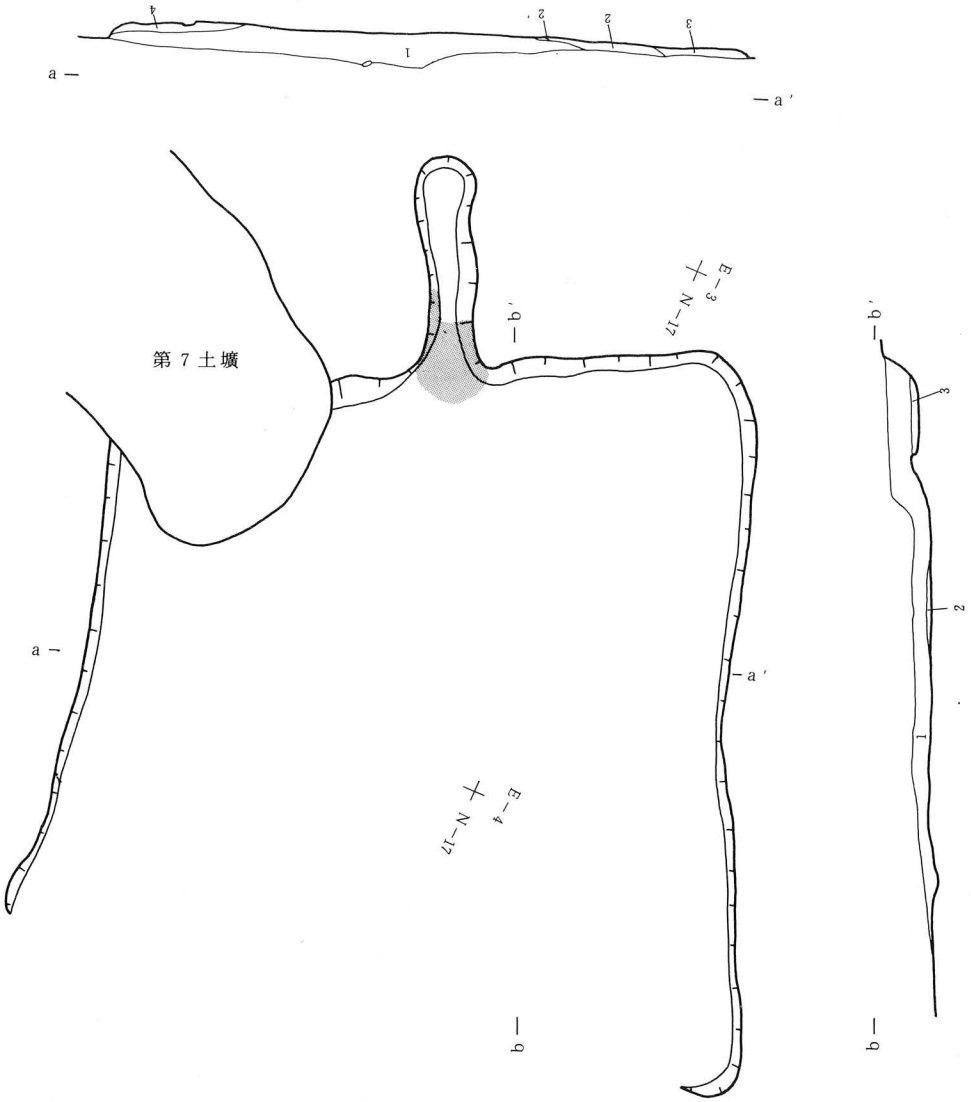
挿図－38　15号住居跡出土遺物実測図

16号住居跡

（遺構の位置と確認）

12号住居跡の北東に隣接して発見され、調

査区域D区にあたる。プランは、、褐色砂質シルト面で確認された。



１６号住居跡

層位	土　　色	土　質	そ　の　他
1	暗褐色（10ＹＲ3/4）	砂質シルト	炭化物、骨片を含む
2	褐　色（10ＹＲ5/6）	砂質シルト	炭化物、骨片を含む、白色シルト混入
2	褐　色（10ＹＲ5/6）	砂質シルト	灰色土（砂質）混入
3	褐　色（10ＹＲ5/4）	シルト質砂	荒い粒状の砂を含む
4	褐　色（10ＹＲ5/6）	砂質シルト	白色シルトが若干混入

0　1　2 m

挿図－39　16号住居跡実測図

（遺存状況）東壁及び南壁の一部が削平されている。

（平面形・規模・方向）平面形は、歪んだ長方形を呈し、北壁と南壁が内側に弯曲しているのが特徴である。規模は、3.9m・短軸3.4mである。長軸方向は、東ー西を示す。

（壁・床）壁は、高さ9cm程が残り、やや外傾気味に立ちあがる。床は、平坦でしまっている。

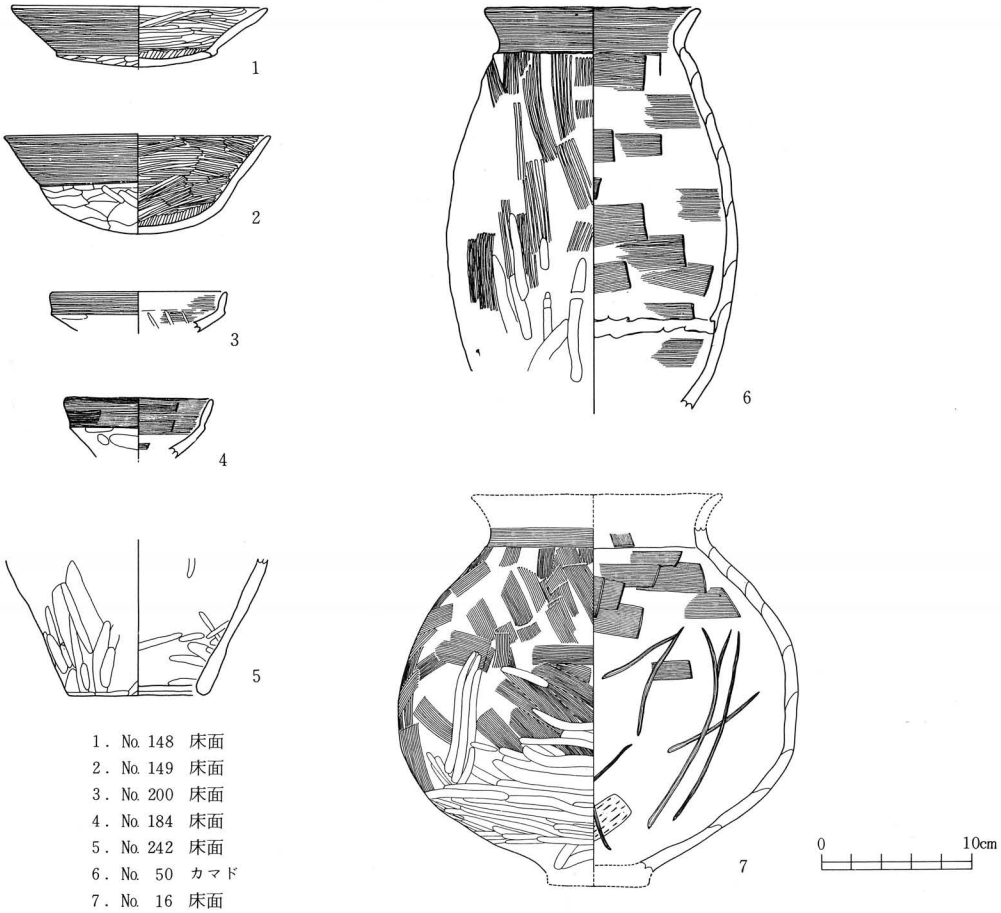
（柱穴）観察されなかった。

（カマド）西壁中央に設けられ、カマド本体の長さは、約60cmであり、幅は約56cmを計る。トンネル状の煙道が付設されており、この長さは110cm、幅は23cmである。なお本体の規模は、火床面の大きさと補強石の出土位置からの推定であり、上部は、完全に崩壊している。

（堆積土層位）4層が観察された。第1層と第2層は、暗褐色乃至褐色を呈する砂質シルトである。第1層は、灰白色シルトを含むが、第2層は含まない。第3層及び第4層は、褐色の砂である。

（重複・増改築）第6土壙及び第7土壙と重複しており、両土壙が16号住居を切っている。

（出土遺物）床面出土の遺物は、土師器甕（No.16・No.50）及び坏（No.148・No.149・No.184・No.200）



1．No. 148　床面
2．No. 149　床面
3．No. 200　床面
4．No. 184　床面
5．No. 242　床面
6．No. 50　カマド
7．No. 16　床面

挿図ー40　16号住居出土遺物実測図

と甑（No.242）である。

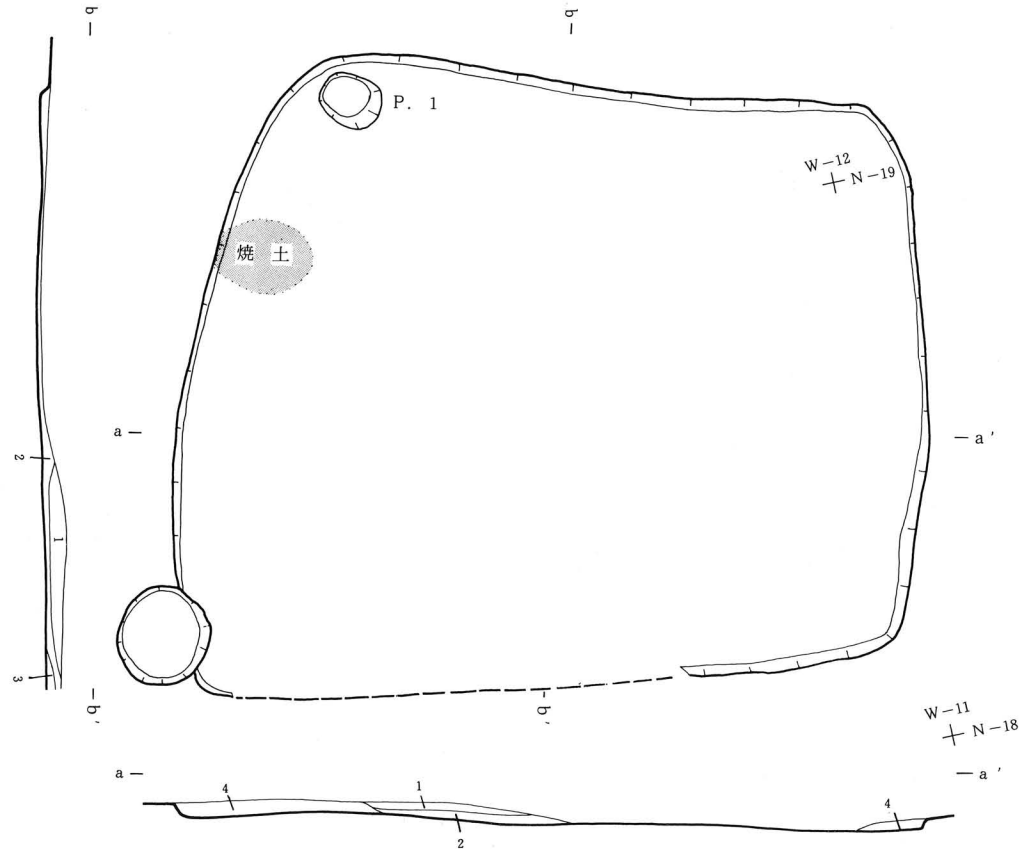
17号住居跡

（遺構の位置と確認）15号住居の北に隣接する。確認面は、褐色砂質シルト面である。

（遺存状況）西壁が耕作のため削平されている。

（平面形・規模・方向）平面形は、長方形を呈し、東壁がやや外方に弯曲している。規模は、長軸４ｍ・短軸３ｍである。長軸方向は東－西を示す。

（壁・床）壁は、西側の壁が削平されている以外は、８cmから４cm残存している。やや外傾気味に立ちあがっている。床は、平坦でしまっている。



１７号住居跡

層位	土色	土質	その他
1	明褐色	砂質シルト	しまりなし
2	褐色	砂質シルト	しまりあり
3	暗褐色	砂質シルト	しまりあり
4	暗褐色	砂質シルト	しまりあり、黒色土がブロック状に含まれる

0　1　2m

挿図－41　17号住居跡実測図

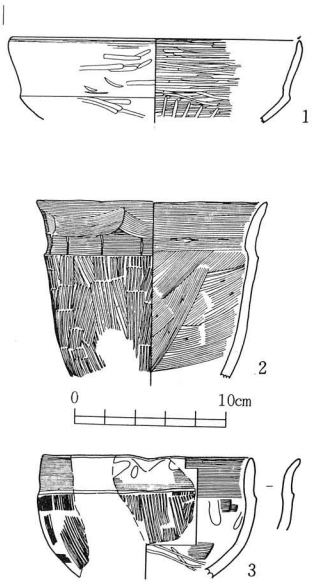
（柱穴）ピットは、北西隅で１個発見された。しかしこれとセットを成すピットは、発見することができなかったので、柱穴となるものであるかどうかは不明である。

（カマド）削平され西壁中央やや北偏りの床面でカマドの残痕と思われる焼土が観察された。またこの近くから、補強用の石と思われる焼けた河原石が出土している。

（堆積土層位）４層が観察された。４層とも砂質シルトである。

（重複・増改築）15号住居を切っている。

（出土遺物）床面から出土した遺物は、土師器甕（No.116）と坏（No.192）及び片口土器（No.213）などである。



1．No. 192　床面
2．No. 116　床面
3．No. 213　床面

挿図－42　17号住居跡出土遺物実測図

18号住居跡

（遺構の位置と確認）15号及び17号住居跡の東側に隣接する。褐色砂質シルト面でプランを確認した。また床面において、やや規模の小さいプランを検出した。便宜上、先に確認したものをＡプランとし、後のものをＢプランとする。

（遺存状況）ほぼ南側半分を、第14土壙によって壊されている。

（平面形・規模・方向）平面形は、Ａ、Ｂ両プランとも方形を呈する。Ａプランの規模は、長軸が5.2m、短軸（残存部）が4.0mである。Ｂプランは、(残存部）長軸4.1cm、短軸3.7mを計る。長軸方向は、Ａプランが、北西－南東を示し、Ｂプランは、これよりやや南に傾く。

（壁・床）Ａプランの壁は、高さ15cm程を残す。床は、北及び西壁付近は砂質シルトでしまっているが、中央部のＢプランの覆土にあたる箇所は、シルトでややしまりがない。Ｂプランの壁は、高さ10cm程残存し、床は、砂質シルトでしまっており、焼土と炭化物が多量に検出された。

（柱穴）４個のピットが検出された。このうち柱穴と思われるものは、P_1とP_2であり、プランに対応して配置されている。P_1は長径80cm、短径55cmの長円形を呈すもので、深さは約37cmを計る。P_2は長径75cm、短径60cmの長円形を呈し、深さは約54cmを計る。これらは、Ａプランに伴なうものであり、Ｂプランに伴なう柱穴は発見されなかった。

（カマド）Ａプラン北西壁中央に設けられている。規模は、トンネル状に掘り抜かれたと思われる煙道を含めて、その長さは約100cm、焚口部の幅70cmである。焚口部は、20cm程の河原石で補強されている。カマド内堆積土は、３層が観察されている。第Ｉ層及び第II層は、暗褐色を呈

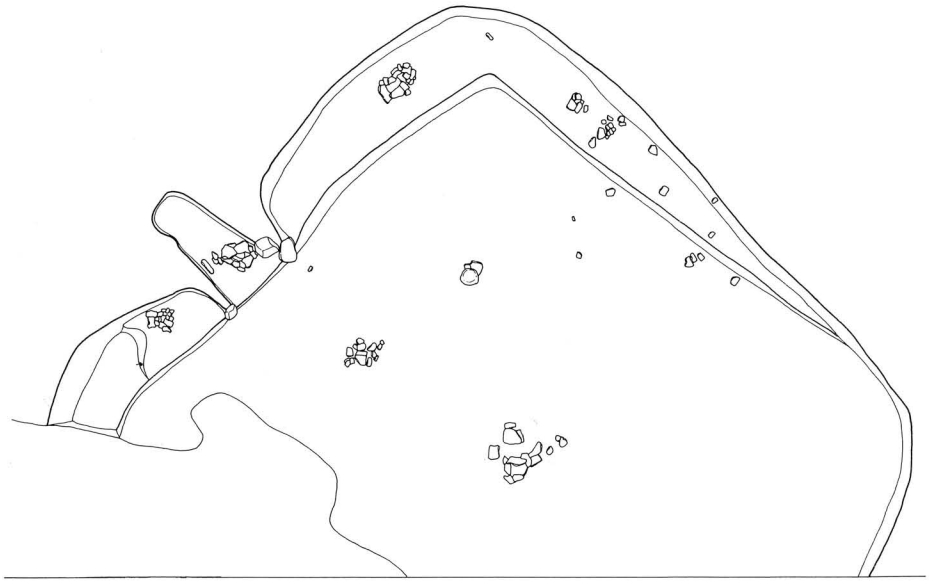
する砂質のもので焼土を含み、第３層は、極暗赤褐色の砂質土である。

（堆積土層位）５層が観察された。シルトあるいは砂質シルトである。第１層及び５層中から土師器の小破片が多量に出土した。

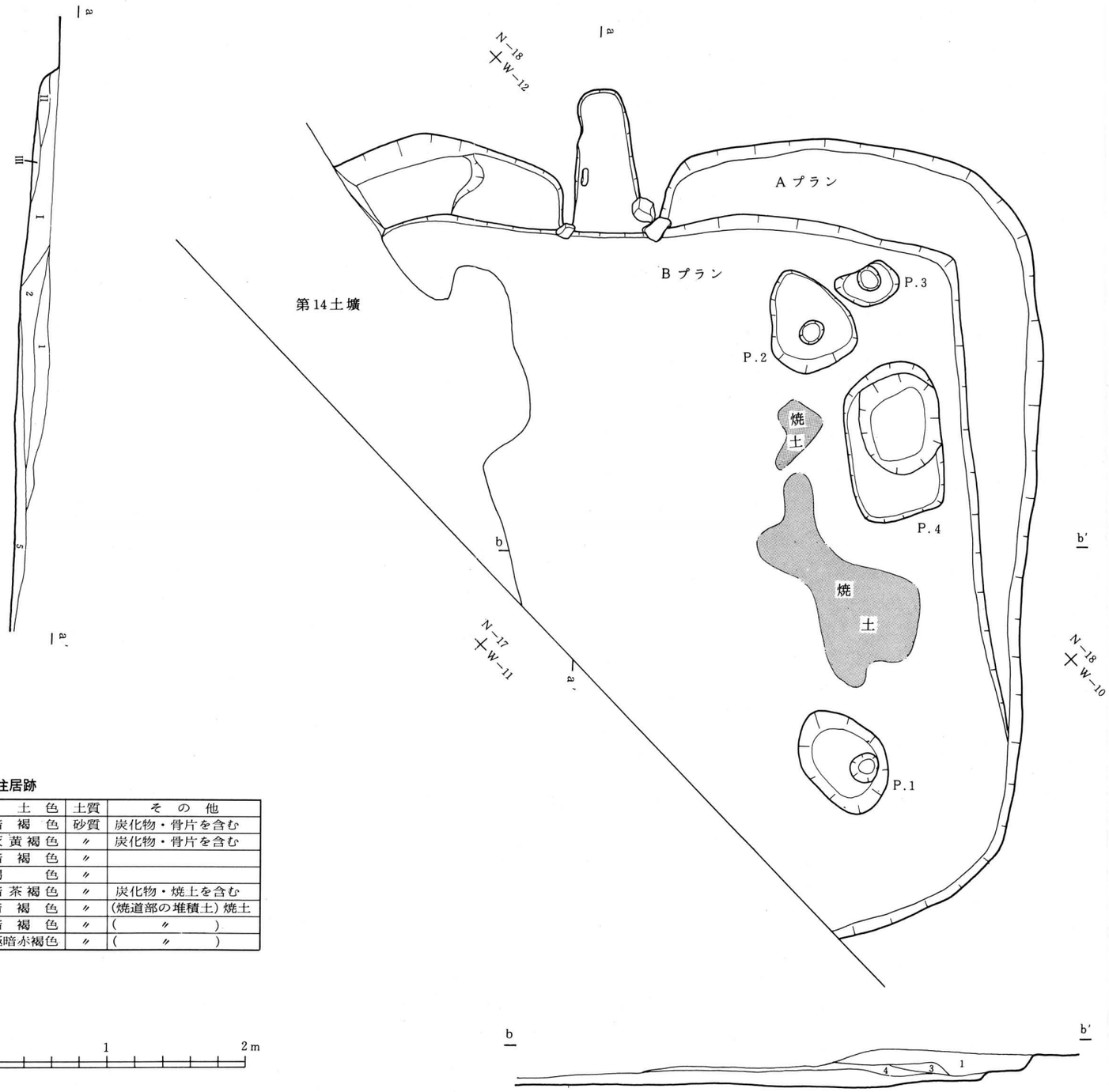
（炉）Ａプラン床面において検出された。この炉に伴って、鉢（No.120）と坏（No.177）が出土している。その出土状態は、鉢が炉の中に正立して埋っており、その上に坏がのっていた。これらの土師器は、熱のため橙色に変色している。

（重複・増改築）第14及び第15土壙に切られている。ＡプランとＢプランの関係は、Ａプランの堆積土を除去した後でＢプランが発見されたので、Ｂプランは、Ａプランよりも古いと思われる。

（出土遺物）床面から出土した遺物は、坏（No.177）鉢（No.120）である。その他に埋土に多量の土師器が含まれていた。



挿図－43　18号住居跡遺物分布状況

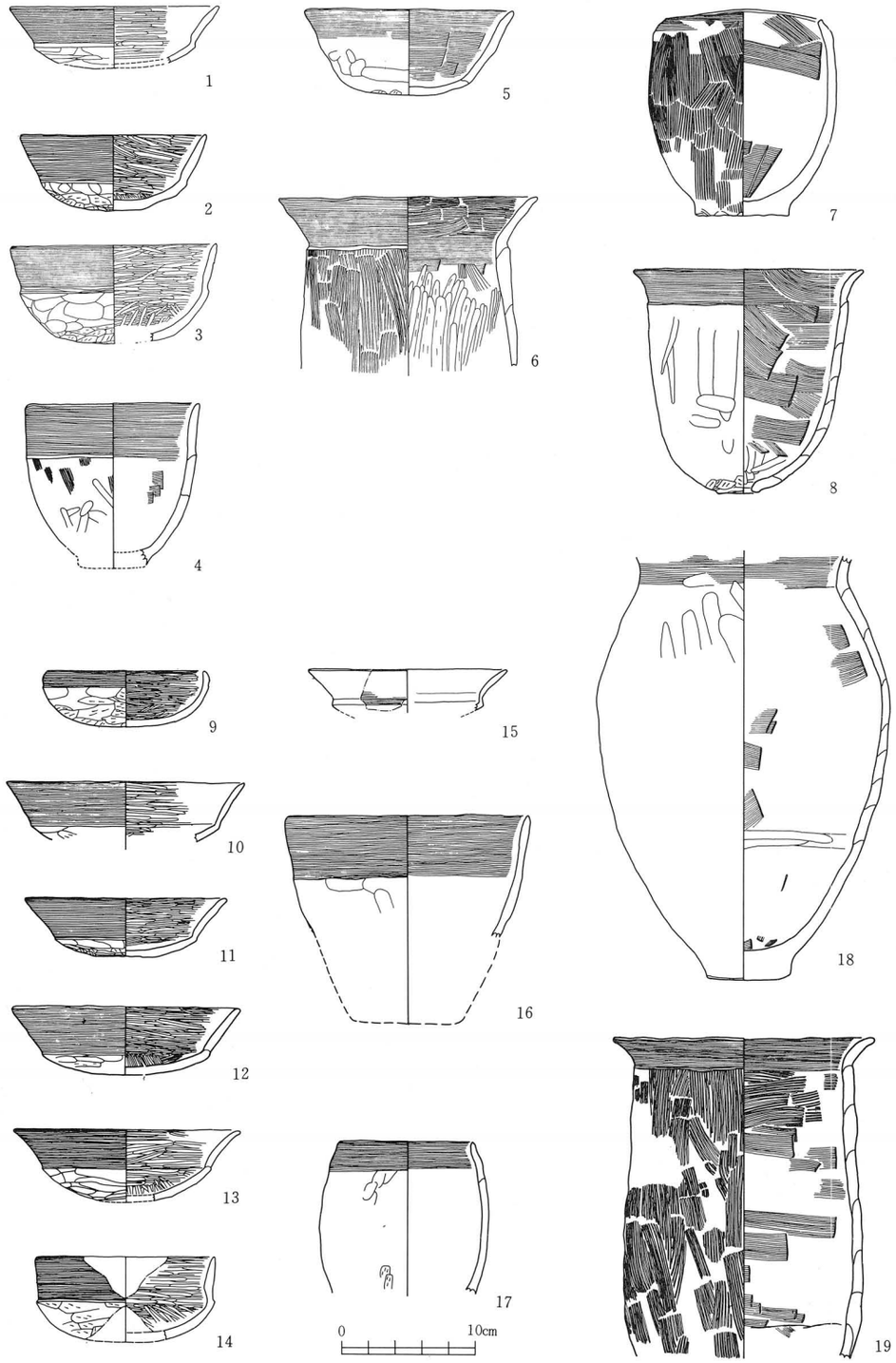


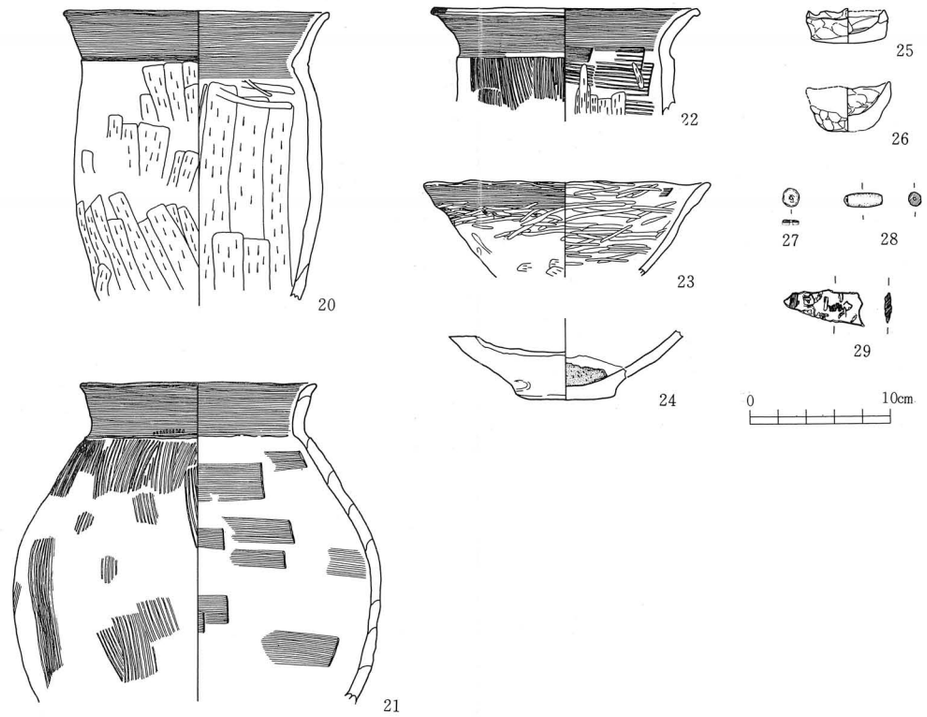
18号住居跡

層位	土色	土質	その他
1	暗褐色	砂質	炭化物・骨片を含む
2	灰黄褐色	〃	炭化物・骨片を含む
3	暗褐色	〃	
4	褐色	〃	
5	暗茶褐色	〃	炭化物・焼土を含む
I	暗褐色	〃	(焼道部の堆積土) 焼土
II	暗褐色	〃	(〃)
III	極暗赤褐色	〃	(〃)

0 1 2m

挿図－44　18号住居跡実測図





1．No. 165　1層
2．No. 177　床面(炉)
3．No. 175　1層
4．No. 120　床面(炉)
5．No. 129　—
6．No. 77　床面
7．No. 125　埋土
8．No. 99　埋土
9．No. 138　埋土
10. No. 146　埋土
11. No. 170　埋土2層上面
12. No. 173　埋土2層
13. No. 187　埋土
14. No. 193　埋土
15. No. 246　埋土2層
16. No. 105　埋土
17. No. 122　埋土
18. No. 30　埋土
19. No. 47　埋土2層
20. No. 50　埋土
21. No. 21　埋土1層
22. No. 76　ピット
23. No. 245　埋土
24. No. 237　埋土
25. No. 221　埋土
26. No. 222　埋土2層
27. No. 248　埋土2層
28. No. 266　埋土
29. No. 271　埋土1層

挿図－45　18号住居跡出土遺物実測図

第三節　土　壙

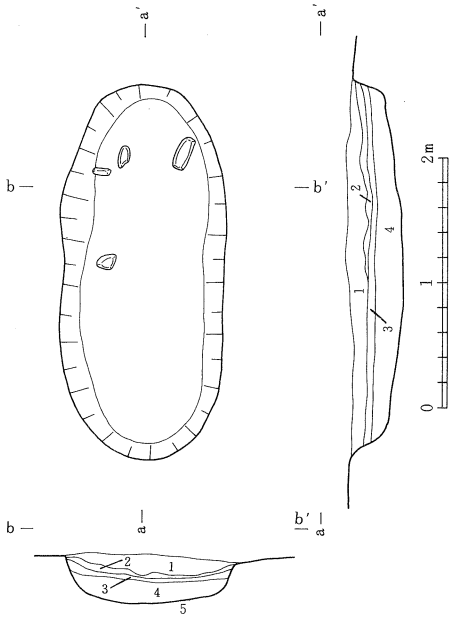
栗遺跡では15基の土壙が検出された。土壙各個の形状・規模・出土遺物等についての概要は次のとおりである。

第１土壙

４号住居跡の南東コーナーより30cm東側に位置する。平面形は楕円形で、長軸300cm、短軸130cm、深さ40cmを計る。底面は舟底状を呈し、長軸は南北方向である。埋土からは土師器片が多数出土した。中間の第２、第３層からは骨片も検出される。底面及び埋土中より大小の石が検出される。

第２土壙

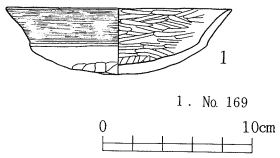
第３土壙の西側に第３土壙と平行して掘られたもので、４号住居跡の西壁と西南コーナー及び第３土壙を切っている。平面形は楕円形で、長軸250cm、短軸130cm、深さ20cmを計る。底面は舟底状を呈す。埋土中からは多数の土師器片が出土した。また層中及び、底面より大小多数の礫が検出された。



第１土壙

層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	暗　褐　色	シ　ル　ト	炭化物・土師器片を含む。褐色土をブロック状に含む。
2	褐　　色	シ　ル　ト	炭化物・土師器片・骨片を含む。
3	にぶい黄褐色	シルト質砂	炭化物・土師器片・骨片を含む。
4	暗　褐　色	砂	炭化物がわずかに含まれる。
5	褐　　色	砂	地　山

挿図－46　第１土壙実測図



挿図－47　第２土壙出土遺物実測図

第３土壙

４号住居跡を切って、住居跡のプラン内に検出された。第４土壙を切り、第２土壙に切られる。平面形は楕円形で、土壙の長軸は、４号住居跡の主軸とほぼ一致する。規模は長軸315cm、短軸143cm、深さ25cmを計る。北側のコーナーは４号住居跡のカマドに当たるが、カマドの焚口の補強のために鳥居状に組んだ三個の石のうち、左右に立てられた二個の基底部は原位置のままであった。石の部分は掘り残したと観察される。埋土中からは多量の土師器片が出土した。土師器のうち、甕No.73は南側コーナーの東よりから出土したもので実測した部分の周囲は完形であるが、体部下半と口縁部は意図的に打ち欠かれたように観察される。またこの土器は、内外面とも黒色を呈する点において、栗遺跡出土土師器甕のうちでは唯一の例である。埋土の第１、第２層中には骨片が検出された。層中及び床面は礫が多数検出された。床面より土製臼玉

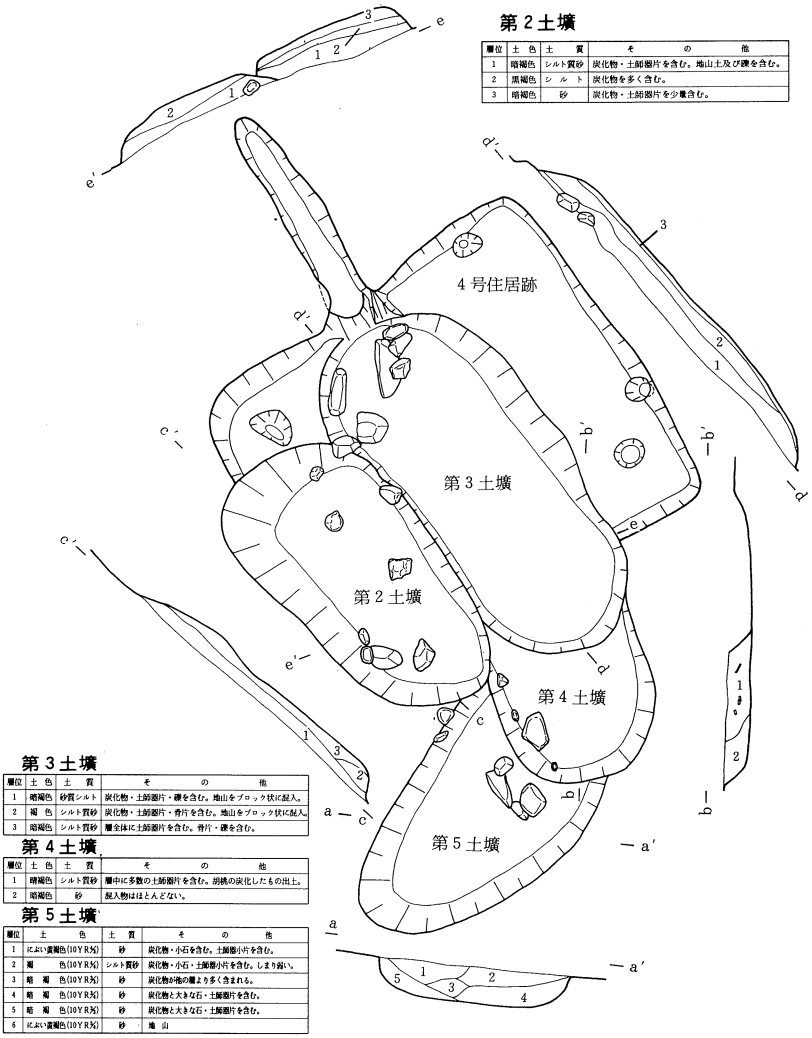
模造品が一点出土している。

第４土壙

４号住居跡の南側から４号住居跡の方へのびる土壙である。第２、第３土壙によって北半を切られている。４号住居跡との新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、長軸の残存は105cm・短軸は75cm、深さ18cmを計る。埋土第１層には土師器片が多く含まれる。底面には礫が数個検出された。

第５土壙

４号住居跡の南側に位置し、第２・第４土壙により北東コーナーを切られる。平面形は楕円形で、長軸の残存部は174cm・短軸140cm・深さ30cmを計る。長軸は南西－東北方向を示す。壁は丸みをもって立ち上がる。底面は舟底状を呈す。埋土中には、炭化物・小石・土師器片が多数含まれる。



第２土壙

層位	土色	土質	その他
1	暗褐色	シルト質砂	炭化物・土師器片を含む。地山土及び礫を含む。
2	黒褐色	シルト	炭化物を多く含む。
3	暗褐色	砂	炭化物・土師器片を少量含む。

第３土壙

層位	土色	土質	その他
1	暗褐色	砂質シルト	炭化物・土師器片・礫を含む。地山をブロック状に混入。
2	褐色	シルト質砂	炭化物・土師器片・骨片を含む。地山をブロック状に混入。
3	暗褐色	シルト質砂	層全体に土師器片を含む。骨片・礫を含む。

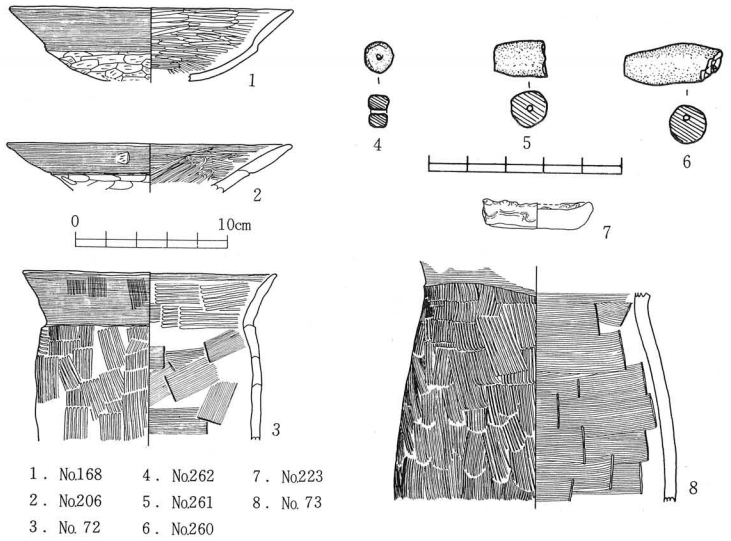
第４土壙

層位	土色	土質	その他
1	暗褐色	シルト質砂	層中に多数の土師器片を含む。胡桃の炭化したもの出土。
2	暗褐色	砂	混入物はほとんどない。

第５土壙

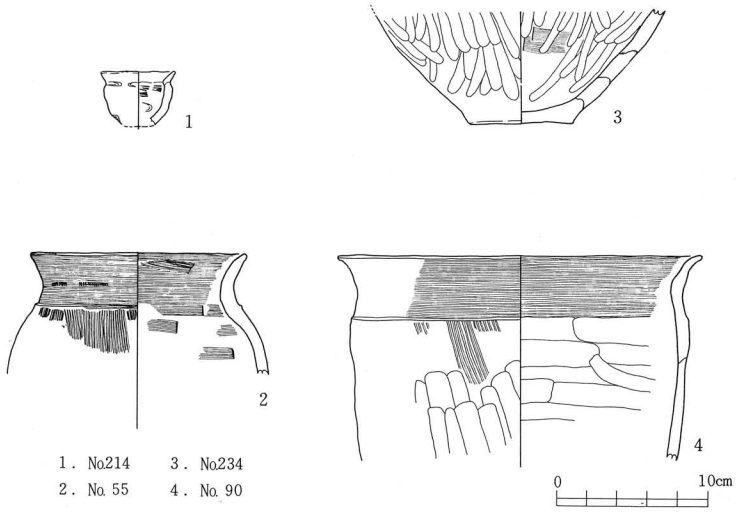
層位	土色	土質	その他
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂	炭化物・小石を含む。土師器小片を含む。
2	褐色(10YR5/3)	シルト質砂	炭化物・小石・土師器小片を含む。しまり弱い。
3	暗褐色(10YR3/3)	砂	炭化物が他の層より多く含まれる。
4	暗褐色(10YR3/3)	砂	炭化物と大きな石・土師器片を含む。
5	暗褐色(10YR3/3)	砂	炭化物と大きな石・土師器片を含む。
6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂	地山

挿図－48　第２・３・４・５土壙実測図



1．No.168　4．No.262　7．No.223
2．No.206　5．No.261　8．No. 73
3．No. 72　6．No.260

挿図－49
第３土壙
出土遺物
実測図

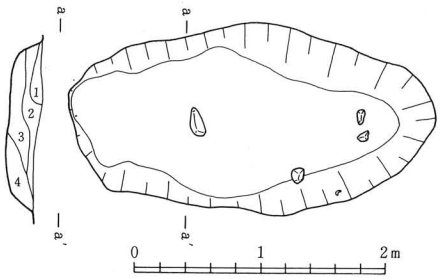


1．No.214　3．No.234
2．No. 55　4．No. 90

挿図－50
第５土壙
出土遺物
実測図

第６土壙

16号住居跡の中央部に、住居の主軸方向と長軸をほぼ同様にして、16号住居跡の埋土を切って掘られている。平面形は楕円形である。長軸292cm・短軸150cm・深さ25cmを計る。長軸は西北－東南方向を示す。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は不整楕円形を呈するが平坦である。



第６土壙

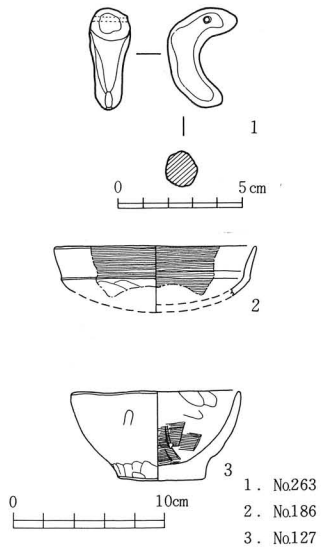
層位	土　色	土　質	そ の 他
1	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	黒褐色土混入。
2	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	
3	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	白色シルト混入。
4	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	3層よりやや明るい。

挿図－51　第６土壙実測図

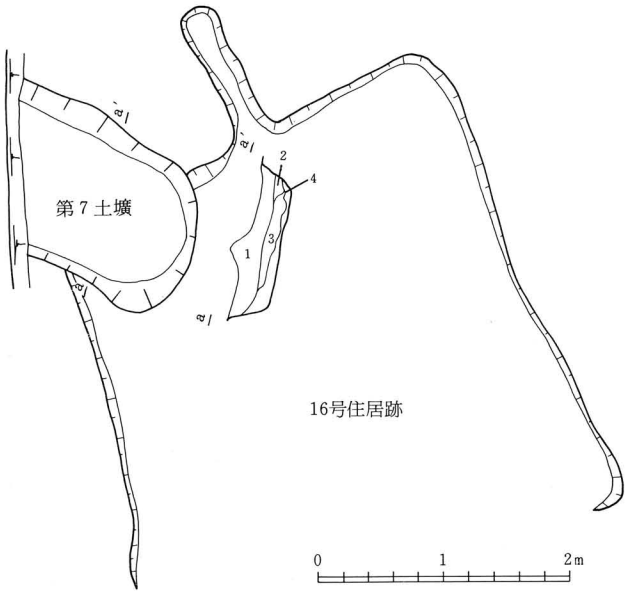
埋土中より土師器片が出土した。また西南壁に接して、土製の勾玉模造品が出土した。底面には礫が数個検出された。

第７土壙

16号住居跡の西南コーナーを切って掘られている。土壙の西南側約半分は調査地外に出る。平面形は楕円形と観察される。長軸は調査した部分で160cm・短軸125cm・深さ25cmを計る。長軸は北東－南西方向である。壁はやや急な立ち上がりで、底面はほぼ平坦である。埋土の第１層中からは骨片が検出された。第２層中からは、坏がほぼ完形で出土している。



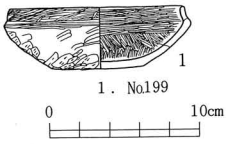
挿図－52　第６土壙
出土遺物実測図



第７土壙

層位	土色	土質	その他
1	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	炭化物・骨片が含まれる。
2	褐色（10YR3/4）	シルト質砂	赤褐色土混入・土師器坏　1点出土。
3	褐色（10YR3/4）	砂質シルト	下部に黒褐色のうすい間層がある。
4	暗褐色（10YR3/4）	砂	褐色色土混入。

挿図－53　第７土壙実測図



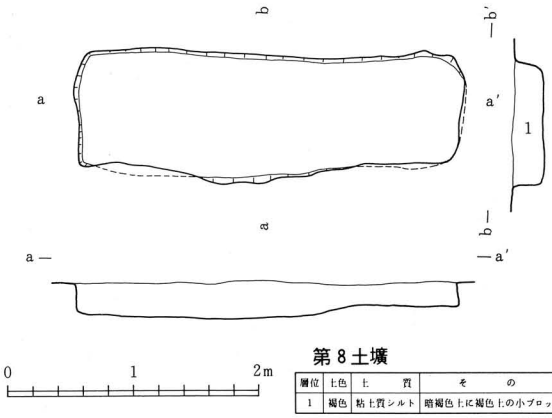
挿図－54　第７土壙
出土遺物実測図

第８土壙

遺跡の東北に位置する。平面形は長方形で、長辺305cm・短辺105cm・深さ29cmを計る。長軸は北西－南東方向を示す。壁はほぼ直立に近い状態で外傾して立ち上がるが、一部では底面幅が広いために内傾して立ち上がる部分もある。底面は平坦である。埋土は１層であり、礫及び土師器は含まれない。

第９土壙

第10土壙の北側コーナーを一部切って掘られているのが、遺構を検出した際に確認された。平面形は楕円形である。長軸285cm・短軸145cm・深さ22cmを計る。長軸の方向は北西ー南東方向を示す。壁面は緩やかな立ち上がりを持ち、底面はやや凹凸がある。埋土の第２層中に骨片が含まれ、第２層の両壁側からは土師器鉢が一個体分出土した。底面には数個の礫が検出された。



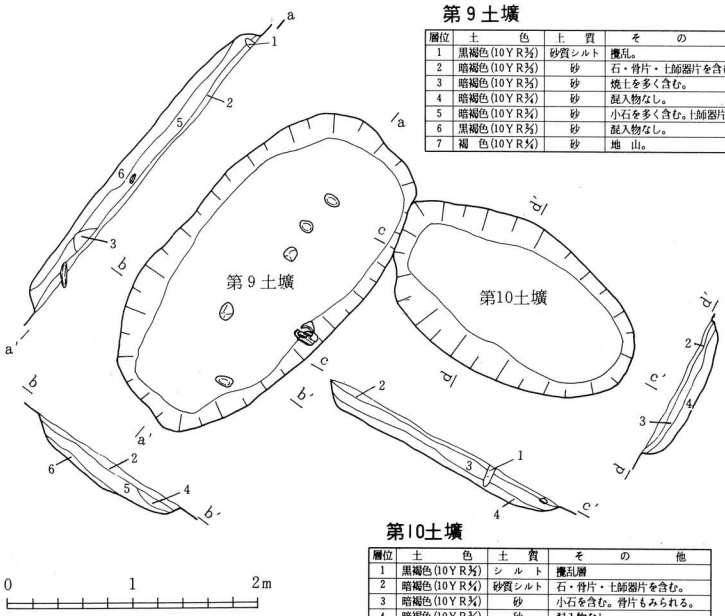
第８土壙

層位	土色	土質	その他
1	褐色	粘土質シルト	暗褐色土に褐色土の小ブロックを含む。

挿図－55　第８土壙実測図

第10土壙

第９土壙により北側コーナーの上部を切られている。平面形は楕円形で、長軸210cm・短軸125cm・深さ19cmを計る。長軸は北東ー南西方向を示し、第９土壙の長軸と直交するかたちとなる。壁面は緩やかに立ち立がり、床面は舟底状を呈す。埋土の第２、第３層中からは骨片が検出されている。



第９土壙

層位	土色	土質	その他
1	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	攪乱。
2	暗褐色(10YR3/3)	砂	石・骨片・土師器片を含む。
3	暗褐色(10YR3/3)	砂	焼土を多く含む。
4	暗褐色(10YR3/4)	砂	混入物なし。
5	暗褐色(10YR3/4)	砂	小石を多く含む。土師器片を含む。
6	黒褐色(10YR3/2)	砂	混入物なし。
7	褐　色(10YR5/4)	砂	地　山。

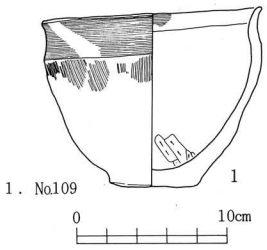
第10土壙

層位	土色	土質	その他
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	攪乱層
2	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	石・骨片・土師器片を含む。
3	暗褐色(10YR3/3)	砂	小石を含む。骨片もみられる。
4	暗褐色(10YR3/4)	砂	混入物なし。
5	暗褐色(10YR3/4)	砂	混入物なし。

挿図－56　第９・10土壙実測図

第11土壙

17号住居跡の北側に位置する。平面形は不整円形で、長径80cm・短径75cm・深さ17cmを計る。底面は平坦で、壁は南側で急に

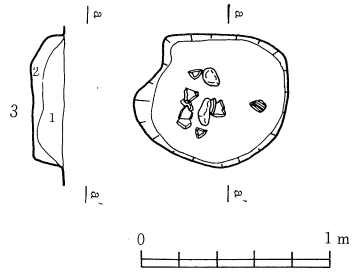


挿図－57　第９土壙出土遺物実測図

立ち上がり、北側では一度緩やかに立ち上がった後、中程で直立して立ち上がる。埋土の第１層には骨片が検出されている。第１・第２層中には、土師器甕の破片が多数出土した。

第11土壙

層位	土色	土質	その他
1	暗褐色（7.5YR3/4）	砂質シルト	炭化物・土師器片・骨片を含む。
2	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	土師器片を含む。
3	褐色	砂	地山。



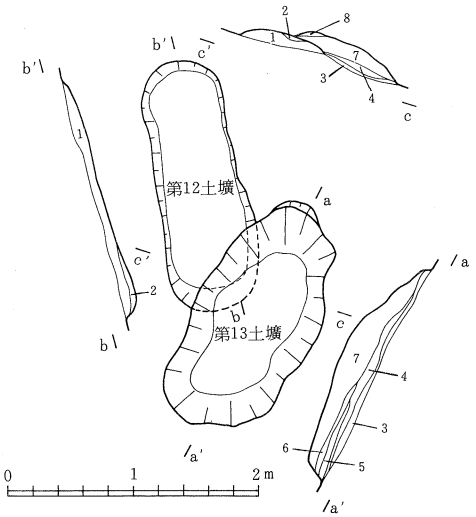
挿図－58　第11土壙実測図

第12土壙

土壙の南側は、第13土壙の北西壁の中央部を切って掘られる。平面形は楕円形を呈し、長軸202cm・短軸72cm・深さ13cmを計る。長軸はほぼ南北方向である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は舟底状を呈す。第１層より骨片が検出される。

第13土壙

５号住居跡と18号住居跡との間に位置し、第12土壙によって北西側の北よりの壁の一部を切られている。平面形は不整楕円形を呈す。長軸は北東－南西方向である。長軸135cm・短軸98cm・深さ30cmを計る。壁は、南側が急な立ち上がりなのに比して、北側では緩やかな立ち上がりを示す。底面は舟底形である。



第12・13土壙

層位		土色	土質	その他
第13土壙	1	暗褐色	砂質シルト	黒褐色土・炭化物・骨片を含む。
	2	暗褐色	砂質シルト	１層よりやや暗い。しまりがある。
第12土壙	1	暗褐色	砂	少量の黒褐色土を含む。ややしまり有り。
	2	暗褐色	砂	３層より明るく、しまりがある。
	3	暗褐色	砂質シルト	
	4	暗褐色	砂質シルト	
	5	暗褐色	砂質シルト	砂、土器片を含む。
	6	暗褐色	砂	７層より暗い。混入物なし。
	7	褐色	砂	地山。

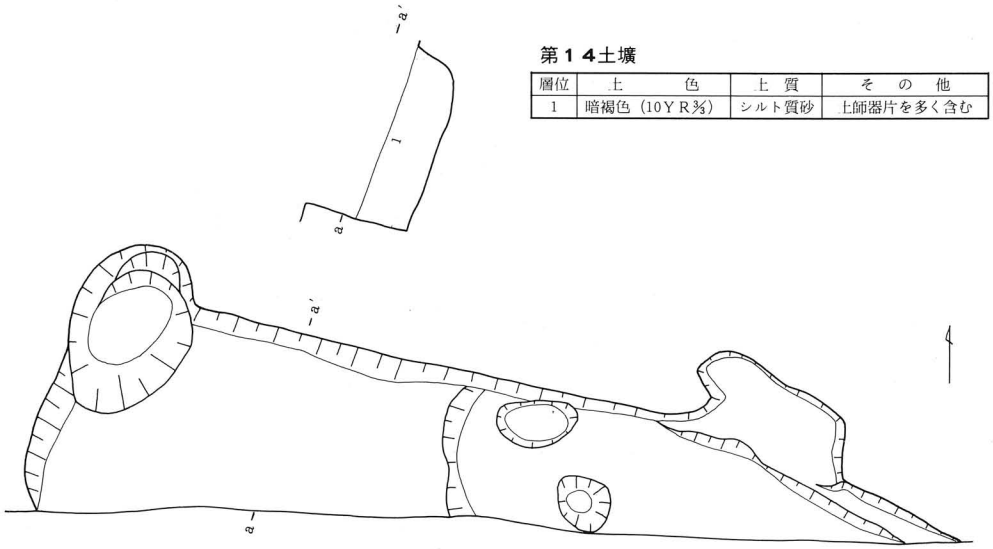
挿図－59　第12・13土壙実測図

第14土壙

土壙の南半は調査地区の外に外る。18号住居跡の南側を切って掘られている。平面形は長方形ないしは正方形であると考えられる。調査した部分の長辺は570cm、短辺は200cm、深さは34cmを計る。底面は全体的には平坦であるが、東西方向の中央に段があり、西側が高くなっている。また、土壙を掘った面でピットが検出された。埋土には多数の土師器片が含まれているが、層は暗褐色のシルト質砂が一層である。

第15土壙

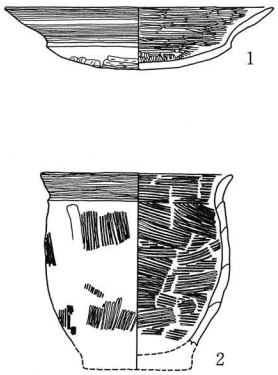
18号住居跡の埋土を切って、住居跡北壁よりに掘られている。平面形は楕円形である。長軸130cm・短軸83cm・深さ22cmを計る。長軸は北西－南東方向である。壁は緩やかな立ち上がりを示す。底面は舟底状である。埋土の各層からは骨片が検出される。また土師器片も多数出土した。



第１４土壙

層位	土　　色	土　質	そ　の　他
1	暗褐色（10ＹＲ3/3）	シルト質砂	土師器片を多く含む

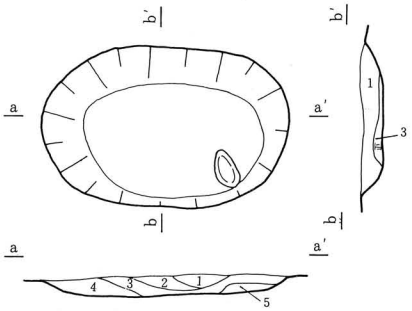
挿図－60　第14土壙実測図



1．No.174
2．No. 5

0　10cm

挿図－61　第14土壙出土遺物実測図

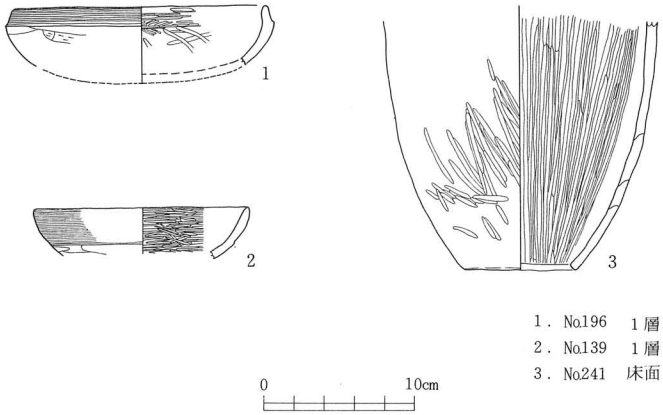


第15土壙

層位	土　　色	土　質	そ　の　他
1	にぶい黄褐色(10ＹＲ3/6)	砂質シルト	炭・骨片・土師器片及び白色シルトを含む。
2	にぶい黄褐色(10ＹＲ5/3)	シ　ル　ト	炭・骨片を含む。白色シルトと暗褐色シルトの混合層。
3	褐　　色(10ＹＲ4/4)	砂質シルト	炭・骨片・白色シルトを含む。
4	暗　褐　色(10ＹＲ3/4)	砂	炭化物・骨片を含む。
5	褐　　色(10ＹＲ4/4)	砂	

0　1m

挿図－62　第15土壙実測図



挿図－63　第15土壙出土遺物実測図

第四節　その他の遺構

1．河原石群

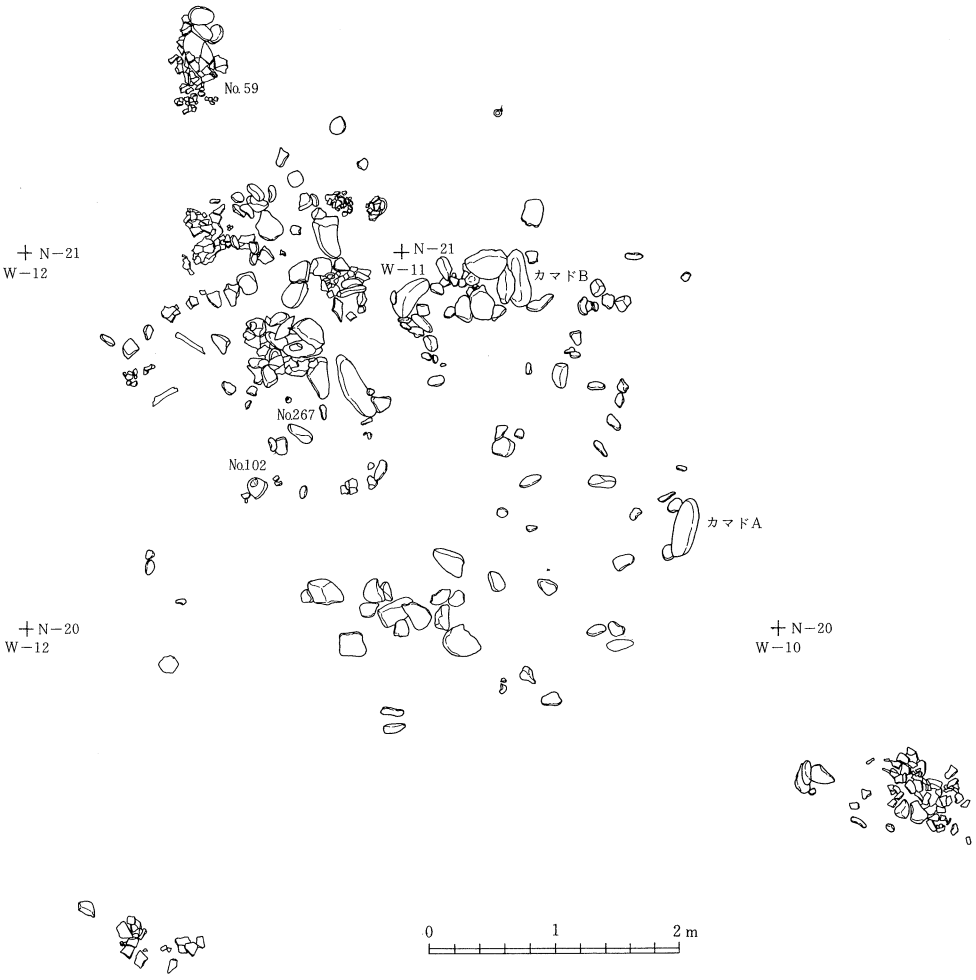
A区、18号住居跡北側、５号住居跡西側に、東西４ｍ、南北８ｍ程の範囲に、人頭大から拳大の河原石が散布する。散布は特に北西側に著しい。栗遺跡において河原石が出土するのは、住居のカマドの施設として利用されたものと、遺構内の堆積土中からであって、この地区のような状況を呈する所は他にない。

河原石群は、全体として規則性や構造性は観察されないが、カマド焚口部の補強用の石組が２基確認された。(挿図－64・カマドA、B）２基とも長円形の棒状の石を２本、約40cmの間隔で立て、その上に大きな棒状の石を橋渡ししている。２本の立った石の間は、径30cm程で焼けている。

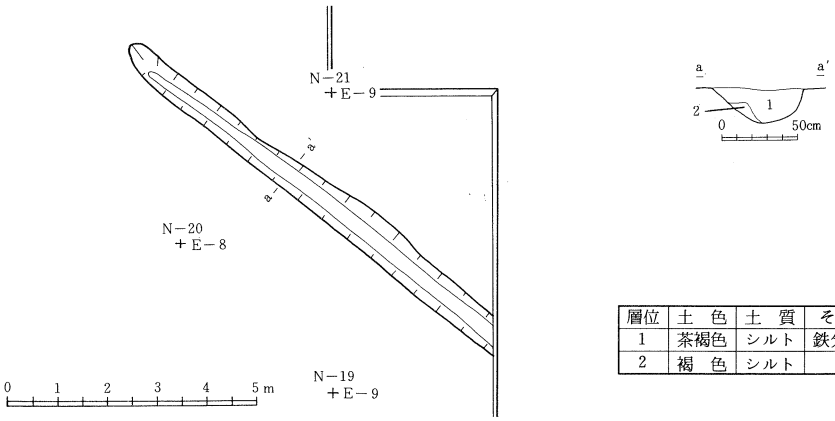
河原石群の中には、石以外に土器の出土量も多い。土器は破片の他に、つぶれた状態での一括土器（No.59）や完形土器（No.102）が出土した。また土製紡錘車（No.267）もこの地区より、石に接して出土した。河原石群の下からは、何らの遺構も検出されなかった。

2．溝

D区、東端に一条確認されている。長さ9.5ｍ・幅0.6ｍのものである。溝は北西から南東方向にのびており、北西端に近くなるにつれてしだいに浅くなっている。本来は、さらに北西方向に延びていたとみられる。堆積層は２層みられ、遺物は検出されない。



挿図－64　河原石群



層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	茶褐色	シルト	鉄分を含む。
2	褐　色	シルト	

挿図－65　溝

第六章　遺構と遺物の総括と考察

第一節　住居跡の総括と問題点

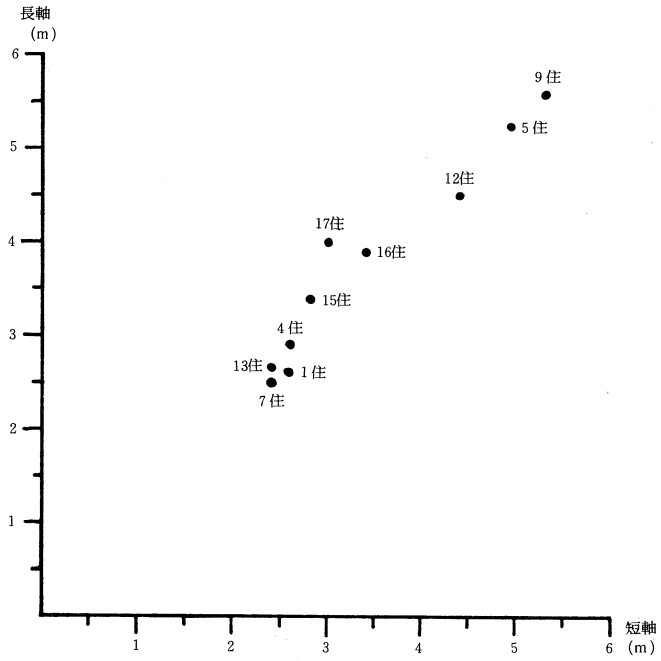
1．平面形と規模について

栗遺跡の住居跡の平面形は、ほぼ正方形のものと、やや長方形ぎみの住居跡があるが、これらはすべて隅丸方形を基調とするものである。

住居跡の規模は、一辺が2.5m程の小形のものから、6m近くのものまである。住居跡の規模を、その長辺と短辺とで示したグラフが挿図66である。このグラフによれば、住居の規模には規則性は認められない。

2．壁と床について

壁は、わずかに外傾して立ち上がる。壁から床面へ接する部分は円くなっている。床面は、12号住居跡の場合を例とすると、地山を掘り込み、凹凸となった部分を4cm前後の厚さで整地し床面としている。



挿図－66〔グラフ－1〕住居跡の規模

床面の利用状況を復元する手掛りとなる住居としては、12号住居跡がある。12号住居跡のカマドは西壁に構築されている。このカマド焚口部の前方の床面は、東壁に接する所まで副1m前後にわたり堅くしまっている。12号住居跡は床面全体が火を受けてはいるが、南北両壁から柱穴の部分までの床面と比較すると、かなり堅さに差がある。カマド焚口部の前方から東壁に至る住居跡中央帯は、居住者の活動によって踏み締められ、そのうえ火を受けて一段と堅くなったものと観察される。また南北両壁に

沿って竹材が幅60cm、長さ130cmにわたり検出された。ここは、床面がそれほど堅くなっていないことから、南北両壁から柱穴までの床面が寝所として使用されたことを示すものと考えられる。

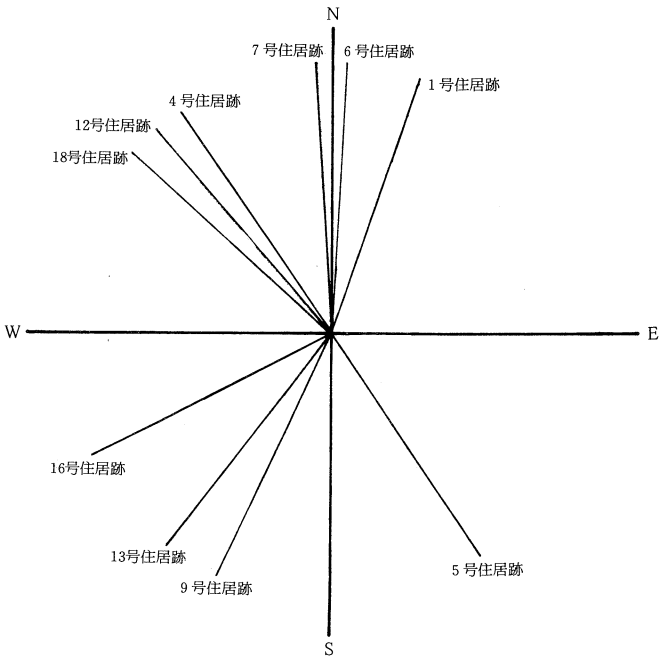
3．柱穴について

住居跡には、柱穴が検出された住居跡と検出されなかった住居跡とがある。柱穴が検出されない住居跡は、規模の比較的小さな住居跡に多く見られる傾向にある。

9号住居跡では、各柱穴に伴って対角線上のコーナーよりに、15×10cm程の長方形のピットが検出されている。柱穴内の堆積土には、指先程の大きさをはじめとする大小の炭化物片が多数混入し、9号住居跡焼失後、焼け残った柱を抜き取ったごとき状況を呈しているが、長方形のピットには、炭化物はほとんど含まれず、柱穴とは様相を異にしている。長方形ピットには、柱痕跡は観察されなかった。この各柱穴に伴う長方形のピットが柱穴に付随して何らかの施設をなしたものであるか、または独自の施設として用をなしたのか、本調査の問題として残った。

4．カマドについて

カマドは壁の中央に構築されているものが主であるが、9号住居跡のように中央よりずれて設けられているものもある。18棟の発見住居中、比較的良くカマドが遺存しているのは、7軒にすぎない。その他の住居のカマドは、上部構造が削平され、火床と思われる焼土やカマド石が観察されただけである。保存の比較的良好な7軒の住居のカマドも、天井部が崩落していたり、カマド本体は崩れ去って煙出しのみ残っている状態である。これからカマドの構造を考察すると次のようになる。壁は



挿図－67〔グラフ－2〕カマドの方向

シルト質粘土によって作り付けられ、焚口は、鳥居状に組まれた三個の長円形の河原石で補強される。煙出しは地山をトンネル状に掘り抜いたものが多い。土器を支える支脚は、すべて長さ15cm前後の棒状の自然石を利用したものである。土製のものは出土していない。

カマドは、構造上２タイプに分類することができる。

Ａタイプ―トンネル状の煙出しを持っもの（１号住居跡、４号住居跡、５号住居跡、16号住居跡、18号住居跡）

Ｂタイプ―火床が壁に向って傾斜し、トンネル状の煙出しを持たないもの（９号住居跡、12号住居跡）

５．その他の施設

カマド以外の住居内施設としては、貯蔵穴類似のピットと炉がある。

貯蔵穴類似のピットは、10号住居跡のピット１である。住居跡の東北コーナー（カマドの右側に当たると考えられる。)に二段階に分けて掘り窪められており、平面形は不整長方形を呈する。このような施設は、栗遺跡においては、10号住居跡だけに認められたものである。

炉は、９号住居跡と18号住居跡Ａプランに施設されている。９号住居跡のものは、東北コーナーよりの柱穴と東南コーナーよりの柱穴の中間に施設された、所謂地床炉である。炉に近接するピット11とピット12とには、その堆積土中に灰・炭化物・焼土及び土師器細片が混入しており、これら二つのピットは、炉の灰等を廃棄するために掘られたものと推察される。18号住居跡Ａプランのものは、北側柱穴からは対角線上に１ｍ程中央によった所に位置する。この炉は、床面を掘り窪め、その穴に底部を欠く鉢の上に坏の完成品を重ねて埋設したものである。調査時においては、鉢は破損しており、坏の内部には焼土が充満していた。

炉を持つ住居跡は、両方の住居跡ともカマドを施設されている。この点を考慮するならば、炉は煮焚のため以外の用途があったものと考えられる。また、カマドと伴に炉の施設された９号住居跡と18号住居跡は、栗遺跡で調査された18棟の住居跡の中にあっては大型の方で、一辺が５ｍ以上あるものである。このような住居が集落内でどのような役割を持つものなのか、今後の検討を要する課題と思われる。

６．火災住居跡について

調査した18棟の住居跡の中に、炭化材を多量に出土した住居跡が３棟ある。９号住居跡・12号住居跡・18号住居跡Ｂプランである。この３棟の住居跡からは、炭化材のほかに焼土や灰も検出され、床の焼けた部分も認められており、何らかのかたちで火を受けたものと推察できる。

３棟の火災住居跡にあって、９号住居跡と12号住居跡はその様相を異にしている。すなわち、

9号住居跡においては住居跡内に多数の土器が遺存しており、カマド周辺と南側壁に沿って出土したものは、接合作業によってほぼ完形品となるものであった。9号住居跡は、検出された炭化材も(挿図－22)に見るように多量であり、住居跡全面に土砂を混えた10数cmの層となって堆積している。これに対して、12号住居跡においては、出土した土器はすべて破片であり、接合して完形品となるものは一点もなく、出土遺物そのものが少数である。この住居跡から検出された炭化材は9号住居跡と比較すると少量と言える。炭化材は9号住居跡のように層をなしてはおらず、床面に密着した状態である。9号住居跡と12号住居跡とにおける上記したような差異の起因については次のように考察される。すなわち、9号住居跡にあっては、住居使用時に遇発的に火災が起ったために土器等が移動（持ち出す。)される間もなく焼失したものと考えられる。これに対して12号住居跡の場合は、住居内のものを整理した後に意図的に火を付けたものと考えられ、さらには、建築材を再利用するために持ち出した可能性が考えられる。

7．18号住居跡について

18号住居跡は、床面出土の土器が少ない反面、覆土中から約300点にものぼる小破片が出土している。これらの破片は、ほとんどが摩耗しており、接合するものもごく少数である。覆土に遺物が含まれる原因としては、自然あるいは人為的な土砂の堆積に伴うものと考えられるが、この場合、覆土に含まれる破片の密度が他の遺構に比して非常に濃く、自然に混入したとは思われない。このことから18号住居跡は、廃絶後に破片となった土器などの廃棄物を、竪穴の中に捨てたのではないかと推察される。しかし現在のところこのような性格の遺構の報告例が手元になく、他例との比較検が為されていない段階である。今後の報告例の増加に伴ってさらに検討をする必要がある。

第二節　土壙の性格についての考察

土壙は平面形態によって、楕円形・円形・長方形乃至方形のものに三分類することができ、それぞれ12基・1基・2基を数える。長方形に分類される2基の土壙の埋土は、等質な1層からなる。この点は、楕円形・円形を呈する13基の土壙の埋土が複数の土層（わずかな質や色の違いによって層を分離したが、上下の層に大差はなく、大きくみると1層としてとらえることも可能である。)からなるのと異っている。土壙の堆積状況の差異は、平面形態の違いと伴に長方形乃至方形の土壙の性格を他の土壙と区別して考えさせるものである。しかし、両土壙ともその性格を示す資料に欠け、納得いく見解は出しえない。

平面形態が楕円形を呈するものは、130×83cmを計る第15土壙から、315×130cmを計る第13土壙まで、種々の大きさのものがある。これら大小12基の土壙にあって７基（第１、第３、第６、第７、第９、第10、第11、第15土壙）からは、その堆積土中に、骨片が検出されている。骨片は、そのほとんどが微細なものであるが、なかには指先程の大きさのものもあり、堆積土中に上下幅10cm内外で広範に分布する。骨片の色は白色から乳白色で、硬さは白墨程度である。大きな骨片には海綿質の部分が観察できるものもある。楕円形を呈する土壙からの出土遺物として注意せられるものには、第６土壙から出土した勾玉模造土製品と、第３土壙から出土した臼玉模造土製品、同じく第３土壙の南側から出土した甕形の黒色土器がある。甕形の黒色土器は口縁部と体部下半が故意に打ち欠いて円筒状にされている。埋土についてみると、第３土壙等に、ブロック状のまとまりをもつ土を混入する埋土が観察される。これは、土壙が掘られた後、間もなく人為的に埋戻されたことによるものと判断される。平面形態が楕円形の土壙について、上述した各状況をもとにその性格を検討すると、墓壙という性格が考えられる。

平面形態が円形を呈する１基は、土壙の中央に土師器片が散布し、その周辺に骨片がみられる。この土壙は、墓壙と考えられる楕円形の土壙群とは形態を異にするが、骨片の出土している点に着目すると、やはり墓壙という性格をもつものと考えられる。

以上のように、発見された土壙にあって、長方形乃至方形を呈するものについての性格は不明であるが、楕円形及び円形を呈する平面プランをもつ土壙は、栗遺跡における墓跡と考察される。墓壙から出土した土器は、栗遺跡の住居跡より出土したものと差異は認められず、墓壙が住居跡と同時代に造営されたことを示している。

今回の調査では、墓壙の細部の構造について調査できなかったが、墓壙と墓壙の重複があることから、地表面に墓壙の存在を示す特別の施設はなかったものと推察できる。又、墓壙は一定の地域にまとまっておらず、規則的な配列も認められないので、墓域・墓地といった特定の場所もなかったものと考えられる。

第三節　出土遺物の総括

１．土製品

（１）小形手捏ね土器

No.214

第５土壙埋土より出土した手捏ね土器である。平底の底部と球形の体部をもち、口縁部はくびれ部から外反している。この土器の法量は、口径4.9cm、最大腹径4.5cm、器高3.6cmである。

No.215

Ａ区より出土した鉢形の手捏ね土器であるが、底部を欠損している。胎土に石英をわずかに含み、色調は内外面ともに黒色を呈しており、体部の外面に指ナデの整形がみられる。この土器の法量は、口縁径3.2cm、器高3.4cmをはかる。

No.216

部厚い平底の底部をもつ手捏ね土器である。口縁部はくびれ部から外上方にのびており、色調は内外面ともに黒色を呈している。この土器の法量は、口縁径2.8cm、最大腹径3.9cm、器高3.5cmである。Ｄ区出土。

No.217

Ａ区出土の椀形の手捏ね土器である。口縁部が内弯しており、体部の内外面に指ナデ整形がみられる。この土器の法量は、口縁径4.0cm、体部径4.6cm、器高3.2cmとなる。

No.218

口縁部を欠損しているが、平底の底部をもつ手捏ね土器である。体部外面に指ナデ整形が施されている。残存部の大きさは、底部径3.5cm、器高1.5cmをはかる。中央区出土。

No.219

中央区より出土した、かなり厚い平底の底部（1.3cm）をもつ手捏ね土器である。胎土に石英の粒（１mm～２mm）を含み、体部外面に指ナデの整形がみられる。この土器の法量は、口縁径7.7cm、底部径6.1cm、器高3.2cmである。

No.220

Ａ区より出土した、平底の底部にわずかな口縁部を残した扁平な手捏ね土器である。この土器の法量は、底部径6.0cm、器高0.8cmである。

No.221

口縁部を欠損しているが、平底の底部をもつ手捏ね土器である。色調は褐灰色を呈しており、胎土に細砂を含んでいる。底部の内外面、及び体部の内面に指ナデ調整の跡がみられる。この土器の法量は、底部径2.5cm、器高３～3.4cmである。18号住居跡埋土１層より出土している。

No.222

18号住居跡埋土１層より出土した、口縁部の一部を欠損している坏形の手捏ね土器である。色調は鈍い橙色を呈しており、胎土に細砂を含んでいる。底部外面に篦ナデと内面に指ナデが施されており、体部外面はナデツケの後に指ナデで整形されたと思われる。この土器の法量は、口縁径4.4cm、底部径4.3cm、器高2.5cmである。

No.223

第３土壙埋土より出土した、かなり厚い平底の底部をもつ手捏ね土器である。胎土に細砂粒

や小石を含み、色調は鈍い黄橙を呈している。体部及び口縁部の内外両面にナデツケ整形がみられる。この土器の法量は、口縁径6.8cm、底部径6.0cm、器高2.0cmを計る。

（２）土製模造品

No.260

Ｄ区出土の管玉を模倣した土製品である。この模造品はほぼ完全に管玉の形を模倣しているが、中央部がやや脹むものである。大きさは長さ2.5cm、径1.0cmを計り、色調は黒色を呈している。

No.261

管玉を模倣した土製品であるが、半分ほど欠損している。残存部は長さ1.3cm、径0.9cmである。色調は黒色を呈している。

No.262

第３土壙床面より出土した、臼玉を模倣したと考えられる土製品である。径0.8cm、高さ0.5cm、孔径0.1cmを計り、色調は黒色を呈す。

No.263

「Ｃ」字型の土製の勾玉で、ほぼ完全に形をとどめている。大きさは長さ3.8cm、径1.3cm、孔径0.2cmであり、色調は黒色を呈している。

No.264

鏡を模倣した土製品である。平面形は不整円形で、径5.0cm程である。鏡面にあたる部分は平滑に整えられているが、鏡背にあたる部分は整形の際の指の痕跡を残している。鈕に当る部分は、径1.6cm、高さ1.0cm程円鈕状に突出しており、径0.2cmほどの紐孔が穿たれている。明褐色を呈す。

（３）土錘

No.265

全体に円筒形を呈するが、中央部がやや飛らんだ、Ａ区攪乱層出土の土錘である。長さ4.8cm、径2.0cmを計り、表面は摩滅が著しく、孔端部は摩滅している。褐色を呈す。

No.266

円筒形を呈するが、中央部がわずかに脹らんだ褐色の土錘である。18号住居跡埋土より出土し、大きさは長さ2.7cm、径1.0cmを計る。管玉を模倣した土製品の可能性もある。

（４）紡錘車

No.267

Ａ区より出土した截頭円錐形を呈す土製紡錘車で、約½残存する。孔は中心よりずれているが、大きさは復元すると底面径5.1cm、上面径3.4cm、高さ2.6cm程のものである。外面はヘラミガキによって仕上げられている。

２．鉄製品

（１）鉄鏃

No.268

現存長9.5cmを計る尖根式の鉄鏃で、刃部は長さ0.3cm、幅1.0cm、厚さ0.4cmである。

No.269

現存長12.9cmの尖根型長茎式の鉄鏃で、刃部は長さ2.7cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmをはかる。

（２）刀子

No.270

刃部が現存しているが、把は欠損している。刃部の長さは6.5cm、幅1.0cm、背幅0.5cmである。

（３）その他

No.271

腐蝕が激しく、先端部が原形を示すものかどうか不明である。全体が扁平であり、長さは5.8cm、幅2.1cmを計る。鎌と考えられる。

３．石製品

（１）石製模造品

No.247

菱形の平面形を呈し、一角に両面より穿孔されている泥岩製である。打裂による凸凹や稜があるが、表面は平滑で光沢をもつ。長さ5.4cm、幅4.2cm、最大厚1.2cm、孔部厚0.4cmを計る。石製模造品の未完成品と考えられる。15号住居跡埋土より出土。

No.248

単孔円板または臼玉で、乳白色の滑石である。平面に対して平行に欠損部があり、径は1.2cm、

現存厚0.2cmを計る。18号住居跡埋土2層より出土。

（2）紡錘車

No.249

截頭円錘形で、側面に8単位、底面に7単位の鋸歯文が線刻されている。又、上面より0.4cm及び0.5cm下って、側面をめぐり2条の沈線が刻まれる。底面径4.4cm、上面径2.2cm、高さ1.9cmを計る。滑石製で12号住居跡より出土している。

No.250

上下両面及び側面の対応する2ヶ所に欠損の痕跡をもつ滑石製品である。径3.6cm、残存厚0.5cmを計る。9号住居跡Pit 4上面より出土。

（3）砥石

No.251

C区の耕作による攪乱層より出土した、所謂分銅形携帯用砥石である。穿孔された方の端が丸味をもち、その先に台形状の突出し部をもつ。本来は5面が使用されたと観察されるが、2面に欠損部があり、各面は中央が張出している。長さ8.8cm、幅3.9cm、厚さ1.8cmを計る。泥岩製。

No.252

棒状の自然石の平担な3面を利用して砥石としている。各面は、幅2cm前後で平滑となっている。この砥石の一端は丸くなっており、他端は欠損している。現存部は、長さ13.3cm、太さ4.4cm平均とする。泥岩製でD区の耕作による攪乱層から出土している。

No.253

端部が丸味をもち、短冊状を呈した珪化木製品である。4面が使用されているが、欠損が著しく、火を受けた痕跡が砥面に観察される。大きさは、25.7×5.4×3.9cmである。この砥石の一面に丸い窪みがあり、上面は長径3.1cm、短径2.3cmの円形で、深さは0.6cmを計る。窪みの表面は摩滅痕が観察される。12号住居跡北東コーナーより出土。

（4）その他

No.254

長径4.6cm、短径4.1cm、厚さ2.3cmの扁平な球形の石の両面中央に、丸い窪みを有する軽石製品である。窪みの大きさは、径2.0cm深さ0.5cmと、径2.1cm深さ0.4cmである。窪みの周辺には細い溝状の擦痕が観察される。8号住居跡北東コーナーよりの床面から出土している。

No.255

No.255

長径6.6cm、短径6.3cm、厚さ5.0cmの扁平な球形の石である。表面は平滑であるが、わずかに擦痕が観察される。泥岩製。9号住居跡床面より出土。

No.256

乳棒状の石で、一端が球状に丸く脹む泥岩製品である。長さ13.4cm、中央部長径3.0cm短径2.0cm、球状部分長径3.9cm短径3.0cmを計る。表面は全体に平滑である。9号住居跡床面より出土。

No.257

9号住居跡カマド出土の石製支脚で、石質は火成岩（花崗岩、又は安山岩）製と思われる。長さ13.2cm、中央部長径5.0cm、短径3.5cmを計る。

No.258

滑石製品で玉類の一種と考えられ、臼玉のような形状を呈するが、臼玉と呼ばれるものより大きい。径1.3cm、中央部高0.65cm、孔径0.2cmを計る。わずかに紐ずれが観察される。D区出土。

No.259

No.258と同様の滑石製品で、大きさは径1.18cm、高さ0.45cm、孔径0.3cmを計る。紐ずれがわずかに観察される。B区出土。

4．須恵器

出土数は点数にして16点、極めて少量の出土である。全体的に器形のわかるものは少なく、大半は破片である。器種としては、坏・碗・提瓶・甕・壺がある。

坏

2点出土している。両方とも、たちあがり・受部を有する蓋坏形のものである。

No.272

器形の半分が欠損している。たちあがりは内傾しており、器高とたちあがりの部分との長さの比は4：1である。切り離しは不明であるが底部を中心に回転ヘラ削りの再調整が施こされており丸底にしあげられている。他の部分はロクロによるナデ調整である。焼成は非常に良好であり色調は灰色である。ロクロの回転方向は右回りであり、全体的に端正な作りである。

No.284

口縁部から体部にかけての破片である。たちあがりと底部を欠損している。破片ではあるが全体的に薄手で偏平な形と考えられる。現存部は全てロクロによるナデ調整が施こされている。色調は乳白色である。

瑯

No.273

口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部はゆるやかに外傾し、頸部とは一条の沈線と段によって分けられ、頸には５～６条の櫛描波状文がみられる。色調は極赤褐色である。

平瓶

No.274

口縁部の破片で口唇部は不明である。二条の浅い沈線がみられる。土器の断面の色調は暗茶褐色でかなり焼きしまっている。

提瓶

No.275

体部の破片である。ロクロ回転によるカキ目調整がみられる。色調は暗茶褐色で焼きしまっているが、胎土に砂粒が多く含まれる。

甕

No.276

口縁部から頸部にかけての破片である。６～７条の櫛描波状文がみられ、その下方に隆帯が一本みられる。色調は暗灰色で焼成は良好である。

No.277～No.281

全て体部の破片である。土器の表には平行叩き目文が施こされ、裏面には削り取られて薄くなった同心円文がみられる。

No.282・No.283

体部の破片である。土器表面には平行叩き目文が施こされている。No.283の土器には自然釉がみられ土器断面にまでおよんでいる。

壺

No.285

頸部から肩部にかけての破片である。肩部は強く屈曲し体部へと続くものである。色調は灰色である。

蓋？

No.286・No.287

蓋と考えられるが破片であるので坏とも考えうるものである。二点とも外面は手持ちのヘラ削り調整が施こされており、内面はロクロのナデ調整である。

第四節　土師器の分類と編年試案

1．分類法と分類

栗遺跡出土の土師器は、小形壺・甕・甑・鉢・坏・椀・高坏・蓋・片口土器・小型手捏ね土器の各器形のものがある。出土した土器には、数種の器形に共通する特徴や各器形個別の特徴各個体だけの特徴などが見られ、それぞれの特徴によって各器形の土器を何種類かに分類することができる。分類を行なうに当っては、どのような点を基準として分類したのかという共通の観察視点（これを分類基準と呼ぶことにする）をいくつか設け、それぞれの基準をアルファベット（A・B・C……）で示した。分類基準ごとに抽出されたいくつかの特徴は、それぞれアラビア数字（1・2・3……）で示した。また、必要に応じて小文字のアルファベットや、ギリシャ数字も用いた。分類基準は、各器形ごとに設け、器形に関する点から器面調整に関する点にまで及ぶ。分類基準の数は、器形により異なるが、Aから最後のアルファベットまでの組合せ（例＝A1—B2—C4）をもって一つの分類とする。

（1）小形壺

本来壺と呼ぶものとは、やや異なるものであるが、適当な名称がないので小形壺と呼ぶことにする。出土数は少ないが、個体差は著しい。

＜分類＞

〔A〕体部と頸部との境の段の有無による分類

1．体部と頸部との境に段の無いもの。
2．体部と頸部との境に段の有るもの。

〔B〕体部の形状による分類

1．頸部が締まり、体部が球形のもの。
2．頸部に締まりがなく、頸部径と体部径の差が少ないが、体部が球形に近いもの。
3．肩部に張りをもち逆台形を呈する体部のもの。

〔C〕口頸部の形状による分類

1．体部との境からほぼ垂直に頸部が立ち上がり、口縁部で外傾するもの。
2．体部との境から単純に外反するもの。

〔D〕器面調整による分類

1．最終器面調整が、ヘラミガキによるもの。
2．最終器面調整が、ナデによるもの。

└ 3．最終器面調整がハケメによるもの。

以上のように分類より、表－4・集成図版－1のように分類される。

（2）甕

この器形の土器は、坏とともに出土量が多い。器形は、大別すると体部が球形に近いものと、長胴のものとに分類される。甕においては、体部が球形に近いものをⅠ類、長胴のものをⅡ類と分類し、その中でそれぞれの特徴により細分する。

＜分類＞

甕Ⅰ類―体部球形の甕

〔A〕体部と頸部との境の段の有無による分類

1．体部と頸部との境に段の無いもの。
2．体部と頸部との境に段の有るもの。

〔B〕体部の形状による分類

1．体部が横長に球形のもの。
2．体部が真球に近いもの。
3．体部が縦長の球形のもの。

〔C〕体部外面調整による分類

1．最終調整にヘラミガキがされるもの。
2．主調整がナデによるもの。
3．主調整がハケメによるもの。
4．主調整がヘラケズリによるもの。

以上の分類基準により、表－5・集成図版―1～2のように分類される。

甕Ⅱ類―体部長胴の甕

〔A〕体部と頸部との境の段の有無による分類

1．体部と頸部との境に段の無いもの。
2．体部と頸部との境に段の有るもの。

〔B〕最大径の位置による分類

1．最大径が体部に有るもの。
2．最大径が口縁に有るもの。
3．口径と体部径がほぼ等しいもの。（この場合、口縁径と体部径との差が5㎜以下のものを示す。）

〔C〕体部最大径の位置による分類

1．体部最大径が底部近くに有るもの。
2．体部最大径が中央に有るもの。
3．体部最大径が肩部近くに有るもの。

〔D〕器面調整による分類

1．口縁部外面ヨコナデ・内面ヘラミガキ、体部内面ヘラミガキ、体部外面ヘラケズリによるもの。
2．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ、体部外面ヘラケズリによるもの。
3．口縁部外面ヨコナデ・内面ヘラナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ナデ後ヘラミガキによるもの。
4．口縁部外面ヨコナデ・内面ハケメ、体部内面ヘラナデ後ヘラミガキ、体部外面ハケメ後ヘラミガキによるもの。
5．口縁部両面ヨコナデ、体部内面上半ハケメ下半ナデ、体部外面ハケメ後ヘラミガキによるもの。
6．口縁部外面ヨコナデ・内面ハケメ、体部内面ヘラケズリ、体部外面ハケメ後ヘラミガキによるもの。
7．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ナデによるもの。
8．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ハケメによるもの。
9．口縁部外面ヨコナデ・内面ハケメ、体部内面上半ハケメ下半ヘラナデ、体部外面ハケメによるもの。
10．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ナデ、体部外面ハケメによるもの。
11．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ハケメ後ヘラケズリ、体部外面ハケメによるもの。
12．口縁部外面ヨコナデ・内面ヘラナデ、体部内面ヘラケズリ、体部外面ハケメによるもの。
13．口縁部外面ヨコナデ・内面ハケメ、体部内面ヘラケズリ、体部外面ハケメによるもの。
14．口縁部両面ヨコナデ、体部両面ヘラナデによるもの。
15．口縁部両面ヨコナデ、体部両面ヘラケズリによるもの。

以上の分類基準により、表－6・集成図版－2～7のように分類される。

（3）甑

甑には、大形のものと小形のものが有り、小形のものは、鉢の底部を取り除いたような器形を示すが、大形のものは、甑として定型化されているように見られる。

＜分類＞

〔A〕器高の高低による分類

1．器高が18cmを起えるもの。(大形)
2．器高が18cm以下のもの。(小形)

〔B〕体部と頸部との境の段の有無による分類

1．体部と頸部との境が沈線により区画されるもの。
2．体部と頸部との境に段の無いもの。
3．体部と頸部との境に段の有るもの。

〔C〕底部の有無による分類

1．無底のもの。
2．有底のもの。

〔D〕底部の孔数による分類

1．単孔のもの。
2．多孔のもの。

〔E〕器面調整による分類

1．口縁部両面ヘラミガキ、体部内面ヘラミガキ、体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキによるよの。
2．口縁部内面ヘラミガキ・外面ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ、体部外面ハケメ後ヘラミガキによるもの。
3．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ、体部外面ハケメ後ヘラミガキによるもの。
4．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ、体部外面ハケメ後ヘラケズリによるもの。
5．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ、体部外面ハケメ後下部をナデにより仕上げたもの。
6．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ハケメ後ナデによるもの。
7．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ハケメ後下半ヘラケズリによるもの。
8．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ナデによるもの。
9．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ハケメによるもの。
10．口縁部両面ヨコナデ、体部内面ナデ、体部外面ナデ後ヘラケズリによるもの。

以上の分類基準により、表－7・集成図版－8～9のように分類される。

（4）鉢

鉢には甕を小型化したようなものや、口縁部直立のもの、口縁部内弯のものなどが見られる。

＜分類＞

〔A〕口縁部の形状による分類

1．口縁部が外反、もしくは外傾するもの。
2．口縁部が垂直に立つもの。
3．口縁部が内弯するもの。

※2・3に関して
a．口縁巾の広いもの。
b．口縁巾の狭いもの。

〔B〕体部と頸部との境の段の有無による分類

1．体部と頸部との境に段の無いもの。
2．体部と頸部との境に段の有るもの。

〔C〕器面調整による分類

1．口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ナデによるもの。
2．口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、体部外面ハケメによるもの。
3．口縁部ヨコナデ、体部両面ナデによるもの。
4．口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ハケメによるもの。
5．口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ハケメ後下半ナデによるもの。

以上の分類基準により、表－8・集成図版－9～10のように分類される。

（5）坏

坏は丸底で、底部と口辺部との境に内外面とも段を有し、口辺部が長く外へ伸びるものが最っも多い。

＜分類＞

〔A〕底部の形状による分類

1．平底のもの。
2．丸底のもの。

〔B〕外面の立上りによる分類

1．口辺部と底部との境に段の無いもの。
2．口辺部と底部との境に段の有るもの。

〔C〕内面の立上りによる分類

1．内面に段の無いもの。
2．内面に外面の段と対応して緩やかな段をもつもの。
3．内面に外面の段と対応して垂直に近く、もしくは器壁を抉るような段をもつもの。
4．内面の底部より緩やかに内弯して立上り、口縁近くで稜をなして外傾するもの。

〔D〕口辺部の形状による分類

1．底部から引き続いて弧を描き、素縁の口縁となるもの。
2．底部との境から一度外傾し口辺部中程から内弯する。全体に丸味をもったもの。
3．底部との境から直線的に外傾するもの。
4．底部との境から外反して伸び、口縁端部でさらに外側に折れるもの。
5．底部との境から外反して伸び、口縁端部近くで僅かに内反するもの。
6．底部との境から直立、もしくは内傾するもの。

〔E〕器面調整による分類

1．内面ヘラミガキ、外面口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリによるもの。
2．内面ヘラミガキ、外面口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後上半ナデによるもの。
3．内面ヘラミガキ、外面口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後ヘラミガキされるもの。
4．内面ヘラミガキ、外面口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後上半ナデ、さらに底部をヘラミガキしたもの。
5．内面ヘラミガキ、外面口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリした後外面をヘラミガキしたもの。
6．内面ヘラミガキ、外面口辺部ヨコナデ、底部ナデによるもの。
7．内面ヨコナデ、外面口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリによるもの。
8．口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面ナデによるもの。
9．内面上半ナデ下半ヘラナデ、外面ナデによるもの。
10．内面ヘラミガキ、外面口辺部ナデ、底部ヘラケズリの後上半ナデによるもの。

内面黒色処理したもの――――――a
内面黒色処理をしないもの――――b

以上の分類基準により、表－9・集成図版－11～13のように分類される。

（6）椀

器形は坏に類似するが、器高が高いものを椀とした。口縁径を器高で割った数値が2以下となるものである。椀は2個体だけ出土した。

1．坏分類基準〔A２—B２—C３—D６—E５b〕に近似する特徴を有するもの。

2．坏分類基準〔A２—B２—C２—D２—E２b〕により説明できるものである。

（７）高坏

高坏は完形のもの一点、坏部片二点、脚部片四点の出土である。全体として小形である。

＜分類＞

〔A〕坏部の形状による分類

1．坏部の底部と口辺部との境の内外面に強い段を有し、口辺部が直線的に外傾するもの。

2．坏部の底部と口辺部との境の外面に強い段を、内面に緩やかな段を有し、口辺部が底部との境から一度外傾し、口辺部中程から内弯する全体に丸味をもつもの。

3．坏部の底部と口辺部との境の外面が沈線により区画され、内面には緩やかな段を有する。口辺部は底部より続いて直線的に外傾するもの。

〔B〕脚部外面の形状による分類

1．脚筒部上端に締りをもち、そこから脚裾部端まで八字状に広がるもの。

2．中央がやや細まる円筒状の脚筒部と、僅かに広がる脚裾部との境に段を有するもの。

3．中央部がやや細くなるだけの円筒状の脚筒部に、僅かに広がる脚裾部のついたもの。

〔C〕脚部内面の形状による分類

1．内面上部中央が一段と凹むもの。

2．内面上部が緩やかに丸くなるもの。

3．内面上部がほぼ平担なもの。

以上の分類基準により、表—10・集成図版—10のように分類される。

高坏の器面調整は、No.204のものでは坏部内面ヘラミガキ、外面口辺部ヨコナデ後ヘラミガキ、底部上半ケズリ後ナデ、底部下半及び脚筒部ヘラケズリ、脚裾部ヨコナデによる。No.205・No.206の坏部内面ヘラミガキ、外面口辺部ヨコナデ、底部上半ナデによる。No.208・No.207・No.209・No.210は脚筒部ヘラケズリ、脚裾部ヨコナデによる。

（８）蓋

蓋は、平面形が円形で上面が平担なつまみを有し、このつまみから蓋端部まで八字状に広がるものである。二個体ある。

1．つまみから端部まで、直線的に広がって伸びる。器面は、外面上半ヘラケズリ下半ヨナデ、内面ヘラミガキにより調整される。

2．つまみから直線的に伸び、端部近くでさらに開く。器面は、外面上半ハケメ下半ヨコナデ、内面ヘラナデ後ヨコナデにより調整される。

（9）片口土器

この器形のものは、一点のみ出土している。底部は、欠損している。半球形の体部をなし、体部と口縁部との境に段を有す。口縁は、直立する。器面調整は、口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ヘラナデ後ナデ及びヘラミガキされる。体部外面は、ハケメ調整による。

2．栗遺跡の住居跡編年と土器変遷

（1）住居跡編年の方法

前項では、栗遺跡出土土師器の分類を行なったのであるが、分類によると各器形の土器は細かく別れ、かつまた住居跡から出土した土器も、表－4から表－10までに見られるように、一律に出土するのではなく、片寄りが認められる。土器が細別されることと、住居跡より出土する土器に片寄りが見られることは、栗遺跡がある程度の時間幅をもって営まれたことの意味をも含むと考えられる。本項では分類された各器形の土器が、どのような組合せをなしたかを、遺物の共存を適確に把握することが可能とされる住居跡床面の土器によって捉える。そしてさらに、栗遺跡において使用された土器がどのように変遷したのか、各住居跡床面の土器の組合せの比較検討を中心とする編年作業によりもとめる。

編年、変遷といった時間的変化を考える場合、一般に層位学と型式学による方法が行なわれる。しかし、栗遺跡では層の上下や遺構の重複によって、遺物の新旧を知り得るには、十分な資料を得られなかった。この為、栗遺跡出土土師器の変遷を考えるには、型式学的方法によらねばならない。しかし、型式学的方法による場合においても、相対年代のわかる幾つかの資料がその中に含まれていなければ、有意義な結果は得られない。そこで、氏家和典氏による土師器編年の第四型式（住社式）と国分寺下層式を、相対年代のわかる資料とする。すなわち、両型式の土器を第五型式（栗囲式）[註1]の前後[註2]のものとして位置づけ、第四型式（住社式）から国分寺下層式へ変化する過程にあるものが、第五型式（栗囲式）の標準遺跡である栗遺跡出土の土器群であると考えるのである。

この考え方に基づき、栗囲式に先行する住社式と、後続する国分寺下層式、及び栗遺跡表採土器を標式とした栗囲式土器の特徴を吟味し、栗遺跡における土器の変遷の方向性を把握する。

住社式は、坏形土器において、口縁部と体部との接触部分が外側において稜を形成する。甕形土器においては、第五型式（栗囲式）のように長胴を呈すけれども、下腹部に膨みをもっている。そして第五型式のような頸部における段の形成は見られない。(これは坏以外の各器形について共通する。)長胴甕の最大径は、口縁部にあるものと体部にあるものとがあるが、体部にある場合、大型のものは底部近くから中央に位置し、小型のものは中央から肩部に位

置している。体部最大径は大型のものでは下位にあり、小型のものは中位から肩部にある。住社出土の甕・鉢・甑等の体部外面の調整はヘラケズリ、またはナデによってなされる。(註3)

国分寺下層式は、坏が三類に分類されるが、三類とも内面に段をもたない。口縁は、内反ぎみである。このような坏に共伴する坏以外の器形の土師器は、宮城県高清水町観音沢遺跡(註4)や、名取市清水遺跡(註5)、小牛田町山前遺跡等において発見されている。国分寺下層式の坏と共伴した長胴甕(註6)について共通点を見ると、最大径が口縁部にあり、体部最大径は中央から肩部付近にある。また体部と口縁部との境に段を有し、体部外面の調整はハケメ、またはヘラケズリによるものが一般的である。(註7)

栗囲式は、甕形土器にあっては所謂長胴の器形に外反せる単調な口縁を有し、体部における最大径は中央部乃至肩部にあり、口縁部と体部との接続部分である頸部外側に段を形成している。(段の見られないものも存在する。)坏形土器にあっては、口縁径の割に器高が小となり、口縁部と体部との接続部分において、稜線もしくは括れが見られるのをその特徴とする。(註8)

以上三型式の特徴を羅列してみると、住社式から国分寺下層式への変遷について、次の三つの仮説を立てることができる。

〔仮説一〕＝甕・甑・鉢の口縁部と体部との接続部における段の有無により。

〔Ⅰ〕段の無いものだけの組合せの段階。

↓

〔Ⅱ〕段の無いものと有るものが組合さる段階。

↓

〔Ⅲ〕段の有るものだけが組合さる段階。

〔仮説二〕＝長胴大形甕の体部最大径の位置による。

〔イ〕底部近く或いは、中央部に位置する段階。

↓

〔ロ〕中央部から肩部付近に位置する段階。

〔仮説三〕＝坏形土器における段と、口辺部の傾きによる。

〔ア〕内外面に段もしくは括れを有し、口辺部の傾きの急なものを主体とする段階。

↓

〔イ〕内外面に段を有し、口辺部の傾きの緩やかなものが主体となる段階。

↓

〔ウ〕内面の段が無くなり、口辺部が一度外傾してから内弯するものを主体とする段階。

仮説の一から三までに示した変化は、相関して移行したと考えられる。次にこれを、栗遺跡の住居跡出土物によって具体的に検討し、編年の試案とする。

（２）住居跡編年と土器変遷

住居跡床面における土師器の組合せの状況は、表－11及び、第五章一第２節の図版に示したとうりである。18棟の住居跡のうち、６棟の住居跡の出土土師器について詳説すると次のようである。

＜10号住居跡＞

甕Ⅰ類３点、甕Ⅱ類１点、大形甑１点、坏３点が出土した。No.81の甑の体部と口縁部との境に沈線が観察される以外、４点の甕の体部と口縁部との境に段はない。甕・甑を通してNo.６以外の外面の調整は、ヘラケズリとヘラミガキによる調整である。No.６においては細かなハケメ調整の後にヘラミガキ調整が行なわれ、ハケメの痕跡がほとんど消されている。坏は比較的口径の割に器高が高く、口辺部の傾きも急である。

尚、No.６・７・81は胎土・焼成・色調が同様であると観察でき、同時に生産された可能性が強い。

＜14号住居跡＞

甕Ⅰ類１点、甕Ⅱ類３点、小形甑１点、坏１点が出土している。甕・甑を合せて４点の体部と口縁部との境には段が認められない。甕Ⅱ類のNo.25の外面はナデにより調整され、No.36、No.25の外面はヘラナデによって調整されるが、No.10、34の甕はハケメ調整される。甑の外面はナデ調整される。坏は比較的器肉の厚いもので、口辺部の傾きは急である。

＜３号住居跡＞

甕Ⅱ類２点、甑１点、鉢１点が出土している。２点の甕には、体部と口縁部との境に段の有るものと無いものとがある。甑は大形のもので、体部と口縁部との境は沈線により区画されている。体部外面の主調整は、No.118の鉢以外ハケメ調整によるものである。

＜５号住居跡＞

甕Ⅰ類１点、甕Ⅱ類１点、鉢２点、小形甑１点、坏２点が出土した。甕・甑・鉢を合せて５個体のうち、鉢No.123・甑No.76には体部と口縁部との境に段はないが、甕No.57と鉢No.114により段が観察できる。甕・甑・鉢は、全て体部外面はハケメ調整による。坏は、外面の段と対応して内面にも段を有するが、口径に比して器高は低い。この坏の底部には両方ともヘラミガキ調整が粗雑に行なわれる。

＜２号住居跡＞

甕Ⅰ類１点、甕Ⅱ類４点、大形甑１点、高坏１点が出土した。甕・甑は、全て体部と口縁部との境に段をもつ。体部外面は、ハケメ調整が共通して観察されるが、甑No.85はハケメ調整の後にヘラミガキが丁寧になされる。また、甕No.14はハケメ調整の後に下半がナデにより調整されている。高坏は、脚筒部上端が締まり、そこから脚裾まで八字状に開く。坏部の内外面の段

は鋭角的で、全体に端整な作りである。

甕II類において、No.38、70は大形で、No.62・64は小形のものであるが、大形のものの体部最大径は底部近くから体部中央に位置するが、小型のものは体部中央から肩部に位置する。

＜9号住居跡＞

甕I類3点、甕II類3点、鉢2点、坏は復原可能なもの4点と多数の破片が出土した。甕・甑・鉢の合計10個体のうち小形甑No.100は上半を欠損して全容は不明であるが、他の9個体は全て体部と口縁部との境に段がある。調整はNo.19・124を除きハケメ調整される。ハケメ調整した後にさらにミガキ調整したものもある。

以上18棟の住居跡のうち、6棟の住居跡の出土土器について説明した。これらは〔仮説一〕において示した移行過程の〔I〕・〔II〕・〔III〕によって三類別できる。

〔I〕＝＜10号住居跡・14号住居跡＞

10号住居跡と14号住居跡は甕・甑において、10号住居跡のNo.81の甑に体部と口縁部との境に沈線が認められる以外、他のものには段が見られない。甕・甑等の器形の体部と口縁部との境に段が形成されていない点において、両方の住居跡は共通している。

両住居跡を比較すると、10号住居跡の甕と甑にあっては、No.6だけがハケメ調整され、しかもこれはハケメ調整の後にその痕跡を消すかのように丁寧にヘラミガキされている。No.6以外の甕・甑の調整はハケメ調整の行なわれていない点は、体部と口縁部の境に段を形成しない点と伴に、住社遺跡出土の土器群と共通する。また、坏No.162・182は、氏家和典氏が『東北土師器の型式分類とその編年』の第二図中に、引田式・住社式として掲げた南小泉出土坏41と42の中間的な形態を示す。41・42を住社式とした場合、No.162・182は住社式に含まれるものであろう。

14号住居跡では、甕No.25と36はハケメ調整されない点10号住居跡のものと通じるものがある。しかし、No.10・34は外面がハケメだけより調整される。これは10号住居跡出土のものと様相を異にし、調整技法の変化を考えさせる。ハケメ調整は、この後に述べる体部と口縁部の境に段を有するものだけが組合さる2号住居跡出土土器に顕著に観察される調整で、14号住居跡出土土器以降発展・継続される調整と考えられる。

以上のように10号住居跡と14号住居跡出土土器を、住社遺跡出土土器と栗遺跡の他の住居跡出土土器との比較により新旧に分けると、10号住居跡のものが古く、14号住居跡のものが新しいと考えられる。

10号住居跡・14号住居跡は、仮説一の〔I〕に当り、甕I類・II類・甑・(鉢)の体部と口縁部との境が、大形甑において沈線により区画されるが、いわゆる段が形成されず、坏においては内外に段をもち、口辺の立上りが比較的急に外側へ伸びるものが組合さる。この段階を＜第I

時期＞と仮称する。

〔II〕＝＜３号住居跡・５号住居跡＞

３号住居跡においては大形甕No.46には、体部と口縁部との境に段があるが、小形の甕No.28には段がない。大形の甑No.82は、10号住居跡出土の甑と同様の沈線による区画がなされる。５号住居跡では小形甑No.93・鉢No.123には、体部と口縁部との境に段はなく、甕No.57・鉢No.114には段が形成される。調整技法を観察すると３号住居跡出土鉢No.118にはハケメ調整がされていないが、他の甕・甑・鉢は最終調整にナデ、ヘラミガキされるものもあるが、主体となる調整はハケメ調整である。

３号住居跡と５号住居跡の土器の組合せの新旧を考えると、３号住居跡出土甕No.28と５号住居跡出土甕No.57とは、ほぼ同じ大きさの甕であるが、No.28には体部と口縁部の境に段がなくNo.57には段がある点において、３号住居跡の方が古くなる可能性がある。また、３号住居跡出土甑No.82は、10号住居跡出土甑No.81に器形と沈線による区画とに類似が認められることからも、３号住居跡が５号住居跡よりも若干古くなる可能性がある。

３号住居跡・５号住居跡は、仮設一の〔II〕に当り、甕Ｉ類・II類・甑・鉢の組合せの中に、体部と口縁部との境に段の有るもの無いものが混在する。この段階を＜第II時期＞と仮称する。

〔III〕＝＜２号住居跡・９号住居跡＞

２号住居跡では、甕・甑の６個体のうち、上半を欠く甕No.70を除く５個体の体部と口縁部の境に段がある。９号住居跡においても境の部分が明らかなもの９個体の全てに段がある。２号住居跡と９号住居跡の出土土器を比較すると、２号住居跡の甕は体部外面ハケメ調整体部内面ヘラナデ調整で終始するが、９号住居跡の甕はNo.63を除き、体部外面ハケメ調整の後にヘラミガキ調整され、No.19のように体部外面が単にヘラケズリによってのみ調整されるものもある。甑を比べてみると、２号住居跡出土のNo.85と９号住居跡出土のNo.86は調整技法は類似するが、No.86はNo.85よりも口縁径に比して器高が高い。

２号住居跡と９号住居跡の出土土器は、No.63・No.64のように類似するものがある一方、調整技法と甑の器形等に若干の差異がある。この差が時間的なものであるとすれば、10号住居跡・３号住居跡出土の甑に器形の近い甑を出土した２号住居跡の方が古い土器の組合せの可能性がある。

２号住居跡・９号住居跡は、仮説一の〔III〕に当り、共存する甕・甑・鉢の全ての体部と口縁部との境に段がある。この段階を＜第III時期＞と仮称する。

栗遺跡の住居跡は、その出土土器の組合せにより＜第Ｉ期＞＜第II時期＞＜第III時期＞にに分けられ、〔仮説一〕の〔Ｉ〕・〔II〕・〔III〕の移行過程の各時期が継続的に認められた。これにより〔仮説一〕は住社式から国分寺下層式へ移行する過程の土器群の実際的組成の段階変化を示

す一定律となりうると考えられる。

〔仮説二〕については、栗遺跡の住居跡出土の甕II類の大型のものの体部最大径は、底部近くから中央にかけて位置するものが総てである。〔ロ〕に規定したような中央から肩部にかけて体部最大径をもつものを主体とする住居跡は、発見されていない。

〔仮説三〕により坏を検討すると、栗遺跡は〔イ〕を中心とし、〔ア〕に近いものも10号住居跡出土坏を代表的例として出土している。〔ウ〕の段階のものは、住居跡出土土器中には見られない。

以上のように、栗囲式及びその前後形式の検討により仮説を得て、栗遺跡の住居跡出土土器の組合せを詳細に観察することにより、<10号・14号>—<3号・5号>—<2号・9号>という住居跡の編年と同時に、栗遺跡における土器の変遷が把握できる。

10号・14号・3号・5号・2号・9号の各住居跡以外の12棟の住居跡が、三時期区分のどの段階に入るかは、住居跡床面出土土器が少なかったり比較するのに適当な遺物がない為に、判断の困難なものもある。三時期に区分した住居跡と同一分類の土器を出土する住居跡の関係を示したのが表—12である。この表でわかるように、第I時期の住居跡は10号と14号だけである。第II時期に至って共伴例が急増し、第III時期に最っとも多くの共伴例を数える。

尚、今後の資料の増加によって、第I時期の土器群と第III時期の土器群とは、型式の分離が行なわれ得ることが予想される。

註1—氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」(「歴史十四輯」昭和30年)

註2—氏実和典「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」(「柏倉亮吉教授還暦記念論文集・昭和42年」)

註3—志間泰治「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」(「考古学雑誌43巻4号・昭和33年」)
また、志間泰治氏の御厚意により住社出土の土器を実見させていただいた。

註4—註2に同様

註5—宮城県教育委員会「高清水町観音沢遺跡現地説明会資料」(昭和51年)

註6—宮城県教育委員会「清水遺跡現地説明会資料」(昭和50年・51年)

註7—宮城県小牛田町教育委員会「山前遺跡」(昭和51年)

註8—註1に同様

第五節　栗遺跡の年代に関する考察

栗遺跡では、住居跡を三時期に区分できることが明らかになった。では、この三時期の絶対年代は、どのような年代の内に収まるのであろうか。その上限と下限について検討すると、次のような年代が求められる。

1．上限について

上限については、栗遺跡出土の須恵器によって求められる。出土した須恵器のうち、器体の全てを図化できるものは集成図17—No.272に示した坏だけであるが、これと同型とみられる坏は他に1点出土している。No.272は、15号住居跡床面の遺物を全て取上げ、同住居跡の調査を一応終了した後、床面下2cm程のところに底部を上にした状態で埋っているのが偶然に発見されたものである。15号住居に伴うPitがあったのか、あるいは他の遺構と15号住居とが重複していたのかは、確認することができなかった。15号住居跡の床面より下の層は、名取川の運んだ砂層であるが、遺物が包含されていないので、15号住居跡が遺物包含層を掘込んで築造されたとも考えられない。No.272は、このような出土状況のために、15住居跡出土土師器との共伴は不明であると言わねばならない。しかしながら、栗遺跡では10号住居跡よりも古い時期の土器を出土する住居跡や、第6型式（国分寺下層式）の土器を出土する住居跡が発見されていないことを考えるならば、この須恵器は、栗遺跡の第Ⅰ時期から第Ⅲ時期までの、どの時期かの住居跡と密接に関係する須恵器であることは間違いないものと思われる。No.272の坏は、畿内の須恵器編年で、Ⅱ期とされるものの特徴を有し、Ⅱ期のなかでもTK209の坏に類する。Ⅱ期は6世紀前半から7世紀前半の絶対年代が与えられており、TK209はその後半期とされている。(註1) 畿内での年代を、東北地方においてもそのまま適用できるかという点については、論議のあるところである。(註2) しかし、昭和50年に仙台市大蓮寺窯跡から所謂初期須恵器が発見され、東北地方における須恵器生産の初源を5世紀中葉から5世紀後半に求められるに至っている現在、栗遺跡から出土した須恵器坏に、畿内の年代をそのまま当てはめて、7世紀初頭頃から7世紀中葉を下らない年代を与えても、大きな誤りはないであろう。(註3) したがって栗遺跡の上限は、7世紀中葉頃までは溯ることになる。

次に、この須恵器坏がどの時期の住居跡と関連するかを検討すると、上限はさらに明瞭に把握できる。この点において注意されるのは6号住居跡より出土した須恵器坏を模倣した土師器の坏である。集成図13のNo.197は精巧に須恵器坏の器形を模倣して作られており、その器形は栗遺跡出土の須恵器坏に類似している。6号住居跡出土の甕No.49・66は、体部と口縁部との境に段を有し、特にNo.66は2号住居跡出土の甕No.62ときわめて類似する器形であるので、6号住居跡は2号住居跡と同時期性の強い住居跡と考えられる。仮に6号住居跡出土の須恵器を模倣した坏と、先述した須恵器坏とが、ほぼ同時期のものとして7世紀中葉頃とすると、2号住居跡より古いと考えられる第Ⅱ時期の5号・3号、第Ⅰ時期の14号・10号の各住居跡及びその出土遺物は7世紀中葉以前に溯る可能性もある。

2．下限について

下限については、宮城県刈田郡蔵王町塩沢北遺跡出土土器と、福島県郡山市麓山瓦窯跡出土須恵器とによって求められる。塩沢北遺跡１号住居跡より土師器坏５点、須恵器坏２点が出土している。土師器坏のうち２点は、底部と口縁部との境に内外面ともに段があり、口縁が直線的に外傾する。この二点は栗遺跡より出土するものに近似する。他の三点のうち２点は坏内面に段がなく、全体に丸みをもち国分寺下層式の坏と観察される。この住居跡は、栗遺跡出土坏のＡ２―Ｂ２―Ｃ２―Ｄ３、Ａ２―Ｂ２―Ｃ３―Ｄ３に分類されるものと、国分寺下層式に含まれるものが共伴する点において、栗遺跡の住居跡よりもやや新しい時期と考えられる。又、この住居跡からは体部外面の中程に軽い段をもち、口縁が外方に開く須恵器坏が出土している。この坏と類似する坏は麓山窯跡より出土している。麓山窯跡出土の須恵器坏に関して木本元治氏は『本例は大木戸窯跡より高畑窯跡に近い年代が与えられるものと考えられる。ただし、体部に段のある坏形土器を含む点でやや古くなる可能性もなくもない。ともあれ本資料は８世紀初頭を下らないものと考えられ……。』(註５)と述べられている。高畑窯跡は、蓋の内面にかえりがあるものがあり、畿内の編年ではⅢ期の末からⅣ期（７世紀後半から８世紀末）の初め頃と考えられる。(註６)

麓山窯跡出土の須恵器坏により、塩沢北遺跡１号住居跡の年代も８世紀初頭を下らない時期が考えられる。したがって、塩沢北遺跡１号住居跡よりも古いと考えられる栗遺跡の住居跡は、８世紀初頭を下らないことは確実であろう。

以上に述べたとうり、栗遺跡の上限は７世紀前半、下限は８世紀初頭以前に求められる。この年代観は、12号住居跡床面より出土した、截頭円錐形で鋸歯文の線刻された紡錘車によっても裏付けられる。すなわち、12号住居跡出土品と同形同文の紡錘車が、後Ⅱ期に位置づけられる大阪府大藪古墳から出土しているのである。又、多賀城の創建と前後して、宮城県内でも瓦生産の興隆と伴に須恵器生産が進展するが、(註７)この時期の須恵器が栗遺跡において発見されていないことも、下限の妥当性を裏付けるものであろう。

栗遺跡及びその出土土器の年代に関しては、資料の増加を待って、今後さらに検討せねばならない。

註１―田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」(平安学園考古学クラブ、昭和41年)

註２―註１に同じ

註３―渡辺泰伸、結城慎一『仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告』(「陸奥国官窯跡群Ⅱ」昭和51年)

註４―藤沼邦彦「塩沢北遺跡」(宮城県文化財調査報告書第24集、昭和46年)

註５―梅宮茂「郡山市麓山窯跡調査報告」(福島県文化財調査報告書第８集、昭和45年)

註６―木本元治「郡山市麓山瓦窯跡出土の須恵器」(『しのぶ考古』５、昭和50年)

註７―日本の考古学Ⅳ、古墳時代上、世界考古学大系３、日本Ⅲ古墳時代

第七章　まとめ

最後に今回の調査によって明らかになったことについてのまとめを記して発掘調査報告の終りとしたい。

1．栗遺跡は名取川の形成した氾濫原の自然堤防上に立地している。

2．栗遺跡からは、本調査によって竪穴住居跡18軒・土壙15基・溝１条が発見され、住居跡と土壙の大部分のものの年代は、古墳時代後期後半の７世紀前葉から７世紀後葉頃と考えられる。

3．栗囲式土器の組合せの実体が、住居跡床面出土土器によって明らかになった。住居跡床面出土土器の組合せの検討により、栗遺跡出土土器は三時期に区分されると考えられる。また今後さらに細分される可能性がある。

4．調査した土壙のなかで平面形が円形または楕円形を呈するものは、墓壙と考えられ古墳被葬者以外の一般の人々の墓の在り方を示している。

5．出土遺物の中には、12号住居跡出土紡錘車のように畿内の古墳等から出土したものと同類のものがある。

6．住居跡のなかには、カマドとともに炉が設けられたものがあり、炉も施設された住居跡は、カマドだけの住居跡よりも大形の住居跡に限られている。

表－2　住居跡一覧表

住居跡番号	正面形	規模	長軸方向	重複・増改築	カマド		柱穴	貯蔵穴		その他の施設	備考
					位置	規模		位置	規模		
1	正方形	2.6m×2.6m	北西－南東	無し	北壁中央	3.1m×0.5m	無し	無し		無し	
2	方形	不明	北－南又は東－西	不明	不明		無し	不明		不明	
3	不明	不明	不明	不明	不明		無し	無し		不明	一括土器と焼土のみ検出
4	正方形	2.9m×2.6m	北東－南西	第2土壙、第3土壙、第4土壙と重複、4号住居跡が古い	北壁中央	2.5m×0.6m	4個	無し		不明	
5	正方形	5.25m×4.95m	北西－南東	2回の改築	南壁中央	2.1m×0.6m	4個	無し		無し	
6	方形	3.0m×？	北－南又は東－西	不明	北壁中央よりやや東寄り	1.15m×0.55m	無し	無し		無し	
7	正方形	2.5m×2.4m	東－西	無し	北壁中央よりやや東寄り	0.8m×0.3m	無し	無し		無し	
8	隅丸方形	3.0m×？	北東－南西又は北西－南東	不明	不明		無し	不明		不明	
9	隅丸正方形	5.7m×5.3m	北西－南東	無し	南壁中央よりやや東寄り	0.8m×0.7m	4個	無し		炉	火災住居跡
10	方形	4.0m×？	北東－南西又は北西－南東	不明	不明		4個(？)	東隅	1.2m×1.0m	不明	
11	方形	5.4m×？	北東－南西又は北西－南東	不明	不明		4個(？)	不明		不明	
12	正方形	4.5m×4.4m	北東－南西	無し	西壁中央	0.8m×0.4m	4個	無し		無し	火災住居跡
13	隅丸正方形	2.65m×2.4m	北西－南東	無し	南壁中央	1.0m×0.5m	無し	無し		無し	
14	不明	不明	不明	不明	不明		無し	無し		無し	
15	長方形	3.4m×2.8m	東－西	17号住居跡及び第14土壙と重複、15号住居が古い	不明		無し	無し		無し	
16	長方形	3.9m×3.4m	東－西	第13土壙と重複、16号住居跡が古い	西壁中央	1.7m×0.6m	無し	無し		無し	
17	長方形	4m×3m	東－西	15号住居跡と重複15号住居跡が古い	不明		無し	不明		不明	
18	方形	5.2m×？	北西－南東又は北東－南西	第14土壙及び第15土壙と重複、18号住居跡が古い	西壁中央	1.0m×0.7m	4個？	不明		炉	廃棄後捨場として使用された住居

表－3　土壙一覧表

土壙番号	平面形	規模(cm) 長	短	深さ	方向	堆積土	備考
1	楕円形	300	130	40	南－北	層中に骨片が含まれる。	
2	楕円形	250	130	20	北西－南東		4号住居跡、第3土壙を切る。
3	楕円形	315	143	25	北西－南東	層中に骨片が含まれる。	4号住居跡、第4土壙を切る。2号土壙に切られる。
4	楕円形	残存105	75	18	北西－南東	クルミを検出	第2、第3土壙に切られる。
5	楕円形	残存174	140	30	北東－南西		第2、第4土壙に切られる。
6	楕円形	292	150	25	北西－南東	層中に骨片が含まれる。	16号住居跡を切る、土製勾玉出土。
7	楕円形	160	125	25	北東－南西	層中に骨片が含まれる。	16号住居跡を切る。
8	長方形	305	105	29	北西－南東	埋土は一層	遺物なし。
9	楕円形	285	145	22	北西－南東	層中に骨片が含まれる。	第10土壙を切る。
10	楕円形	210	125	19	北東－南西	層中に骨片が含まれる。	第9土壙に切られる。
11	不整円形	80	75	17	—	層中に骨片が含まれる。	
12	楕円形	202	72	13	南－北	層中に骨片が含まれる。	第13土壙を切る。
13	不整楕円形	135	98	30	北東－南東		第12土壙に切られる。
14	方形	570	200	34	東－西	埋土は一層	
15	楕円形	130	83	22	北西－南東	層中に骨片が含まれる。	18号住居跡を切る。

表－4　小形壺分類表

実測総数５個体

	分類基準				遺物番号	分類基準段階別個体数				住居跡番号																	
	A	B	C	D		A	B	C	D	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1	1	1	1	1	1	4	2	1	1																		
2	1	1	2	1	2			1	1																		
3	1	2	2	2	3		1	1	1																		
4	1	3	(1)	1	4		1	1	1																		
5	2	2	2	3	5	1	1	1	1																		

表－5　甕Ⅰ類分類表

実測総数17個体

	分類基準			遺物番号	分類基準段階別個体数			住居跡番号																		
	A	B	C		A	B	C	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1	1	1	1	6．7．8	5	4	3										6.7 8								
2	1	1	2	9			1	9																	
3	1	3	3	10		1	1														10				
4	2	1	1	11. 12. 13	11	5	3				13														
5	2	1	2	14			1		14																
6	2	1	3	15			1								15										
7	2	2	1	16. 17		4	2																16		
8	2	2	2	18			1							18											
9	2	2	4	19			1									19									
10	2	3	1	20		2	1									20									
11	2	3	3	21			1																		
12	( )	2	3	22	1	1	1	22																	

表－6　甕II類分類表

実測総数58個体

	分類基準				遺物番号	分類基準段階別個体数				住居跡番号																	
	A	B	C	D		A	B	C	D	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1	1	1	1	7	23	14	8	2	1																		
2	1	1	1	8	24				1																		
3	1	1	2	7	25			4	1														25				
4	1	1	2	3	26				1																		
5	1	1	2	5	27				1																		
6	1	1	2	8	28				1			28															
7	1	1	3	7	29. 30			2	2																		
8	1	2	1	9	31		1	1	1																		
9	1	3	2	1	32		1	1	1																		
10	1	( )	( )	2	33		4	4	1										33								
11	1	( )	( )	8	34. 35				2														34				
12	1	( )	( )	14	36				1														36				
13	2	1	1	8	37. 38. 39 40. 41. 42 43. 44. 45. 46	44	19	11	10	37	38	46	39			45											
14	2	1	1	11	47				1																		
15	2	1	2	8	48. 49. 50 51			4	4						49										50		
16	2	1	3	6	52			4	1													52					
17	2	1	3	8	53. 54. 55				3								54										
18	2	2	2	4	56		12	4	1									56									
19	2	2	2	8	57. 58				2					57													
20	2	2	2	15	59				1																		
21	2	2	3	7	60			8	1								60										
22	2	2	3	8	61. 62. 63 64. 65. 66				6		62 64				66			63									
23	2	2	3	12	67				1				67														
24	2	3	1	4	68		2	2	1									68									
25	2	3	1	9	69				1																		
26	2	( )	( )	8	70. 71. 72 73		11	11	4		70									71							
27	2	( )	( )	9	74				1													74					
28	2	( )	( )	10	75				1															75			
29	2	( )	( )	11	76				1																		
30	2	( )	( )	13	77				1																		77
31	2	( )	( )	14	78. 79				2															79			
32	2	( )	( )	15	80				1												80						

表－7　甑分類表

実測総数23個体

	分類基準					遺物番号	分類基準段階別個体数					住居跡番号																	
	A	B	C	D	E		A	B	C	D	E	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1	1	1	1	1	1	81	12	2	2	2	1										81								
2	1	1	1	1	2	82					1			82															
3	1	2	1	1	5	83		1	1	1	1																		
4	1	3	1	1	1	84		8	8	8	1																		
5	1	3	1	1	2	85. 86					2		85							86									
6	1	3	1	1	3	87. 88					2																		
7	1	3	1	1	4	89					1																		
8	1	3	1	1	6	90. 91					2																		
9	1	( )	1	1	( )	92		1	1	1	1						92												
10	2	2	1	1	7	93	11	4	3	3	1					93													
11	2	2	1	1	8	94. 95					2				95										94				
12	2	2	2	2	10	96			1	1	1																		
13	2	3	1	1	6	97		7	4	4	1																		
14	2	3	1	1	7	98					1								98										
15	2	3	1	1	8	99					1																		
16	2	(3)	1	1	( )	100					1									100									
17	2	3	2	2	9	101. 102. 103			3	3	3																		
18																													

表－8　鉢分類表

実測総数23個体

	分類基準			遺物番号	分類基準段階別個体数				住居跡番号																		
	A	B	C		A	B	C	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1	1	1	1	104	14	6	1														104				
2	1	1	3	105			1																		
3	1	1	4	106. 107			2																		
4	1	1	5	108			1																		
5	1	1	( )	109			1																		
6	1	2	1	110		8	1																		
7	1	2	4	111. 112. 113. 114. 115. 116. 117			7					114			112	117			111					116	
8	2a	1	3	118	4	3	1	1																	
9	2a	2	2	119		2	1																		
10	2a	2	5	120			1																		120
11	2b	2	1	121		1	1	1										121							
12	3a	1	3	122	5	3	1																		
13	3a	1	5	123		2	1					123													
14	3a	2	1	124		1	1									124									
15	3b	1	4	125		2	1																		
16	3b	2	2	126			1											126							

表－9　坏分類表

実測総数75個体

	分類基準					遺物番号	分類基準段階別個体数					住居跡番号																	
	A	B	C	D	E		A	B	C	D	E	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1	1	1	1	2	9b	127	4	4	4	1	1																		
2	1	1	1	4	8b	128.129.130				3	3						130		128										
3	2	1	1	1	1a	131		4	4	4	1									131									
4	2	1	1	1	2a	132					1																		
5	2	1	1	1	5b	133					1																		
6	2	1	1	1	5a	134					1																		
7	2	2	1	2	1a	135		67	6	5	1																		
8	2	2	1	2	1b	136					1																		
9	2	2	1	2	2a	137.138.139					3															137			
10	2	2	1	3	10b	140				1	1																		
11	2	2	2	2	2b	141			20	1	1									141									
12	2	2	2	3	1a	142.143.144.145.146.147.148				18	7				144												148		
13	2	2	2	3	2a	149.150.151.152.153.154.155					7	153 155			152								154				149		
14	2	2	2	3	3a	156					1					156													
15	2	2	2	3	4a	157					1																		
16	2	2	2	3	5a	158					1																		
17	2	2	2	3	6a	159					1														159				
18	2	2	2	4	2a	160	71			1	1																		
19	2	2	3	2	2a	161			40	1	1																		
20	2	2	3	3	1a	162.163.164.165.166.167.168.				25	7										162								
21	2	2	3	3	2a	169.170.171.172.173.174.175.176.177.178.179.180					12									172				176					177
22	2	2	3	3	2b	181					1															181			
23	2	2	3	3	3a	182					1										182								
24	2	2	3	3	3b	183					1					183													
25	2	2	3	3	6b	184					1																184		
26	2	2	3	3	7a	185					1																		
27	2	2	3	3	7b	186					1																		
28	2	2	3	4	2a	187				2	1																		
29	2	2	3	4	5a	188					1							188											
30	2	2	3	5	1a	189				4	1										189								
31	2	2	3	5	2a	190					1																		
32	2	2	3	5	2b	191					1																	192	
33	2	2	3	5	5a	192					1																		
34	2	2	3	6	1a	193.194.195				8	3								194										
35	2	2	3	6	2a	196					1																		
36	2	2	3	6	3b	197					1						197												
37	2	2	3	6	5a	198					1						198												
38	2	2	3	6	5b	199					1																		
39	2	2	3	6	6b	200					1																200		
40	2	2	4	4	3b	201			1	1	1																		

表－１１　住居跡出土土器の分類と組合せ表

住居跡番号	甕　I　類		甕　II　類		甑		鉢		坏		その他の器形	
	分　類	遺物No.	分　類	遺物No.	分　類	遺物No.	分　類	遺物No.	分　類	遺物No.	分　類	遺物No.
1　号	A1－B1－C2	9	A2－B1－C1－D8	37					A2－B2－C2－D3－E2a	153		
	A( )－B2－C3	22							A2－B2－C2－D3－E2a	155		
2　号	A2－B1－C3	14	A2－B1－C1－D8	38	A1－B3－C1－D1－E2	85					高坏　A1－B1－C1	204
			A2－B2－C3－D8	62								
			A2－B2－C3－D8	64								
			A( )－B( )－C(2)－D8	70								
3　号			A1－B1－C2－D8	28	A1－B1－C1－D1－E8	82	A2a－B1－C3	118				
			A2－B1－C1－D8	46								
4　号	A2－B1－C1	13	A2－B1－C1－D8	39	A2－B1－C1－D1－E8	95			A2－B2－C2－D3－E1a	144	甕　破　片	229
			A2－B2－C3－D12	67					A2－B2－C2－D3－E2a	152		
5　号	A( )－B( )－C( )	263	A2－B2－C2－D8	57	A2－B2－C1－D1－E7	93	A1－B2－C4	114	A2－B2－C2－D3－E3a	156		
							A3a－B1－C5	123	A2－B2－C3－D3－E3b	183		
6　号			A2－B1－C2－D8	49	A1－B( )－C1－D1－E( )	92			A1－B1－C1－D4－E8b	130	腕	203
			A2－B2－C3－D8	66					A2－B2－C3－D6－E3b	197		
									A2－B2－C3－D6－E5a	198		
7　号	A2－B2－C1	18	A2－B1－C1－D8	45					A2－B2－C3－D4－E5a	188		
8　号	A2－B1－C3	15	A2－B1－C3－D8	54	A2－B3－C1－D1－E7	98	A1－B2－C4	112	A1－B1－C1－D4－E8b	128		
			A2－B2－C3－D7	60					A2－B2－C3－D6－E1a	194		
9　号	A2－B1－C1	11	A2－B2－C2－D4	56	A1－B3－C1－D1－E2	86	A1－B2－C4	117	A2－B1－C1－D1－E1a	131		
	A2－B2－C4	19	A2－B2－C3－D8	63	A2－B(3)－C1－D1－E( )	100	A3a－B2－C1	124	A2－B2－C2－D2－E2b	141		
	A2－B3－C1	20	A2－B3－C1－D4	68					A2－B2－C3－D3－E2a	172		
									A2－B2－C3－D3－E2a	180		
10　号	A1－B1－C1	6	A1－B( )－C( )－D4	33	A1－B1－C1－D1－E1	81			A2－B2－C3－D3－E1a	162		
	A1－B1－C1	7							A2－B2－C3－D3－E3a	182		
	A1－B1－C1	8							A2－B2－C3－D3－E2a	189		
11　号			A2－B( )－C( )－D8	71			A2b－B2－C1	121			高坏　A2－B( )－C( )	205
							A3b－B2－C2	126	A2－B2－C2－D3－E2a	154		
12　号			A2－B( )－C( )－D15	80			A1－B2－C4	111	A2－B2－C3－D3－E2a	176		
13　号			A2－B1－C3－D6	52			A1－B1－C1	104	A2－B2－C3－D3－E2a	176		
			A2－B( )－C( )－D9	74								
14　号	A1－B3－C3	10	A1－B( )－C( )－D8	34	A2－B2－C1－D1－E8	94			A2－B2－C2－D3－E6a	159		
			A1－B( )－C( )－D8	35								
			A1－B( )－C( )－D14	36								
15　号			A2－B( )－C( )－D10	75					A2－B2－C1－D2－E2a	137		
			A2－B( )－C( )－D14	79					A2－B2－C3－D3－E2b	181		
16　号	A2－B2－C1	16	A2－B1－C2－D8	50	A1－B( )－C1－D1－E( )	242			A2－B2－C2－D3－E1a	148		
									A2－B2－C2－D3－E2a	149		
									A2－B2－C3－D3－E6b	184		
									A2－B2－C3－D6－E6b	200		
17　号							A1－B1－C4	116	A2－B2－C3－D5－E5a	192	片口土器	213
18　号			A2－B( )－C( )－D13	77			A2a－B2－C5	120	A2－B2－C3－D3－E2a	177		

表－10　高坏分類表

実測総数－7

	分類基準			遺物番号	分類基準段階別個体数			住居跡番号																	
	A	B	C		A	B	C	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1	1	1	1	204			1		204																
2	2	( )	( )	205			1											205							
3	3	( )	( )	206			1																		
4	( )	1	1	207			1																		
5	( )	2	2	208			1																		
6	( )	3	1	209			1																		
7	( )	3	3	210			1																		

表12　住居跡編年関係

時期	標式住居	共通する土器分類とその住居跡
I	10号	×
	14号	4号 (甑A2－B2－C1－D1－E8)
II	3号	1号・2号・4号・7号 (甕II類A2－B1－C1－D8)
	5号	8号・9号・12号・17号 (鉢A1－B2－C4)
III	2号	1号・4号・7号　6号・9号　9号　11号 (甕II類A2-B1-C1-D8)　(甕II類A2-B2-C2-D8)　(甑A1-B3-C1-D1-E2)　(甕II類A2-B( )-C( )-D8)
	9号	8号・5号・12号・17号　13号・18号　2号・6号　2号 (鉢A1-B2-C4)　(坏A2-B2-C3-D3-E2a)　(甕II類A2-B2-C2-D8)　(甑A1-B3-C1-D1-E2)

栗遺跡出土遺物目録 (1)

No.	器形	地区・遺構	出土層位	写真図版
1	土師器・小形壺	E区	地山面	22－1
2	土師器・小形壺	E区	地山面	22－2
3	土師器・小形壺	A区	地山面	22－3
4	土師器・小形壺	B区	—	22－4
5	土師器・小形壺	A区 第14土壙	埋土	22－5
6	土師器・甕 I	E区 10号住居跡	床面	23－1
7	土師器・甕 I	E区 10号住居跡	床面	23－2
8	土師器・甕 I	E区 10号住居跡	床面	23－3
9	土師器・甕 I	中央区 1号住居跡	床面	23－4
10	土師器・甕 I	A区 14号住居跡	床面	23－5
11	土師器・甕 I	C区 9号住居跡	床面	
12	土師器・甕 I	A区	—	
13	土師器・甕 I	D区 4号住居跡	床面	
14	土師器・甕 I	中央区 2号住居跡	床面	23－6
15	土師器・甕 I	D区 8号住居跡	床面	
16	土師器・甕 I	D区 16号住居跡	床面	23－7
17	土師器・甕 I	B区	—	
18	土師器・甕 I	B区 7号住居跡	床面	
19	土師器・甕 I	C区 9号住居跡	床面	23－8
20	土師器・甕 I	C区 9号住居跡	床面	23－9
21	土師器・甕 I	A区 18号住居跡	1層	
22	土師器・甕 I	中央区 1号住居跡	床面	
23	土師器・甕 II	A区	—	24－1
24	土師器・甕 II	A区	—	24－2
25	土師器・甕 II	A区 14号住居跡	床面	24－3
26	土師器・甕 II	A区	撹乱層	24－4
27	土師器・甕 II	A区	撹乱層	
28	土師器・甕 II	C区 3号住居跡	床面	24－5
29	土師器・甕 II	A区	表土	24－6
30	土師器・甕 II	A区 18号住居跡	埋土	
31	土師器・甕 II	A区	表土	24－7
32	土師器・甕 II	A区	—	
33	土師器・甕 II	E区 10号住居跡	床面	
34	土師器・甕 II	A区 14号住居跡	床面	24－8
35	土師器・甕 II	A区	—	24－9

栗遺跡出土遺物目録 (2)

No.	器形	地区・遺構	出土層位	写真図版
36	土師器・甕 II	A 区 14号住居跡	床面	
37	土師器・甕 II	中央区 1号住居跡	床面	
38	土師器・甕 II	中央区 2号住居跡	床面	25－1
39	土師器・甕 II	D 区 4号住居跡	床面	
40	土師器・甕 II	A 区	—	
41	土師器・甕 II	A 区	表土	
42	土師器・甕 II	A 区	—	
43	土師器・甕 II	A 区	—	25－2
44	土師器・甕 II	A 区	—	25－3
45	土師器・甕 II	B 区 7号住居跡	床面	25－4
46	土師器・甕 II	C 区 3号住居跡	床面	25－5
47	土師器・甕 II	A 区 18号住居跡	2層	25－6
48	土師器・甕 II	A 区	表土	
49	土師器・甕 II	B 区 6号住居跡	床面	
50	土師器・甕 II	D 区 16号住居跡	カマド袖	25－7
51	土師器・甕 II	A 区	—	25－8
52	土師器・甕 II	A 区 13号住居跡	床面	
53	土師器・甕 II	A 区	撹乱層	25－9
54	土師器・甕 II	D 区 8号住居跡	床面	
55	土師器・甕 II	D 区 第5土壙	埋土	26－1
56	土師器・甕 II	C 区 9号住居跡	床面	
57	土師器・甕 II	B 区 5号住居跡	床面	26－2
58	土師器・甕 II	A 区	—	
59	土師器・甕 II	A 区 河原石群	地山面	26－3
60	土師器・甕 II	D 区 8号住居跡	床面	26－4
61	土師器・甕 II	A 区	—	26－5
62	土師器・甕 II	中央区 2号住居跡	床面	
63	土師器・甕 II	C 区 9号住居跡	床面	
64	土師器・甕 II	中央区 2号住居跡	床面	26－6
65	土師器・甕 II	A 区	—	
66	土師器・甕 II	B 区 6号住居跡	床面	
67	土師器・甕 II	D 区 4号住居跡	床面	26－7
68	土師器・甕 II	C 区 9号住居跡	床面	26－8
69	土師器・甕 II	A 区	—	
70	土師器・甕 II	中央区 2号住居跡	床面	26－9
71	土師器・甕 II	A 区 11号住居跡	床面	

栗遺跡出土遺物目録 (3)

No.	器形	地区・遺構	出土層位	写真図版
72	土師器・甕 II	D 区 第 3 土壙	埋土	
73	土師器・甕 II	D 区 第 3 土壙	埋土	26−10
74	土師器・甕 II	A 区 13号住居跡	床面	
75	土師器・甕 II	A 区 15号住居跡	床面	
76	土師器・甕 II	A 区 18号住居跡	ピット内	
77	土師器・甕 II	A 区 18号住居跡	床面	
78	土師器・甕 II	中央区	—	
79	土師器・甕 II	A 区 15号住居跡	床面	
80	土師器・甕 II	D 区 12号住居跡	床面	
81	土師器・甑	E 区 10号住居跡	床面	27−1
82	土師器・甑	C 区 3号住居跡	床面	27−2
83	土師器・甑	A 区	—	27−3
84	土師器・甑	A 区	—	27−4
85	土師器・甑	中央区 2号住居跡	床面	
86	土師器・甑	C 区 9号住居跡	床面	27−5
87	土師器・甑	中央区	表土	
88	土師器・甑	C 区	表土	
89	土師器・甑	A 区	表土	27−6
90	土師器・甑	D 区 第 5 土壙	埋土	
91	土師器・甑	中田中学校所蔵		
92	土師器・甑	B 区 6号住居跡	床面	
93	土師器・甑	B 区 5号住居跡	床面	27−7
94	土師器・甑	A 区 14号住居跡	床面	27−8
95	土師器・甑	D 区 4号住居跡	床面	
96	土師器・甑	中田中学校所蔵		
97	土師器・甑	A 区 河原石群	地山面	27−9
98	土師器・甑	D 区 8号住居跡	床面	27−10
99	土師器・甑	A 区 18号住居跡	埋土	27−11
100	土師器・甑	C 区 9号住居跡	床面	
101	土師器・甑	A 区	—	27−12
102	土師器・甑	A 区 河原石群	地山面	27−13
103	土師器・甑	中田中学校所蔵		
104	土師器・鉢	A 区 13号住居跡	床面	
105	土師器・鉢	A 区 18号住居跡	埋土	
106	土師器・鉢	A 区	表土	28−1
107	土師器・鉢	中田中学校所蔵		

栗遺跡出土遺物目録 (4)

No.	器形	地区・遺構	出土層位	写真図版
108	土師器・鉢	中田中学校所蔵		
109	土師器・鉢	D区 第9土壙	壁上部	28－2
110	土師器・鉢		—	28－3
111	土師器・鉢	D区 12号住居跡	床面	
112	土師器・鉢	D区 8号住居跡	床面	28－4
113	土師器・鉢	A区	—	28－5
114	土師器・鉢	B区 5号住居跡	床面	
115	土師器・鉢	A区	—	
116	土師器・鉢	A区 17号住居跡	床面	
117	土師器・鉢	C区 9号住居跡	床面	28－6
118	土師器・鉢	C区 3号住居跡	床面	28－7
119	土師器・鉢	D区 12号住居跡	1層	
120	土師器・鉢	A区 18号住居跡	炉	28－8
121	土師器・鉢	A区 11号住居跡	床面	
122	土師器・鉢	A区 18号住居跡	埋土	
123	土師器・鉢	B区 5号住居跡	床面	28－9
124	土師器・鉢	C区 9号住居跡	床面	28－10
125	土師器・鉢	A区 18号住居跡	埋土	28－11
126	土師器・鉢	A区 11号住居跡	床面	
127	土師器・坏	A区 第6土壙	埋土	29－1
128	土師器・坏	D区 8号住居跡	床面	
129	土師器・坏	A区 18号住居跡	—	29－2
130	土師器・坏	B区 6号住居跡	床面	
131	土師器・坏	C区 9号住居跡	床面	
132	土師器・坏	D区	—	
133	土師器・蓋？	B区 6号住居跡	—	29－3
134	土師器・坏	A区	—	
135	土師器・坏	A区	—	
136	土師器・坏	D区	—	29－4
137	土師器・坏	A区 15号住居跡	床面	29－5
138	土師器・坏	A区 18号住居跡	埋土	29－6
139	土師器・坏	A区 第15土壙	1層	
140	土師器・坏	A区	—	
141	土師器・坏	C区 9号住居跡	床面	
142	土師器・坏	A区	—	
143	土師器・坏	A区	—	

栗遺跡出土遺物目録 (5)

No.	器形	地区・遺構	出土層位	写真図版
144	土師器・坏	D区 4号住居跡	床面	
145	土師器・坏	—	—	
146	土師器・坏	A区 18号住居跡	埋土	
147	土師器・坏	A区	撹乱層	
148	土師器・坏	D区 16号住居跡	床面	27－7
149	土師器・坏	D区 16号住居跡	床面	29－8
150	土師器・坏	D区	撹乱層	29－9
151	土師器・坏	B区	—	
152	土師器・坏	D区 4号住居跡	床面	
153	土師器・坏	中央区 1号住居跡	床面	29－10
154	土師器・坏	D区 12号住居跡	床面	
155	土師器・坏	中央区 1号住居跡	床面	
156	土師器・坏	A区 5号住居跡	床面	
157	土師器・坏	A区	—	
158	土師器・坏	A区	—	
159	土師器・坏	A区 14号住居跡	床面	29－11
160	土師器・坏	D区	撹乱層	
161	土師器・坏	C区 9号住居跡	埋土木炭1層	29－12
162	土師器・坏	E区 10号住居跡	床面	30－1
163	土師器・坏	A区	—	
164	土師器・坏	C区 9号住居跡	埋土木炭層	
165	土師器・坏	A区 18号住居跡	1層	
166	土師器・坏	A区	—	
167	土師器・坏	D区	撹乱層	
168	土師器・坏	D区 第3土壙	埋土	
169	土師器・坏	D区 第2土壙	埋土	
170	土師器・坏	A区 18号住居跡	2層上面	30－2
171	土師器・坏	A区	—	
172	土師器・坏	C区 9号住居跡	床面	30－3
173	土師器・坏	A区 18号住居跡	2層	
174	土師器・坏	A区 第14土壙	埋土	
175	土師器・坏	A区 18号住居跡	1層	
176	土師器・坏	A区 13号住居跡	床面	
177	土師器・坏	A区 18号住居跡	炉	30－4
178	土師器・坏	A区	—	
179	土師器・坏	A区	—	

栗遺跡出土遺物目録 (6)

No.	器形	地区・遺構	出土層位	写真図版
180	土師器・坏	C区 9号住居跡	床面	
181	土師器・坏	A区 15号住居跡	床面	30－5
182	土師器・坏	E区 10号住居跡	床面	30－6
183	土師器・坏	A区 5号住居跡	床面	
184	土師器・坏	D区 16号住居跡	床面	
185	土師器・坏	D区	表土	30－7
186	土師器・坏	A区 第6土壙	埋土	
187	土師器・坏	A区 18号住居跡	埋土	
188	土師器・坏	B区 7号住居跡	床面	
189	土師器・坏	E区 10号住居跡	床面	30－8
190	土師器・坏	A区	—	
191	土師器・坏	A区	—	
192	土師器・坏	A区 17号住居跡	床面	
193	土師器・坏	A区 18号住居跡	埋土	30－9
194	土師器・坏	D区 8号住居跡	床面	30－10
195	土師器・坏	A区	—	
196	土師器・坏	A区 第15土壙	1層	
197	土師器・坏	B区 6号住居跡	床面	30－11
198	土師器・坏	B区 6号住居跡	床面	
199	土師器・坏	D区 第7土壙	炭化物層上面	30－12
200	土師器・坏	D区 16号住居跡	床面	
201	土師器・坏	中央区 1号住居跡	埋土	
202	土師器・椀	C区	撹乱層	31－1
203	土師器・椀	B区 6号住居跡	床面	31－2
204	土師器・高坏	中央区 2号住居跡	床面	31－3
205	土師器・高坏	A区 11号住居跡	床面	31－4
206	土師器・高坏	D区 第3土壙	埋土	
207	土師器・高坏	D区	—	31－5
208	土師器・高坏	A区	—	31－6
209	土師器・高坏	B区	—	
210	土師器・高坏	B区	—	
211	土師器・蓋	D区 12号住居跡	1層	31－7
212	土師器・蓋	A区	—	31－8
213	土師器・片口土器	A区 17号住居跡	床面	31－9
214	土師器・手捏ね土器	D区 第5土壙	埋土	
215	土師器・手捏ね土器	A区	表土	32－1

栗遺跡出土遺物目録 (7)

No.	器形	地区・遺構	出土層位	写真図版
216	土師器・手捏ね土器	D区		32－2
217	土師器・手捏ね土器	A区		
218	土師器・手捏ね土器	中央区		
219	土師器・手捏ね土器	中央区		32－3
220	土師器・手捏ね土器	A区		
221	土師器・手捏ね土器	A区 18号住居跡	2層	32－4
222	土師器・手捏ね土器	A区 18号住居跡	2層	32－5
223	土師器・手捏ね土器	D区 第3土壙	埋土	32－6
224	土師器・破片（鉢）	D区 12号住居跡	2層	
225	土師器・破片（鉢）	D区 12号住居跡	—	
226	土師器・破片（台付鉢）	A区	—	
227	土師器・破片（小鉢）	—	—	
228	土師器・破片（小鉢）	—	—	
229	土師器・破片（甕）	D区 4号住居跡	床面	
230	土師器・破片（甕）	A区	—	
231	土師器・破片（甕）	A区	—	
232	土師器・破片（甕II）	A区	表土	
233	土師器・破片（甕I）	B区	—	
234	土師器・破片（甕I）	D区 第5土壙	埋土	
235	土師器・破片（甕I）	B区	—	
236	土師器・破片（甕I）	A区 5号住居跡	床面	
237	土師器・破片（甕I）	A区 18号住居跡	埋土	32－14
238	土師器・破片（甕I）	C区 3号住居跡	—	
239	土師器・破片（甕I）	C区	—	
240	土師器・破片（甕I）	A区	—	
241	土師器・破片（甑）	A区 第15土壙	床面	
242	土師器・破片（甑）	D区 16号住居跡	床面	
243	土師器・破片（甑）	A区	—	
244	土師器・破片（甕再利用）	B区	表土	31－10
245	土師器・破片（鉢又は甕）	A区 18号住居跡	埋土	31－11
246	土師器・破片（坏）	A区 18号住居跡	2層	
247	石製品	A区 15号住居跡	埋土	33－1
248	石製品	A区 18号住居跡	2層	33－3
249	滑石製紡錘車	D区 12号住居跡	床面	33－6
250	滑石製紡錘車	C区 9号住居跡	ピット4上面	33－2
251	砥石	C区	撹乱層	33－7

栗遺跡出土遺物目録 (8)

No.	器形	地区・遺構	出土層位	写真図版
252	砥石	D区	撹乱層	33－8
253	砥石	D区 12号住居跡	床面	33－9
254	石製品	D区 8号住居跡	床面	33－10
255	石製品	C区 9号住居跡	床面	33－11
256	石製品	C区 9号住居跡	床面	33－12
257	支脚	C区 9号住居跡	(カマド内)	33－13
258	石製品・臼玉	D区	—	33－4
259	石製品・臼玉	B区	地山面	33－5
260	土製品・管玉模造品	D区 第3土壙	埋土	32－7
261	土製品・管玉模造品	D区 第3土壙	埋土	32－8
262	土製品・臼玉模造品	D区 第3土壙	埋土	32－9
263	土製品・勾玉模造品	A区 第6土壙	(壁面)	
264	土製品・鏡模造品	A区	地山面	
265	土製品・錘	A区	撹乱層	32－11
266	土製品・錘	A区 18号住居跡	埋土	32－12
267	土製品・紡錘車	A区	地山面	32－13
268	鉄鏃	—	—	32－14
269	鉄鏃	A区	—	32－15
270	刀子	A区	—	32－16
271	鎌?	A区 18号住居跡	1層	32－17
272	須恵器・坏	A区 15号住居跡	床面	34－1
273	須恵器・瓶	A区	撹乱層	34－2
274	須恵器・平瓶	A区	表土	34－3
275	須恵器・提瓶	A区 5号住居跡	1層	34－4
276	須恵器・甕	B区	撹乱層	34－5
277	須恵器・甕	A区		34－6
278	須恵器・甕	A区	撹乱層	34－7
279	須恵器・甕	A区	表土	34－8
280	須恵器・甕	D区	撹乱層	35－1
281	須恵器・甕	表採		35－2
282	須恵器・甕	表採		35－3
283	須恵器・甕	A区 5号住居跡	2層	
284	須恵器・坏	B区		35－4
285	須恵器・壺	A区	撹乱層	35－5
286	須恵器・蓋?	A区		35－6
287	須恵器・蓋?	E区	撹乱層	35－7

写　真　図　版

写真図版－1

① 遺跡遠景
（西南より）

② 遺跡主要部
（西半分）

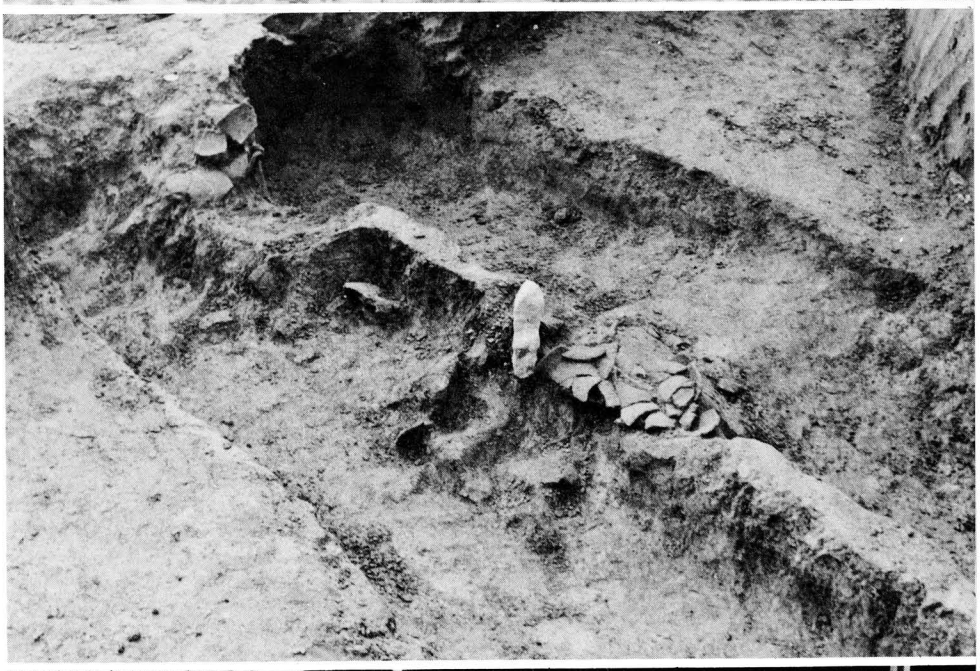
③ 遺跡主要部
（東半分）

④ 遺構検出面の状況

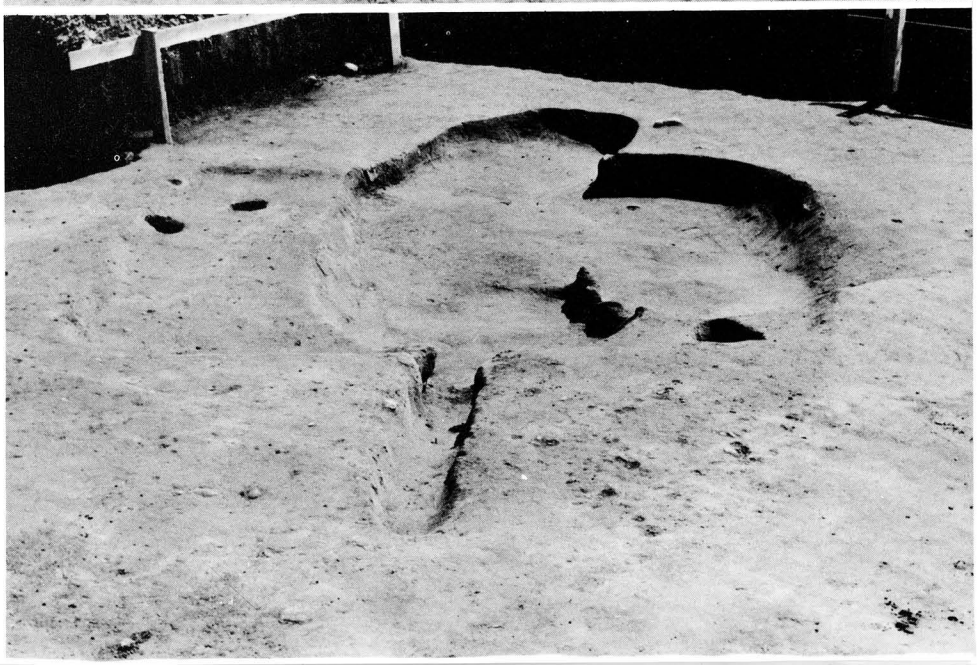
⑤ １号住居跡

⑥ ２号住居跡

⑦ 2号住居跡
遺物出土状況



⑧ 3号住居跡
カマド周辺の残存部

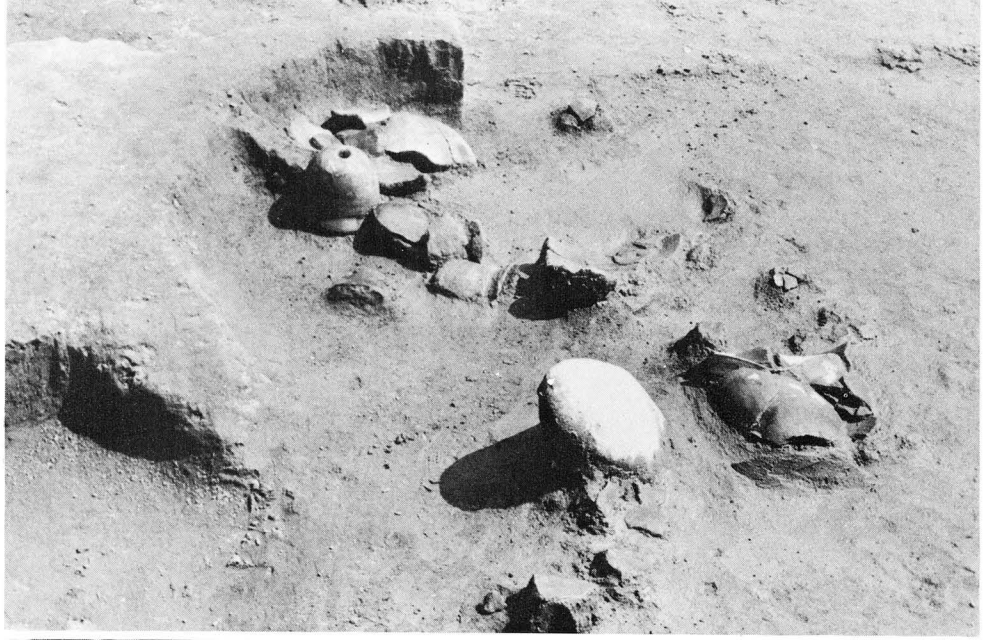


⑨ 4号住居跡

⑩ 5号住居跡

⑪ 6号住居跡
遺物出土状況

⑫ 6号住居跡
遺物出土状況



⑬ 8号住居跡
北東コーナー残存部
及び遺物出土状況

⑭ 9号住居跡
炭化材検出状況

⑮ 9号住居跡
遺物出土状況
（ベルトの部分が
カマドに当る）

⑯ 9号住居跡
ピット検出状況

⑰ 9号住居跡

⑱ 9号住居跡
カ マ ド

⑲ 10号住居跡
遺物出土状況
（北東コーナー及びピット1）

⑳ 10号住居跡

㉑ 11号住居跡

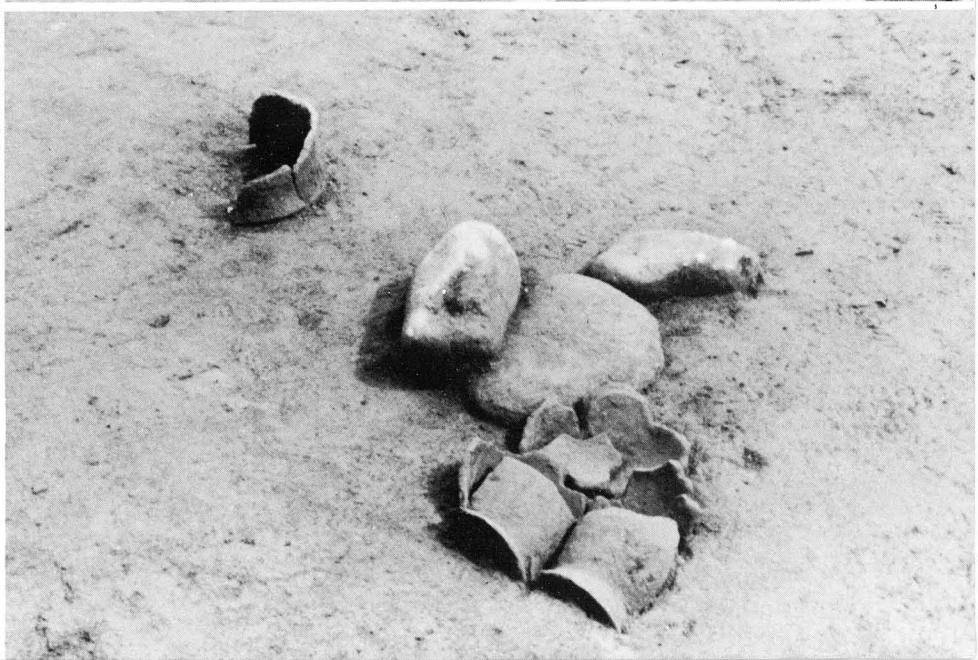
㉒ 12号住居跡
遺物出土状況

㉓ 12号住居跡

㉔ 12号住居跡
北東側壁出土作製編物

㉕ 13号住居跡

㉖ 14号住居跡

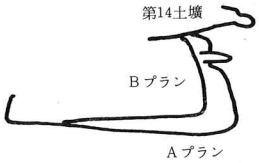


㉗ 14号住居跡
遺物出土状況

㉘ 15号住居跡

㉙ 16号住居跡

㉚ 16号住居跡
カ マ ド

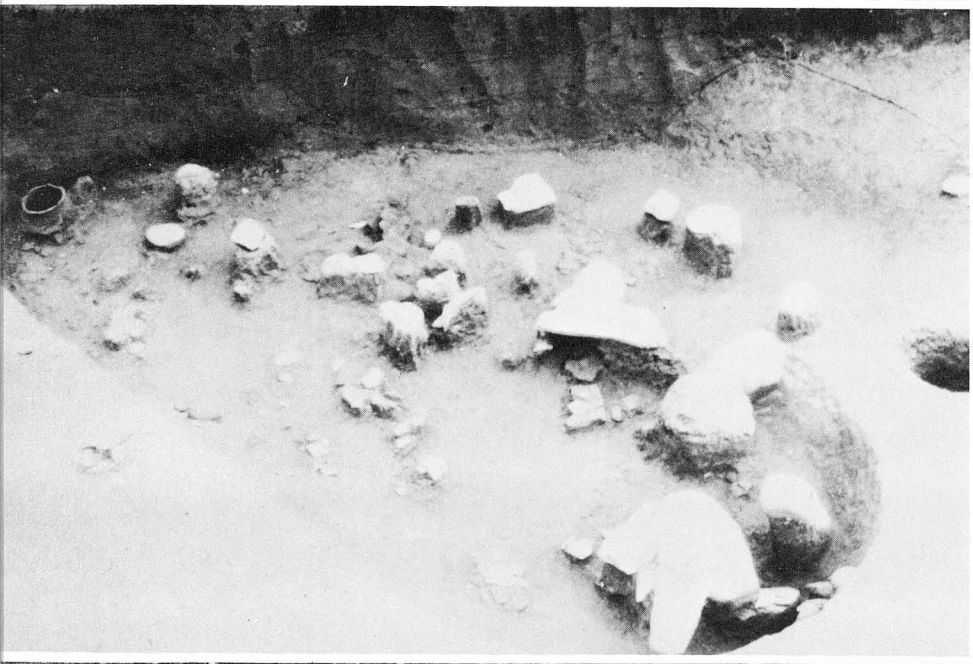


㉛ 18号住居跡

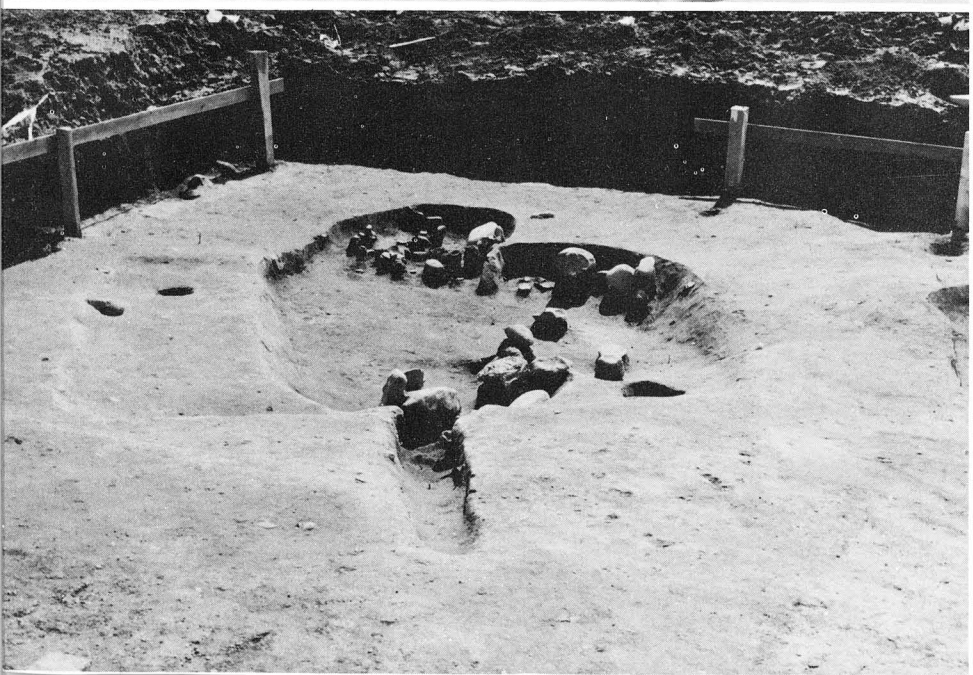
㉜ 18号住居跡
カ マ ド

㉝ 18号住居跡
炉の埋設土器

㉞ 第１土壙



㉟ 第２・３土壙



㊱ 第２・３・４土壙

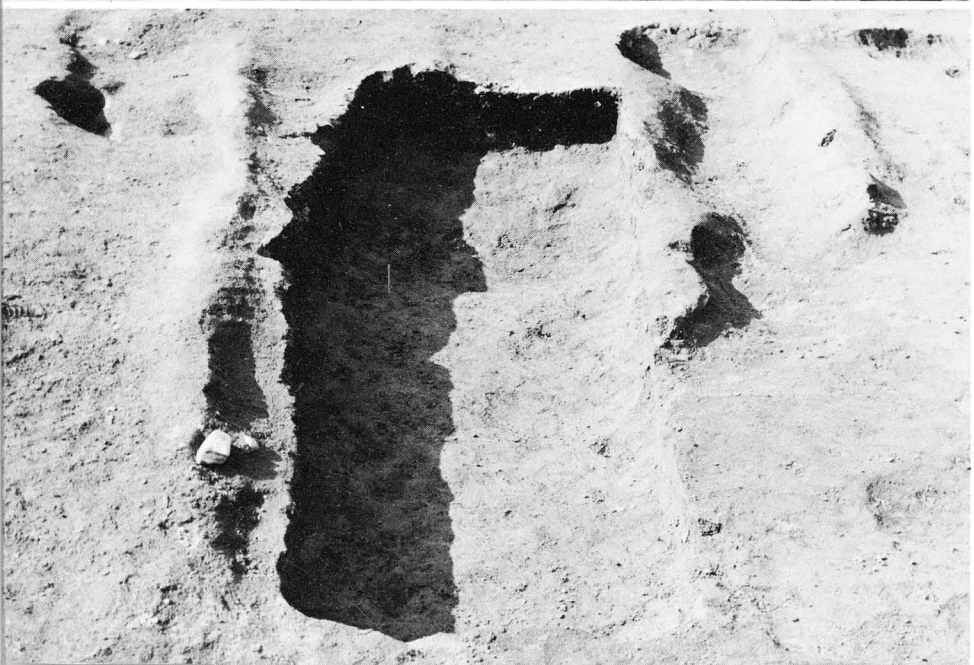
㊲ 第５土壙

㊳ 第６土壙

㊴ 第６土壙

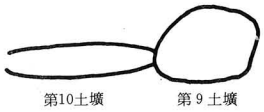
㊵ 第７土壙

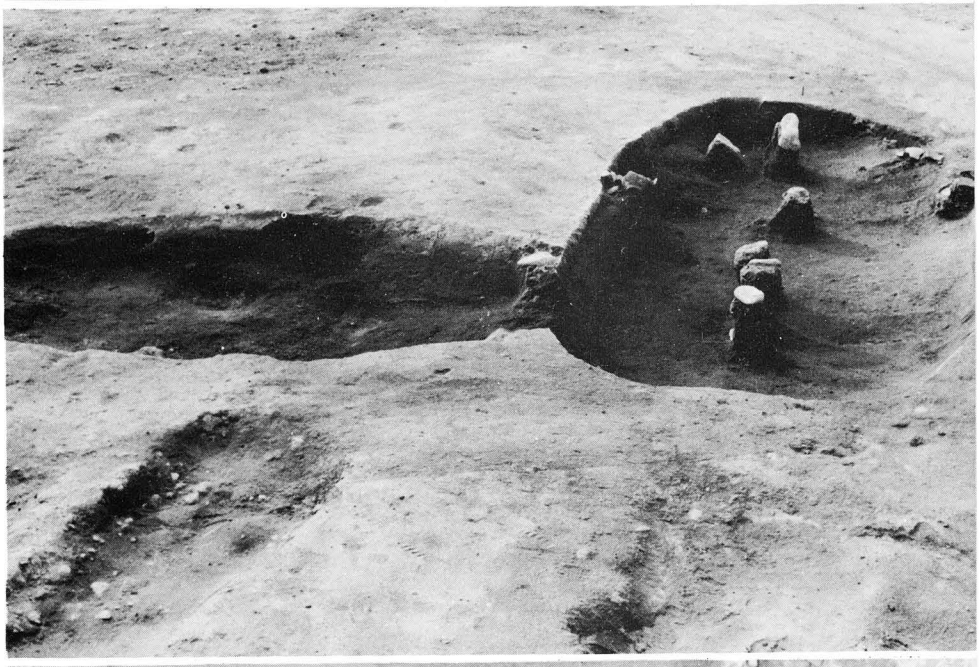
㊶ 第７土壙



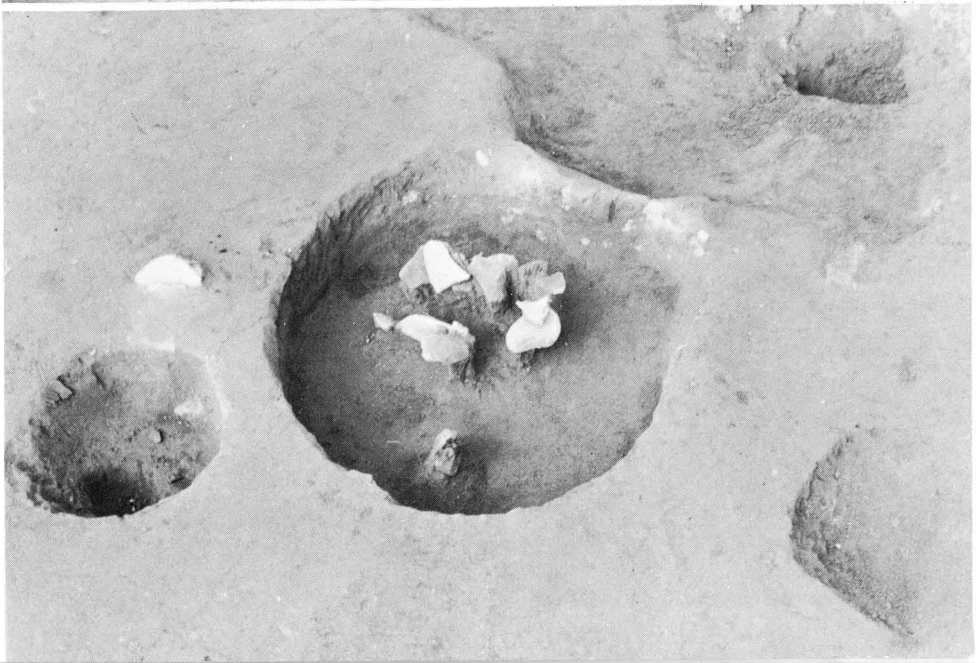
㊷ 第８土壙

㊸ 第９・10土壙

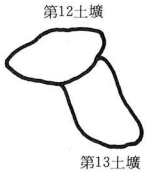




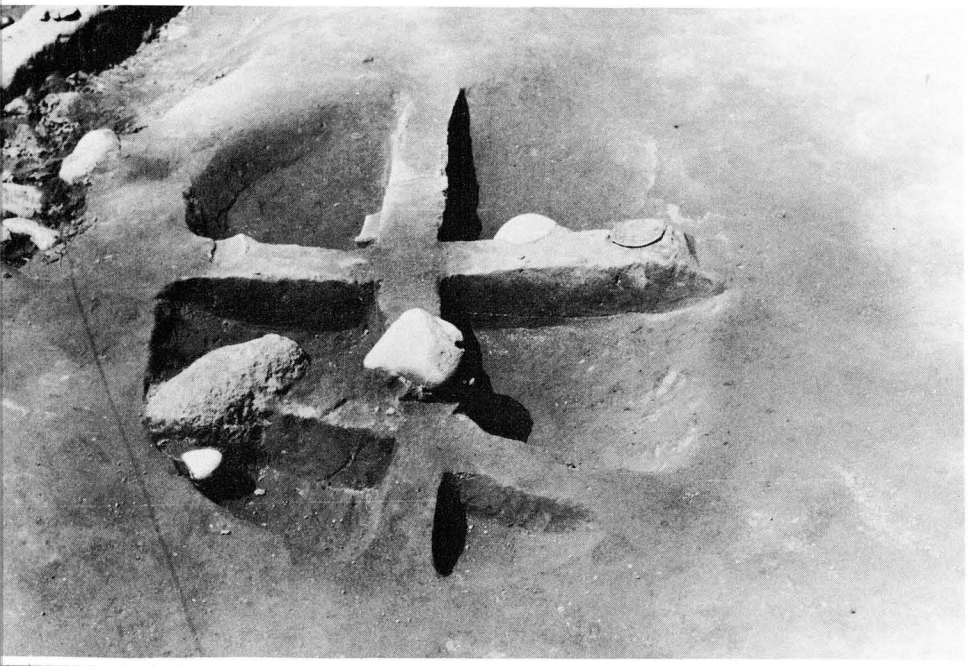
㊹ 第９・10土壙



㊺ 第11土壙

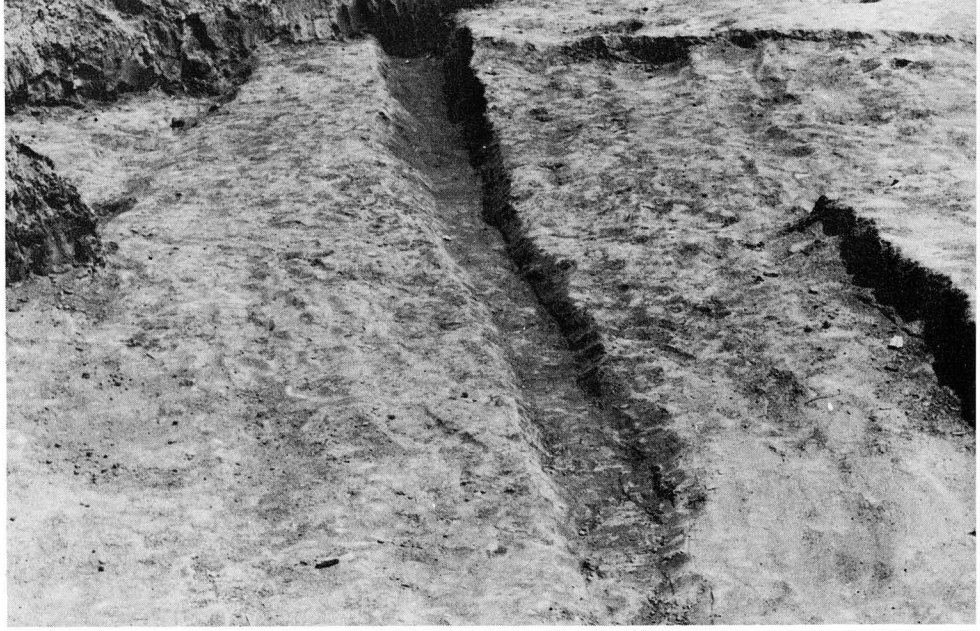


㊻ 第12・13土壙

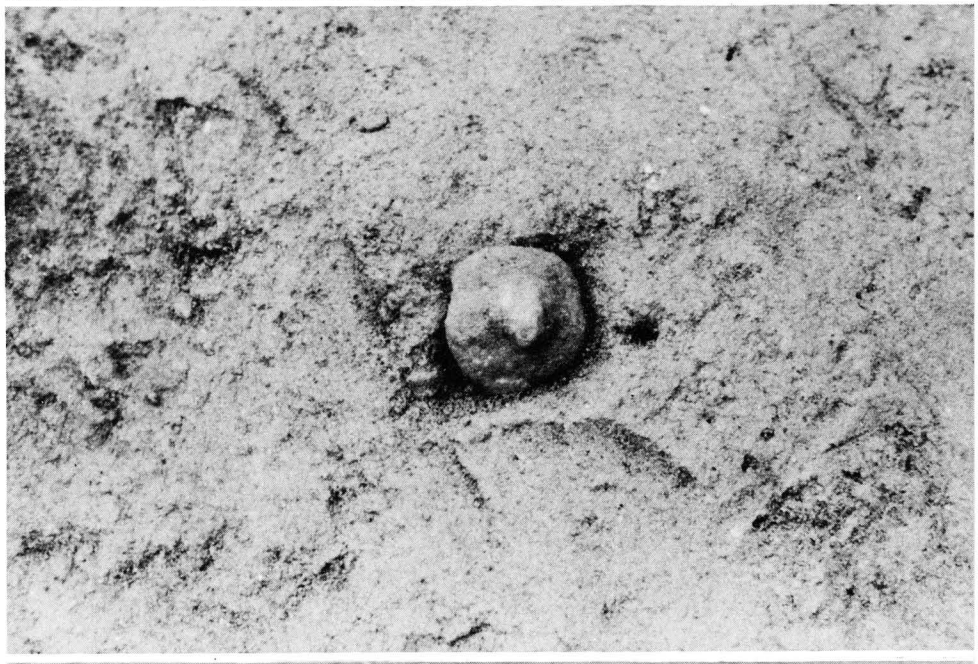


㊼ 第15土壙

㊽ 河原石群

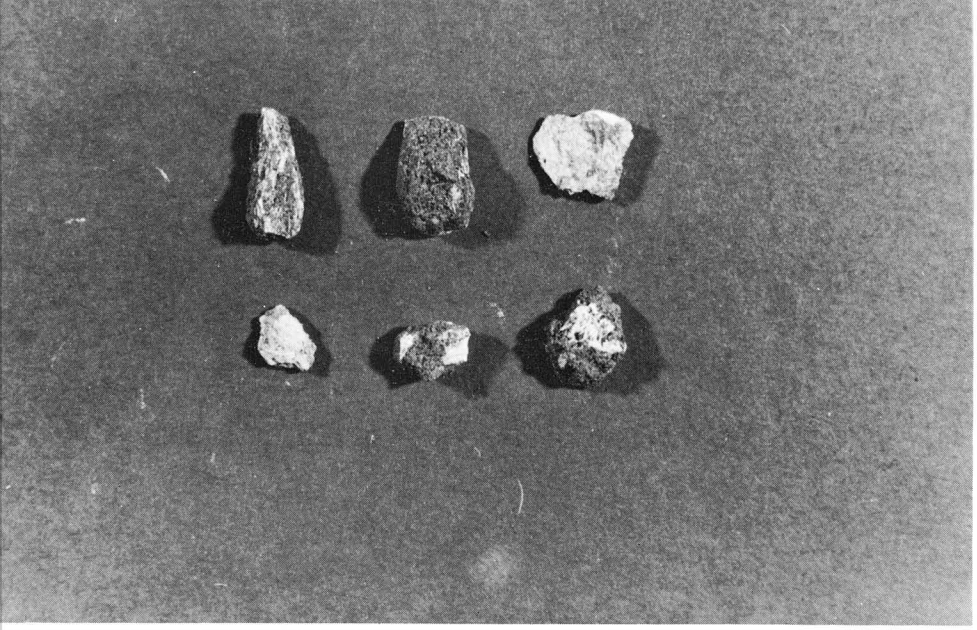


㊾ 溝状遺構

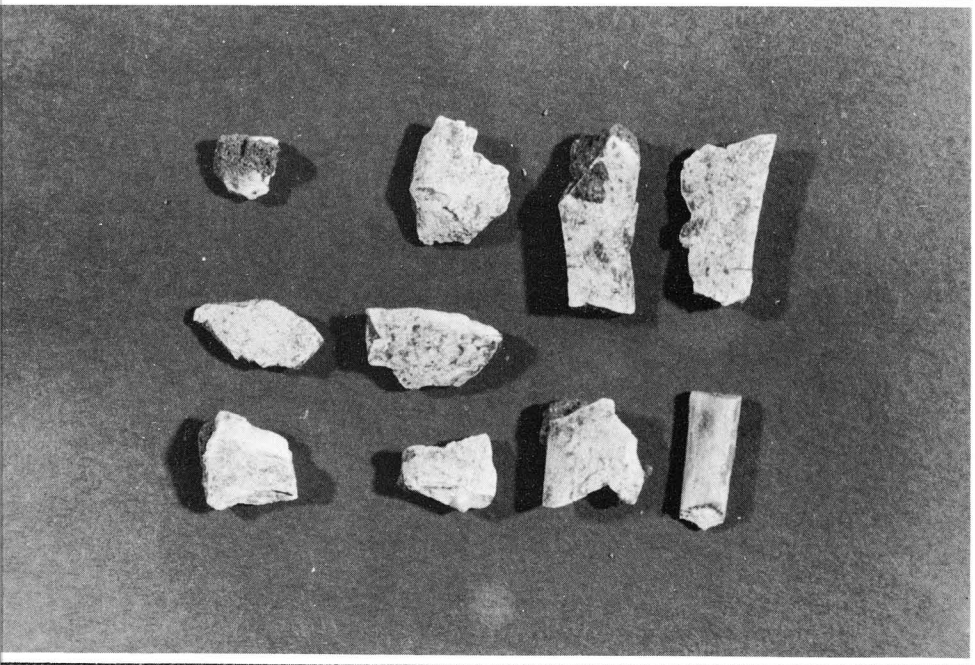


㊿ 鏡模造土製品

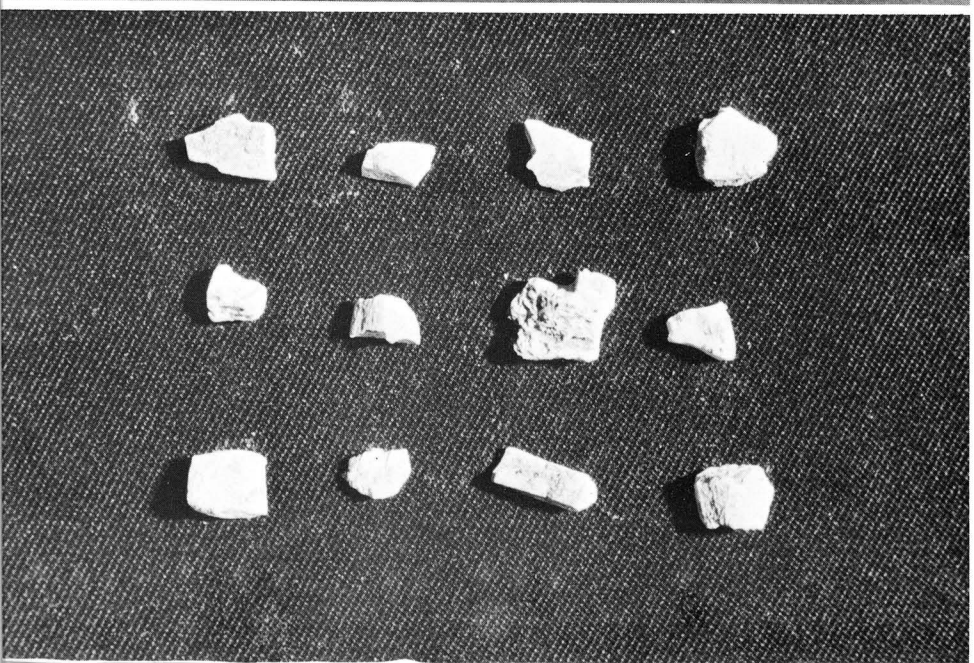
51 須恵器出土状況
15号住居跡床面
の下層より出土



㊷ 第３土壙
出土骨片

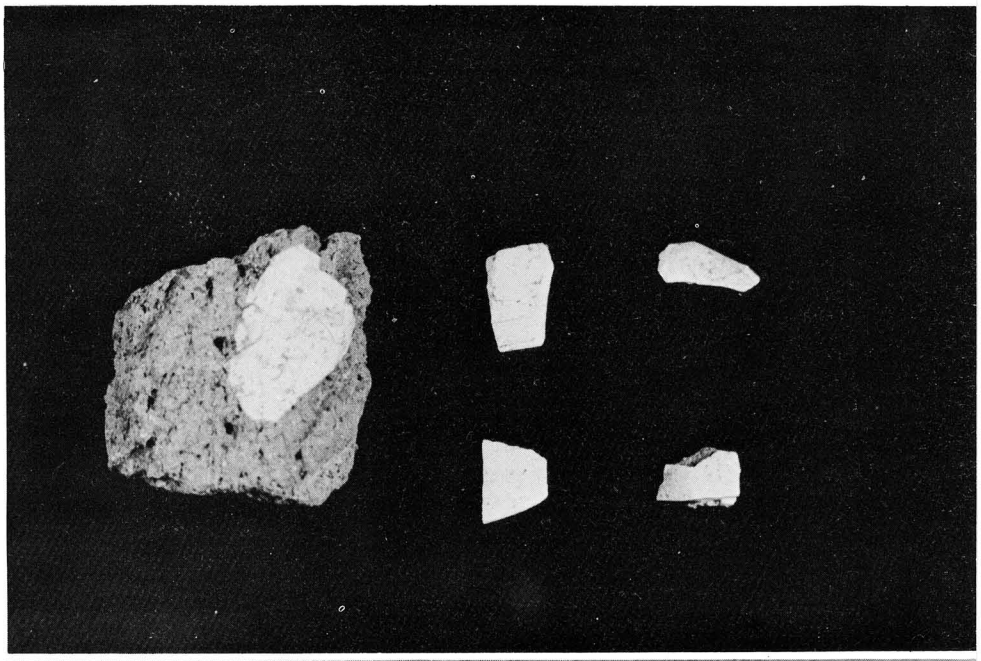


㊸ 第６土壙
出土骨片

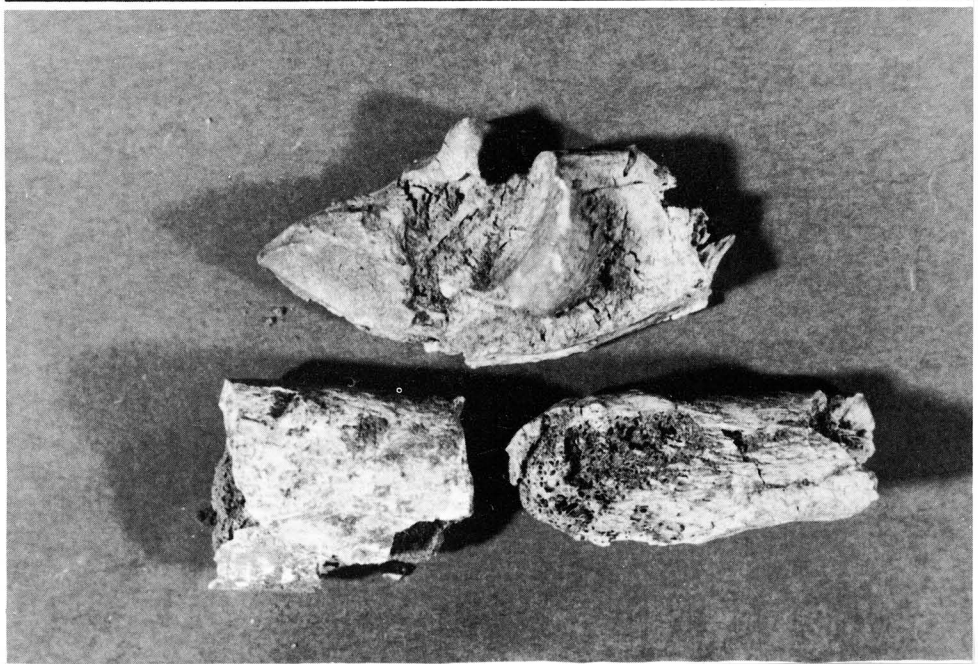


㊹ 第７土壙
出土骨片

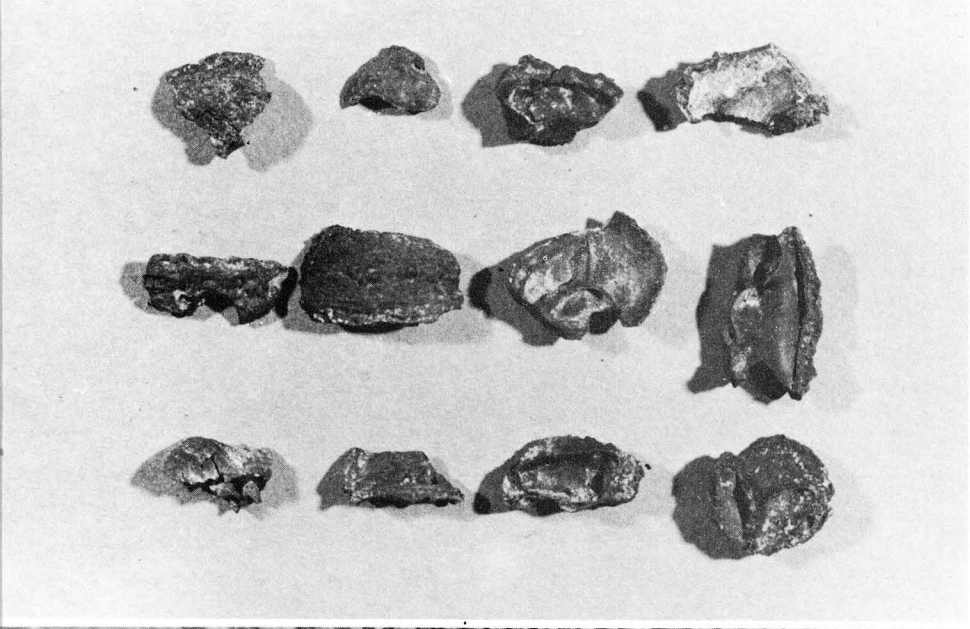
㊺ 第11土壙
出土骨片



㊻ 第12土壙
出土骨片

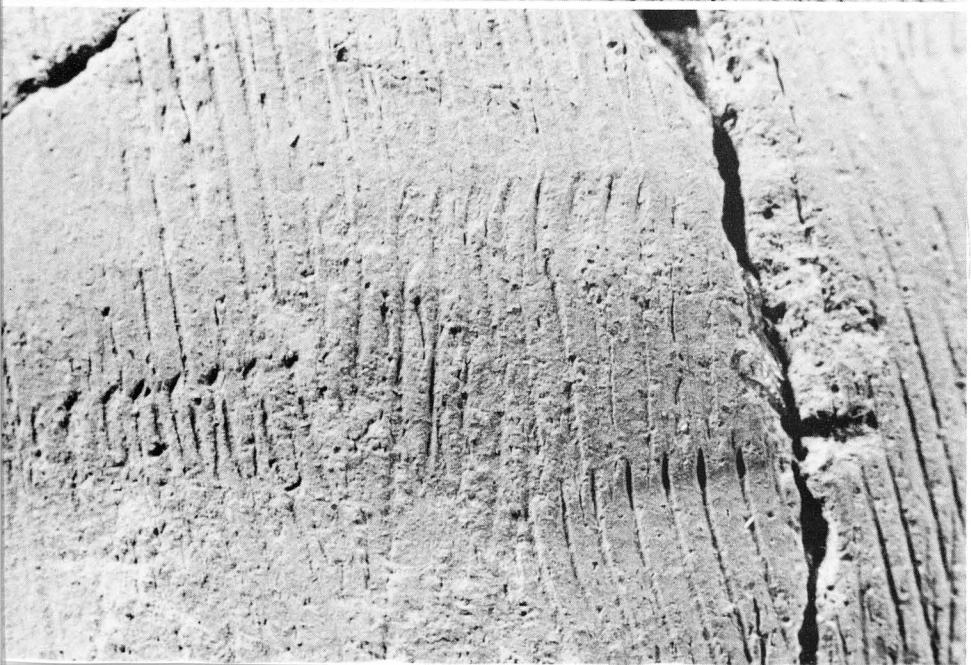


㊼ 18号住居跡
Bプラン方形
ピット出土骨片



㊽ 第４土壙出土
クルミ炭化物

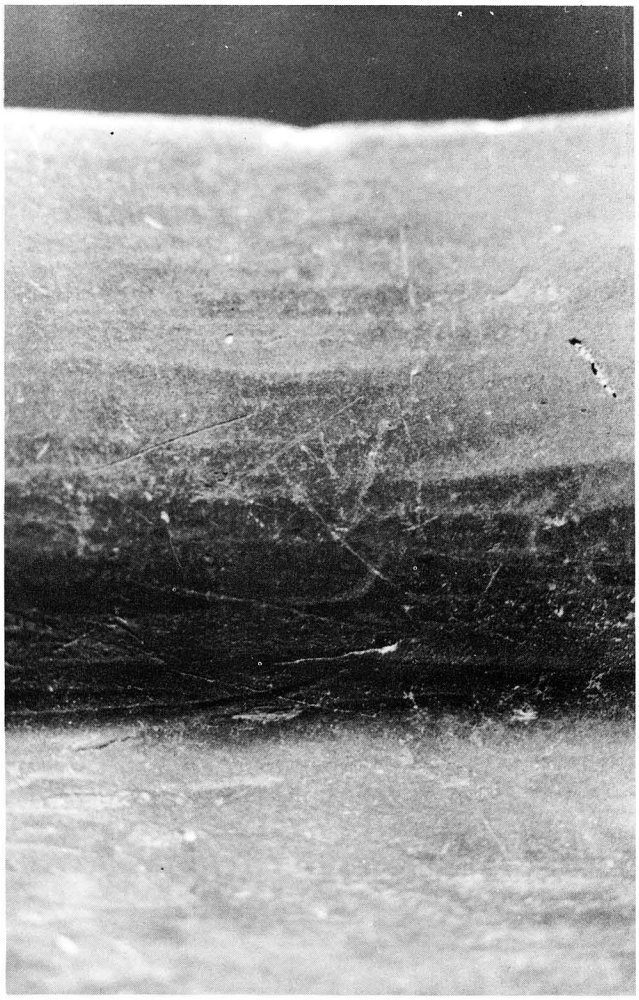
㊾ 出土土師器
ハケメ調整



㊿ 出土土師器
ハケメ調整

⑥1 出土土器
ヘラケズリ調整

⑥2 出土土器
ヘラナデ調整



⑥3 出土土器
ヘラミガキ調整

① No. 1

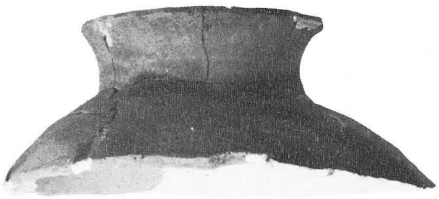
③ No. 3

④ No. 4

② No. 2

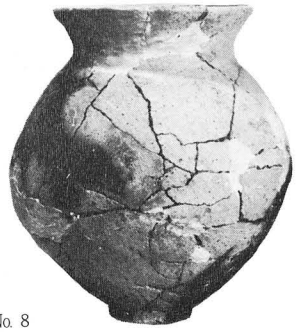
⑤ No. 5

写真図版－22　小形壺

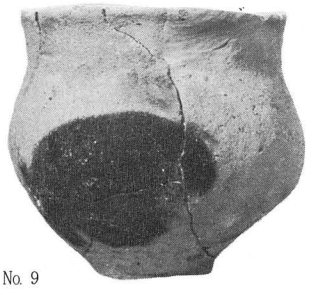


① No. 6

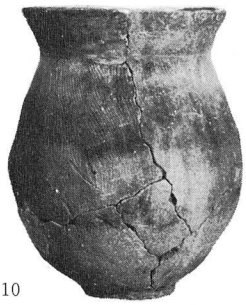
② No. 7



③ No. 8

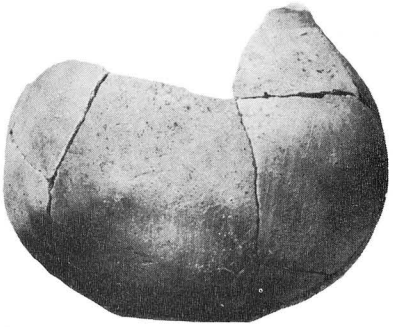


④ No. 9



⑤ No.10

⑥ No.14

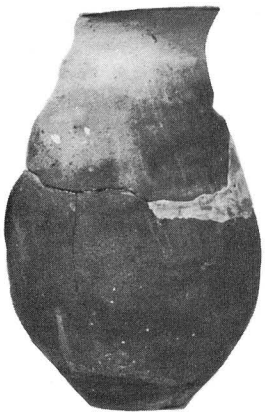


⑦ No.16

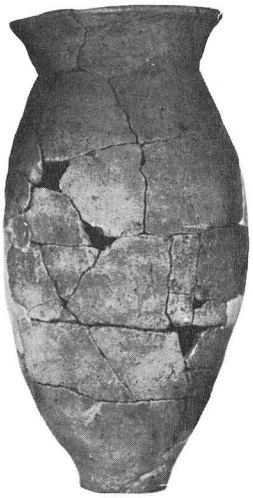
⑧ No.19

⑨ No.20

写真図版－23　甕Ⅰ類

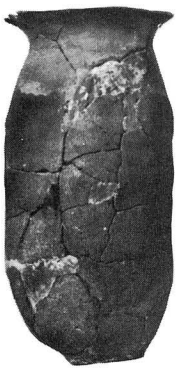


① No.23

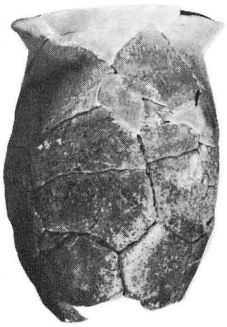


④ No.26

⑦ No.31



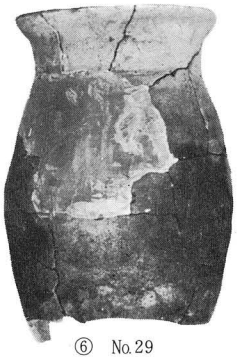
② No.24



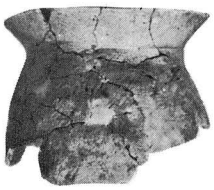
⑤ No.28

⑧ No.34

③ No.25

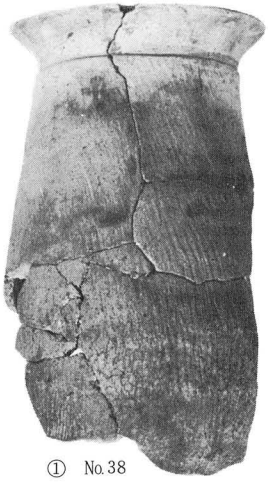


⑥ No.29



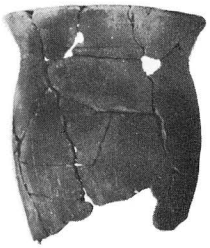
⑨ No.35

写真図版－24　甕Ⅱ類

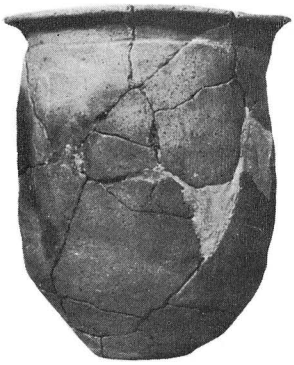


① No.38

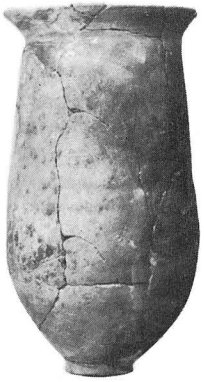
④ No.45



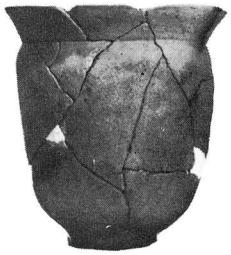
⑦ No.50



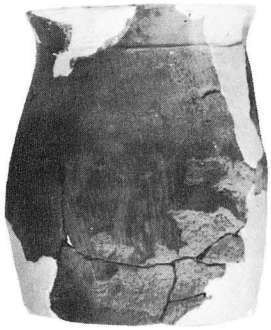
② No.43



⑤ No.46

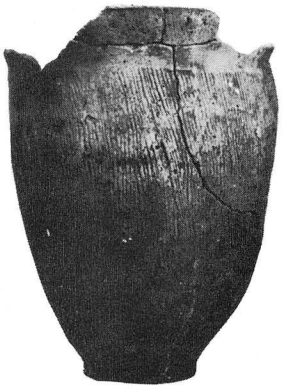


⑧ No.51



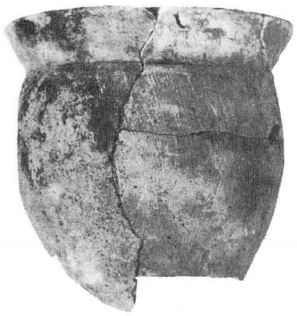
③ No.44

⑥ No.47

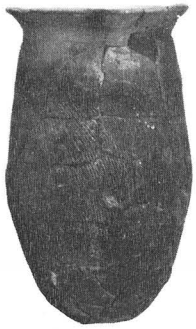


⑨ No.53

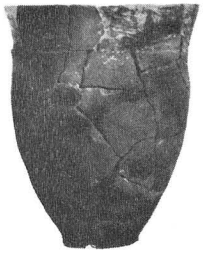
写真図版－25　甕Ⅱ類



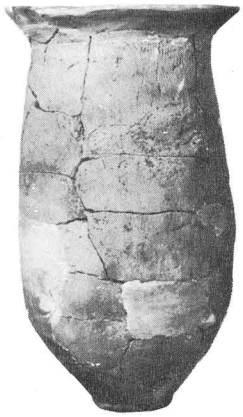
① No. 55



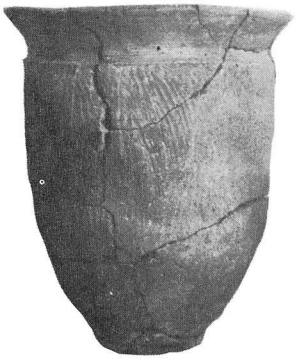
④ No. 60



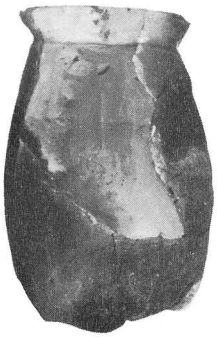
⑦ No. 67



⑧ No. 68

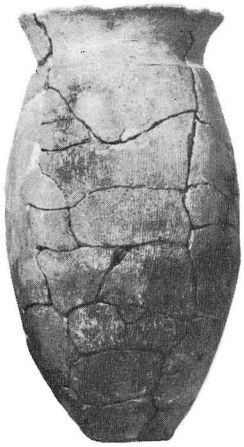


② No. 57

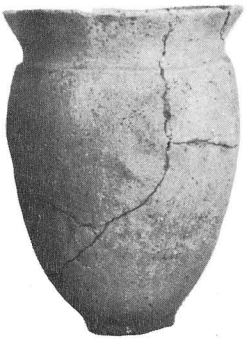


⑤ No. 61

⑨ No. 70



③ No. 59

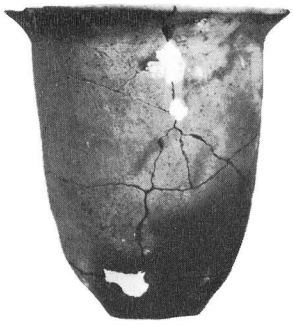


⑥ No. 64

⑩ No. 73

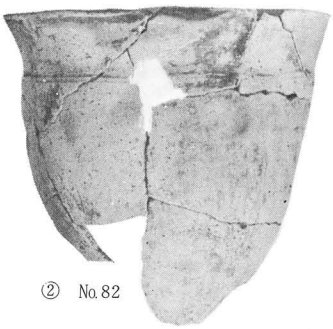
写真図版－26　甕Ⅱ類

① No.81



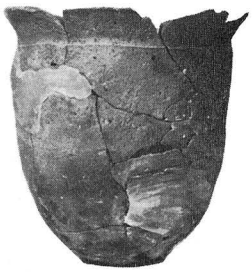
⑤ No.86

⑩ No.98

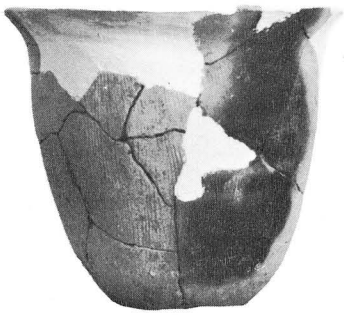


② No.82

⑥ No.89



⑪ No.99

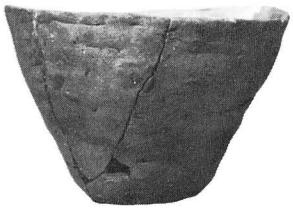


③ No.83

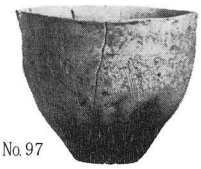
⑦ No.93

⑫ No.101

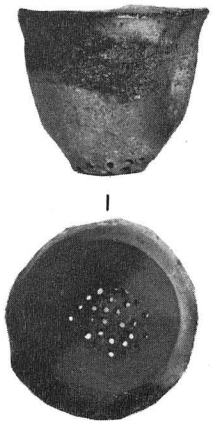
④ No.84



⑧ No.94



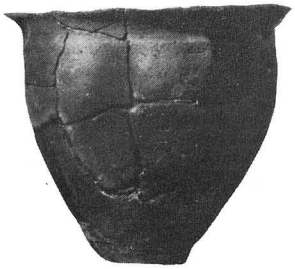
⑨ No.97



⑬ No.102

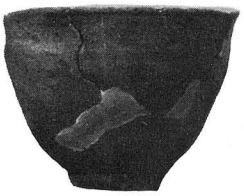
写真図版－27　甑

① No.106



⑤ No.113

⑧ No.120

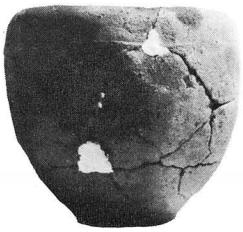


② No.109

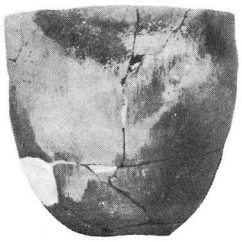
⑨ No.123

⑥ No.117

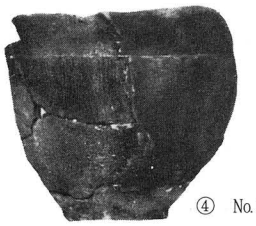
③ No.110



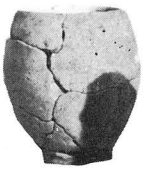
⑩ No.124



⑦ No.118



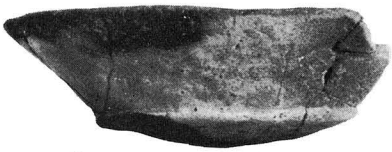
④ No.112



⑪ No.125

写真図版－28　鉢

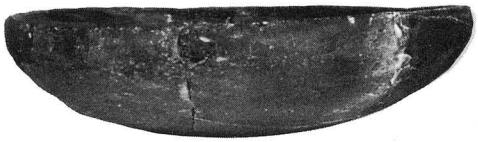
① No.127



⑦ No.148

② No.129

⑧ No.149



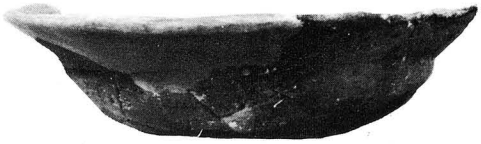
③ No.133

⑨ No.150

④ No.136

⑩ No.153

⑤ No.137

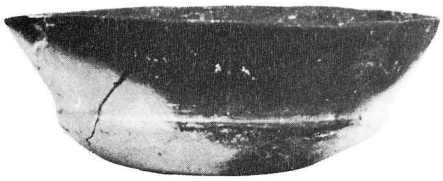


⑪ No.159

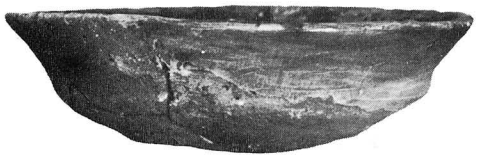
⑥ No.138

⑫ No.161

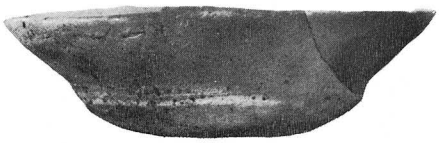
写真図版－29　坏



① No.162

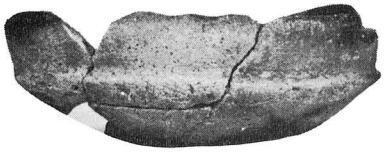


② No.170

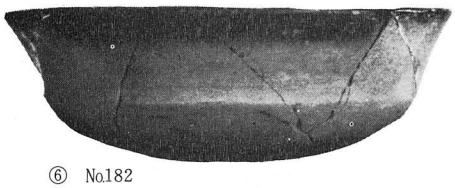


③ No.172

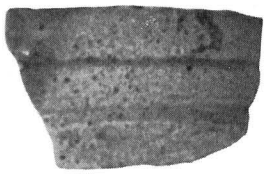
④ No.177



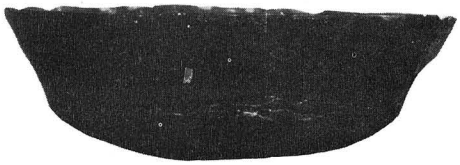
⑤ No.181



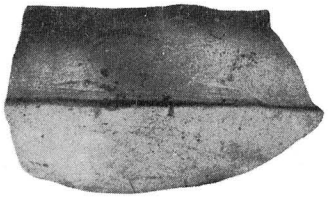
⑥ No.182



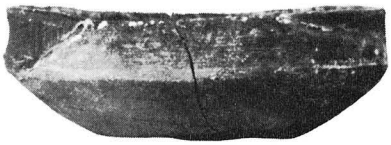
⑦ No.185



⑧ No.189

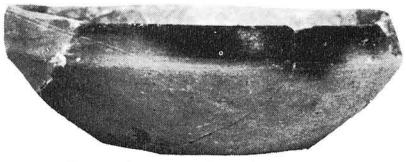


⑨ No.193



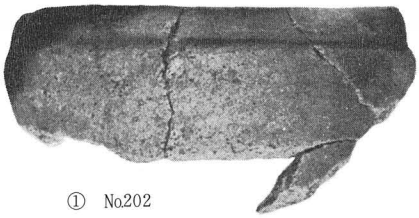
⑩ No.194

⑪ No.197

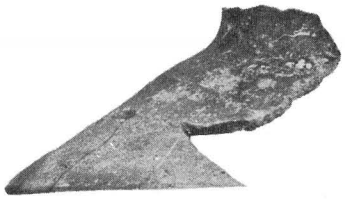


⑫ No.199

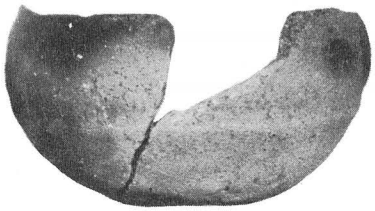
写真図版－30　坏



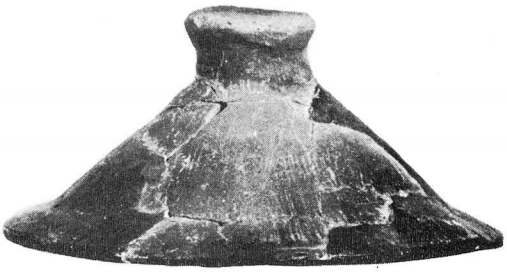
① No.202



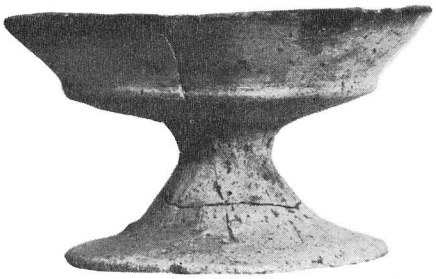
⑦ No.211



② No.203

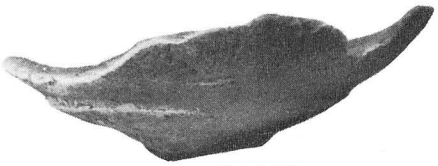


⑧ No.212



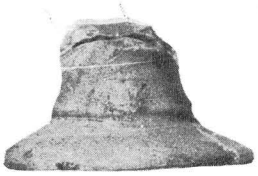
③ No.204

⑨ No.213

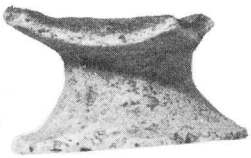


④ No.205

⑩ No.244



⑥ No.208



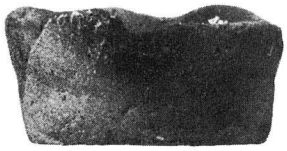
⑤ No.207

⑪ No.245

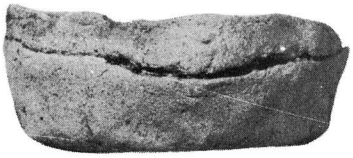
写真図版－31　椀、高坏、蓋、その他の土器

① No.215

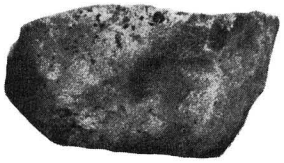
② No.216



③ No.219



④ No.221



⑤ No.222

⑥ No.223

⑦ No.260

⑧ No.261

⑨ No.262

⑪ No.265

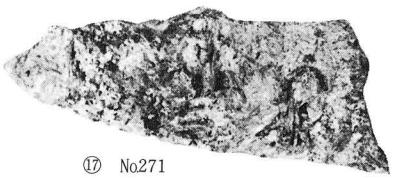
⑫ No.266

⑬ No.267

⑮ No.269

⑭ No.268

⑯ No.270



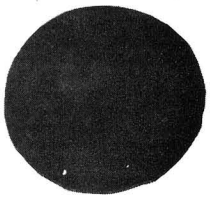
⑰ No.271

写真図版－32　土製品、鉄製品

① No.247

② No.250

⑩ No.254



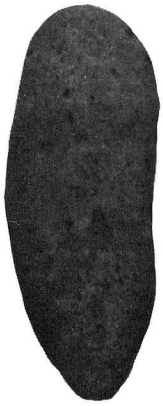
⑪ No.255

③ No.248

④ No.258

⑤ No.259

⑥ No.249



⑬ No.257

⑫ No.256

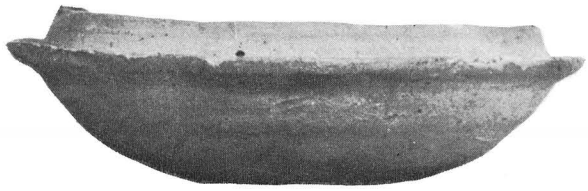
⑦ No.251

⑧ No.252

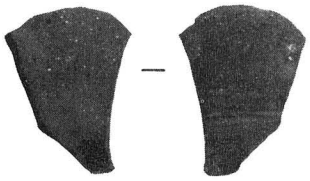
⑨ No.253

⑭ No.237
(炭化米附着)

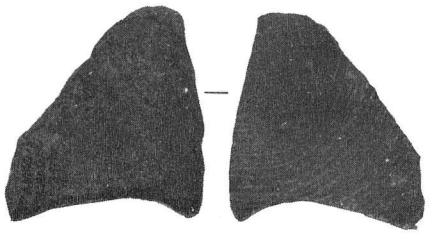
写真図版－33　石製品



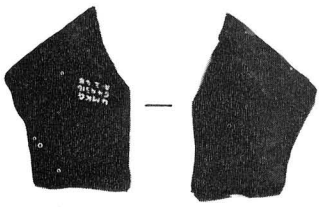
① No.272



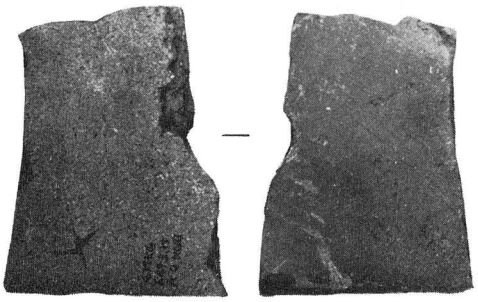
② No.273



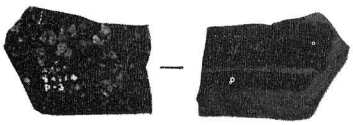
④ No.275



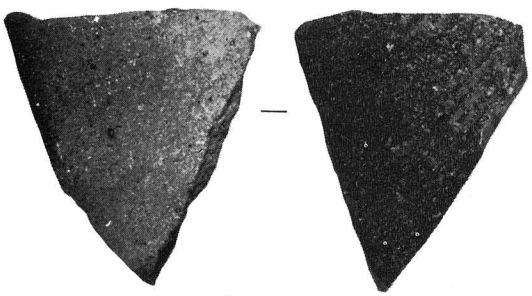
③ No.274



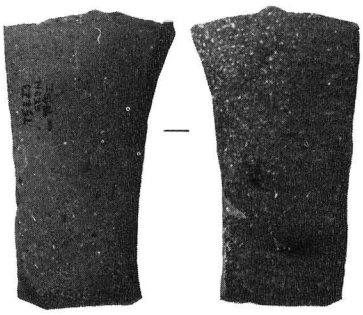
⑥ No.277



⑤ No.276

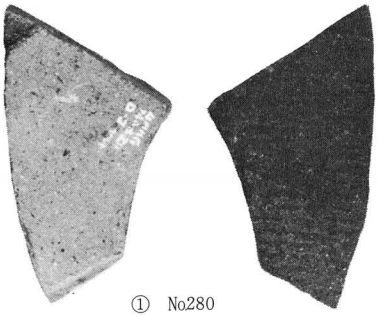


⑦ No.278



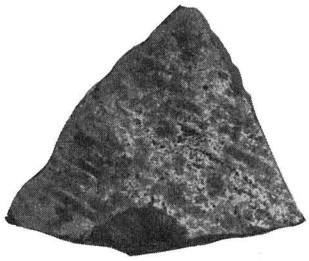
⑧ No.279

写真図版－34　須恵器

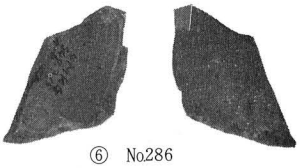


① No.280

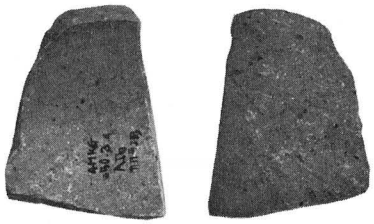
② No.281



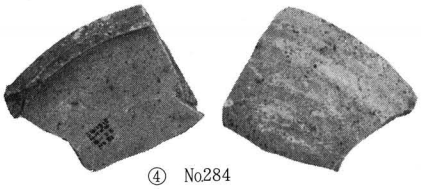
③ No.282



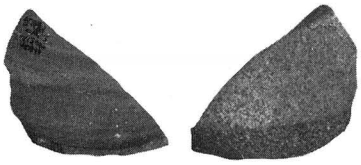
⑥ No.286



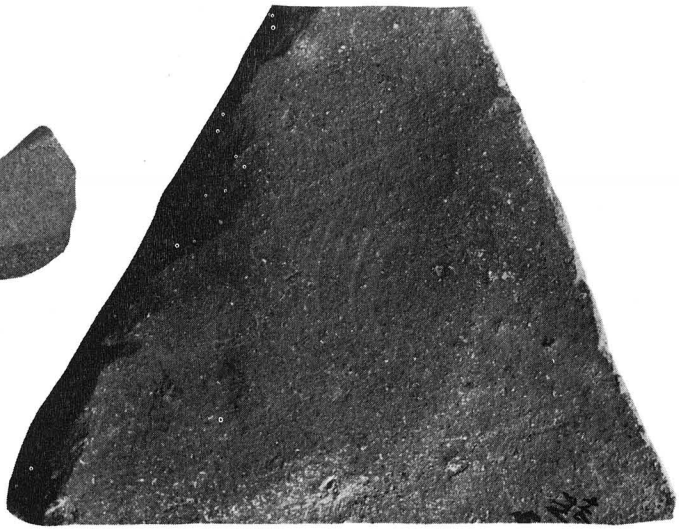
⑦ No.287



④ No.284



⑤ No.285



No. 278（裏面ー青海波文）

写真図版－35　須恵器

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）

第２集　仙台城（昭和42年３月）

第３集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年３月）

第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）

第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）

第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）

第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）

第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）

第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）

第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）

第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）

第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）

第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年３月）

第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）

第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）

第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）

第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）

仙台市文化財調査報告書第14集

仙台市中田町栗遺跡発掘調査報告書

昭和54年３月

発行　東北学院大学考古学研究部
仙台市中田町第一土地区画整理組合
仙台市教育委員会

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　TEL (63)1166

文化財愛護シンボルマーク

仙台市文化財調査報告書第14集

仙台市中田町

栗遺跡発掘調査報告書

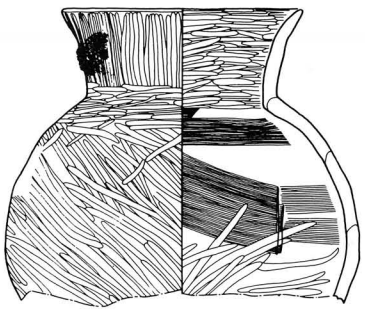
栗遺跡出土遺物集成図版

昭和54年3月

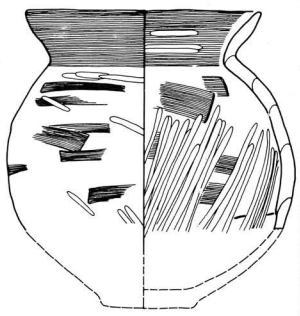
東北学院大学考古学研究部
仙台市中田第一土地区画整理組合
仙台市教育委員会

栗遺跡出土遺物集成図版－1

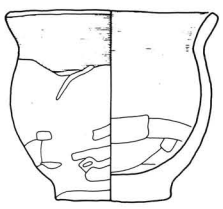
小型壺　　甕 I



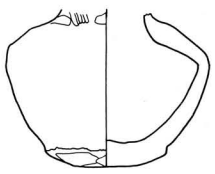
No.1　A1－B1－C1－D1



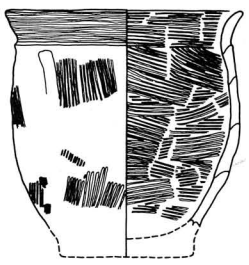
No.2　A1－B1－C2－D1



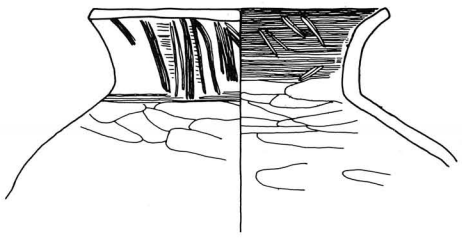
No.3　A1－B2－C2－D2



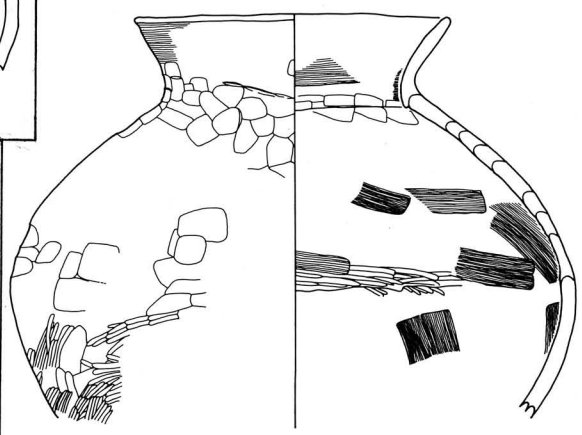
No.4　A1－B3－C(1)－D1



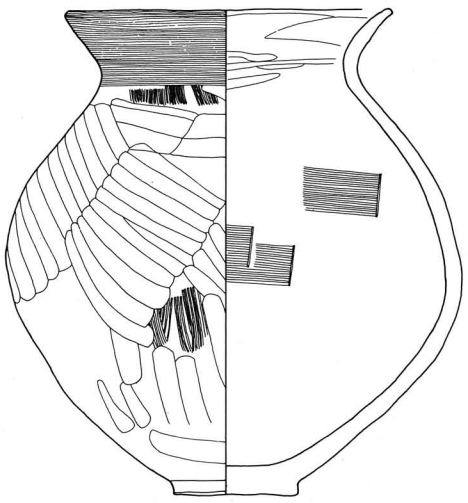
No.5　A2－B2－C2－D3



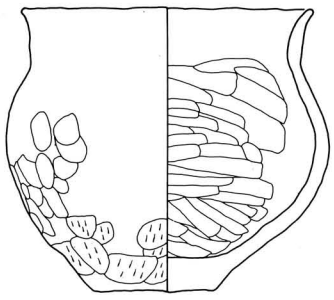
No.6　A1－B1－C1



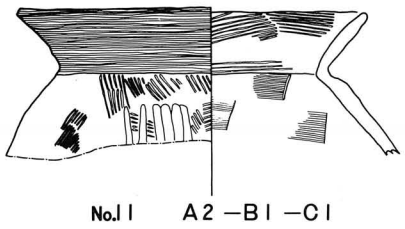
No.7　A1－B1－C1



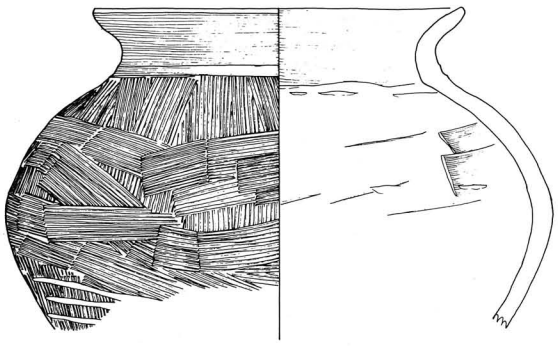
No.8　A1－B1－C1



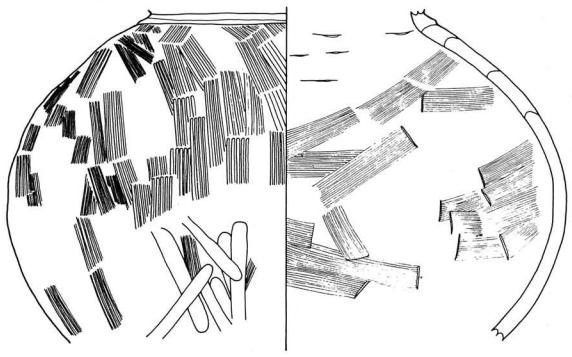
No.9　A1－B1－C2



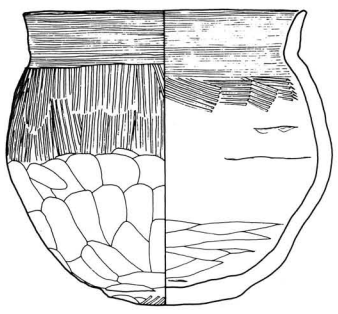
No.11　A2－B1－C1



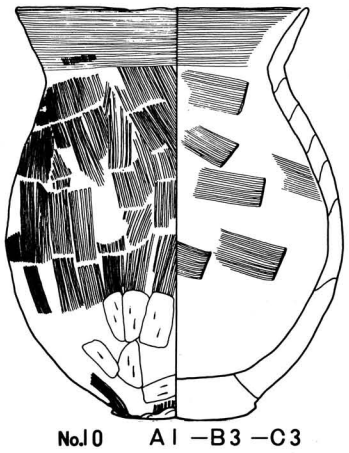
No.12　A2－B1－C1



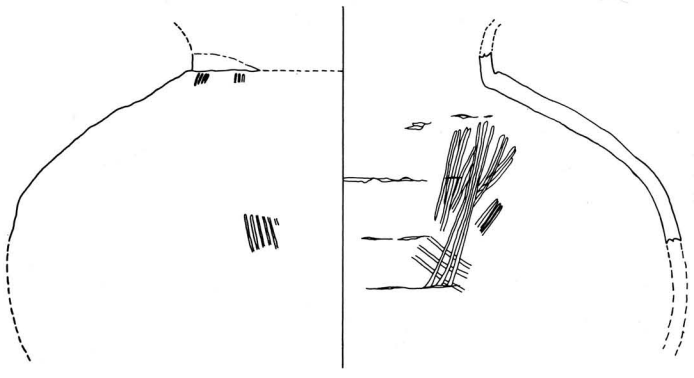
No.13　A2－B1－C1



No.14　A2－B1－C3



No.10　A1－B3－C3

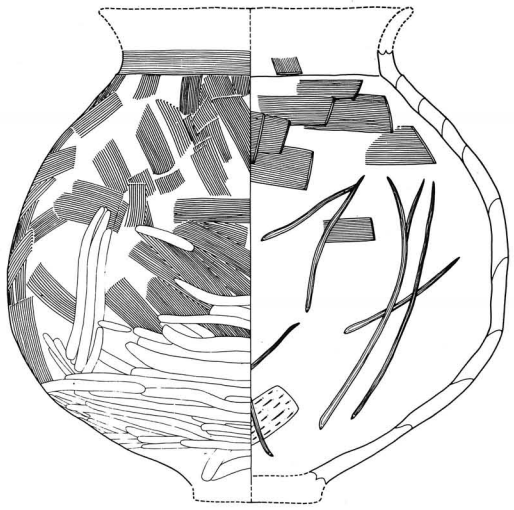


No.15　A2－B1－C3

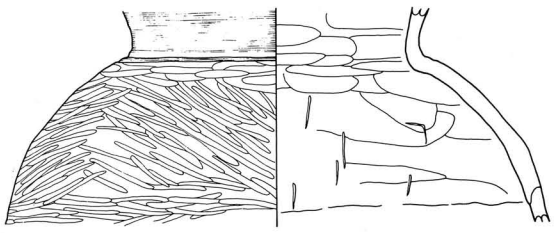
0　10　20cm

栗遺跡出土遺物集成図版－2

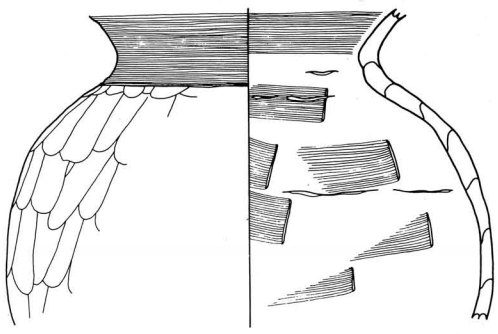
甕 I



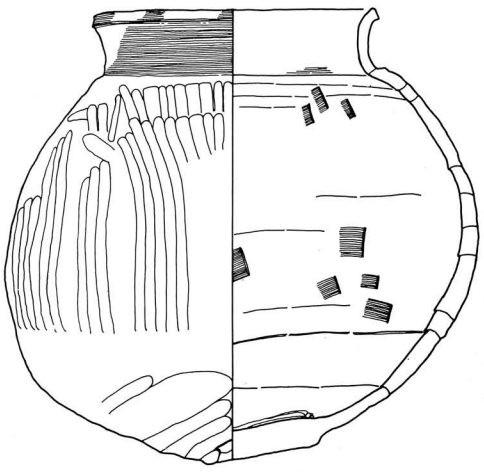
No.16　A2－B2－C1



No.17　A2－B2－C1

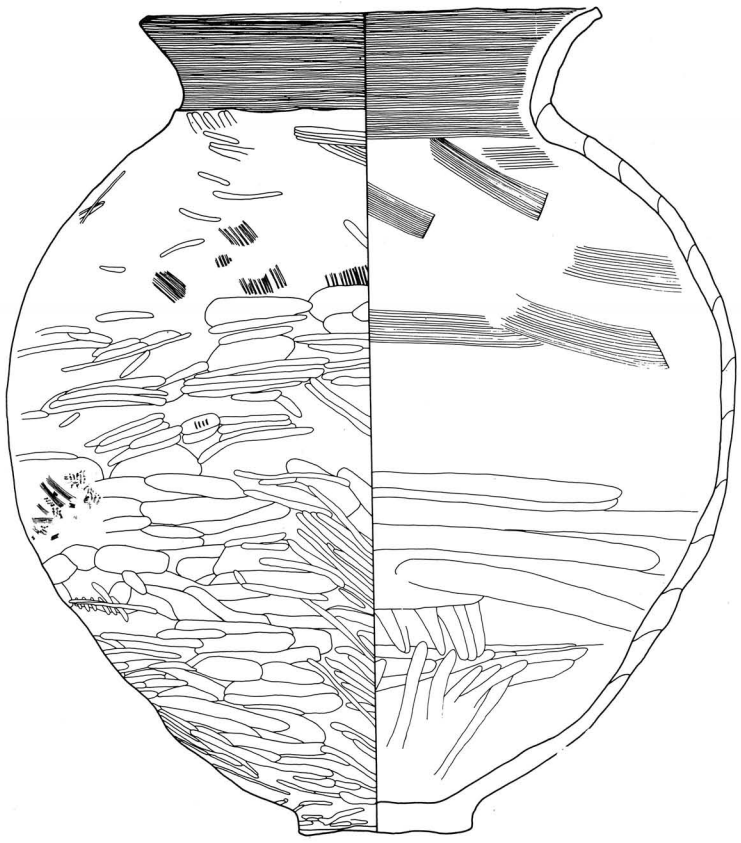


No.18　A2－B2－C2

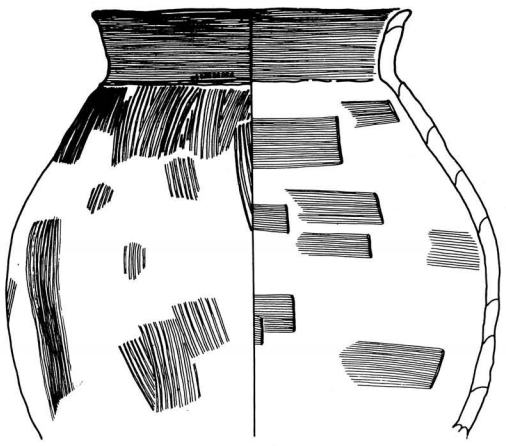


No.19　A2－B2－C4

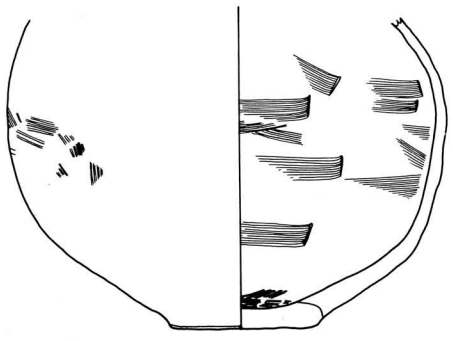
甕 II



No.20　A2－B3－C1

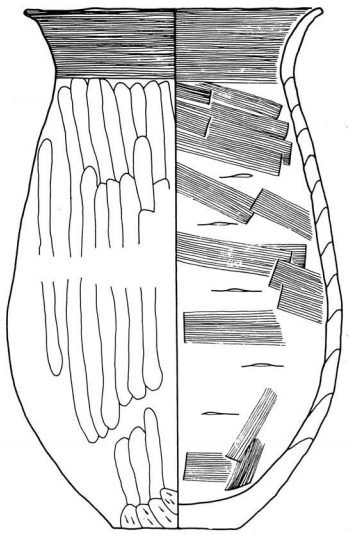


No.21　A2－B3－C3

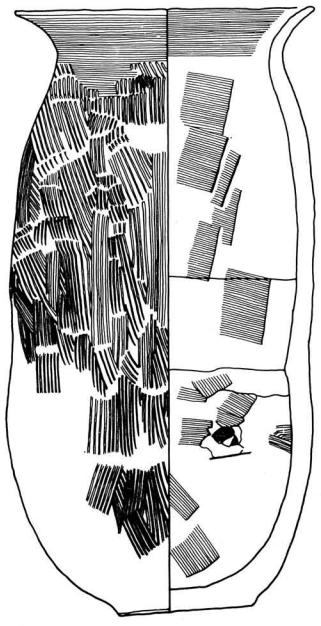


No.22　A2－B3－C3

甕 II



No.23　A1－B1－C1－D7

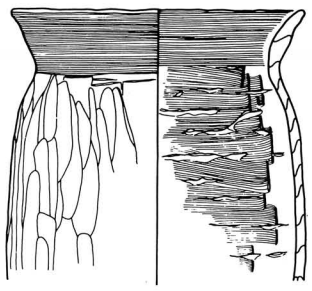


No.24　A1－B1－C1－D8

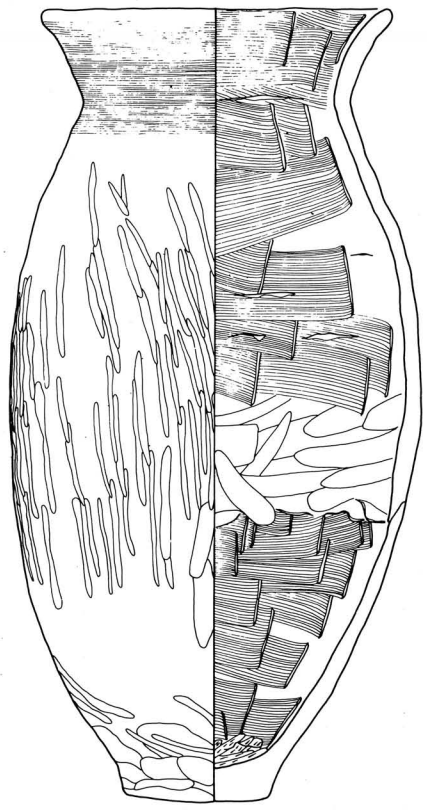
0　10　20cm

栗遺跡出土遺物集成図版－3

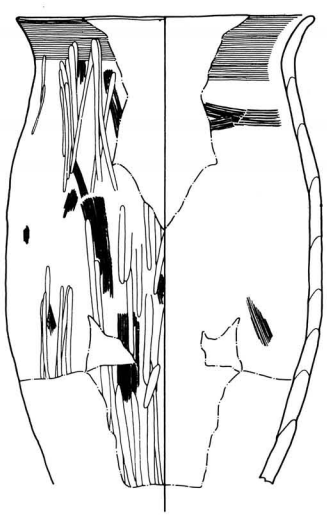
甕　II



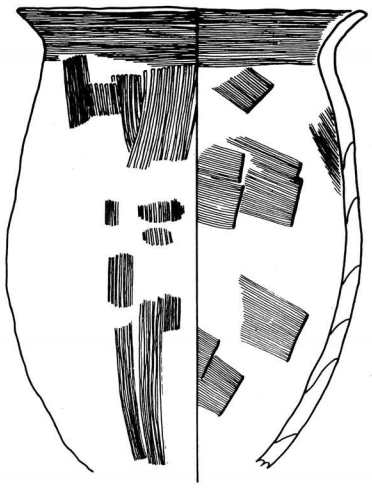
No.25　A I －B I －C 2 －D 7



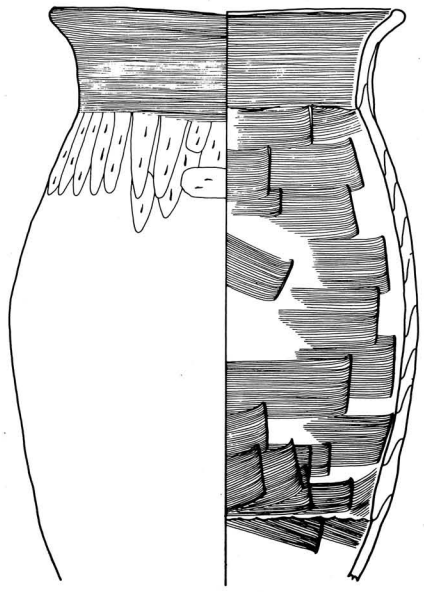
No.26　A I －B I －C 2 －D 3



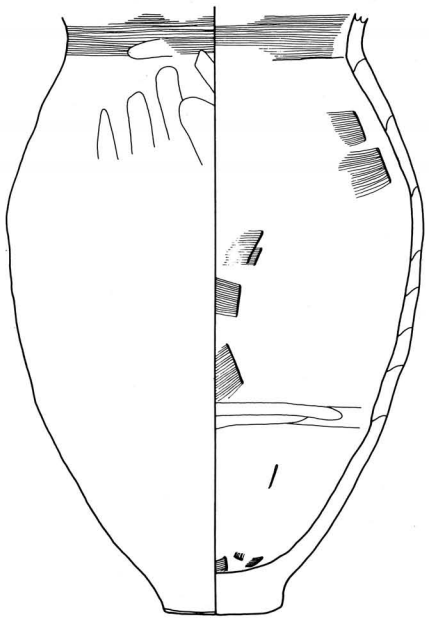
No.27　A I －B I －C 2 －D 5



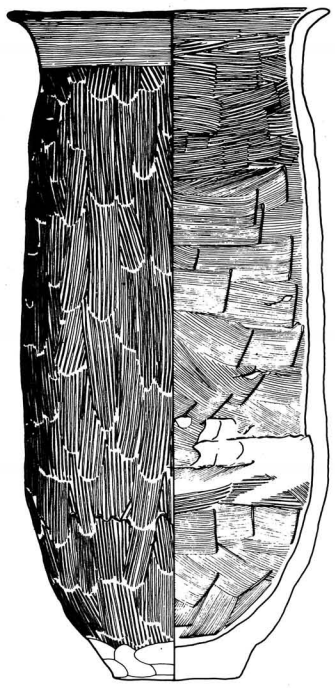
No.28　A I －B I －C 2 －D 8



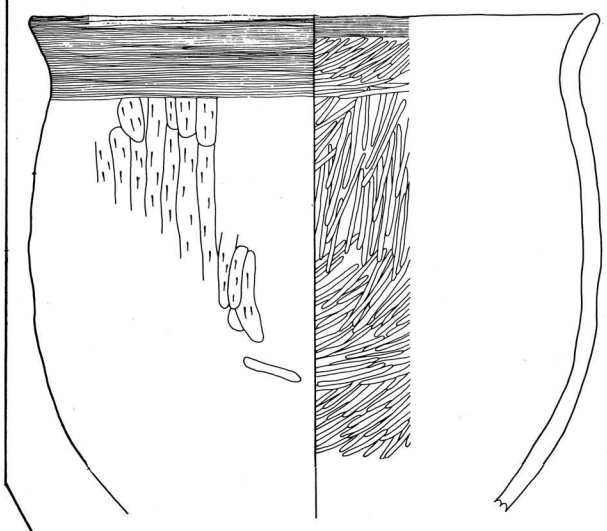
No.29　A I －B I －C 3 －D 7



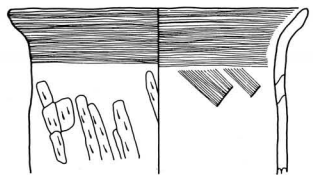
No.30　A I －B I －C 3 －D 7



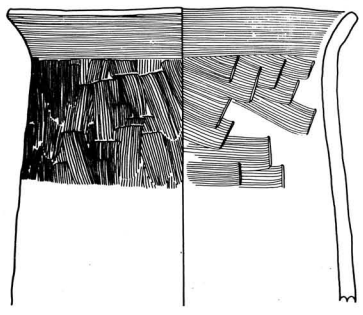
No.31　A I －B 2 －C I －D 9



No.32　A I －B(3)－C(2)－D I



No.33　A I －B( )－C( )－D 2

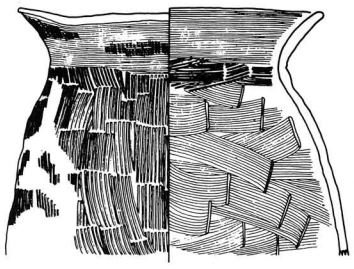


No.34　A I －B( )－C( )－D 8

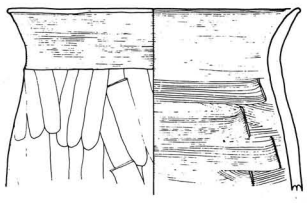
0　10　20cm

栗遺跡出土遺物集成図版－4

甕 II

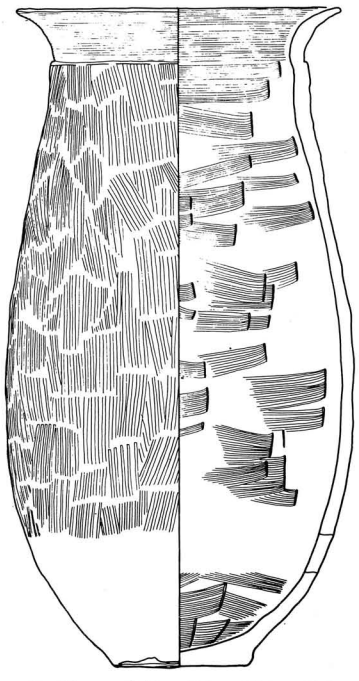


No.35 A1 －B( )－C( )－D8

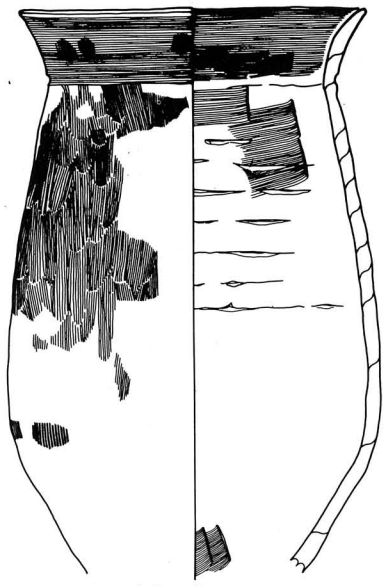


No.36 A1 －B( )－C( )－D14

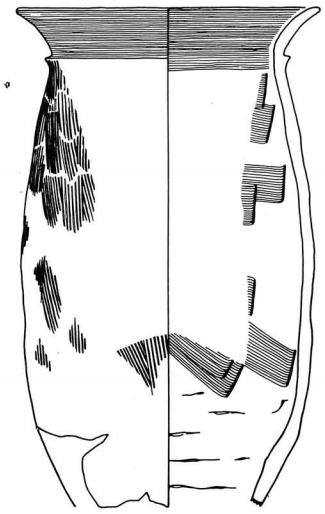
No.37 A2 －B1 －C1 －D8



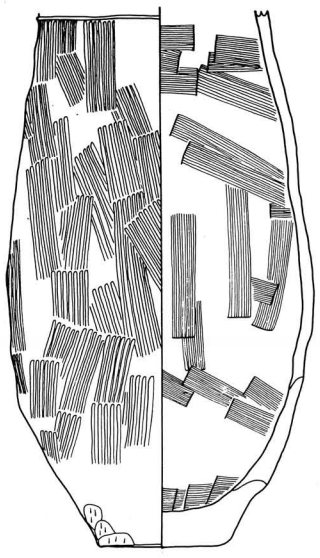
No.38 A2 －B1 －C1 －D8



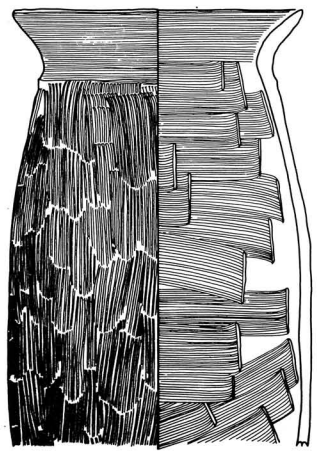
No.39 A2 －B1 －C1 －D8



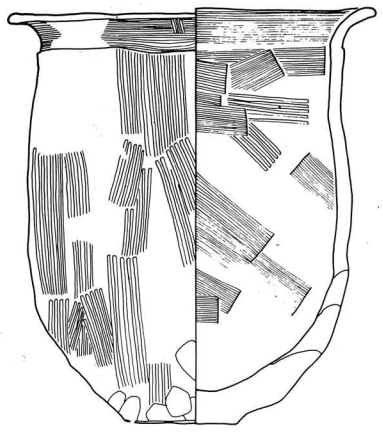
No.40 A2 －B1 －C1 －D8



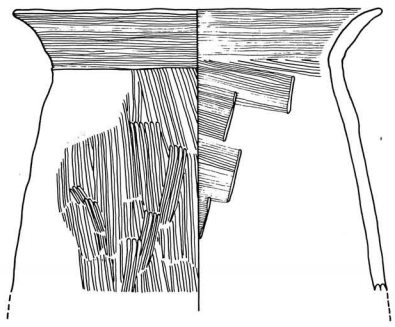
No.41 A2 －B1 －C1 －D8



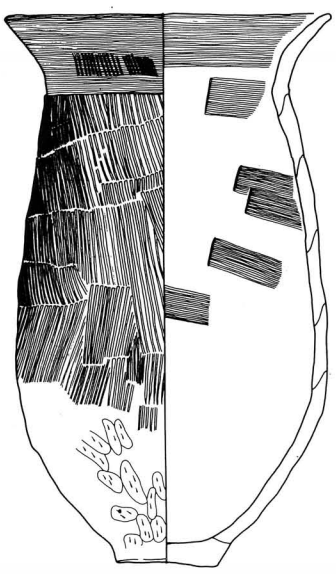
No.42 A2 －B1 －C1 －D8



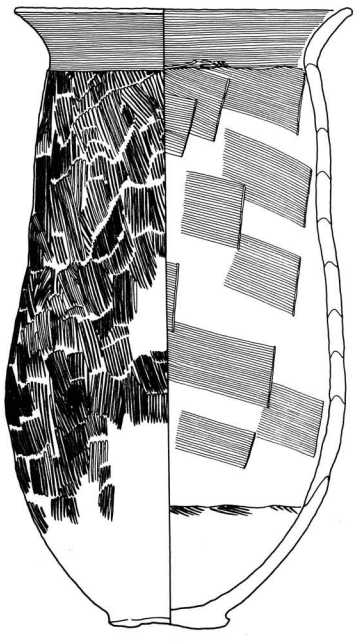
No.43 A2 －B1 －C1 －D8



No.44 A2 －B1 －C1 －D8



No.45 A2 －B1 －C1 －D8

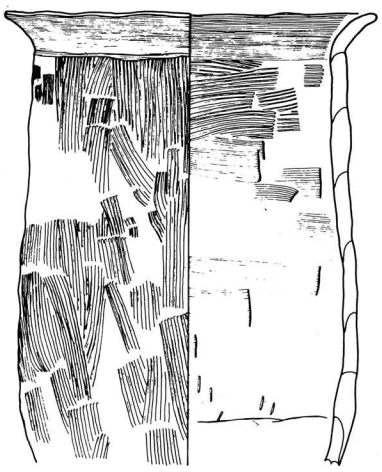


No.46 A2 －B1 －C1 －D8

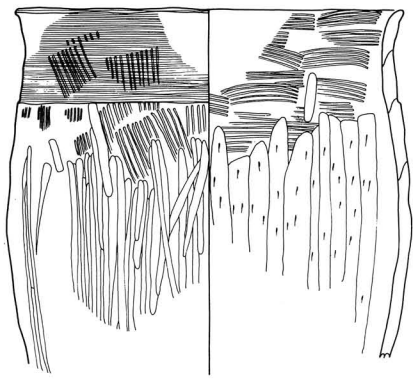
0 5 10 15cm

栗遺跡出土遺物集成図版－5

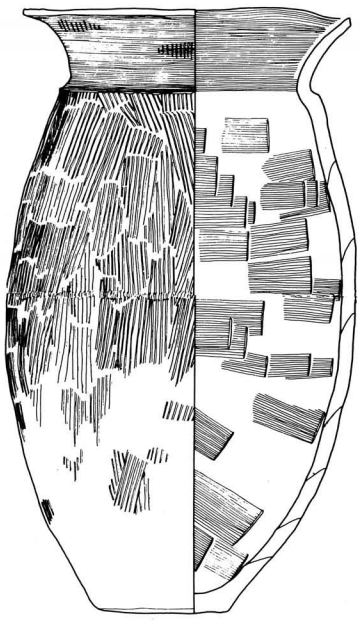
甕　II



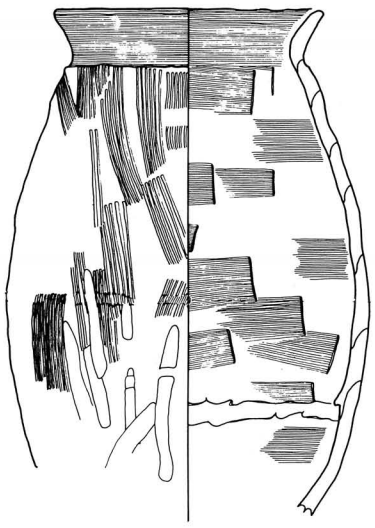
No.47　A2－B1－C1－D11



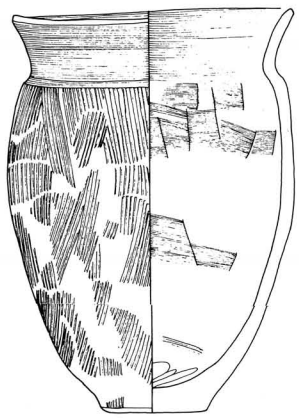
No.52　A2－B1－C3－D6



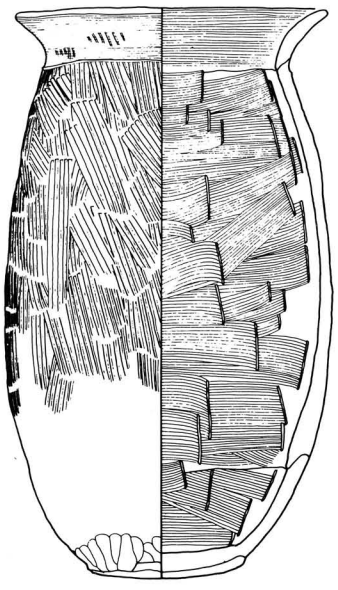
No.48　A2－B1－C2－D8



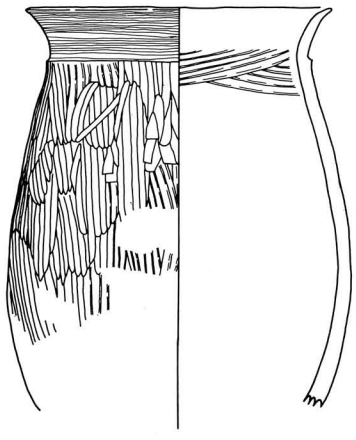
No.50　A2－B1－C2－D8



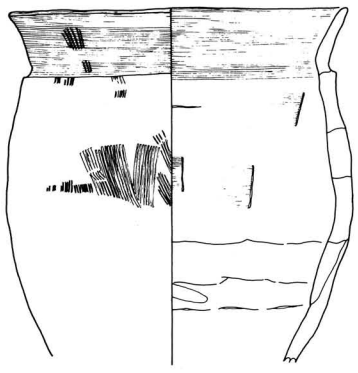
No.53　A2－B1－C3－D8



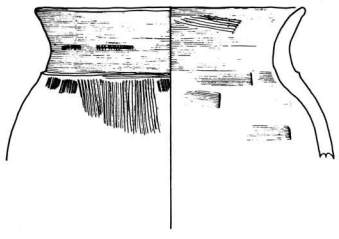
No.49　A2－B1－C2－D8



No.51　A2－B1－C2－D8



No.54　A2－B1－C3－D8

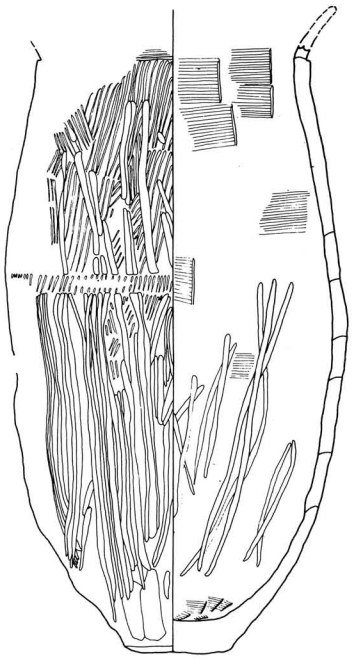


No.55　A2－B1－C3－D8

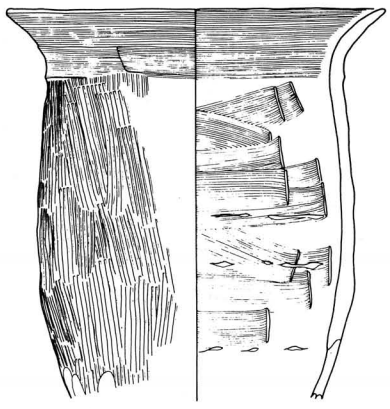
0　10　20cm

栗遺跡出土遺物集成図版－6

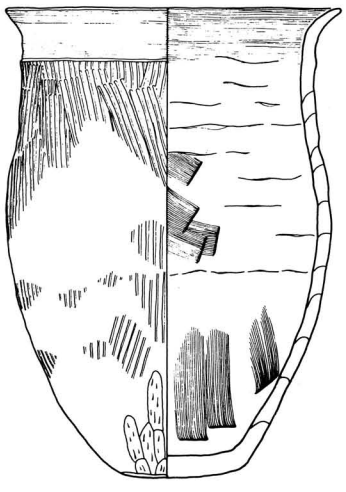
甕 II



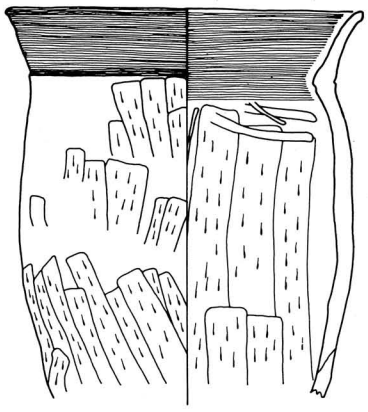
No.56　A2－B2－C2－D4



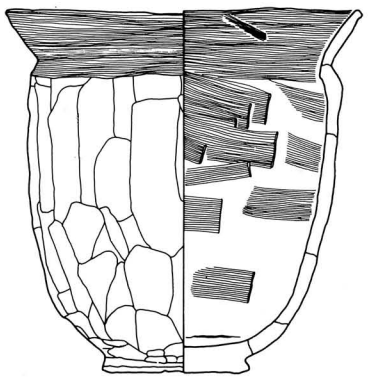
No.57　A2－B2－C2－D8



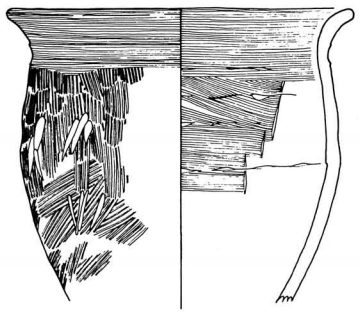
No.58　A2－B2－C2－D8



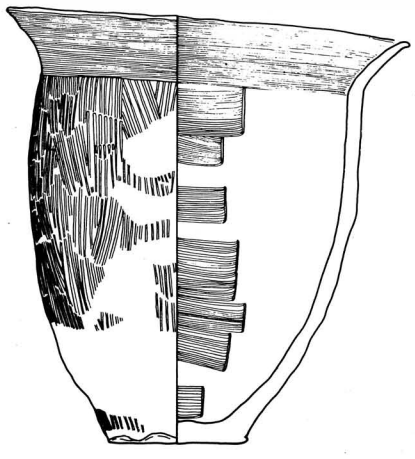
No.59　A2－B2－C2－DI5



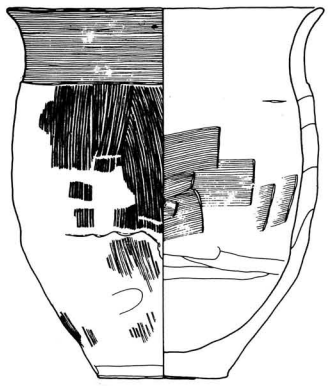
No.60　A2－B2－C3－D7



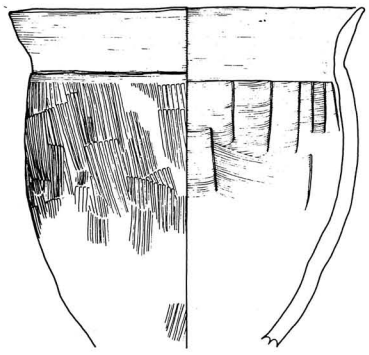
No.61　A2－B2－C3－D8



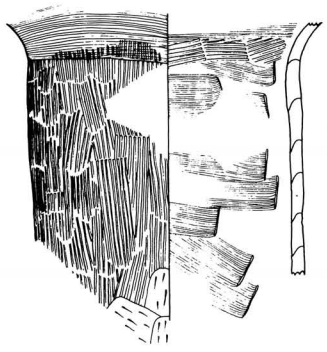
No.62　A2－B2－C3－D8



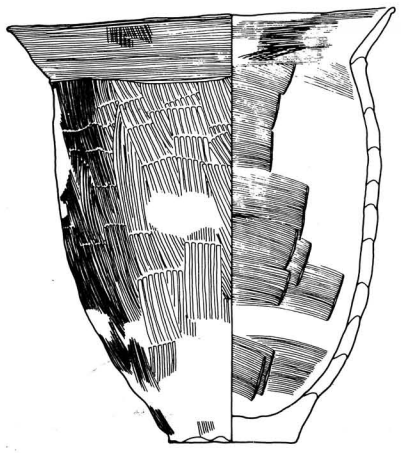
No.63　A2－B2－C3－D8



No.64　A2－B2－C3－D8



No.65　A2－B2－C3－D8

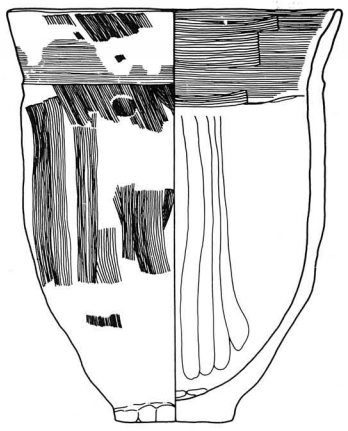


No.66　A2－B2－C3－D8

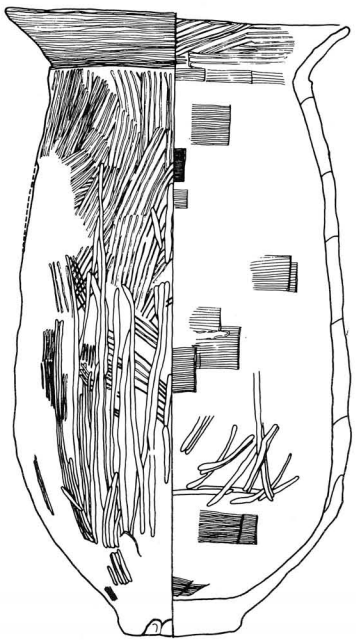
0　10　20cm

栗遺跡出土遺物集成図版－7

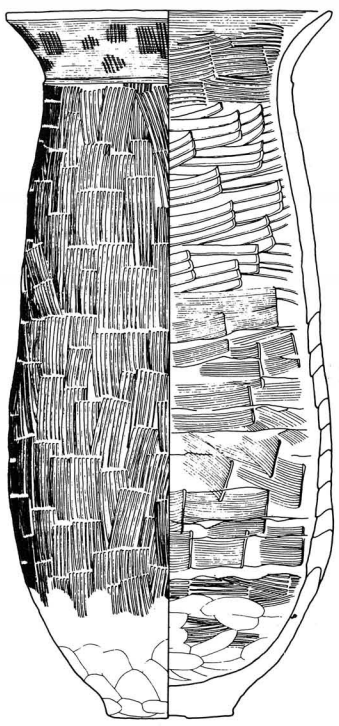
甕 II



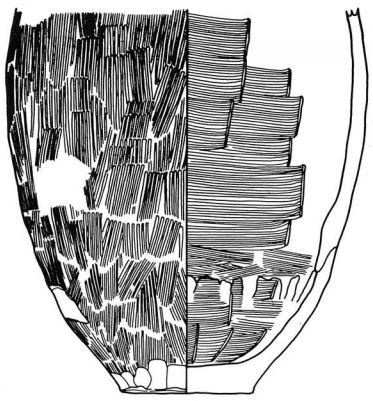
No.67　A2 －B2 －C3 －DI2



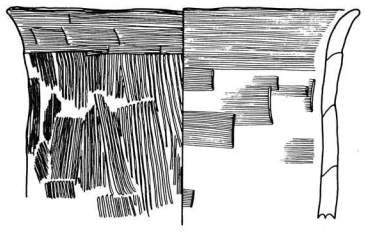
No.68　A2 －B3 －C1 －D4



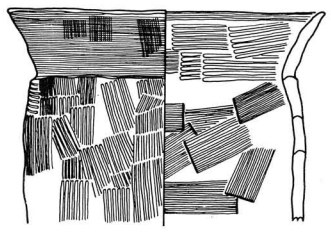
No.69　A2 －B3 －C1 －D9



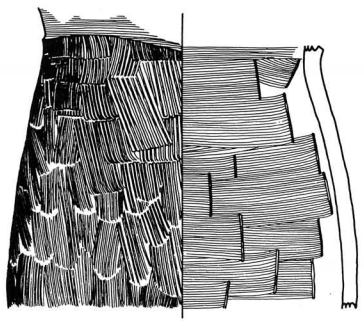
No.70　A2 －B( )－C( )－D8



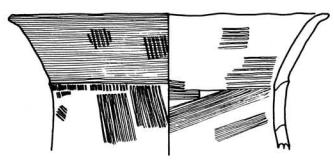
No.71　A2 －B( )－C( )－D8



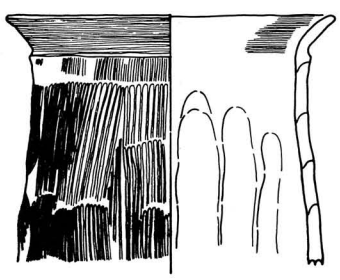
No.72　A2 －B( )－C( )－D8



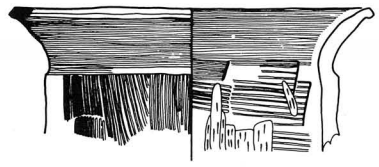
No.73　A2 －B( )－C( )－D8



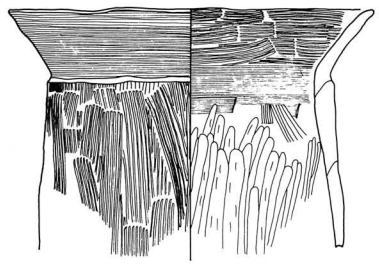
No.74　A2 －B( )－C( )－D9



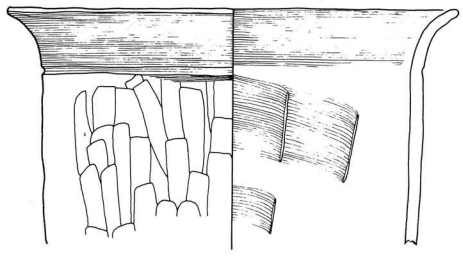
No.75　A2 －B( )－C( )－DI0



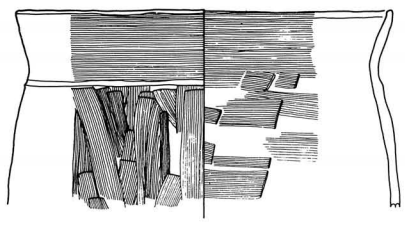
No.76　A2 －B( )－C( )－DI1



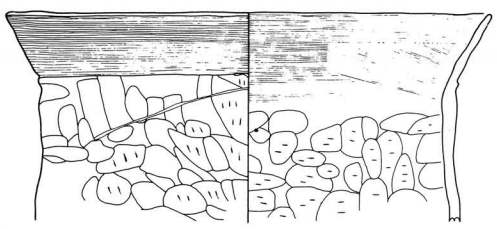
No.77　A2 －B( )－C( )－DI3



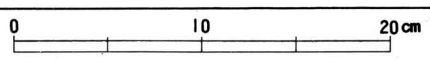
No.78　A2 －B( )－C( )－DI4



No.79　A2 －B( )－C( )－DI4

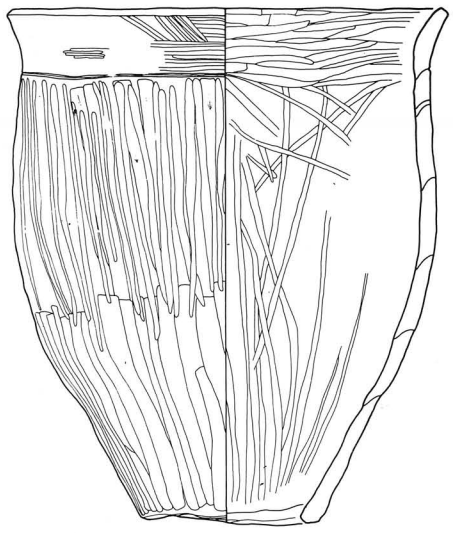


No.80　A2 －B( )－C( )－DI5

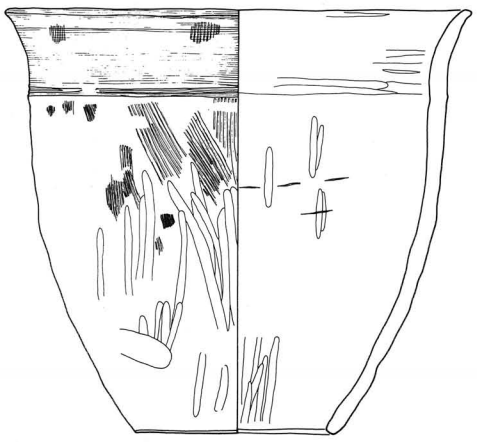


栗遺跡出土遺物集成図版－8

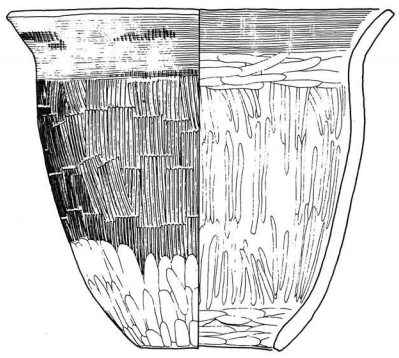
甑



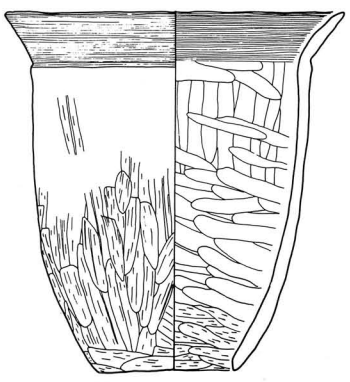
No.81　A1－B1－C1－D1－E1



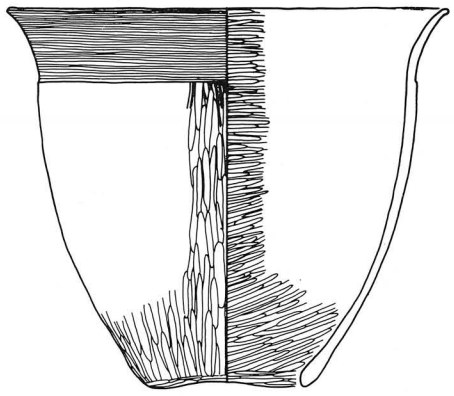
No.82　A1－B1－C1－D1－E2



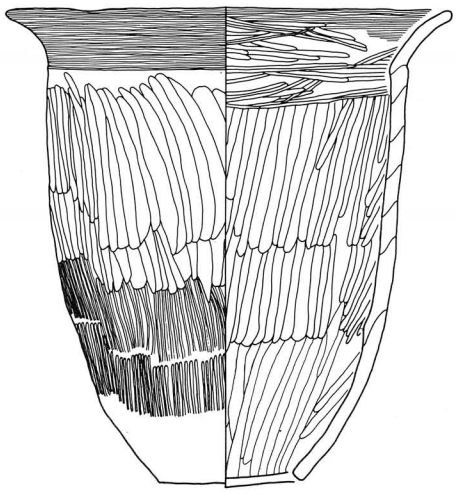
No.83　A1－B2－C1－D1－E5



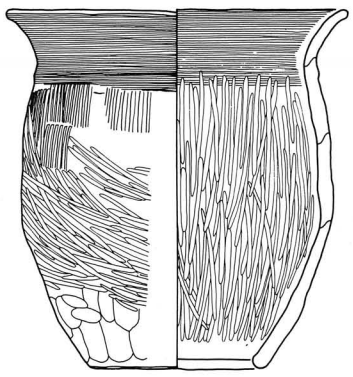
No.84　A1－B2－C1－D1－E1



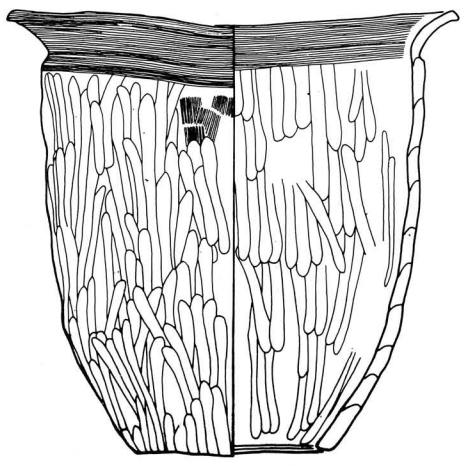
No.85　A1－B3－C1－D1－E2



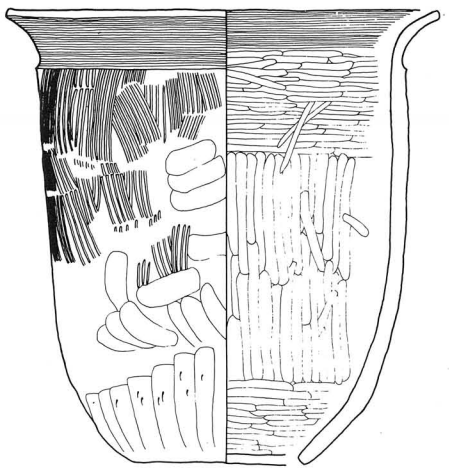
No.86　A1－B3－C1－D1－E2



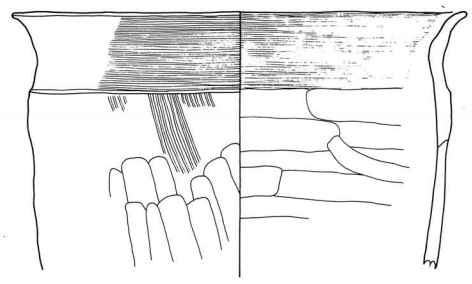
No.87　A1－B3－C1－D1－E3



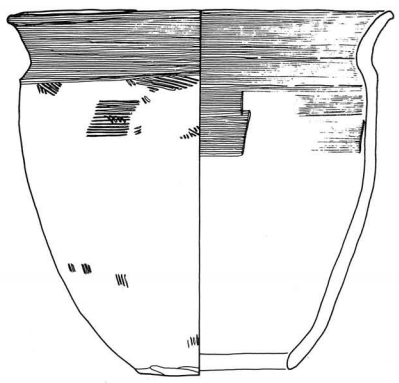
No.88　A1－B3－C1－D1－E3



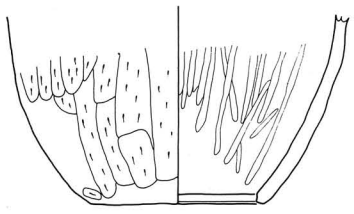
No.89　A1－B3－C1－D1－E4



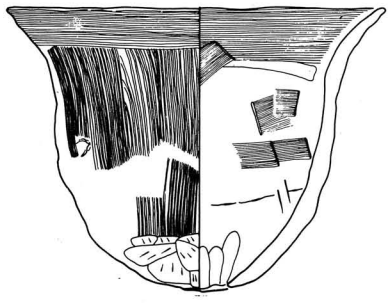
No.90　A1－B3－C1－D1－E6



No.91　A1－B3－C1－D1－E6



No.92　A1－B( )－C1－D1－E( )

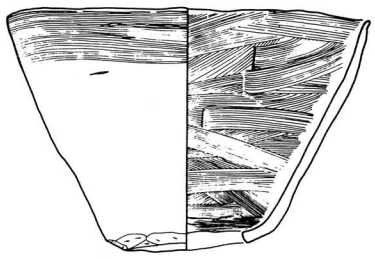


No.93　A2－B2－C1－D1－E7

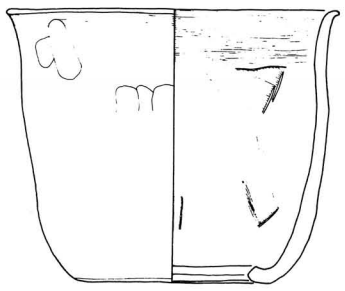
0　10　20cm

栗遺跡出土遺物集成図版－9

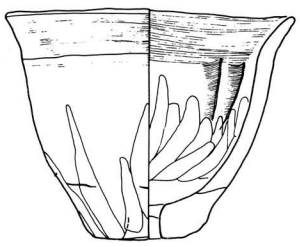
甑



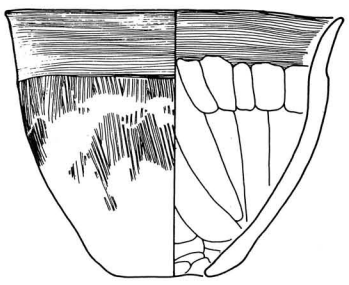
No.94　A2－B2－C1－D1－E8



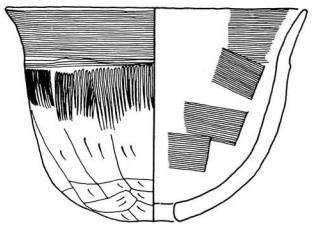
No.95　A2－B2－C1－D1－E8



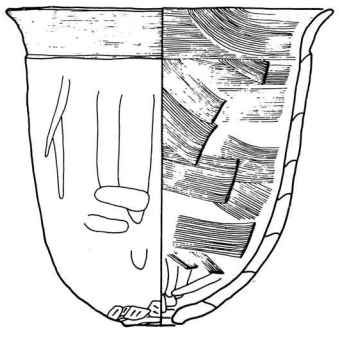
No.96　A2－B2－C2－D2－E10



No.97　A2－B3－C1－D1－E6

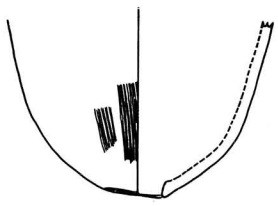


No.98　A2－B3－C1－D1－E7

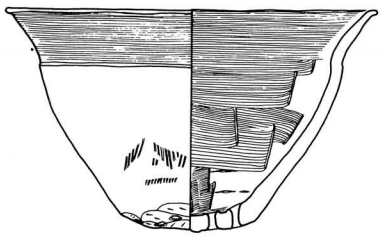


No.99　A2－B3－C1－D1－E8

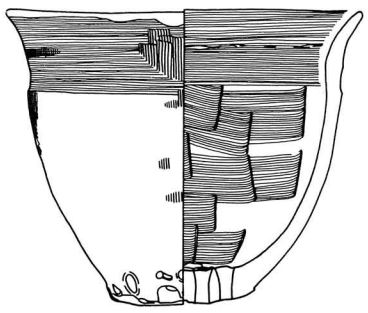
鉢



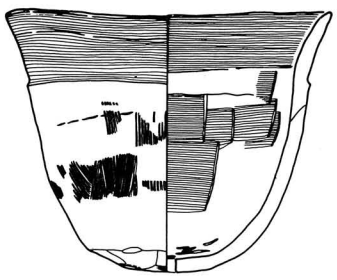
No.100　A2－B(3)－C1－D1－E( )



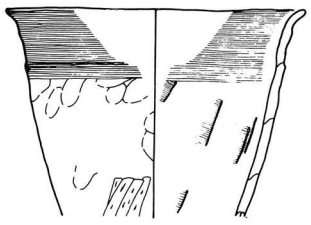
No.101　A2－B3－C2－D2－E9



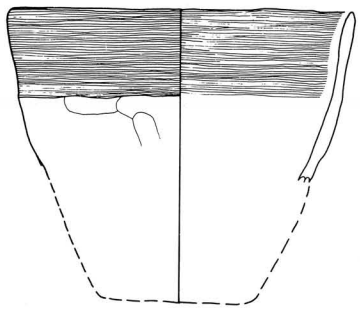
No.102　A2－B3－C2－D2－E9



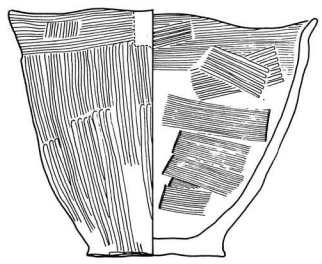
No.103　A2－B3－C2－D2－E9



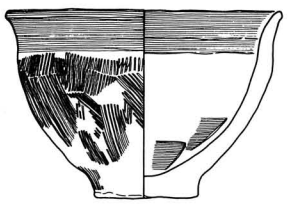
No.104　A1－B1－C1



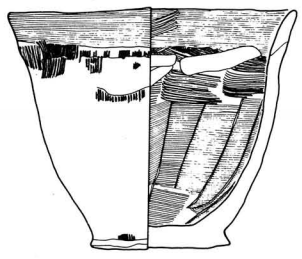
No.105　A1－B1－C3



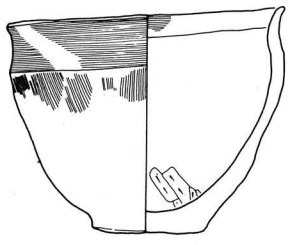
No.106　A1－B1－C4



No.107　A1－B1－C4



No.108　A1－B1－C5

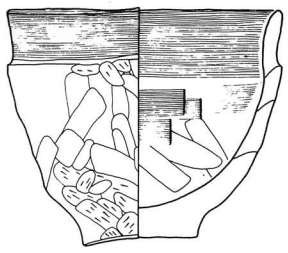


No.109　A1－B1－C( )

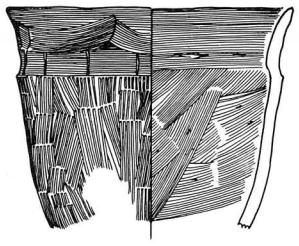
0　10　20cm

栗遺跡出土遺物集成図版－10

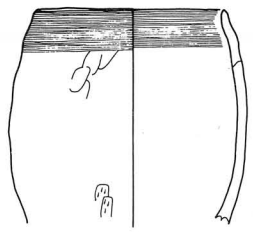
鉢



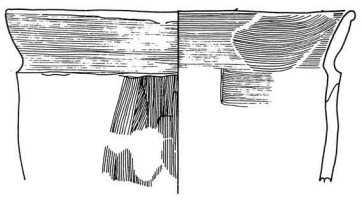
No.110　A1－B2－C1



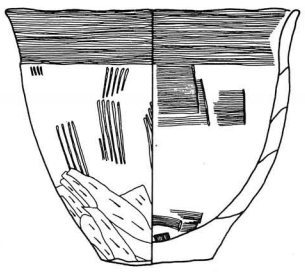
No.116　A1－B2－C4



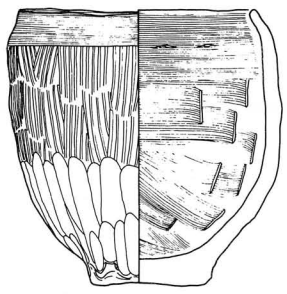
No.122　A3a－B1－C3



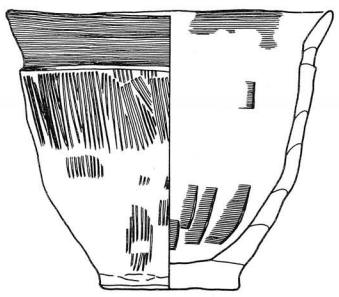
No.111　A1－B2－C4



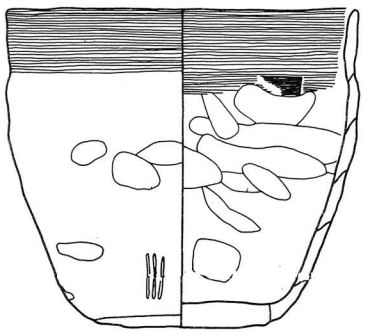
No.117　A1－B2－C4



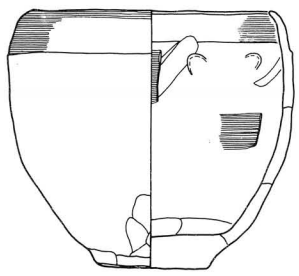
No.123　A3a－B1－C5



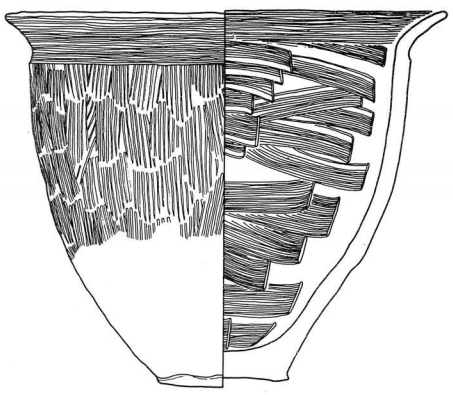
No.112　A1－B2－C4



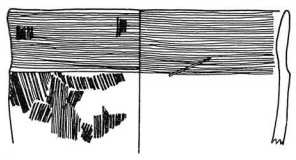
No.118　A2a－B1－C3



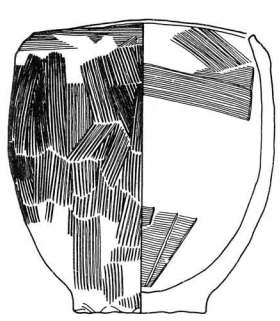
No.124　A3a－B2－C1



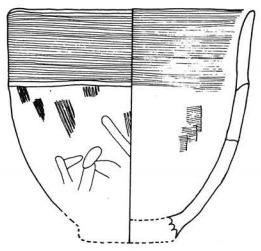
No.113　A1－B2－C4



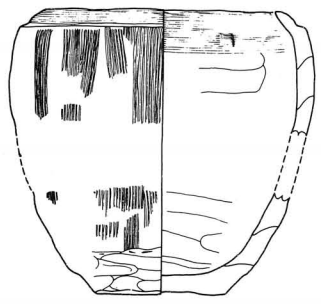
No.119　A2a－B2－C2



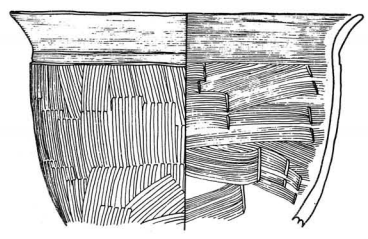
No.125　A3b－B1－C4



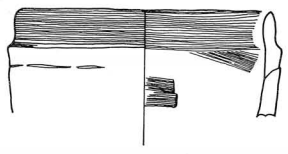
No.120　A2a－B2－C5



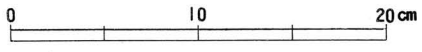
No.126　A3b－B2－C2



No.115　A1－B2－C4

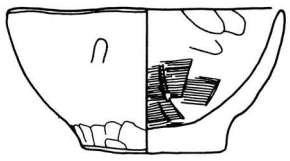


No.121　A2b－B2－C1

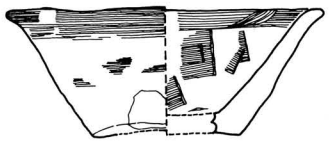


栗遺跡出土遺物集成図版－11

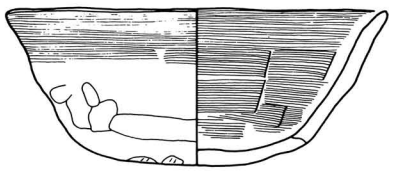
坏



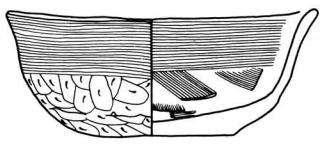
No.I 27　A I －B I －C I －D 2 －E 9 b



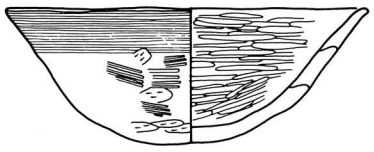
No.I 28　A I －B I －C I －D 4 －E 8 b



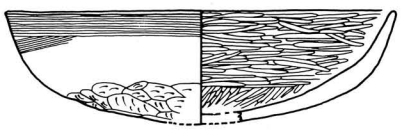
No.I 29　A I －B I －C I －D 4 －E 8 b



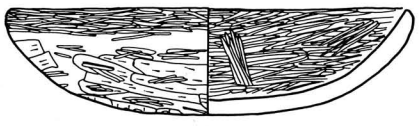
No.I 30　A I －B I －C I －D 4 －E 8 b



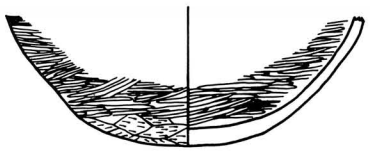
No.I 31　A 2 －B I －C I －D I －E I a



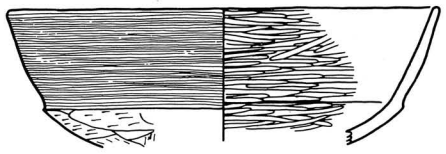
No.I 32　A 2 －B I －C I －D I －E 2 a



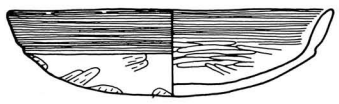
No.I 33　A 2 －B I －C I －D I －E 5 b



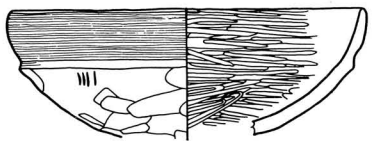
No.I 34　A 2 －B I －C I －D I －E 5 a



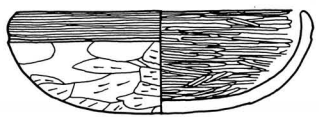
No.I 35　A 2 －B 2 －C I －D 2 －E I a



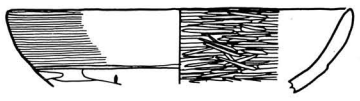
No.I 36　A 2 －B 2 －C I －D 2 －E I b



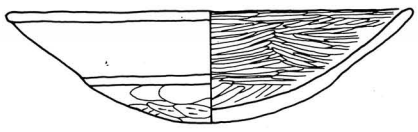
No.I 37　A 2 －B 2 －C I －D 2 －E 2 a



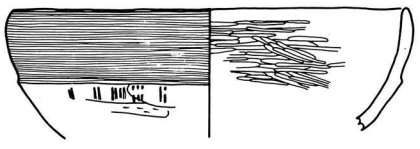
No.I 38　A 2 －B 2 －C I －D 2 －E 2 a



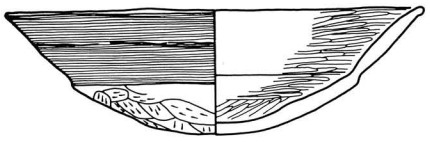
No.I 39　A 2 －B 2 －C I －D 2 －E 2 a



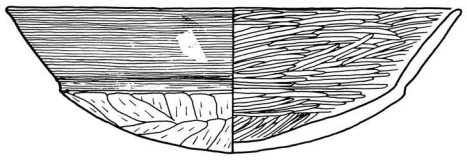
No.I 40　A 2 －B 2 －C I －D 3 －E I 0 b



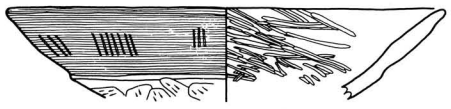
No.I 41　A 2 －B 2 －C 2 －D 2 －E 2 b



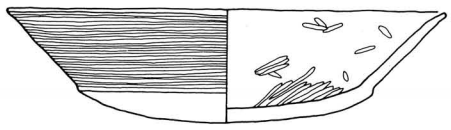
No.I 42　A 2 －B 2 －C 2 －D 3 －E I a



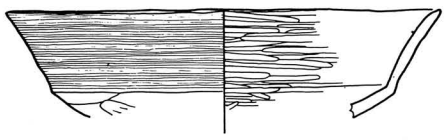
No.I 43　A 2 －B 2 －C 2 －D 3 －E I a



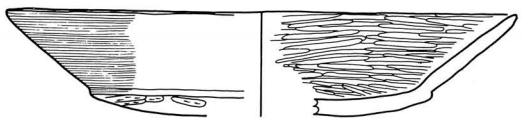
No.I 44　A 2 －B 2 －C 2 －D 3 －E I a



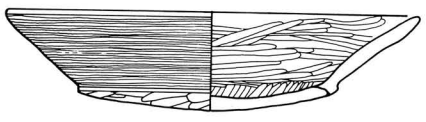
No.I 45　A 2 －B 2 －C 2 －D 3 －E I a



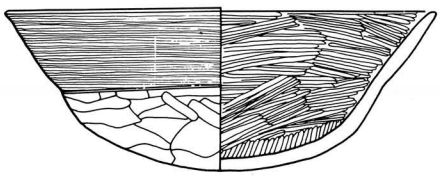
No.I 46　A 2 －B 2 －C 2 －D 3 －E I a



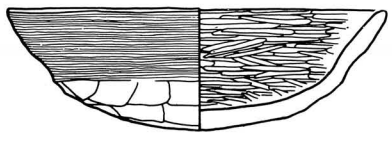
No.I 47　A 2 －B 2 －C 2 －D 3 －E I a



No.I 48　A 2 －B 2 －C 2 －D 3 －E I a



No.I 49　A 2 －B 2 －C 2 －D 3 －E 2 a

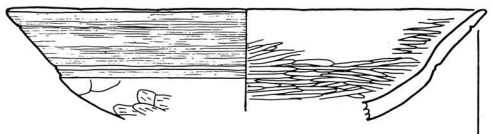


No.I 50　A 2 －B 2 －C 2 －D 3 －E 2 a

0　5　10　15cm

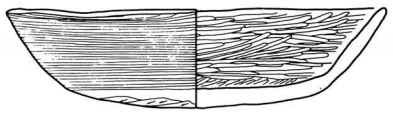
栗遺跡出土遺物集成図版－12

坏

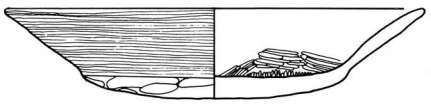


No.151　A2－B2－C2－D3－E2a

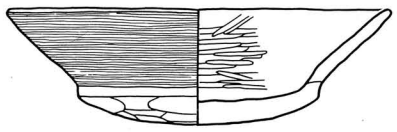
No.152　A2－B2－C2－D3－E2a



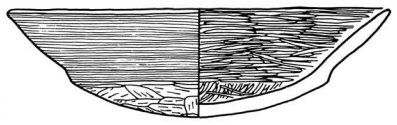
No.153　A2－B2－C2－D3－E2a



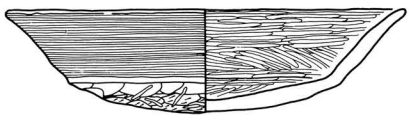
No.154　A2－B2－C2－D3－E2a



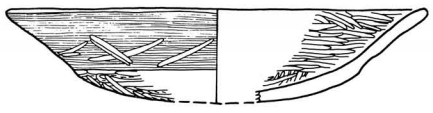
No.155　A2－B2－C2－D3－E2a



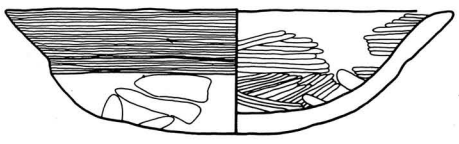
No.156　A2－B2－C2－D3－E3a



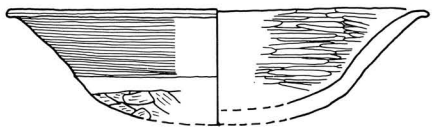
No.157　A2－B2－C2－D3－E4a



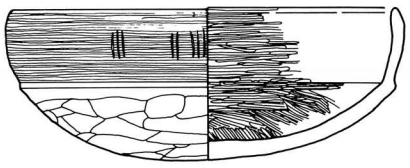
No.158　A2－B2－C2－D3－E5a



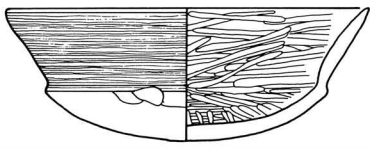
No.159　A2－B2－C2－D3－E6a



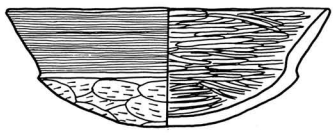
No.160　A2－B2－C2－D4－E2a



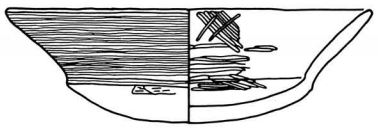
No.161　A2－B2－C3－D2－E2a



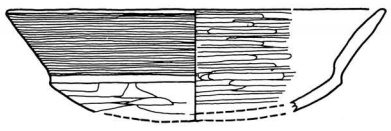
No.162　A2－B2－C3－D3－E1a



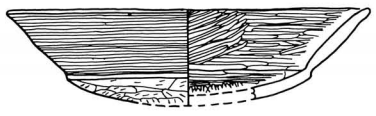
No.163　A2－B2－C3－D3－E1a



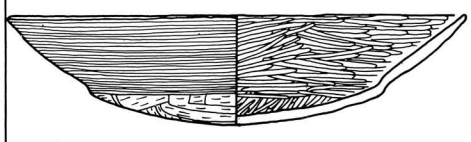
No.164　A2－B2－C3－D3－E1a



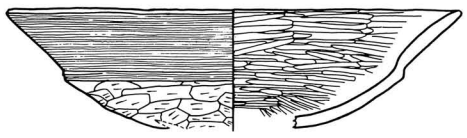
No.165　A2－B2－C3－D3－E1a



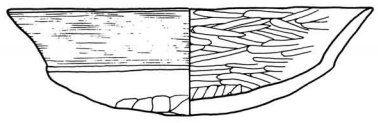
No.166　A2－B2－C3－D3－E1a



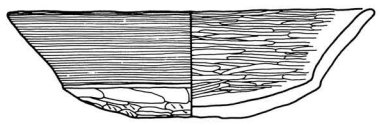
No.167　A2－B2－C3－D3－E1a



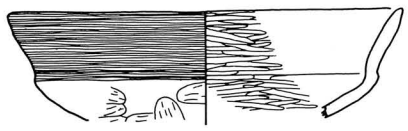
No.168　A2－B2－C3－D3－E2a



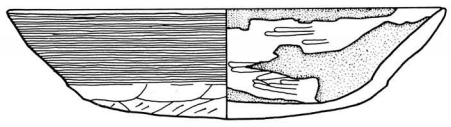
No.169　A2－B2－C3－D3－E2a



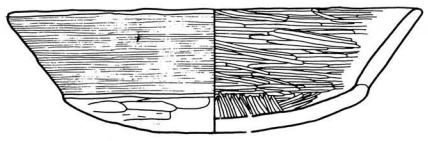
No.170　A2－B2－C3－D3－E2a



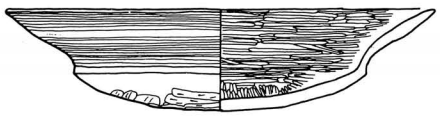
No.171　A2－B2－C3－D3－E2a



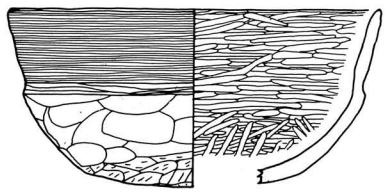
No.172　A2－B2－C3－D3－E2a



No.173　A2－B2－C3－D3－E2a



No.174　A2－B2－C3－D3－E2a

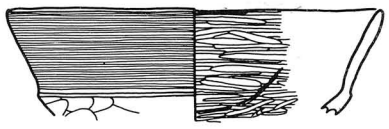


No.175　A2－B2－C3－D3－E2a

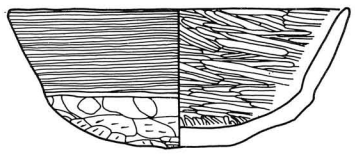
0　5　10　15cm

栗遺跡出土遺物集成図版－13

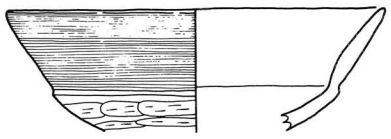
坏



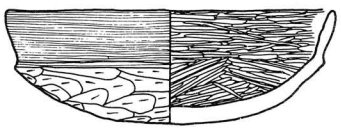
No.176　A2－B2－C3－D3－E2a



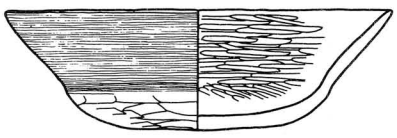
No.177　A2－B2－C3－D3－E2a



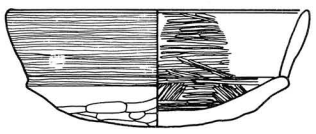
No.178　A2－B2－C3－D3－E2a



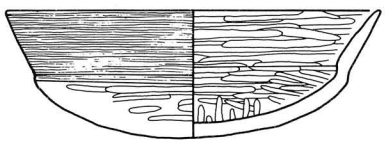
No.179　A2－B2－C3－D3－E2a



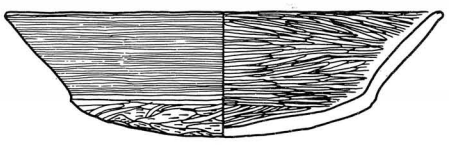
No.180　A2－B2－C3－D3－E2a



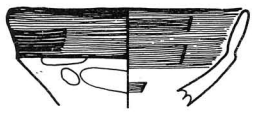
No.181　A2－B2－C3－D3－E2b



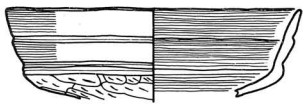
No.182　A2－B2－C3－D3－E3a



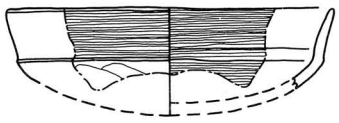
No.183　A2－B2－C3－D3－E3b



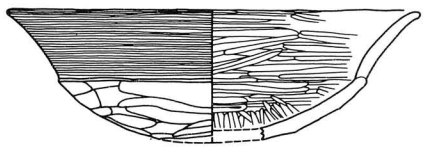
No.184　A2－B2－C3－D3－E6b



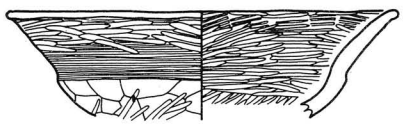
No.185　A2－B2－C3－D3－E7a



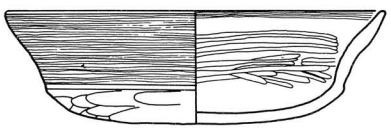
No.186　A2－B2－C3－D3－E2a



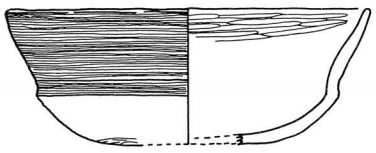
No.187　A2－B2－C3－D4－E2a



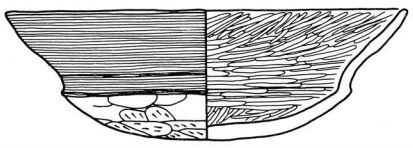
No.188　A2－B2－C3－D4－E5a



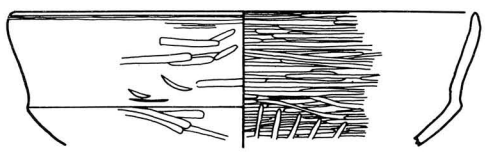
No.189　A2－B2－C3－D5－E1a



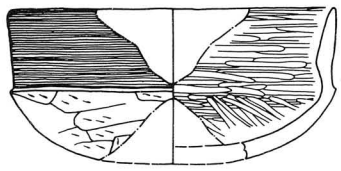
No.190　A2－B2－C3－D5－E2a



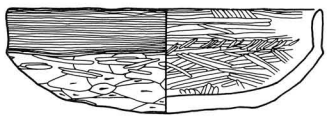
No.191　A2－B2－C3－D5－E2b



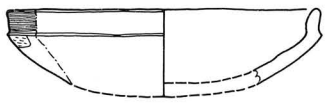
No.192　A2－B2－C3－D5－E5a



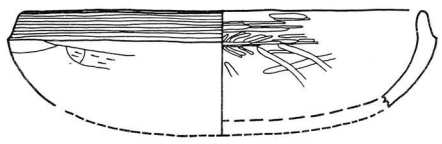
No.193　A2－B2－C3－D6－E1a



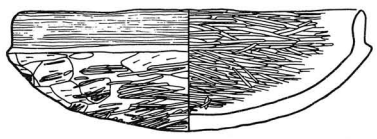
No.194　A2－B2－C3－D6－E1a



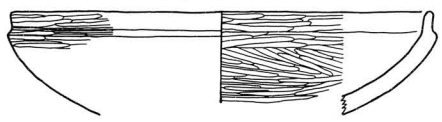
No.195　A2－B2－C3－D6－E1a



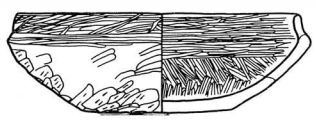
No.196　A2－B2－C3－D6－E2a



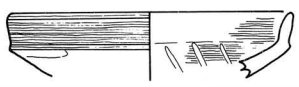
No.197　A2－B2－C3－D6－E3b



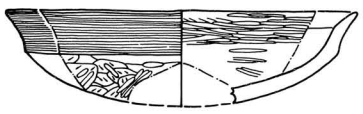
No.198　A2－B2－C3－D6－E5a



No.199　A2－B2－C3－D6－E5b



No.200　A2－B2－C3－D6－E6b

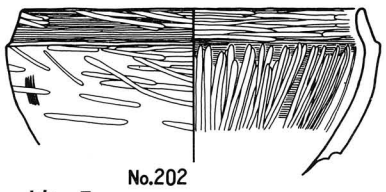


No.201　A2－B2－C4－D4－E3b

0　5　10　15cm

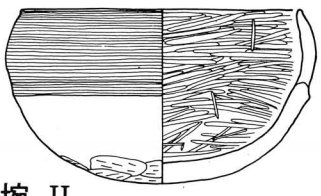
栗遺跡出土遺物集成図版 —14

埦　　蓋　　土師器　破片



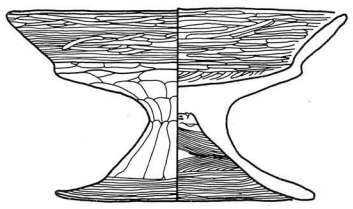
No.202

埦 I

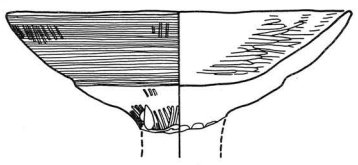


埦 II　No.203

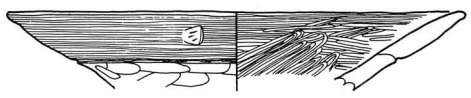
高 坏



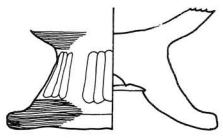
No.204　A I —B I —C I



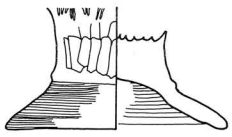
No.205　A 2 —B( )—C( )



No.206　A 3 —B( )—C( )

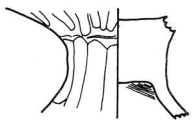


No.207　A( )—B I —C I

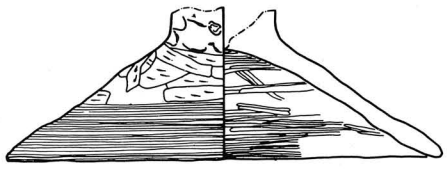


No.208　A( )—B 2—C 2

No.209　A( )—B 3 —C I

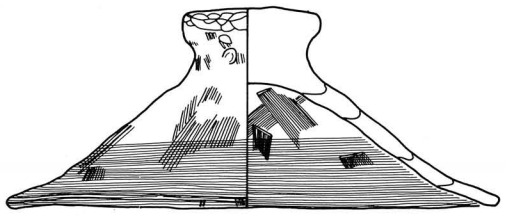


No.210　A( )—B 3 —C 3



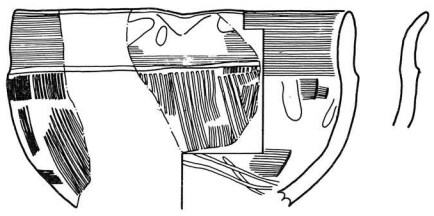
No.211

蓋 I



蓋 II　No.212

片口土器



No.213

手捏ね土器

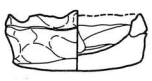
No.214

No.219

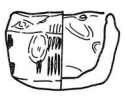
No.215

No.220

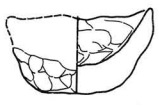
No.216



No.221

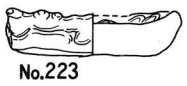


No.217

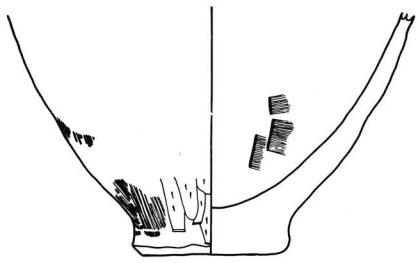


No.222

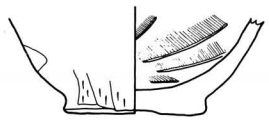
No.218



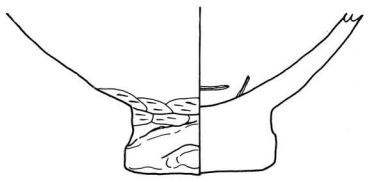
No.223



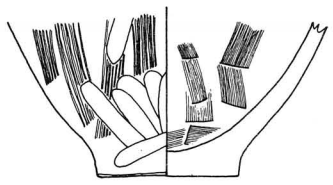
No. 224



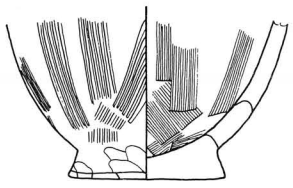
No.225



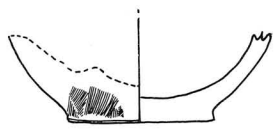
No.226



No.277



No.278



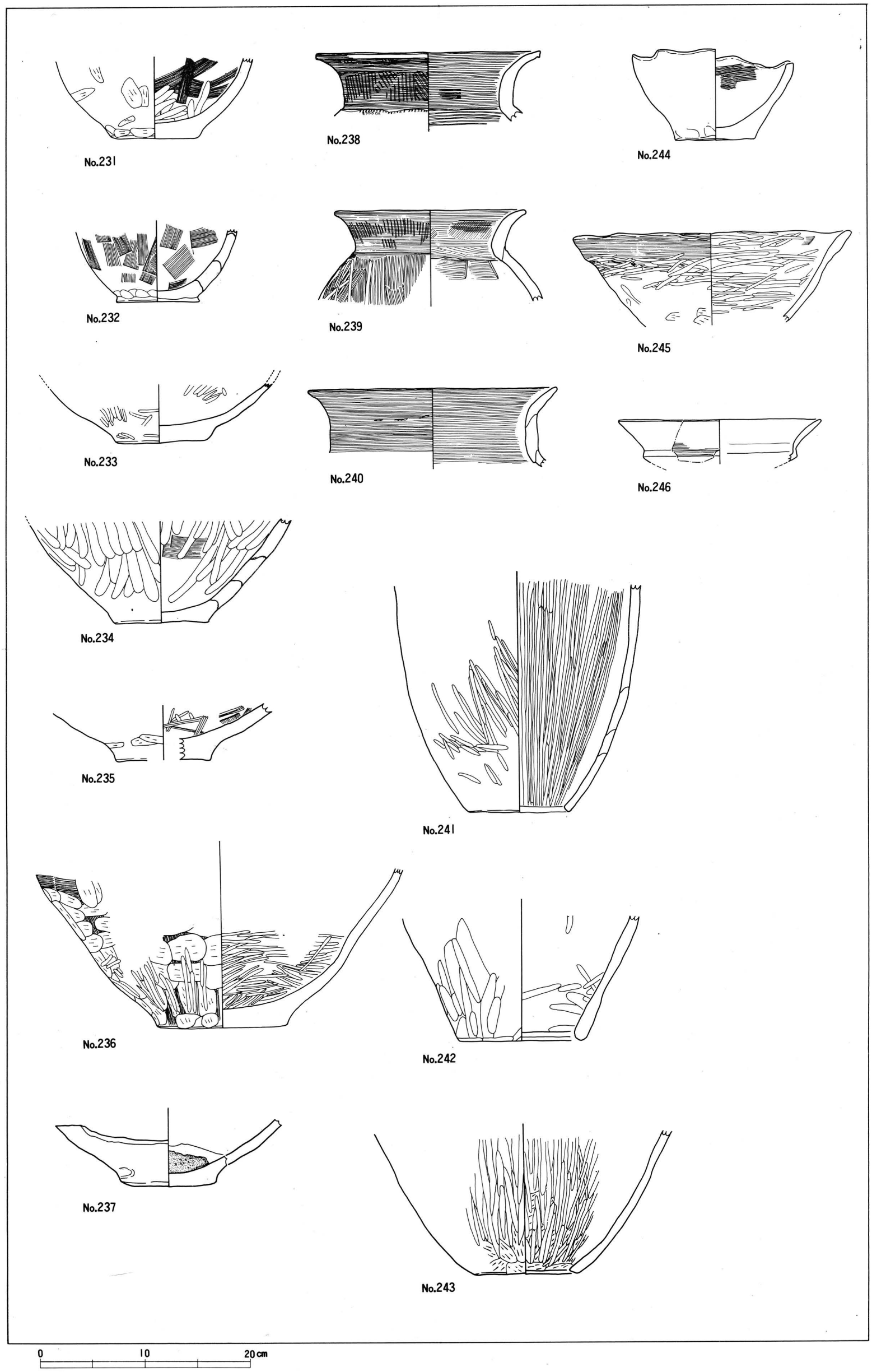
No.229

No.230

0　5　10　15cm

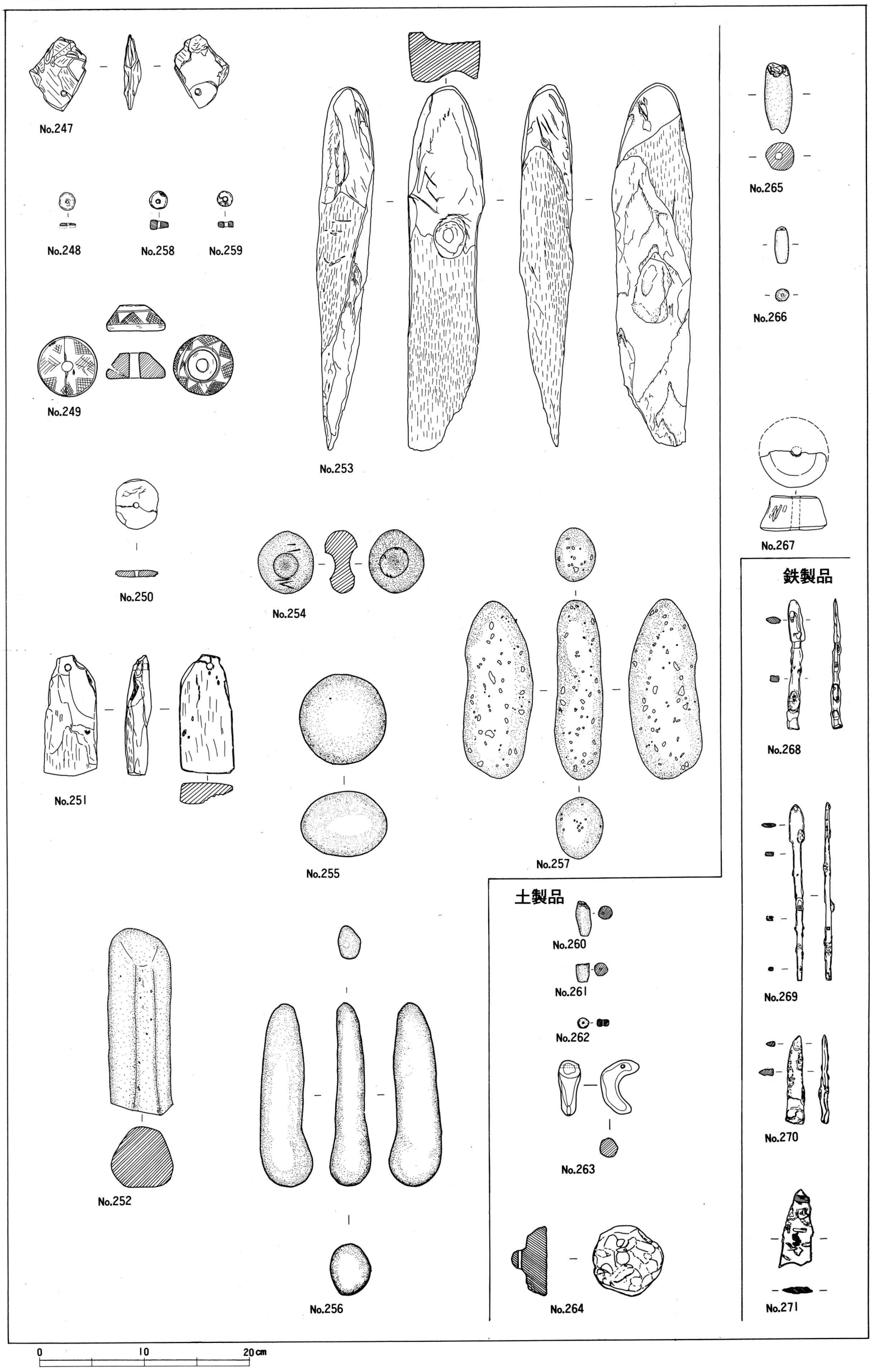
栗遺跡出土遺物集成図版－15

土師器　　破　片



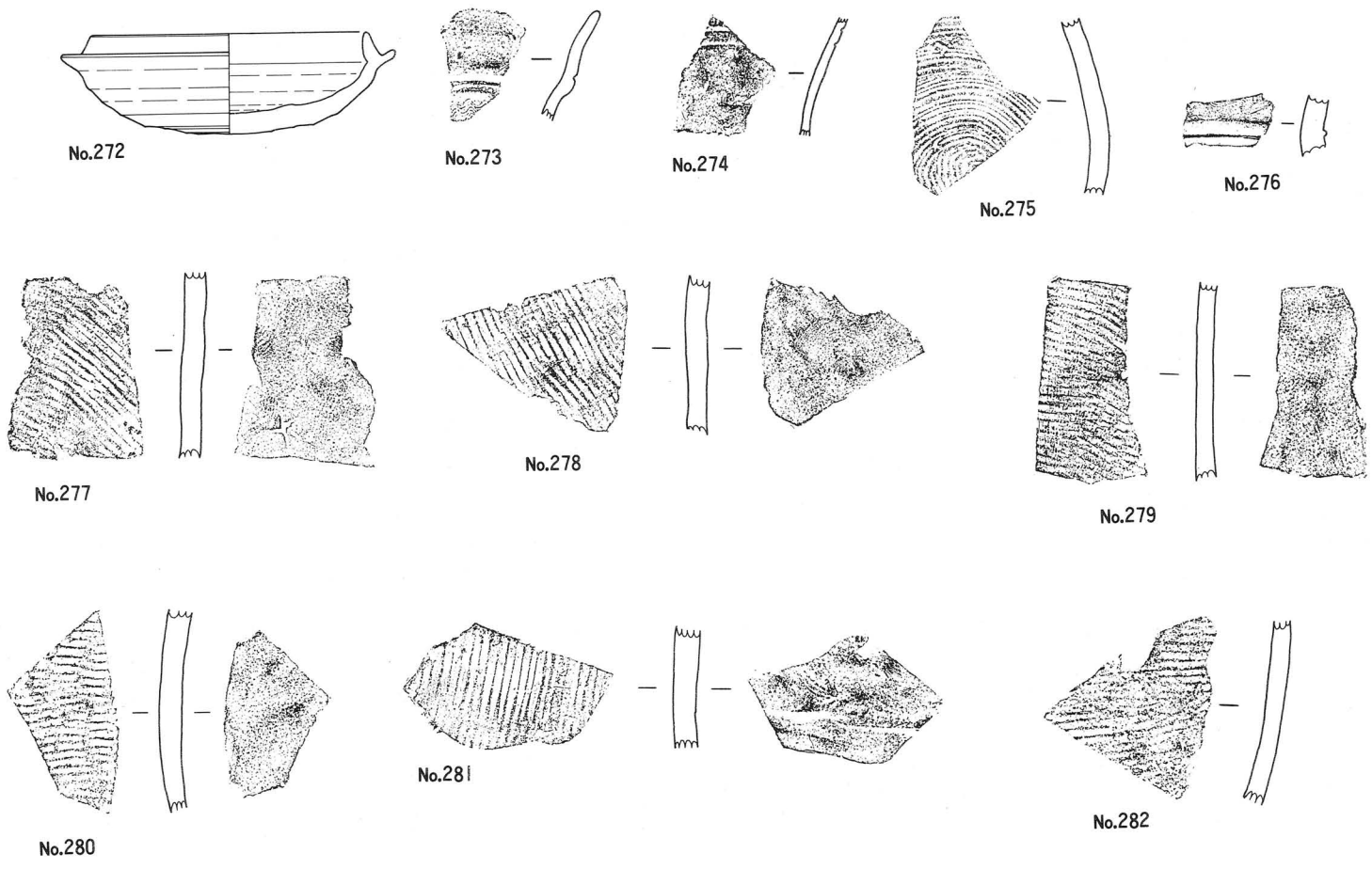
栗遺跡出土遺物集成図版 —16

石製品　　土製品　　鉄製品



栗遺跡出土遺物集成図版 —17

須 恵 器



0 5 10 15cm